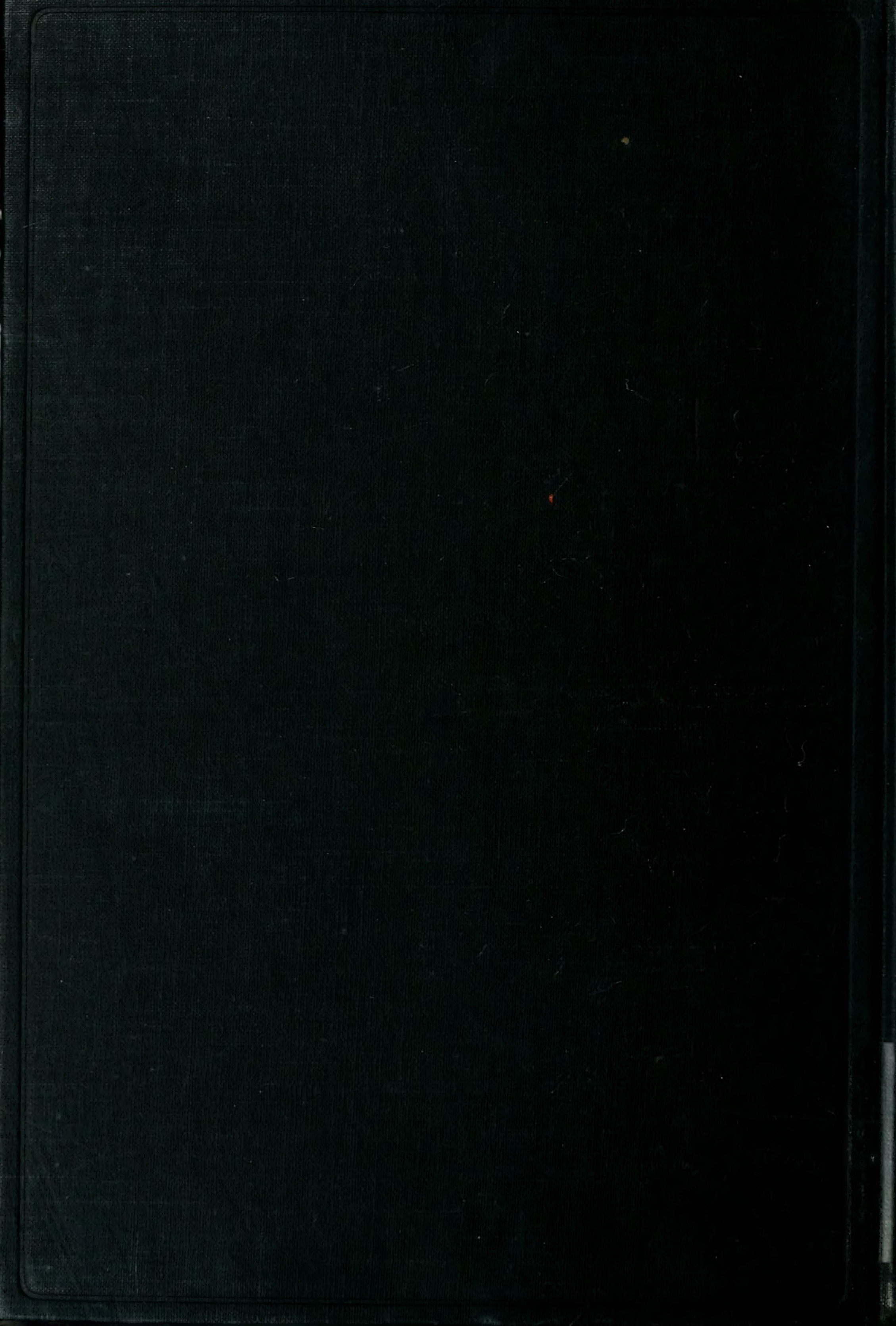


Kanehara, Shōgo
Kaishaku no kenkyū

金原省吾著

實踐國語教育研究叢書

解釋の研究

東京 啓文社出版


LIBRARY
JUL 25 1968
UNIVERSITY OF TORONTO

序

私は子供の時から、讀むことは好きで、商店で物を入れてよこした新聞紙の袋さへ裂いてよんだ。ものを讀むことには、いつも餓えてゐるやうな心持であつた。そしてそんな心持で讀んだものの多くは、國文學の古典である。しかし私の專門は國文學の方になかつたので、自然さういふ讀書からも何時か遠のき、靑年期にはずつと長く古典の世界を離れて居た。しかるに昭和のはじめに二年程、西尾實氏のすすめによつて、垣內松三先生の「國文敎育」の編輯に關係することになつて、また私の世界の一方に古典があらはれて來た。去年の春西原慶一氏が「實踐國語敎育」を創刊するに及んで、每月のやうに言葉に就いての論文を要求された。要求されるままに書いてゐると、今度はそれを著書にまとめて見ないかと言はれた。言はれて見るとつひそんな氣にもなつた。私は書名を「實踐國語」とするつもりだつたが、それは通じにくいだらうといふことで「言葉の實踐性」とかへた。ところがこれでは論文の名のやうだといふのでまた「解釋の研究」にかへた。それは何れも西原氏の意見によつたの

である。それ程この書物には西原氏が働いてゐる。西原氏がなければこの書物はとても出來る筈ではない。西原氏は「實踐國語教育」の五月號に「吉祥寺雜信」をかいて、その中に私のこの書物をも豫告し紹介して居られる。

金原省吾先生は、ながく鼻ごゑでいらつしやる。「お風邪に氣をつけて下さい」と云へば「いや、私のは百日咳です。大人にも百日咳があるとみえますね」と言ふのがやはり子供のやうな鼻ごゑである。愚按ずるに、東洋美術の理念にわけ入り、線の研究や畫論に夜を深めてゐられると、心が澄みわたつてきて、いつしか子供ごころの純一さにかへるのではあるまいか。そこで自家療法として、今度二三年前の「構想の研究」につぐ「言葉の實踐性」の著述を、啓文社から出されることになつた。「實踐國語研究叢書」の第一番目である。甚だ愉快な福音であるが、同時に先生の百日咳も、おさまりましたとあつて、甚だめでたいことになつた。

言ふ迄もなくこの書中の多くは「實踐國語教育」の論文であるが、しかしその外に「國文教育」、「コトバ」等のものもふくまれて居る。其れ等の論文を整へて、かういふ形にした。

附錄の二篇中「童話」は昭和二年に「信濃教育」に書いたものであり、「讀物」は昭和

四年に書いたものを、昭和六年に一先づ定位し、後更に増補したもので、未發表である。昭和四年から九年迄の前後六ケ年にわたるので、自分ながら變なものだと思つてゐる。

私はこの杉並區井荻三丁目九拾番地の家で、第四冊目の書物をまとめることになる。窓外は今綠で、夏に向ひつつある。ただ心に晴やかならぬ憂があつて、それを包んでこの序文を書いてゐる。（昭和拾年六月十二日夜九時）

目次

第一章　實踐性

航空寫眞をみると、川の描く曲線と、人の描く曲線とが、明瞭に出てゐる。川の曲つた處は必ず曲らねばならぬやうに地貌に强制せられて居る。不可抗的に曲つて居る。故にそこには文化的必然性はない。然るに人の描く曲線は、それとは違つて居る。曲つた處には、人の意志があらはれて居る。自然の形に隨つて曲ることもあり、或は自然の形に反して曲ることもある。その何れにあつても、必ずそこに意志があらはれて居る。自然は人の進む意志を左右することは出來ない。

さういふ曲線に似たものを、人の生活の中にも感ずる。昭和八年の九月であつたが、土浦に行つた事がある。用事をすましてうす暗い夕暗に、神社の境內を通つた。神社の前は石疊になつて居る。その上を女が三人でお百度を踏んでゐる。三人共に尻端折りで、裸足である。中の一人は子供を背負つてゐる。子供の赤い着物がもう暗くなつて居る。石疊を踏む足どりは、荒くてはげしい。社の前でぐつと向をかへ、鳥居の處まで行つて、またぐつと向をかへる。向を

變へる時に、何か掛け聲をする。その掛け聲が張つて居て、すごい。私は襟頸に寒氣を感じて振りかへる氣にならなかつた。

この場合信州の大町では、王子神社の社殿を廻る。王子神社の社殿は國寶で、荒い素朴な桃山期のものであるが、破風の上に鬼面がある。社殿は暗い杉の木立の中にある。社殿を廻りながら、神を呼ぶのである。神を呼ぶ聲が、五六町も離れた私の家迄も聞える。聲を出すのは、これも或は社殿の角を曲る時ではないかと思ふ。曲り目に意志がある。

能の面は檜で作る。昔は丸い木を十文字に割つて、その一つの割片の尖端、即ち木の髓にあたる處を鼻にした。この面では反ることが無い。木の年輪の方向とある角度を持つて、顏が作られて居るからである。曲らうとする方向と、ある角度に面があるから、その方向に對して抵抗の位置にある。この抵抗を侵すのは意志である。自然の反りは意志ではない。曲りが意志である。この故に反らないのである。然るに今の面は檜材を半分に割つて、外部に鼻をつける。この作法ではさほどに大きい檜材を要しない。前には四つ割りであるのに、今度は二つ割りである。しかも前には狹い面を顏にしたのに、今度は廣い面を顏にする。これだから大きい材を要しない。けれども反らうとする方向と年輪とは、角度的に交錯しないから、面は少しの反り

にも直に反ることになる。ここには意志が無くて自然がある。

素描は繪畫の基本的性質を示すものである。素描が缺けて居るといふことは、基本的な性質の缺けてゐることである。性格の不明な人がある。さういふ人を見ると、顏にも體にも、常に素描の感が缺けてゐる。素描の確立は、單に輪郭を與へることでなくて、形に基礎を與へることである。形を定位することである。形を定位するとは、一つの形から、無限に豐富なる感情を讀み、且感じ得るやうにすることである。最も簡素な形の中に、最も豐かに感情を見ることである。この形を東洋畫では古くから骨體といひ、骨體を描くことを骨法用筆と言つてゐる。骨體は線でなくては描けないものと、東洋では最初からきめて居る。これが長く東洋畫の特性となつて來た。線は東洋畫の意志である。

志賀直哉氏が選集の扉に書いた序詞。

夢殿の救世觀音を見てゐると、その作者といふやうな事は全く浮んで來ない。それは作者といふものから、それが完全に遊離した存在となつてゐるからで、これは又格別な事である。文藝の上で、もし私にそんな仕事でも出來ることがあつたら、私はもちろんそれに自分の名などを冠せようとは思はないだらう。

夢殿觀音で作者を感じない理由は、おそらく二つある。第一の理由は、作品に對して作者が二重に働いてゐる點にある。作者は先づ觀る働に於いて、第二に作る働に於いて、作品の中に重ねて現はされる。觀る働と作る働との途中では、作者は觀らるる對象や、作らるる作品から分離してゐる。故に其處には作品が明かである。觀る働の始まる以前には作者はなく、作る働の終つた以後にも作者はない。完全な作品には作者はない。しかし同時に完全な作品ほど作者を感じさせるものもない。

然るにこの作品が年を經ることの長くなると共に、作品は古るび枯れて、作られた感がない。蒼然として古くより存在した感である。作品が既に作られたと感じられないならば、作者は勿論感じられない。これが作者の感ぜられない第二の理由である。ここに於いて作品は最も完全に作品となる。

かかる作品にはもはや意志は感じられない。意志は背後にあつて働く。背後に働く意志が、基礎の意志である。

「實踐國語教育」の第一號に、滑川道夫氏が「科學的綴方揚棄」を書いてゐられる。その中に調べた綴方論をされた一節があり、尋二兒童六名合作の「かだん」(花壇)の文例がある。花

壇の植物を數へてゐる文の中に、

ぎんなんの木が二本、さくらが三本、その中にでんでん虫が一つとまつてゐました。こすもす二百ぐらひ、こすもすはきれいにさいてゐます。

といふ數量以外の觀察が入り、最後に

こんなにたくさんのものがありました。ほんとにふしぎなくらひ色色ありました。

といふ結論が出てゐる。それが私には面白かつた。調べることは論理的であるが、兒童はいつかこの論理力を、一足も二足も踏み出さうとしてゐる。これは嚴密な意味でいつたならば、調べた綴方主義にとつては破綻であらうが、調べる綴方の破綻する處に、子供の自然性の面白さがある。

これは美術解剖學者M氏の觀察談である。聽いてから書いたもので、誤が無いとは言へぬので、單にM氏とのみ言つて置きたい。M氏は東大寺の南大門の修繕中に行き合せて、足場を上まで上つて、仁王を見おろしたのである。

東大寺の仁王も、頭は別に大きくもない。前から見ると丸彫に見えるが、實際は大きな厚肉彫で、背面はない。肩も前面から見れば、大きい彎曲で背面に向つてゐるやうに見えるが、しかしそれも前面だけのことで、側面から力をそいで、背面では一つの平面になつて居る。のみならず上から見下すと、頭から、胸腹にかけて一つの面になつて居る。手もさほど前に出てゐる譯ではない。手から足に向つて一つの面をなしてゐ、しかも天主閣の石垣などにみる、中央で窪んで上下に開いてゐる彎曲性傾斜をなしてゐる。これは力學的にも最も強い傾斜だときいてゐる。

かかる構成の基くものは、力學的必然性であらう。これ程に大きくては、手も暢氣に前には出せない。重くなつて落ちやすいばかりでなく、體をも傷ける心配がある。で體の全體を一つの塊とする。手はその塊の一突出として前に出す。故に背は大きい丈夫な板狀の塊であり、前面の突出の一切の支點である。前面のものは、これを據り處として、突出する。かうなつてくれば、全形は何の無理もなく、大きい一つの塊體として構成される。この構成は力學的、論理的である。

しかしそれと共に、この力學的、論理的構成の中に埋れて、非論理的、非力學的な構成がある。これは光學的構成である。陰影的効果による形の構成である。例へば上から見ると頭が無

い。肩の上に大きい頭がぢかに載せられてゐる。肩と頭とは兩方が大きい塊で、それが直接に結合してゐる。頸のやうに細くて弱い部分があつては、力學的に危險である。重い頭が高い所にあつて、しかも細い頸でつながつて居ては、甚だ危險である。肩と頭とが直接に結合してゐるのは、安心である。これは力學的構成である。しかしそれでは頭が肩から離れて見えない。どうしても頸がなくてはならぬ。力學的に排除した頸が、形態的には必要になつてくる。その頸をどうして現すか。ここで光學的効果を使用する。鎖骨の上に、大きな窪みがある。この窪みが陰になつて、下からは頸にみえる。力學的構成を、光學的構成によつて、改變したのである。力學的構造と矛盾することなくして、しかも力學的構造のなし得ないものを成したのが、光學的構造である。上から見るとそれ程前に出ても居ない手が、前に出て見えるのも、また光學的効果である。斜上の窓から射し入るやうになつてゐる斜上の光が、手の平にあたつて、手の平が明るくなる。この光の効果によつて、手がぐつと前に出てくる。

仁王は大體の構造をかういふ力學的構造に置きながら、細部を光學的に構造することによつて、體を甚しく立體的にして居る。この二種の相異る構造は、鎌倉期彫刻の中心をなすものである。力學的構造は論理的構造であり、光學的構造は感情的構造である。そしてこの兩種の構造の下に、意志がある。

かういふ論理的並びに感情的構造は、單に彫刻にあらはれるばかりでなくて、刀に於いても亦見得るのである。刀は鋭いことを論理的性質とするから、「鋭利」が重要な性質であることは、何時も同じであり、鋭い鋼鐵が要求し工夫せらるることも、亦同じである。

堺市戎島堺化學工業株式會社では砂鐵からチタニュウム白粉を取ることに成功、昨年商工省から研究費五千圓を授與されたが、白粉を取つた砂鐵のかすについて東北帝大村上工學博士等が研究の結果、鋼として必要なバラヂウムを多量に含み有害なシリカリン、硫黃などを含まない優良な鋼鐵を作ることに成功し、金屬材料研究所堺相談所岸本工學士指導の下にこれにクロウム、ニツケル、モリブデン等を適度に含ませて堺の名工沖本國明氏の手で刀劍を鍛へてゐたが、愈二十四日完成、素晴しいものが出來上り、本多「鋼鐵」博士も折紙をつけた。正宗のもつ凄い切味とは又變つた特殊な切味を持ち、折れず曲らず鹽水に浸しても絕對にさびず、小刀で木を切る程度に普通の鐵がざくざくと雜作なく切れる。この不意議な切味こそ正に「昭和正宗」ともいはるべきものであらう。（昭和九年二月廿五日、東京朝日新聞）

この鋼鐵は甚しく鋭利らしいが、刀となる爲には鋭い上に、も一つの性質、卽ち粘つて折れない性質が必要である。鋭いのにつきものの脆い性質は、困るからである。

鎌倉期の刀身は二つの意味から成立してゐる。刀の棟の方は、外側が皮金で、中に心金がある。心金は二重に重つてゐるから、斷面は皮金、心金、心金、皮金である。この鋼は折りかへし折りかへし鍛へてゐるから、皮金は大體三百十五萬五千枚、心金は二百五十六枚の層から出

來てゐる。しかもこの鋼が各二重に重つてゐるから、棟の方の斷面は、六百三十一萬四百枚の鋼の層である。そして心金はねばり强いから、折れない。そこは刀に强靱性を與へる構造部分である。刄の方は、皮金に刄金が包まれて居る。刄金は百四萬八千五百枚の層から出來て居て甚だ鋭い。鋭いけれども脆い。それで刄金程もろからず、心金程鈍ぶからぬ皮金が、之を包んでゐる。磨ぐのは皮金をすりへらして、中から刄金を鋭く露出せしむる方法である。この斷面は八百四十萬七千枚である。

かくて刀の力學的構造は、鋭利性と强靱性との互に相反する二つの性質を根本要素として居る。もし鋭利性を積極性とすれば、强靱性は消極性である。刄物を鋭利にするだけでは、その中の一方的性質を高めるだけであり、刄物を强靱にするだけでも、また不十分な一方的性質である。

かういふ相反性は、甲冑にもある。甲冑は堅牢が、中心性であるが、堅牢のみならば動かれない。堅牢と堅牢とをつなぐ部分が、柔軟でなくてはならぬ。甲殼類の外殼も同様である。

も一つの例をとる。セザンヌの畫がある。この畫には相反する二種の性質がある。

一、家は傾き、林檎は角を持ち、山は板の如く、寫實より隔離して行く方向。

二、家は傾けど確かに、林檎は角を持てど潤ひ、山は板の如けれど起伏し、寫實に相卽して行く方向。

この隔離して行く方向と、相卽して行く方向との、二つの相反性が、セザンヌの畫を靜肅にし、深邃にしてゐる。寫實の深さ、寫實の確かさが其處にある。どの一方を缺くも、セザンヌの畫面は成立しない。

かういふ性質は、單にセザンヌが持つばかりではなくて、古來のすぐれた藝術家は何れも之を持つてゐる。もし單に藝術が寫實の方向のみを持てば、藝術の上に樣式は成立しない。そこで成立するのは寫眞である。畫面が寫眞以上になり得るのは、そこにこの相反性、卽ち歪曲 Doformation があるからである。

歪曲とは、ある形態が、形態の上で强調する點と、低下する點とを區別することである。時代によつて形の上に、ある傾向の强調と低下とが行はれる。この傾向の判然たる時に、この時代は樣式を持つものと言はれる。故に樣式とは、歪曲の傾向の一致である。隨つて藝術の樣式史とは、この歪曲の歷史である。であるから、作品の上の二方向、寫實の方向と反寫實の方向との二方向は、非歪曲と歪曲との二方向として言ひ換へることが出來る。

これは更に畫面の技法に就いても言ひ得る。物を描くのに西洋畫は面の立場に立つのであるが、線はその立場から見れば、面の歪曲である。東洋畫は線の立場に立つのであるが、面はこの立場から見れば、線の歪曲である。面は空間性である。限界を持つ擴大、卽ち定位性である。然るに線は時間性である。限界を有せざる擴大である。卽ち非定位性である。この定位性と非定位性との、直角に結合したものが、畫面の輪郭である。輪郭は定位性と非定位性との相反性から成立する。しかもかかる相反性の成立し得る根據は、この兩性の基礎に意志があるからである。意志は二つの方向にあらはれる。相反する二つの方向にわかれる。意志の相反性的成立が、實踐性である。東洋畫が明確な輪郭性を持つことは、東洋畫が時間と空間との二つの立場に立つことである。卽ち東洋畫の實踐性は輪郭性である。

かくの如くにして、吾等の實踐のあらゆる方向には、常に背反する二つの方向がある。實踐はこの相反する二つの方向に同時に立つことである。互に相矛盾する二つの方向の上に立つのが、實踐である。隨つて實踐には如何なる場合にも、この二つの方向を考へなくてはならぬ。

前述の「かだん」の綴方が、私に注意をひいたのは、この出發、卽ち意志が飽く迄論理的で

あり、且最後迄論理的ならんことを期して居たにも係らず、論理的考察の進行の中途に、いつかそれと相背反する非論理的なる要素の生じて來た點である。論理として徹しようとする處には、實踐性はない。論理が自己と相背反する非論理性を生じて來る處に實踐性がある。論理的に進行する間は、花壇の植物を計數的に計量する事で滿足するであらうが、しかし計數の進行もまた一つの實踐である限り、いつか微量ではあるが、非計數的な感動が生じて來る。それは如何に實踐が相背反するものを要するかを示すものである。隨つて理科地理何れの教科に於いても、論理性にのみ集中すれば、論理性の徹底は有り得ても、實踐性はあり得ない。實踐性を有つためには、必ずそこに感情性が入つて來なくてはならぬ。

　食物の論理性は勿論榮養である。しかしこの論理性を歪曲せしむるものとして辛味があり、甘味があり、澁味があり、時に苦味さへある。それが味である。故に味は榮養の非論理性である。榮養の歪曲である。筍は化學成分中、含窒素物は一・八二パアセントであるが、この中眞の蛋白質として、榮養價値のあるものは、僅かに三分の一である。含水炭素の含量は五・六四パアセントで、大部分はペントウザンと稱する澱粉と同種類の多糖類であつて、外に少量の葡萄糖、果糖、甘蔗糖も含まれてゐる。纖維は一・四二パアセントであるが、この量は成熟すると一層多くなる。筍の消化率は蛋白質七一・一パアセント、含水炭素九一・二パアセントであるから、消

化の惡い食物である。消化も惡く、營養分も少いに係らず、季節の食品として愛好されるのはこのうま味の故である。榮養にはじまる食物も、それが完全な實踐性を持つ爲には、非論理性、感情性たるうま味がなくてはならぬ。論理性だけを追及すればよささうな藥にでも、相當に味の問題は考慮せられてゐる。味のない食物は、食物とは言へない。食物の實踐性は、或はこの非論理性から始まるかに見える。食物は榮養よりも先づ味が考へられる。これは必ずしも食物のみには限らない。衣服、住居にも、この非論理性が、多分に要求せられ、場合によつては論理性過少の弊さへ生ずるやうになつてゐる。

實踐性を持つ社會運動或は宗教運動は必ず非論理性を持ち、この非論理性の歪曲が、多くの場合その實踐を活き活きさせて居る。愛するが故に憎み、憎むが故に愛する消息もそこから出てくる。他の人から見ては笑ふべき、乃至は厭ふべき性質に見ゆるものが、かへつて兩者を結合する重大な契機になつてゐる。深く愛好される食物には、最初には必ず厭はしい或る歪曲性がある。

激しい實踐性には、この性質が一層顯著である。例へば群集の暴動の場合にも、その暴動の基礎には勿論それを支持する論理性がある。暴動の必然性がある。しかしこの論理的必然性ば

かりでは、暴動は起りにくい。そこに何かの非論理性がなくてはならぬ。論理的立場から見れば、甚しく附加的であり、偶然的である。それにも係らずこの非論理性が、多くの場合、暴動の爆發性となつて居る。德川末期の百姓一揆などは、何れもこれである。また暴動や一揆の指導者の言行にみても、論理的必然性のみを中心としては居ない。そこに出てくる非論理性感情性が、一層煽動性となつて居る。煽動性とは論理中に入り來る非論理性である。もとより非論理性のみでは、實踐性は生じない。論理性に參加する非論理性があつて、はじめて實踐性が生ずる。これは論理性、非論理性の背後にある統一的な意志の問題であり、結局は意志がこの相反する兩樣の性質を持つてあらはれることを意味する。故に意志がこの相反性の二性質を分出しない間は、實踐があらはれないことになる。隨つて實踐とは意志がこの二性質に分立すべきことを基礎とするのである。

第二章　讀の實踐性

支那の畫には一つの鳥でも、一つの草でも、一つの山でも、それをこつちからあつちから、つくづくと見て居る態度がある。それで支那の畫に對してゐると、如何にも形を見盡してゐるといふ感がする。随つて支那の畫史には形體を究盡するといふ言葉がよくあらはれて居る。十のものを十はおろか、十一、十二、にも見て居る根强さがある。

森田恒友氏が、かういふ事を言つて居られた。「近頃支那の畫を注意する人が增して來たのは幾分流行的であるとしても、結構な事に相違ない。だが大體私は、本當の事を言ふと、支那畫より日本の畫を好む性質で、大和畫系統のもの、南畫でも日本人の手に成つたものの方が明るくて見て樂な事などが性分に向くのだが、支那人の仕事を見ると矢つ張り感心する。どうも彼等の仕事は悠悠閑閑として、幾日でも一畫紙の上に遊んで成された感のものが多く、畫趣が大きいのに自然頭が下るが、どうも何となし明るくないものだから、見て居て樂でないものがある。悠悠たる畫事程見て樂な筈なのに、不思議に樂でないものがひそむ。其處に支那といふ國の分らないものがある。支那料理は實にうまい。料理として、最も發達したものだらうと誰も

よく言ふが、吾吾の胃袋は毎日の支那料理には到底堪へない。と先づ同じやうなものかも知れぬ」。

これは大變に面白い觀察だ。描く態度は悠悠としてゐるが、見る態度に急迫し、逼迫してゐるものがあるから、畫面が甚しく嶮峻である。池大雅が祇南海から得て、ために畫技に一劃期をなしたといふ蕭尺木の「太平山畫譜」の如きも、刻、畫共に嶮峻、骨をかむ程のものがある。悠悠として描き、悠悠として刻したに相違ないが、畫面は實に嶮峻である。眼を刺す程の烈しさである。かういふ「究盡」したものから、「鬼氣」が出て來る。鬼氣は支那の長所でもあり、同時に短所でもある。

ところが吾等の認識は、ここで止まらない。更にも一歩を進める。

名優九代目團十郎の「毒饅頭」の加藤清正は有名な當り藝ですが、初演の時の夢さめの場で、「扨は今のは夢であつたか」と言つたのを、再演の時に「夢であつたか」と改め、晩年は「夢か」と言つただけで、初演以上の味ひを出されたのも、楷書から行書、草書の順序を經たもので、これを他人が初演から「夢か」と言ふセリフだけ眞似はしても、所詮團十郎の味はひは出せない道理で、うまく行く筈はないのでございます。（中央公論　九年五月號）

と、「吉右衛門藝談」では語つてゐる。この有の形から無の形に向うて進むのが、東洋の認識である。有の定位に滿足しないで漸次に無の定位に近づくのが、東洋の認識である。「扨は今の

は夢であつたか」が、單に「夢であつたか」となり、更に「夢か」に進んで行くのが、この具體的の例である。

これを「源氏物語」にも見ることが出來る。「桐壺」のはじめの方に、桐壺の孤獨なことを言ひ、また皇子御出生について、

父の大納言はなくなりて、母の北の方なむ、いにしへの人の由あるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ花やかなる御方方にも劣らず、何事の儀式をももてなし給ひけれど、とり立てて、はかばかしき御後見しなければ、事とある時は、なほ據所なく心細げなり。前の世にも御契や深かりけむ、世になく淸らなる玉の男御子さへ生れ給ひぬ。いつしかと心許ながらせ給ひて、急ぎ參らせて御覽ずるに、珍らかなる兒の御貌なり。

と言つてゐる。そこでその玉の男御子を急ぎ參らせて御覽じたのは、誰方かといふことが問題になる。母親ともみえるが、また前の御契深かりしかといふ前文によつては、帝とも見ゆるのである。何れにしても、急ぎ見に行かれた方の表示が缺けてゐる。「いつしかと云云」の文には主語が無い。しかも主語にあたり得る人は、この場合二人を數へ得るとすれば、この主語缺落は文章を不完全にする譯である。然るにそのことなくして、かへつて文章を緊密にして居、急ぎ御覽ぜられたのも帝であることが、文章の氣はひで明かである。これは文章の不完全でなくて、文章の緊張である。「源氏物語」のかかる主語省略は、全卷に滿ちてゐる。曖昧のやうでか

へつてそこに緊縮したものがある。

また石井庄司氏は「よみの構造」で、次の如くいつてゐられる。

枕草子の「春は曙。云云」の條を讀む。大抵の註釋書には「春は曙」の下に「いとをかし」といふやうな言葉の省略せられてゐることを指摘するだけで、「春は曙」といふことばの眞義を「よむ」ことには努めないのである。次に何の言葉が省かれてゐるかどうか、それは單なる知識である。吾吾はいまは眼前にある「春は曙」といふ清少納言の口をほとばしり出た「ことば」を讀むのである。これは「春は曙、いとをかし」などといふ、間の伸びたことばでなく、もつと生命の流を宿した文である。この場合、「春は曙」をそのままに讀むことが出來るのである。(コトバ、九年三月號)

然らば智識でなくてこれを直接によめばどうなるか。それについて最も注意すべきは、「春は曙」と體言で言ひ切つてゐる點である。體言は內に働きを持つてゐる。しかしその働きはまだ發現してゐない。發現以前の形である。しかし體言は「扨は今のは夢であつたか」を「夢か」に定位せしめ得たやうに、之を發現後の形にすることが出來る。子供の言葉は多くは、最初體言で語られる。「うまうま」といひ、「とととと」と言ひ、其等の言葉は、「うまうま」や「ととと」が持ち得る樣樣の可能性を、その時時の事情で、明瞭に限定することが出來る。この體言の限定作用を、高度に用ひたのが、この場合の「春は曙」の表現である。

「春は曙」の形から出て來る景觀は無限である。甚しい多樣であり、甚しい未決定である。この甚しい無限を持つ形は、形自身からみると、實に單純であり、簡素である。これが「無」である。「無」とは數學的の零ではない。形としては零に近いけれども、この中に無限の可能性を有つのである。單一なる形が、無限の可能性を持つこと、その無限性は形體的でなくて、可能的である。かかる未表現の形で無限なるものが「無」である。やがて無限の有たり得るものが、未だ有たらざる狀態である。この無限の可能性のままで居るのは、沈默である。しかしこの沈默は自ら破れる機がある。「春は曙」は、「春」の無と「曙」の無から成つてゐる。「春」の無と「曙」の無との可能の發動形が、互に交錯すると「は」になる。「は」は兩者の沈默の僅かに破れた形であり、春と曙との兩者を定位したのである。春の意向と曙の意向とが、ここに集中してゐる。「は」が「春は曙」の一つの重要な鍵であると石井氏の言はれる意味がある。春と曙とは「は」で第一の表現を持つてゐる。「は」は春の意向がどこにあるか、曙の意向がどこにあるかを示す第一の鍵である。ここに「無」は「有」を持つ。しかしこれで止つてしまつた。「春は曙」と言ひ切つて、ぴたり止つてしまつた。この止り方が實に明瞭で確實で、不動である。そこで、人達はこの定位に導かれて、春によつて生ずる可能なる樣樣、卽ち春の無、それから曙によつて生ずる可能なる樣樣、卽ち曙の無、この兩者の無が、曙は春を、春は曙を

それぞれの有にかへて來る。「曙」の無は「春は」があつて、曙だけでは定位せられぬ定位作用を生かしてくる。「春」の無は、「は曙」があつて、定位作用が生きてくる。この定位作用で、「春は曙」で定位の交互作用が確立してくる。だからこの「春は曙」は、下に何か省略せられてゐるのではない。はじめから「春は曙」である。省略せられて居るのではない、そこに一切がふくまれて居るのであり、そして同時にこの定位作用によつて、一切はあらはれてゐるのである。故に、この「春は曙」と體言で明瞭に言ひ切つた定位作用は、はじめからこの形で定立してゐるものである。この形で成立してゐるものである。はじめから、その下に入るべき言葉を持つてゐない。丁度「扨は今のは夢であつたか」の省略形が、「夢であつたか」でないと同樣である。兩者はそれぞれ限定作用がちがつてゐる。別な定位である。また「夢か」が前二者の省略形でないことも同一である。これは前二者をふくんで、新らしく定位されたものである。新らしい「無」である。隨つてこれは前者の省略からは得られない、新らしい生命である。言葉の實踐性中にかかる定位作用を重要な性質として含むのが、東洋の認識である。

石井氏は同じ論文に於いて「なほ又例をあげるならば」と言つて、次の如く續けて居られる。

芭蕉の奥の細道の中に、

まづ高館にのぼれば北上川は南部より流るる大河なり。

といふ一節がある。これも大抵の註釋書には「まづ高館にのぼれば北上川見ゆ。北上川は南部より流るる大河なり」の二つの文章の組合せであつて、省略法によつたとある。しかし右のやうに二文と見るとき「北上川は南部より流るる大河なり」の一句は、實に無味乾燥な、概念的説明となる。ところが奥の細道は原文のまま「よむ」べきものである。これは芭蕉が高館に登つた時の驚きを表現した文となつて生きて來るのである。「よむ」とは何を「よむ」のであるか、深く考へねばならぬ處である。

然らば何故「原文のまま」讀むべきであるか。この文を認識の順序でみるならば、

一、まづ高館にのぼる。

二、北上川みゆ。

三、北上川は南部より流るる大河なり。

となつて、註釋書が、「まづ高館にのぼれば北上川見ゆ。北上川は南部より流るる大河なり」といふ解釋は誤ではない。然るに何故この認識的に正しい註釋を否とするのであるか。これは、二と三との間にあまりに空隙を置いて居すぎるからである。この「北上川見ゆ」と「北上川は南部より流るる大河なり」とは、可成廣い空隙を持つて、隔離してゐる。これでは芭蕉が高館に登つて、北上川を驚き眺めた感動が出てゐない。感動してみたものから、感動を取りのぞけば、甚しく相違したものになる。原文のまま讀むのは、「芭蕉が高館に登つた時の驚き」を、そ

のままに讀むことである。卽ち二と三との「二つの文章の組合せであつて、省略法によつた一といふ見方は原文をよんでゐるものではない。芭蕉は北上川を見た。そして直ちに、目の前に流れてゐる北上川に、「南部より流るる大河なり」と感動してゐる。しかしこの感動は說明の如くにみえるが、假にこれを說明としても、この說明は知解的にする說明ではなくて、流れて居る川に感動してゐる理解である。感動の理解である。北上川と直接に結合してゐる、北上川を見る働と、北上川を理解する働とが、ここでは一致してゐる。見る働にも感動があり、知る働にも感動がある。高館にのぼればそこに意外にも大川がある。この大川は南部より流るる大河である。北上川を見て川の流を見て、感動してゐる。そこで、一と二とが密接に結合したやうに、二と三とも密接に結合する。高館にのぼつて見た北上川と、南部より流るる大河の北上川とは、そのまま一致した北上川である。それ故に、「高館にのぼれば北上川は一と一氣につづき、北上川をそのまま主語にして、次の「南部より流るる大河なり」と一氣に續いてゐる。これは省略ではない。はじめからの間斷なき伸展である。見る働と、解釋する形とを分離すれば、感動の姿はなくなつて居る。登り、見、知る働が、空隙のない一連の進行になつて、はじめて

まづ高館にのぼれば北上川は南部より流るる大河なり。

の表現が、一氣に成立する。省略によつて成立したものでなくて、斷ゆることなき伸展によつ

て成立したのである。この伸展は斷絶することなき形であるから、一は直に二の主語的位置をとり、二は直に三の主語的位置をとる。この主語的定位による間斷なきものを、中央で切斷しては原意と全く異つたものになる。石井氏が原文のまゝ讀むべきだといふ意味がここにあるのであらう。

そしてこの定位に於いて「北上川見ゆ」を無位に置けば、

一、まづ高館にのぼれば。

二、北上川見ゆ。

三、北上川は南部より流るる大河なり。

の三項に於いて、第二項は第三項の主語北上川に一致し、「北上川は」の體言となり終る。この體言化、卽ち無の定位は、この表現を明確にする。それは丁度「枕草子」に於いて、「春は曙」といふ體言化の無の定位が、彈力を持つのと同一である。しかもこの北上川の表現は、見る立場の連續における無の定位である。故にこの表現をよむのは、第一に見る働の立場に立つこと、第二に見る働が書かれたる働に轉位する立場に立つこと、第三に見る働が書かれたる働に轉位する場合、その中心となる無の定位作用をよみ取ること、この三つが大切になる。

かくて讀むとは、文をよむことであり、文をよむことはそれの見られたる働、書かれたる働、更に無の定位の働を讀みとることである。卽ち間斷なき連續が、無の定位に向ふ働の形でよむのである。書き終れる形を讀むのでなくて、間斷なき働の中にあつて、よむのである。この働を放棄すれば、ここに「北上川は『南部より流るる大河なり』の一句は實に無味乾燥な、概念的說明となる」のである。かくて働の立場に立つのが、讀みの實踐性である。

第三章　言葉の共通性と變化性

言葉はもともと活きたものであるから、その形はほぼ生物と同じ形體と作用とを持つてゐる。言葉は共通性を持つて居て、一つの言語團體の中に、慣習的に保守的に持ち續けられる。もともと一つの形には、一つの意味がある。赤には赤の意味があり、三角には三角の意味がある。一定の音には一定の意味がついて居る。火を意味する印歐語系統の言葉は多く、P、F、Hに關係があり、また日本語でもヒ、オ、フである。これは火の燃える形から來る寫實語だとも見られるし、また火を燃やすために火を吹く音聲身振がP、F、Hとしてあらはされるのだとも見られる。ここに「ヒ」の音が、火を示す一定の意味を有つ起源がある。また「ホノホ」の如く音が複合して來ると、その複合體が一定の意味を持つて來る。「ホノホ」は、蓋し「火の火」であつて、火の中の火、火の最も代表的な形として見らるるものである。火の姿は焰で最もよく示されるからである。しかもその「焰」といふ言葉が傳へらるる間には、さまでの變化はない。香川縣の或る港町は、そのアクセントが孤立して關東型である。その關東型の發音が、長

い事周圍と混合されずに、傳承せられてゐる。またその周圍の土地のアクセントも、その港町から影響されることなく、完全に關西型を持續してゐる。かういふ傳承は可成りたしかで、親から子に傳へ、その間に殆ど相違がない。言葉はこの點で保守性が著しい。もし言葉をやすやすと變化させたら、言葉の共通性は失はれ、言葉の傳達性は著しい障害を受けるに相違ない。

　語るとはある定れる形によつて、語らんとする意向を、他に傳達することである。聞くとは與へられた形を通じて、語る人の表さんとしたものを知ることである。語る人は解せらるるやうに言はなくてはならぬ。聞く人は言はれたるやうに聞かなくてはならぬ。隨つて、言葉は語る人と聞く人との間に共通性がなくてはならぬ。言葉の第一の性質は共通性である。しかしこれにはいつか限界がある。語る人の表さうとするものは、複雜である。聞かうとするものも複雜である。言葉は中中之に應じきれない。例へば色で言ふと、吾等の色の辨別閾は、三五四九閾だとされてゐる。然るに色を語る言葉の數は、之に比べると、甚だ少い。線の場合でも同樣であつて、吾等の知り得る線の種類は、一四五八〇種あるのに、線の性質を示す言葉は、高古遊絲描以下廿種程度のものである。此の言葉で、一四五八〇種の線を言ひあらはすことは不可能である。かくて、言葉は象徴性を有たなくてはならなくなる。象徴 Symbolla とは、集めるといふ意味である。多くを一つに、全體を部分に集めるのである。吾等が今持つてゐるだけ

の言葉の數では、吾等の認識し得るあらゆる變化に應ずることは出來ない。言葉は自然に象徵となる。ここに言葉の變異性がある。言葉が象徵となる爲には、その共通性を歪め、ずらして行かなくてはならず、この歪によつて、言葉の融通性は大きくなる。しかしそれと共に、言葉は多義になる。例へば「彼はおもてでは感謝してゐる」とか、「彼は表面上は勉强してゐる」とかいふ言葉は、感謝してゐ、或は勉强してゐることを示してゐるが、それは表面であつて、その言葉が示さうとしてゐるものは、感謝或は勉强ではない。「おもてでは」或は「表面上は」といふ副詞の限定の仕方が、感謝或は勉强に强く働いて、この意味を變更せしめるからである。「おもてでは」といふ副詞の限定して示すものは、その反對の狀態である。感謝して居るのは「おもて」であつて、「おもて」でない處は正反對の狀態である。また「表面上は」は、同樣に內實はその反對の狀態であることを表出するのである。その勉强は表面上に限ること、他の場合は之に反することを示すのである。かかる副詞の修正作用は、「感謝してゐる」或は「勉强してゐる」を激しく修正し、その言葉の持つ共通的意味を變更し、歪めて居る。そしてかかる表現の仕方は、「彼は感謝してゐない」或は「彼は勉强して居ない」といふ表現よりも、もつと表現狀態を屈曲し、微細に陰影づけてゐる。どうしても感謝し、或は勉强して居なくてはならぬ理由があるにも係らず、それに感謝し勉强することが出來ぬのである。そこで表面と內

面とは違つた二重生活をしてゐる。この狀態の起伏を示すのが、「おもてでは」とか「表面上は」の修正性副詞の限定作用である。この表現の上には、論理の直截性は缺けて居るが、そのかはり感情の明哲性がある。かかる感情可能の確實性は、この言葉の歪による變化によつて表現せられる。ここに言葉の多義はあるが、この多義によつて、感情は可能的に表現せられる。

言葉で語りかけるといふ事は、語りかけらるる人に働きかけるのである。ただ聽者がそれを聞き、それを理解するといふだけでは足りない。それに働きかけ、それを動かすのでなくてはならない。聽者はそれを聞きそれを理解するのでなくて、それに動かされそれに從はせられるのでなくてはならぬ。言葉は聽者に迫り、聽者を支配するものでなくてはならぬ。「ことだま」といふのは、この言葉の活き働く力を言ふのである。そしてこの言葉の支配力は、論理性によるか、感情性によるかが問題である。論理性は理解せしめるが、動かし得ない。動かされなくてはならぬ。心から理解するとは、心から動かされることである。隨つて言葉の力は、論理性にあるよりも、感情性にある。卽ち言葉の共通性にあるよりも言葉の變化性にある。東京でさく鄕里の言葉は、實になつかしい。なつかしいのは鄕里の方言は、歪み、變化されてゐるからである。それは吾等の感情を直接に動かすものである。鄕土の人情と田園とによつて變形され

たものが、吾等の感情に基本的に働きかけるからである。

而してこの變化には、自然的、時代的に生ずるものと、一時的、個人的に生ずるものとある。自然的時代的變化性は、次の共通性を生ずる變化である。變化したものは共通性として人人に完全に承認せられる。一般的承認の形において變化してゐる。したがつて變化してもそこに生じたものは、一般性である。換言すれば一般性の變化である。例へば、助詞の「ぞ」はそれを意味する指示語である。「こそ」は此れと其れの二つの指示語の重つたものである。

「ぞ」は語源から云へば、指示の意味であつて、代名詞の「そ」「それ」等と語源を同じうするものである。それと强く指し示す働をもつてゐて、記紀の時代には「そ」とも云つた。古事記も日本書紀も、「そ」「ぞ」相半ばしてゐる。平安朝以後は、「誰ぞ」「たーそ」などの形に名殘りをとどめた。

「ぞ」がある時は、文の結びは連體形とすることが、奈良朝から平安朝までの一般の慣習であつたが、院政鎌倉時代以後、終止形・連體形が同形となつた結果、次第にこの係結の呼應は失はれた。…室町時代には…全般に係結の意識が衰へてゐた。…後には單に意味をつよめる用を成すものになつた。

「こそ」は「ぞ」より一層强く物を指示する助詞で「こ」も「そ」も語源は指示語。「それ」「これ」と同じ語源から來てゐる。多くの部類の中から、そのもの一つを拔き出して區別する意味を持つてゐる。「こそ」の係を已然形で結ぶ習慣は、他の係結に比べて最も後まで殘り、室町時代にも大體は守られてゐるが亂れてゐるものも少くない。…

アノ下ニコソ吾親ハ居ルラント（中華若木中蒙二三オ）

の如きは失はれてゐる者だが、かかる已然形を失つてゐる者の上から、一般に「こそ」の係結も亡びて行つたのだら

ら。

鎌倉時代から室町時代にかけて、「こさんなれ」「ござんなれ」といふ特殊の連語がある。「こさんなれ」は「こそあるなれ」、「ござんなれ」は「にこそあるなれ」の約つたものである。「ごさんめれ」といふ同趣の連語もある。

（小林好日氏、日本文法史）

「ぞ」はそれと一つに集中するのが、一般性である。いろいろあるものの中から、「それ」一つを選び出して、それに集中するのであるから、そこに「強く指し示す働」がある。その「それ」と何げなく指し示す働から、「ぞ」と強く指し示す働に變化してくるのは變化性である。しかしこの變化は時代的、一般的の變化であつて、決して歪ではない。また「ぞ」の係結の呼應の奈良から鎌倉室町にかけての變遷も一般的變化であつて、決して歪ではない。そこには常に變化の後に共通性が成立してゐる。

「ぞ」のそれよりも「これ」「それ」と、一層ひろく注意を擴大させて、後「こそ」と一點に集中せしむるから、その指示力は、前に注意が擴大して居ただけに、集中力が一層強くなる。「こそ」は「ぞ」の如く二囘の變化をなしてゐる。第一に「これ」「それ」が「こそ」に變化し成立してくる。第二に「こそ」が係結の上で變化してくる。それが鎌倉期から他の言葉に連結して、「こさんなれ」「ござんなれ」といふ新らしい言葉をも生じてゐる。しかしこれ等の變

化は、何れも變化の後に、共通性を成立せしめてゐる。隨つて吾等はかかる變化をば、變化として感ぜず、共通性の推移として感ずる。個人的變化性は、個人に起る變化で、これは共通性を持つては居ない。その個人の生涯を通じての特殊性となる變化性もあれば、またせき込んだ時、亢奮した時、どぎまぎした時、その他普通と違つた心理狀態の時に起る、極めて一時的な變化性もある。それは如何にもその人らしい個性を示す變化である場合もあれば、あの人がどうしてあゝだつたかと思はれるやうな變化である場合もある。何れにしてもその變化は共通性から離れてゐるのが特色である。ただ個人の一時的なる心理狀態の場合には、語序を轉倒するとか、或は發音が斷續するとか、主語が省略されるとかいふやうな、誰にも普通にあらはれる變化があつて、それは一般的な變化として共通性を持つことになる。故にこの場合に變化性として注意せられるのは、その人の生涯を通じて示される偏向である。

例へば一茶の句によく出てくる

あつさりと春は來にけり淺黃空

此やうな末世を櫻だらけかな

の如き表現である。「あつさりと」とか、「櫻だらけ」とかいふ言葉が、無いではないが、新年の空を言ひ、櫻の花の爛漫たるを言ふ場合には使ばれて居ない。かういふ平坦な日常の言葉を

以つて、重大なる場合を樂樂と言つてのけて平氣でゐるのが、一茶の作風である。

わか竹やさも嬉しげにうれしげに

明く口へ月がさすなり角田川

けふからは日本の雁ぞ樂に寢よ

月も月そもそも大の月よ哉

かういふ言葉のかたより、言葉の歪に、一茶でなくてはみられぬものが示されてゐる。言葉の活活とした味は、むしろこの歪の中にある。

かくて言葉は二つの相反する性質からなされて居る。共通性と反共通性である。共通性は保守的に拘束する事によつて、同一の言語團體では誰にも理解せられる性質を持つてゐる。これは歪による理解程に深くはないけれども、廣い。廣くて淺いのが、共通性である。故に、この性質の中心とする處は、言葉の記號性である。記號は歪を持たない。歪を持たないとは、一つの言葉が完全に一つの意味を示す性質である。故に何時にても、如何なる場合にても、例外なしに一つの意味を持つて居る。そこには歪がないから、それが語られる場合の具體的事情を知る必要は少しもない。言葉は言葉の示す意味だけを、最も單純にとればよい。それが成立した

事情から切り離して、考へればよい。電報の「ウナ」は、それが何故に、或は如何にして至急を要するかといふ具體的事情を精しく考へる理由はない。「ウナ」は絶對にそれ以外のものではない。それは至急報である。如何なる場合にもそれは至急報であつて、「ウナ」は「ウナ」だけで、それ以外のものではない。言葉の記號性は完全なる拘束性である。隨つてその性質は可成り抽象的である。論理的には確實性を持つてゐるが、感情可能の確實性は持たない。記號は理解せられるが、感動はさせられない。心情に徹しないからである。そして記號はその記號の示すものの成立の事情を省略してよいのであるから、深く示し、精しく示す性質がない。故に記號に對する感動は、それを理解する側の立場によるのである。

もともと言葉は同一の表現でも、それに對する人の立場によつて、樣樣な意味の相違がある。或る人には愉快にきかれる事が、反對の立場に立つ人からは不快にきかれる。あつい時に雪の話を聞くのと、寒い時に聞くのとでは違つてゐる。ことに記號は自ら聽者に對して迫る力を持つて居ないから、その意味以外は聽者の立場にまかせることになる。その感動は記號がひき起したものではなくて、記號によつて聽者が成立せしめたものである。記號をみて感動するのは感動する人の中に理由がある。故にそれは普遍的ではない。記號は理解に於いては共通性を持つてゐるが、感動に於いては共通性を持たない。此處において言葉の記號性のみにたよること

は理解し盡さるるものを與へて、理解を決定し、感動を放擲することになる。したがつて記號性の示すものは輪郭的である。理解の輪郭的表示が、言葉の記號性である。

記號の一例として、「浮浪人の暗號」（昭和十年三月二十三—二十四日、東京朝日新聞）をあげる。

何れの國でも現在暗號を用ひてゐない國はなからう。ところが、外交部や軍部ばかりでなく、歐洲では暗號通信によつて連絡を圖つてゐる國際的の一大團體が在存してゐる。ボヘミヤン、浮浪人、旅乞食等の所定めぬ遊牧の連中である。勿論その暗號たるものは外交通信のやうな複雜難解なるものでも、又秘密を第一條件とするものでもなく、却つて人目に觸れ易い場所に記して、此の暗號を理解出來る仲間だけで納得し合つてゐる譯だ。

歐洲に長く滯在したことのある人は、よく家の塀、壁或は路傍のベンチの背、橋の欄干などに白墨の妙た記號を見たことがあらう。アラビヤンナイトの中にも斯んな例があるやうだが、何にかテロリストの暗號のやうでいい氣持はしない。併し之はボヘミヤン連中が、その町その家の待遇狀態を後から來る仲間に知らせる暗號に外ならない。

ところで面白いことには、最近ウインのストライヘル教授によつて、之等の暗號が根こそぎ研究しつくされた。

暗號は丸や四角の幾何學的な記號や物象を現した單純なデッサン等から出來てゐて、一目瞭然、國から國へ移り渡つても外國語の面倒もなく、只これによつて仲間に意見を語り、注意を與へ、常に前者の經驗したところのものを後者に傳へて永久に流浪を續けてゐる。

暗號の中から二三の例を拾つてみる。挿圖の右端は「どうにも法がつかぬ。この邊すかんぴんばかりだ」（以下順に「お鳥目にありつけます」「圖太くやれ。意くぢのない奴ばかりだ」「恐ろしく獰猛なのがゐる。どぢを踏むな」「あま

つ子一人。だが氣難し屋だからとちるな（猫の記號）ー「働けばいくらかになる（金槌）」「くたばりかけて見せさへすれば損はない（松葉杖）」「用心肝要、危いぞー（牢獄の鐵柵）」

ざつと斯んなプリミチイブな記號だが、女一人、但し氣難し屋だからと猫を描くところなんかは洒落てゐる。



前記の暗號を警察用語では *Zinces* と呼び、暗號を記すことを *Zinguer* といふ。ス博士の説によると *Zinces* には非常に多くの種類があつて、例へばマドロスの刺青もその一種であり、囚人の間で壁を敲いて通信する法、又唖のやうに十本の指を活用して話す法等悉く之に含まれるといふ。*Zinces* 及び *Zinguer* の語源については種種の説もあるやうだが、少くも *Zinc*—亜鉛などの語から來てゐるものではなく、寧ろ昔犯罪人に刺青や烙印を押した *Zinker*（古い獨逸語の廢語で「體刑執行人」の意）の轉化したものと見るのが至當であらうとス博士は説いてゐる。

然し、斯うした暗號はボヘミヤン連ばかりでなく、イギリスやドイツの警察、憲兵隊等でも利用してゐることは周知であり、フランスでは十七世紀のリシユリユ宰相の頃に盛んに用ひられてゐた。即ち旅行免状などには種種の秘密の印が付けられて——例へば、右角の圖案に隠れてやつと見える程の小さいバラの花は信用するに足る人といふ意であり、右下角のチユウリツプのマアクは重大使命を帯びる者を意味した。反對に注意人物、狂人などには氏名の前に細いペンで數線が引かれたりして、甚だ圖案的の美しい暗號であつた。だが斯くの如き方法は、電信電話等の發達した現今では次第に價値を失つてしまつた。ただボヘミヤン達のみが文明には何の拘はりもなくその暗號を發展させてゆく。

ところが近來自動車旅行をやる連中に一暗號が使用され出した。例へば、此處のガソリン屋はボルから御注意とか、役所の料亭の葡萄酒は鳥渡飲める…といつた工合の極く罪のないものばかりだが、インテリのボヘミヤンには之が案外な役を務めてゐるといふから、世は樣樣である。

之に反して言語の記號性拘束性を變更して來るには、次の三項を成立させなくてはならぬ。

一、言葉の歪を承認すること。

二、言葉の成立の背後の事情を考へること。

三、言葉の多義の中より、その一つを選ぶこと。

二は言葉の語らるる基礎に遡つて、言葉をきくのである。「如何に語られたか」を理解すると共に、「如何に語らうとしたか」を理解することである。どういふつもりで言つたかを理解することである。三は言葉の多義からその一を選定するのであるが、この定位にあたつて、定位の基礎となるものは、二の條件である。故に二と三とは、原因結果の關係に立つのである。されば言葉を聞くといふことは、

一、語られたる言葉の共通性によつて聞くこと。

二、語られる言葉によつて、語らんとするものの意向を知ること。

である。卽ち語られたるものによつて、語らうとする處を知るのである。換言すれば、言葉の共通性に立つて、その言葉の歪を知るのである。これが解釋である。

語られたるものを外的とし、語らんするものを內的とみれば、この內外兩者の接合點を想像することが出來る。この點に立てば、語らんとする意向と、語らるる言葉とを、同時に知るこ

とが出來る。言葉を更に深く知るためには、この接合點から一層意向に遡らなくてはならぬ。そして遡り終つて、再び言葉にかへる時、この言葉の意味は充實する。そこでも一度言葉から接合點に復歸する。ここに接合點は完全に充實する。かかる充實を解釋といふのである。

然るに記號には接合點がない。意向と言葉とは完全に一致してゐて、言葉の背後の意向をさぐる要もなく、隨つて意向と言葉との間を往來することもない。換言すれば歪と感情がないのであるから、記號性には解釋はない。

第四章　言葉の限定作用

子供の言葉の「うまうま」の意味を考へてみる。この言葉は、文法の知識から言へば、明かに名詞である。そしてこの名詞は、主語として語られてゐる。故にこの語り方から言へば、子供は主語のみを言つて、述語を略し、主語的立場で、自分を發表すると考へる。しかし同時に「いやいや」といふやうな述語の形で、自分を發表することもあるから、子供の言葉は、主語的立場にのみ據ると一概には言へない。ただ主語的立場による表現の多いことは事實である。

然らばこの「うまうま」は、主語として如何なる立場にあるか。この形は最も含蓄の多い形である。「うまうま」の中には食物と子供自身との關係を、一切ふくんでゐる。食物をほしい場合も、食物をほしく無い場合も、また食物のうまい場合も、うまくない場合も、皆一様に「うまうま」である。更に「うまうま」を人が食べてゐる場合をも、猫が口をつけさうにする場合をも、一様に「うまうま」であらはしてゐる。随つて「うまうま」は、子供の兒、思ひ、意志する限の一切をふくんでゐる。故にこの「うまうま」は主語でも無ければ、また述語でも

ない。主語と述語とをふくんで、まだ主語にも、述語にも分かれない狀態である。主述未分の狀態である。これは子供の意識が、常に「うまうま」で示されて居、それが一切をふくみ、一切を現して居るからである。まだ主語と述語との組織が出來て居ないのである。

意識が進むと共に、主語と述語とにわかれる。「うまうま」がどう見られ、どう思はれ、どう要求せられるかに向つて、語る働が集中する。「うまうま」の主語が中心ではない。「うまうま」がどうあるかに中心がある。卽ち全體の語る意志は、主語的立場をとるのでなくて、述語的立場をとるのである。語るのは、主語を語るのでなくて、述語を語るのである。主語は述語の出發である。述語の起點である。故に意識が進むといふことは、動的中心が、述語に集中する意味である。卽ち述語を實踐に向つて明瞭にすることである。

隨つて言葉を實踐的に見る時には、言葉の主要性は、主語にはなくて、述語にある。主述兩語未分以前の「うまうま」が持つてゐた意味を、主語が引きうけてゐる。しかし一切を持つといふことは、一切を語ることであり、一切を語ることは、何も語らぬと同じである。ただそれから後に起る限定の作用の出發點を明かにするだけである。限定するものは何か。それは述語である。述語は主語の有する一切の意味、普遍的な一切の意味を、實踐的に限定する。述語は

普遍性ではない。限定性である。一切の意味の中から、實踐的に妥當なるものに向つて限定する。これが語る働である。語るとは一切を語るのでなくて、特殊を語るのである。主語を語るのでなくて、主語を限定するのである。語られるのは主語でなくて、主語の限定された形である。故に主語は限定の出發點たる性質を示すに外ならない。

ここに於いて言葉を實踐的に見る場合には、言葉の重要性は限定作用であり、隨つて述語である。言葉は語るものでなくて語らるるものである。故に述語は重大な意味を持つてゐ、されば外國語はそのままで述語にはなり得ない。必ず日本語化の作用を受けて居なくてはならぬ。日本語化の働とは「す」或は「する」を附加することである。漢語、歐羅巴語何れも日本語化の働は、「す」「する」の附加を待つて行はれる。例へば刺戟、感動が述語になるには、「刺戟する」、「感動する」として、之を動詞にしなくてはならぬ。「ドロップする」、「パスする」も亦同様である。之に反して主語には外國語の入り得ることが容易である。特に運動競技の用語、料理の用語、機械の用語には、甚だ多い。これはその社會の人達の氣質を示すものである。

また外國語の影響の入り難いものに、語序がある。語序とは言葉の限定作用に參加する言葉の順序である。この參加の順序は、言葉の大切な性質であつて、外國語はこれに變化を加へる

ことは出來ない。これは限定作用の基本的性質である。主語と述語とが最も遠く離れる語序では、日本の如き限定作用を表現するのにも適當であつて、語序は、それぞれの限定作用に對して、必然的に適合するやうになつて居る。

主語は固定的性質である。ことに日本にはそれが多い。日本の主語には單數複數の區別がない。「人ス」と發音したり「ヒテ」と發音したりして、人の複數とする樣な事はない。複數には諸、等、多、少などの言葉を附加して、之を示し得るも、これも是非しなければならぬ譯ではない。特に述語には單複の區別が全然ない。日本の限定作用は、かういふ方面には向つてゐない。

しかし言葉は、自分自身では變はる。例へば文語のラ行變格、ナ行變格は四段に、上二段、下二段は、上一段、下一段に變はる。隨つて口語の動詞の變化は、四段と一段とに集中する傾向がある。かういふ可變的な性質が、述語にあるだけに、この方向に於いて、言葉は甚しく柔軟である。

一般に日本の言葉は、語尾の方が變化しやすい。隨つて曲折は語尾に於いてあらはれる。そ

してこの音韻的の性質は、語序と同じ傾向である。日本の言葉では、限定作用は語序のはじめに現れずして、最後に現れる。言葉の存在的傾向を言つた後に於いて、はじめて限定作用が現れる。この性質が、動詞に於いても同様にあらはれて、動詞の限定作用も、語尾に於いてはじめて見られる。語根と語尾との關係は、あだかも主語と述語との關係に等しい。語尾は、自然形以下六種の限定をする。しかもこの限定で猶不足の場合に、動詞、助動詞の限定作用が之に參加する。この爲に、語尾は連體、連用の二形を持つてゐて、豫めその準備をしてゐる。

かういふ言葉の可變性の外に、言葉の語り方の上に、可變性がある。例へば、「さきに」と「さつきに」と、「さつつきに」とでは、先であることに程度上の相違がある。「さつきに」は「さきに」よりも一層先であり、「さつつきに」なると、もつともつと先になる。それは語り方の力點附加によるのである。また「とても」は、普通には下に否定が來るのであつて、實現の思はしくない表現である。然るに之と反對に、實現が甚だしく可能な場合をも意味する樣にも變化してゐる。全然正反對な二つの表現を一つの言葉が持つやうに變化してゐる。しかしそれが「とつても」になれば、實現の否定的豫想はなくて、完全に實現のすばらしさを言ふ表現に變つてくる。語尾で變化しない言葉はまたかういふ方法で可變性を持つてゐる。「めつた」は、下に否定語が來て、實現の可能の稀少をいふのであるが、この力點を除去して「めた」といひ、特

に「めためた」と重ねると、意味は全く反對になつて、實現の頻數なるを言ふのである。これは信濃の方言である。

以上の如くにして、言葉は變化性を以つて、主語の持つ一般的な傾向を限定する。語るとは限定作用に外ならない。ここに述語には、言葉自身としても、多くの變化性があり、その語り方の上にも、多くの變化の樣態がある。この述語の可變性と主語の不變性、換言すれば述語の柔軟性と主語の堅硬性との相反した二樣の性質によつて、言葉は語られる。これが言葉の實踐である。かういふ性質を、臨濟は最も明確に言ひあらはしてゐる。

隨所に主となれば、立てる處皆眞なり。

而して「隨處に主となる」とは、表現の限定作用である。言葉の實踐とは、限定作用によりて「隨處に主となる」立場である。

ここでは「日暖かし」といふ言葉から出發する。「日」には暖かい場合もあり、寒い場合もあり、暑い場合もあり、晴、曇、出、入、正、中、斜等樣樣である。然るに「日暖かし」といふ場合には、その多樣な狀態の中から、暖かい場合のみを肯定して、他の一切の場合を否定したのである。この限定によつて、「日暖かし」の場合が成立する。主語「日」は樣樣の可能の

中から、述語「暖かし」を選ぶことによつて、自分の形を明白にする。卽ち述語「暖かし」によつて、主語「日」は制限されて居る。暖かしは限定以前には主語の形の一性質であり一部分であつたが、今は主語の性質の全部となつた。「日」は「暖かし」になり切つて居る。ここに「日」は述語化されたのである。「日」は寒いでもなく、暑いでもなく、出たのでもなく、傾いたのでもなく、暖かいのである。そして暖かいのは、火の爲でもなく、電氣や瓦斯の爲でもなく、全く日の爲である。日の爲に暖かいことが明かであるから、述語「暖かし」は主語「日」の爲に限定をうけてゐる。卽ち「暖かし」といふ述語は、主語「日」によつて主語化されてゐる。「日」によつて「暖かし」が成立してゐる。はじめには「日」が「暖かし」によつて成立したが、今度は「暖かし」が日によつて成立した。かく主語「日」と述語暖かしとが、互に限定し合ひ、互に成立し合ふ狀態が、「日暖かし」といふ言葉である。

言葉は行爲である。もともと行爲は、自分だけでは成立しない。主語だけでは行爲にならない。同樣に述語だけでも行爲にならない。行爲になる爲には、第一に述語の主語化、第二に主語の述語化がなくてはならず、その上に、この第一第二を包含する狀態が成り立たなくてはならぬ。卽ち第一がそのまま第二、第二がそのまま第一といふ狀態が成り立たなくてはならぬ。これが「主語卽述語」の立場である。主語と述語との間には、圓環狀の通路がある。

然らば「日が暖かし」の如く助詞「が」が主語と述語との間にあらはれた場合、助詞は主語につくのか、それとも述語につくのか、何れであらうか。「が」は傾向を持つのみであつて、意味を持つては居ない。「日」の暖かなる狀態を言ひ現し得る助詞は、大體三つある。「は」「が」「も」である。

は。「日は暖かし」この「は」は主語自身の限定にのみ專らなる傾向である。「日」はどうであるかを決定するのに急な傾向。卽ち主語が述語化する傾向。

が。「日が暖かし」この「が」は述語自身の限定に專らなる傾向である。暖かいのは「日」であるといふ限定に重心がある。卽ち述語が主語化する傾向。

も。「日も暖かし」この「も」は主語の述語化の傾向、或は述語の主語化の傾向のその何れでもない。かかる何れかの傾向が、他の限定作用の場合にも同樣に起り得ることを示す傾向である。卽ち他との連關上の限定に重心を置く傾向である。

而して今の場合は、「日が暖かし」の「が」である。述語の主語化の傾向である。その傾向が主語の述語化であると言つても、それはかかる傾向が主動的であると言ふ迄で、その主動的傾向の中で、主語の述語化も行はれ、述語の主語化も行はれ、更にこの兩作用の相卽することも行はれる。これは「は」「も」何れの場合にも同樣である。然らば主語と述語との間にある助詞

は、限定作用の主動傾向を示すものである。自らは主語化もせず、述語化もせず、その何れの場合にあつても、常に態度を示すものである。故に「主語の述語化」、「述語の主語化」の場合には、「の」の立場を示し、「主語卽述語」の場合には「卽」の立場を示すのである。されば助詞は主語にも屬せず、述語にも屬せず、その傾向部分、特に主動傾向部分をなしてゐる。この助詞のあらはれなかつた前の「日暖かし」は、分化以前の形體である。限定作用の進行は、自然に助詞を分出して、限定作用の表現となるのである。

隨つて「日が暖かい」といふ限定は、主語の部分と述語の部分との二部分から成り立つのではなくて、

1、主語の部分

2、主動傾向の部分

3、述語の部分

の三部分から成り立つのである。故に主語の中心をなすもの、主語の限定をなすものは、2なることを知り得る。

寫眞が常識的に信ぜらるる形は、對象と寫眞とは、A＝A であるといふ點である。A以外のものは何もふくむ事なく、同時にAは缺くることなく含まれてゐる形、即ち完全なる寫眞である。A氏の寫眞は完全にA氏であつて、A氏以外の他の性質は一切ふくまず、且A氏の性質は全部含まれて居る。似ることにおいて寫眞に勝るものはないと考へられてゐる。にも係らず、寫眞は少しく知れる程の人の場合にはよく似てゐるが、熟知せる人の場合には似てゐると思はれない。何處にか不足せるものが感ぜられる。寫眞では何かもの足らぬ心持がある。然るに肖像畫は之と反對である。A氏の肖像畫はA氏に似る外に、更に他の意味がある。隨つてその肖像畫が誰なるかを忘れられた後においても、他の意味で價値を持つてゐる。誰だかわからぬ寫眞で興味のないのとは、全く性質が別である。

吾等のよく知れる顏の一つは、親の顏である。よく知つてゐる顏であるから、寫眞では滿足出來ない。寫眞には親の或る一つの顏しか寫されて居ない。他の場合の多くの顏は寫されてゐない。故に親の寫眞は似ては居るが、滿足出來る程に似ては居ない。滿足する迄似る事が出來ないのである。それ程よく知つてゐる親の顏が、目をつぶつても中中思ひ浮べられない。しかしどんな人ごみの中でも肩の端をちらつと見ただけでも、すぐにわかるのが親である。最もよく知つてゐて最も眼に浮ばない。知り過ぎてゐるからである。この親の顏も畫にはなり得る。

畫はそれを樣樣の視角から見て、その多樣の中で限定するからである。肖像が滿足させるのはこの限定作用によるのである。在るものを皆寫しとるのであるから、寫眞には限定作用がない。そこで光其の外の條件、形の構成その他によつて、樣樣の限定が加へられる。この頃の寫眞は似ることが出來るやうになつた。性格的に似ること、肖像畫的に似ることが出來るやうになつた。これは似るのでなくて、現はすのである。寫眞も似る位置から現はす位置に變つて來て、所謂藝術寫眞と言はれる形にはじまつた、その後の樣樣の工夫がある。

寫眞のA＝Aに似たるものに、幻覺がある。しかしこのA＝Aは一時性で、次の時間にはその等式は成立しない。藝術の場合にはA＝A′であり、次の時間にはA＝A″であり、その示す形は變化する。そこに藝術の深さがある。藝術は人によつて、時によつて示すものが同じくない。寫眞と藝術作品との中間にある位置が幻覺である。

寫眞の場合に「この寫眞はA氏像である」と言ふ時、寫眞は主語であり、A氏像は述語である。寫眞とA氏とは主語と述語との關係になる。しかも主語の限定作用は殆どなされて居ないのであるから、主語の述語化は微力であり、また述語の主語化も微力である。基礎に限定作用がないからである。然るに肖像畫とA氏との間には十分なる限定作用があり、隨つて主語と述語との間の相即關係が十分である。換言すれば寫眞の場合には助詞がないのである。

主語の述語化、述語の主語化は、一歩を進めて、主語卽述語に達する。その「卽」の世界が助詞であるならば、助詞は最も純粹なる形である。言葉の味が助詞に集中するやうに、東洋の藝術の味が、「純粹」に集中する。「日が暖かい」といふ程の短かい言葉の中にもみられる純粹化の傾向が、東洋の藝術に通じてゐる性質なることは見逃し得ない。「其の光淸くして、浮ならず」の境地に至るべき、限定に限定を重ねる用意が鍛錬である。鍛錬の道はここに於いて東洋の藝術に、必然的なる生命を有するのである。

かつてこの問題を別の立場から述べたことがある。今之を次に引く。

故に形體の永遠性は、常に畫面に於ける否定作用によつて支持せられる。而して具體的とはかかる否定作用によつて、空間が時間化せらるることである。かかる意味の具體的生活は、古より生活の理想とせられたもので、宗教もこの方向をとり、文學もこの方向をとり、美術もこの方向をとつてゐる。隨つて東洋の生活の根柢には必然的に否定作用がある。

芭蕉の

月はやし梢は雨をもちながら

の句をみる。梢は栗などの梢でもあらうか。それがやや黄ばみ、秋の雨につめたく濡れてゐる。

上には靑の白ばんだ月がある。月は早く動いてゐる。「月はやし」といふ肯定は、月以外のものを否定して成立してゐる。月の早く動くためには、そこに雲が多い。その雲は、梢は雨を持つといふのにみて、濕氣をふくんだ雲であらう。しかるに月のみが肯定せられてその雲の動きは否定されてゐる。しかも「月早し」は「今」月が早いのである。「今」は月の早い運動の中に取り入れられて、「月はやし」の中に沒してゐる。ここに點が成立する。この否定的定位によつて「月はやし」は、激しい表現になつてゐる。「梢は雨を持ちながら」は、野も土も否定せられ、木でも梢のみが肯定せられてゐる。梢も雨をもつ狀態のみが肯定せられて、他はすべて否定せられて居る。しかも「今」はここでも雨氣をふくむ梢の中に沒してゐる。これが點の完成である。しからば時は顯はれてゐないかといふに、決してさうでない。梢は雨をもち「ながら」といふその持續の中にある。月は「はやし」といふ、時の推移の狀態である。共に豐かに時を持つてゐる。「今」が持續し推移してゐる狀態である。月も梢も時の中に完全に存在してゐる。時に包含されながら、時を月と梢との中に沒して、その月と梢との一樣狀としてゐる。月と梢とが時の中にあるのでなくて、月と梢との有りやうが、時の姿である。その上に「梢は雨をもちながら」には、「月はやし」が感じられる。「月はやし」には、その下に雨をもつ梢が感じられる。故にこの二つは、それぞれ他を包含してゐる。一方は他方に沒することが出來るのである。一方

は他方に沒して、犧牲的に存在することによつて、一層深き存在となる。故に全般にわたつて最も深く働いてゐるのは、否定的定位である。

處が時となる爲には、處の否定力が大でなくてはならぬ。時が處を含むには、時の否定力が大でなくてはならぬ。時と處との兩者は互に否定的に成立せしめられ、而して互に包含し合ふ。處が時となるには、時の無限性を否定して之を含むのである。時が處を含むにも、處の無限性を否定して之を含むのである。かくて「A點」に「今」をふくみ、「今」に「A點」をふくむことが出來る。

かくの如く強く否定せられて後、僅かに包含せらるる形が、無常である。否定せらるるが故に永續ではない。しかし後には、之が實質となるが故に、虛無ではない。永續でなく、虛無でなく、高次の相に向つて流るるのが、無常である。この無常が常に否定的定位によつて他をふくむ機會に、消極性を脫却して積極性となる。この積極性が永遠である。無常の持つ積極性が、東洋の創作性、東洋の美の性質である。

時或は處のみでは、極めて抽象的である。この兩者の中の一方が、他方に含まれ、次に他方が一方をふくむに到つて、具體的である。AがBをふくみ、次にBがAをふくむ。この融合による高次の展開が、具體的である。「A點の今」「今のA點」が、單に「A點」となり、或は「今」

となつて、しかもその中に未來をふくみ、過去をふくむこと、卽ち更に高次の時と處、「今」と「A點」とを含むのである。この高次の「今」と「A點」とが東洋の美の特質である。芭蕉の「月はやし」の句は、この一例である。（「東洋美術論叢」中、東洋の美の特質に就いて）

かくて讀む働は、この限定作用を再びもとにかへして行く。ここに言葉の柔軟にして彈性に富む味があらはれる。新屋敷幸繁氏は、之を「小學國語讀本」から見てゐられる。

卷二の「カマキリヂイサン」を語つてみよう。その中に吾吾の詩を探求してみよう。

（私ハカマキリヂイサンデアル）
カマキリヂイサン（ト呼ンデ下サイ）
（私ハ私ノ）イネカリニ
（私ノ）カマヲカツイデ
（私ノ）アゼミチヲ
（私ノ）トホイタンボヘ
イソギマス。（ゴランナサイ）
（私ノ上ニ）スツキリハレタ
（私ノ）秋ノ日ニ
（私ノ）トホイタンボヘ

かう語ればこれはカマキリの心である。カマキリ自身の詩である。カマキリを實體驗する私の詩情である。すつきり晴れた秋の日に、畦道づたひに、遠い田圃に、鎌をかついで稲刈りに出掛ける氣持は譬へやうもないほど充實した喜びに滿たされる。そこに詩がある。作者(兒童)は、この大まじめな蟷螂を「カマキリヂイサン」と呼びかけたために「イソギマス」が蟷螂自身の言葉でなく、作者の說明の言葉として風景を客觀化した。そのためにこの歌がごく輕いほがらかなをかしみをも含めた、讀み方によつては戯曲的にも見えるやうな作品となつてゐる。勿論この作品にはをかしみの要素が一つの基調をなしてはゐる。然しこのをかしみを墮落ちせしめないところの眞面目なものを忘れてはならない。それが前述の「カマキリ自身の詩情」卽ち創作者の充實された詩情である。「私ハ」「私ノ」の立場から體驗される所のものである。この實生活的詩情と、蟷螂の聯想せしめる情趣的な詩情とによつて、ユーモラスな詩境が創造されてゐる。それで挿繪の畦道の印象は忘れがたいものであり、農家のほの見える姿もなつかしく、擴大されたカマキリは秋の感觸をもつて全體をはじいてゐる。

かうして新しく創造された世界は、兒童の農村的生活感情を高く淸く刺戟するであらう。

かうして得た詩を、兒童との關係に於て想見すれば、決して兒童を面白がらせるだけの教材で

はなく、もつと深く秋の稲田の眞實な情景に觸れさせるものでなければならない。この文句を裏づけてゐる無限の實を讀み取らしめなければならない。

カマキリヂイサン（タンボノ中ヲドコヘイク）
（カマキリヂイサンモ）
イネカリニ（カマヲカツイデ）
カマヲカツイデ（イネカリニ）
アゼミチヲ（イネカリニ）
（カマヲカツイデ）トホイタンボヘ
イソギマス（トホイタンボヘ）
スツキリハレタ秋ノ日ニ
（カマヲカツイデアゼミチヲ）
トホイタンボヘ（イネカリニ）
（トホイタンボヘ）イソギマス

から讀みこなすと、この詩の背景が段段はつきり兒童に示されさうに思ふ。殊に「モ」の發見は、この詩の世界を人間社會と結びつけることに役立つ。かくて次第に散文化されて作者と素材の世界が具體的に還元され、改めて

カマキリヂイサン

イネカリ　ニ
カマ　ヲ　カツイデ
アゼミチ　ヲ
トホイ　タンボ　ヘ
イソギマス。
スツキリ　ハレタ
秋　ノ　日　ニ
トホイ　タンボ　ヘ
イソギマス。

といふ童詩を自ら創作する氣持で讀むことが出來る」からなつてはじめて前述の「言語や文字を克服し押しかへして語る」ことになるのである。（詩探求的方法による讀方の教材研究、教材集錄、十年四月號）

第五章　言葉に於ける相反性

言葉はその實踐に於いて二つの相反した性質から成り立つてゐる。第一はその論理的意味である。この論理的意味は言葉の普遍性であつて、この方向からは言葉は決定的意味を以つて誰にも同樣に理解せらるるのである。辭書はこの立場から言葉を取扱つてゐる。然るに書かれ、或は語られる言葉は、論理的意味以上の或る性質を持つて居る。同じ言葉でも、語る人によつてまた語られる時によつて異る。それ程言葉は變動的である。これは言葉の感性的意味である。この性質は論理的性質が普遍的であつたのと異つて、特殊的である。この特殊性は一つ一つの言葉の上にあらはれるばかりでなくて、文の構成の上にもあらはれる。普通文法に對して、特殊文法としてあらはれる。例へば芭蕉の「奥の細道」にしても、そのはじめの部分に

> 彌生も末の七日、明ぼのの空朧朧として、月は有明にて光をさまれるものから、不二の峯かすかに見えて、上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し。

といふ一節がある。これは三つの部分に分かれる。

1、時は彌生の末の七日で、曙の空は朧に、有明の月は光をさめてゐる。

2、富士の峯がかすかに見える。

3、上野谷中の花の梢を、又いつ見得べきかと心細い。

この三つの部分は　單獨には別に無理がない。しかしこの三つの部分の接合が、「ものから」でなされてゐる。「ものから」は、その論理的意味で言へば、前の部分を原因とし、前の部分から論理的必然的の結果として、後の部分が誘導される意味である。前の部分と後の部分との間に論理的因果關係のあることを前提として居るのである。「歳老いしものから、家に籠る日多し」の類である。この「奥の細道」では1と2との間には論理的因果關係が成立してゐる。「光をさまれるものから、不二の峯かすかに見えて」は論理的に自然に成立する。然るに「ものから」はこの「不二の峯かすかに見えて」を、論理的に誘導するのみならず、「上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し」をも誘導してゐる。「見えて」の「て」は、接續を少しく中止して、そして次の新らしい言葉に連接するからである。けれども「光をさまり富士かすかに見ゆるものから、上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し」は、成立が困難である。ここでは「ものから」は働いて居ない。有明の月の光をさまり、富士の峯のみゆることを論理的前提として、「上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し」は、どうしても出て來ないからである。

みちのくの旅に立つものから、上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し。

ならば、論理的意味は完備する。そこで「奥の細道」の文を書き改めて、論理的に完備したものにする。卽ち「ものから」の論理的意味を十全なるものにすることによつて、ここに論理的誘導關係が成立する。

彌生も末の七日、明ぼのの空朧朧として、月は有明にて光をさまれるものから、不二の峰かすかに見ゆ。みちのくの旅に立てば、上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し。

この書き改めは、第三の部分を獨立させて、「ものから」の接續を第一第二の關係に定位させた。

この文章では、論理的關係はよく行つてゐるが、しかし原文にあるやうな、長い旅に立つ心でみてゐる、自然の漂茫たる心持はなくなつてゐる。すぐこのあとに出てくる

行く春や鳥は啼魚の目は泪

の如き心持で、空を眺め、富士を眺め、上野谷中の花の梢を眺め、さてまた再びこの花の梢を見る日はいつかと心細く思ふ。さういふ動く心はここにはない。明瞭ではあるが、漂ふやうに動いて行く心はない。「不二の峯かすかに見えて」と「て」で切つて、眺めてゐる眼を上野谷中の花の梢にうつし、更に自分の旅の上にうつし、旅の難きを思へば、再びここにかへる日の事

も遠い思がするのである。この動きゆく心が「ものから」と「て」であらはされてゐる。ことにこの二つの言葉には、論理的意味の示し得ない、芭蕉のみの示し得る感性的意味があらはれてゐる。「ものから」を「て」で移行させる處に、芭蕉の感動性があらはれてゐる。かくて言葉の普遍的論理的意味は、この特殊的感性的意味によつて、芭蕉の實踐となつた。かかる變位が言葉の實踐である。

更にも一つの例をとる。芭蕉の句

さまざまの事おもひ出す櫻かな

この句でさまざまの事を思ひ出すのは、作者である。作者が櫻を見てさまざまの思出にふけるのである。然るにこの句の上では文法的にみれば、櫻がさまざまの事を思ひ出すことになつてゐる。觀られる位置にある櫻、それを機縁として様様の事が思ひ出される櫻、それが櫻の位置である。櫻は客語的位置にある。この客語的位置にある櫻が、主語的位置を侵かしてゐる。客語的櫻が主語的位置に乘り移り、主語の作者と一致して來る。かかる文法的過誤があつて、作者が櫻に打ち込んでゐる感性的狀態が明かになつてくる。

櫻みてさまざまの事思ひ出す

ならば、論理的に文法的に正確である。そしてここには何の誤もなく、疑もなく、主語と客語

との關係が定立してゐる。論理的意味は完全であつて、感性的意味は不完全である。ここには感性的歪曲がないからである。言葉をしてその人の言葉たらしめるのは、論理でなくて、感性である。

中には言葉自身かかる感性を持つものがある。接頭語が是である。例へば「瀬田の唐橋打ち渡り」において、その「打ち」である。瀬田の唐橋を、言葉の論理的意味通りに、打ち渡る人は少い。それは石橋をもたたいて渡る程の用心深い人か、でなくては杖で足先をさぐつて行く盲人かである。しかしそれはかういふ意味ではない。渡る働の強さを示す感性語である。冠詞などもはじめは論理的意味であつたが、いつか感性語になり、論理的意味を消失してゐる。かかる消失によつて感性語になつたものは、それが感性的意味に使はれるのは、むしろ普遍的論理的である。即ち感性的であることによつて普遍的論理的になり得たのである。今ここで感性的意味と言ふのは、もともと普遍的論理的意味であるものを、特殊的感性的に使ふことを意味してゐる。

もともと讀むのは、普遍性を據り處としてゐる。前の「さまざまの事おもひ出す櫻かな」の句で、これを讀むのは、普遍性論理性の立場である。第一に

さまざるの事を思ひ出す櫻である。
とよみ、それを更に
　櫻をみてさまざまのことを思ひ出す。
と變へる。そして論理的讀み方の一と二とが融卽すると、
　さまざまの事が思ひ出される櫻である。
となつて、はじめて「かな」が生きてくる。かうなつて來て、その文法的構造も、文法的進行も棄てて、感性的になる。感性的歪曲は、先づ論理的に讀まれてから後にあらはれる。言葉をよみ或は聽くのは、第一に普遍性を以つてしなくてはならぬ。普遍性に基かない讀み方、聽き方は堅實ではない。論理性は言葉の根强さである。しかし同時に普遍性にのみ據る讀み方、聽き方も、眞實ではない
　江戸川亂步氏の "A Tell Tale Film" の中に、かういふ一節がある。

「お前はいい女だ。無邪氣な女だ」
さういふ言葉を聞くのは今が初めてではなかつた。結婚した當初、二人で差向ひに話をしてゐる時など、良人の卓藏は時時ふと意味の分らない憂欝に陷る事があつた。彼は疑ふやうた探るやうな眼で、凝と折江の眼の中を覗込むのであるが、やがて悲しげに頭を振ると、あたかも溜息を吐くやうに、

「折江、お前はいい女だ。無邪氣な女だ」

と言ふのであつた。

いい女だ。無邪氣な女だ――それは文字通りにとれば彼女に對する讃辭に違ひなかつたが、折江は何かしらその言葉の裏に、全く別の意味がこめられてゐるやうな氣がした。何だらう、どういふ意味だらう――、ひよいと裏をほじつて見れば出て來さうで、それでゐてそれを突詰めて考へるのが恐ろしいやうな氣がした。どうせ考へてゝも分らないやうな氣もするのだつた。

この「お前はいい女だ。無邪氣な女だ」といふ言葉の論理的意味は極めて明瞭である。しかしこの論理的意味の背後にある感性的意味は、折江には不明なのである。これが論理的な意味ばかりとはどうしても取れない。何かその背後にかくれた意味、もつと重大で、生生した感性的意味があると思はれる。この意味がだんだんに明かになつて行くのが、この小說の筋の運びである。吾等が第一に讀むのは論理的意味であるが、更にその背後に感性的意味を讀み取るのが讀みの深さである。そこ迄よまなくては、讀み終つたとは言へない。

言葉の論理的の形は決定的である。この形は確かであるが、一般的普遍的なる形のみでは、言葉に深さはない。それに感性的なる意味が加はつて來なくてはならぬ。感性的意味は言葉の形體から見れば、甚しく未決定的である。「あの男は中中利口だ」といふ言葉は、その男性の賢

い性質ともとれれば、またその男性の處世方法が、如何なる場合にも絶對に損をしないやうにしてゐる立廻りの敏捷な意味にも取れる。故に感性的意味は、論理的意味にくらべれば著しく可變的であり、特殊的である。

しかし言葉は完全に可變的になることは出來ない。論理的意味によつて一般的に規定せられるからである。「利口」といふ語は賢の意味にも、また立廻の敏捷の意味にもとれるが、それは愚鈍の意味や、梅の花の意味や、鉛筆の意味にはなり得ない。丁度赤の繪の具は、使ひ方によつて、樣樣の感性を示し得る。人によつて違ひ、時によつて違ふ。しかし赤は遂に赤であつて、絶對に青ではない。赤の一般性、赤の論理性を脱することは出來ない。故に論理性赤の中にあつて、その可能の中で、一般性普遍性を限定し、變化せしめるのである。故に感性的意味は、遂に普遍性論理性の歪曲に過ぎない。隨つてその歪曲を讀むためには、先づその一般性論理性を讀まなくてはならぬ。かくて言葉には絶對的多義といふことは、あり得ない。その言葉が個性的であり、創始的であるといふのは、その言葉が論理性中に於ける最大限度の歪曲だといふ意味である。感性的だといふ意味である。

語感は論理の意味ではなくて、感性の意味である。「かなし」と「悲哀」との語感の相違は、論理的意味の相違でなくて、日本と支那との感性的の相違である。語る人の視及び思と、聽く

人の視及び思との論理的合一がなくては、言葉はわからない。しかしこの兩者の歪曲の一致なき限は、語感にあらはれない。時には全く誤り聞かるる場合さへある。しかしもともと言葉には普遍的論理的の限定作用があるから、その言葉が全く性質を變へてしまふ程のことはない。いかに用法を變へても、醬油は醬油の味であつて、飴の味でもなければ、味醂の味でもない。語感は可變性であるが、絕對的可變性ではない。

かくて言葉の働は、論理的なる一般性が、特殊的なる歪曲によつて、限定される處にある。換言すれば論理的語をして限定語たらしめ、歪曲語たらしめる處にある。しかしこの個性的なものの基底には、依然として一般性がある。一般性の限定する働が、語る働である。傾けた顏の描かれた處をみると、眼だけは傾いてゐない。顏面が垂直の方向を取つてゐる時に、眼が水平の方向をとるのは、論理的普遍的な方向である。然るに顏面が傾斜してゐるにも係らず、眼の方向は水平に近づかうとしてゐる。ここに傾斜の意味が二樣にあらはれてゐる。顏は論理的に傾斜してゐるが、眼は論理的に傾斜してゐない。眼が傾斜することは、人體の壞倒を意味する。壞倒せずして傾斜してゐる顏面では、眼は水平でありたい。これは論理的意味でなくて願望的意味である。感性的意味である。この爲に顏は論理的に傾斜せるにも係らず、眼は感性的に水平を保たうとする。故に傾斜せる顏と水平なる眼とが同時に存在する。かくて頭部の傾斜

は、論理的並びに感性的の傾斜定位を持つてゐる。かかる矛盾によつて傾斜せる顔面が描かれ、しかも極めて自然である。これは「いろいろの事おもひ出す櫻かな」の矛盾と同一である。かくて描くこと、語ること、何れにも歪曲があつて、はじめて感性的にたしかである。

言葉の最も一般的なのは、寫實的性質である。例へば　ミンミン、ミシミシ、ワンワン、ガタガタ、ヒラヒラ、ソロソロ、チラチラ、ガツカリ、コツソリ、チヤキチヤキ、チヤホヤなどである。これは歪曲が出來ない。全體が論理性で滿ちてゐる。しかしこの寫實的方向は、これ以上に深まる力がない。限定作用が出來ないからである。隨つて意志はこの方向をとらない。言葉の寫實的方向は、言葉の行きづまりである。

寫態語の中、チツ、シツの如きは多少意志表示の力を持つてゐる。しかしこれも漸次にもつと沈默の言葉の方向に進んでゆく。內在する意志表示が無限に進み得ないからである。これ等の言葉には限定作用が十分に進み得ない。故に論理的方向乃至感性的方向に進み得る未決定性の大きい言葉でなくては、言葉としての發達が困難である。兒童語の發達しない理由もここにある。兒童語は寫實的性質の大きいのが一般である。

語らうとする意志の中にあるのは、まだ言葉ではない。言葉ならば寫實語である。それが漸

次に表現に近づいて來れば、言葉としての論理性を持つ。而して表現の進行を、假に一つの線と考へれば、この線はその側方に於いて論理性を示してゐるし、進行の方向に於いては感動性を示してゐる。この線の側方向と進行方向とを考へる事によつて、言葉の二性質は示される。言葉はその進行の側方に於いて、社會的意志を示し、進行の方向に於いて、個性的意志を示してゐる。この平衡の上に、言葉の安定がある。故にこの線の描いた成績は、線內の閉ぢた空間では社會性を示し、線進行そのものでは、卽ち輪郭線では個人性を示してゐる。しかもそれを全體として考へれば、言葉は感性的である。輪郭と、輪郭によつて閉ぢられた空間とは、結局は輪郭に歸するのであるから、輪郭の感性が形內の空間迄支持することになる。卽ち社會性は、個人性によつて成立するのである。かくて言葉は直接には感性的にあらはれる。

しかし感性的意味も、これを分析的に考へれば、普遍性になる。「いろいろの事おもひ出す櫻かな」を、分析してくれば、それは一つ一つの單語になる。そして一つ一つの單語はその形では感性を持たずして、普遍性になる。故に如何に感性的の言葉でも、之を分析すれば、明確に論理性の言葉になる。

デルタイの解釋によれば、個性の區別は、全く分量的なる差異によるものである。個性の相違は、性質的に相違するのではなくて、ただ分量的の割合で相違するのである。人によつて性

質的規定や結合形式が、分量的に相違する。相違するものが、新に結合する。さうしてそこに個性の相違が出來る。或る人は空想家とせられ、或る人は輕薄者とせられる。しかし精しく觀察すれば、かかる性質は、總ての人に、必ず多かれ少かれ見出される。個性の差とはその共通して持つてゐる性質が、多いか少いかによつて生ずるのである。

しかし個性は、感性的特殊的特色である。論理的普遍的特色ではない。ただ個性を分析すれば、普遍性になる。個性を分析して普遍性とし、それを總べての人に共通するとし、その分量的相違として之を組み立てる。これがデルタイの考へ方である。

かういふ分析的方法では、言葉の感性的意味は出て來ない。出てくるものは、論理的意味である。今日の文法が言葉の感性的意味を捉へずして、論理的意味に滿足してゐるのは、その方法が分析的だからである。

かくて言葉の實踐性は、本來的に論理的並びに感性的なる二つの矛盾した性質から成り立つて居る。しかしこの矛盾を統一するのは、感性的意味の高まりに於いてである。この感性的意味の高まることによつて、論理的矛盾は極めて容易に除去し得られる。然るに感性的矛盾は除去し得ない。これは先に芭蕉の句及び文について檢した處で明かである。故に言葉の中心はこ

の感性的意味にある。この性質の高まる程、言葉の特色が明かになつてくる。言葉の個性は言葉の感性的意味から生れる。故にシェラアの言つてゐるやうに、個性はその人の體驗の結合でもなければ、また總和でもない。個性に貫かれて、はじめて體驗が成立する。個性の一象徴として把握される時に、はじめて具體的な體驗となるのである。卽ち體驗となるためには、その背後にそれを貫く全體的のものがなくてはならぬ。

かくて言葉が言葉となる爲には、言葉の普遍的意味を貫く感性的意味がなくてはならぬ。言葉の實踐性とは、言葉が論理的意味たるに止らず、感性的意味によつて貫かれてゐるといふ意味である。感性的意味のない言葉は、案内者の說明のやうな、全く類型的なる言ひ現しに過ぎない。

言葉を聞くのは、言葉をそのまま受け入れるのではない。類型となつた、卽ち分析を經た言葉をそのままうけ入れるのではない。言葉を理解するのである。言葉を理解するとは、その言葉を貫いてゐる背後のものを理解するのである。言葉を貫くもの、言葉の根源となるものを發見し、それを受け入れる事である。分析によつて論理とするのではない。根源を發見し、根源によつて貫かれた形において、言葉を受け入れる事である。隨つて言葉には如何に分析しても。

分析しても、必ず分析し得ない殘餘がある。この殘餘が尊い。これが言葉の根源をなすものである。この殘餘の大きい程、深さがある。讀む度にこの殘餘を少くして行く、これが讀みの深さである。天下第一の書は、少年の時よんで、そこに動かされるものがある。靑年期によんで更に動かされるものが多くなる。動かされるものの多くなつたのは、殘餘を讀み縮めることが多くなつたことである。この殘餘が讀みの深さである。生涯讀むに耐ふる書とは、かかる殘餘が讀み讀みて、猶殘る書である。讀む每に心に來て觸れるのは、この殘餘である。殘餘が理解せられるとは、殘餘が論理となつた事である。この理解の殘餘は時が到らなければ溶解しない。今日よんでわからなければまた明日よみ、明後日よむ外はない。讀書百遍、意自ら通ずるのは、時を經て理解性殘餘の溶解する事をいふのである。而してこの殘餘こそ、根源的なるものである。論理性を背後から貫いてゐるものである。言葉はここまで入つて行かなくてはならぬ。言葉を根源的なるもののあり方として觸れてゆけば、言葉は絕對に類型的ではない。言葉が言葉として生きるのは、言葉が感性的意味として觸れられることである。言葉の實踐とは、言葉を言葉として生かすことであるから、言葉を根源的なるものの在り方として、卽ち感性的なるものの意味として觸れる事である。

この頃長野師範の附屬小學校で「青の洞門」の研究授業を見た。禪海が山國川の絶壁に青の洞門を掘る處である。指導者はその課の中から「穴」「洞門」といふ言葉を拾つて、その穴の推移から仕事の進捗、それを見てゐる村人の心の變化、禪海の心の持續、さういふものを明かにして行つた。

毎日毎日根氣よくのみを振るつて、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。

かくて又幾年かたつうちに、穴はだんだん奥行を加へて、既に何十間といふ深さに達した。

此の洞穴と、十年一日の如く默默としてのみの手を休めない僧の根氣を見た村の人人は今更のやうに驚いた。

人人はいつそ我我も出來るだけ此の仕事を助けて、一日も早く洞門を開通し、老僧の命のあるうちに其の志を遂げさせると共に、我我もあのくさり戸を渡る難儀をのがれようではないかと相談して、其の方法をも取りきめた。

其の後は老僧と共に洞穴の中でのみを振るふ者もあり、費用を喜捨する者もあつて、仕事は大いにはかどつて來た。

ちようど三十年目に彼の一生をささげた大工事がみごとに出來上つた。洞門の長さは實に百餘間に及び、川に面した方には處處にあかり取りの窓さへうがつてある。

今では此の洞門を掘りひろげ、處處に手を加へて舊態を改めてはゐるが、一部は尚昔の面目を留めて、禪海一生の苦心を永久に物語つてゐる。

かういふ穴乃至洞門は、是を中心にして人人の生活を示して居、穴は人人の心の象徴としてあらはれてゐる。穴を貫いてゐる背後の意志、根源的なるものをここに示して居る。これを讀み

とらせ得たのは、この教授者の言葉に對する理解を示すものであつた。それが

僧は唯默默としてのみを振るつてゐた。

といふ表現が三回繰り返へされてゐることと、對照して、默默たる僧の背後にあるものが、穴の背後にあるものと共通してゐることをも明かにし、この文の根源的なるものが網のやうに交錯してあらはれてゐることを示し得たのは實によかつた。

文學の職能はすこぶる廣い。本質的に敎化の具でもなければ、政治の手先きでもない。寧ろ現實の政治や社會敎化以外の内在的な人間生活がその對象で、それだからといつて文學者も亦社會人である以上、社會生活を離れて、文學の存在し得る理由もなからうから、小說戲曲の取扱ふ主題も、社會の生活に深い交渉をもつものでなければならないのは勿論だけれど、同時に藝術家特殊の體驗がにじみ出てゐないものは、藝術品として特徵はない譯で、同じ現實の動きを見るにしても、一般的な見方では、藝術的な價値は薄い。（德田秋聲氏、文學と思想と政治との交渉、昭和七年四月十八日、東京朝日新聞）

文學となる爲には、その言葉は體驗によつて貫かれて居なくてはならぬ。卽ち感性的なる言葉になつて居なくてはならぬ。故に秋聲氏は更に論を進めて、かう言つてゐられた。「勿論文學にも傾向的なもの、功利的なものもあるが、それにしても藝術といふ形式を借りる以上、作者個人のにほひとか、實質とか、特徵的な個性によつて鑄られたものでない以上、作品は單なる工

藝品の域を出ない。それらは概念の綴り合せでも結構間に合ふもので、各人の藝術的天分や修練に待つ必要はない。過去の文學に見ても、社會性の偉大な作品と、スケールは小さくも個人性の秀でた作品との二種類があるかと思ふが、社會性の偉大なる作品も、要するに作者自身の主我が强大なので、たとへばトルストイの如きは、社會人の惱みをもつとも强く深く惱んだ藝術家で、要するに問題は個人性の上に繫つてゐる」。作品が感性的でなるべきことは、明かである。作品の扱ふ範圍はもとより廣くて、醫學、機械學、電氣學、生物學等限りはない。しかしそれを扱ふには、電氣學が電氣學の論理によるやうに、作品は作品の感性によらなくてはならぬ。電氣學の論理は作品の感性ではない。それは丁度同一發動機でも工學の製圖と美術の畫面とに相違があると同一である。そこには論理と感性との相違がある。

文典の實踐性と、有職の實踐性は、共に普遍性の上に立つてゐる。時代を通じて、人を通じて、普遍性の大きい程、文典と有職との價値がある。かかる普遍性に立つ時は、完全なる類型がある。個性と寫實とを中心とすれば、そこには類型が無い。例へば推古佛には、鳥式の類型がある。その類型は二等邊三角形であつて、頂點から底に下した垂線によつて、左右相稱の形に兩分される。この鳥式が奈良の寫實主義になつて、類型を失ふ。奈良末から弘仁になつて、

また一つの類型が生ずる。この類型主義は、鎌倉になつて消失する。鎌倉は運慶にはじまつた寫實主義によつて居る。その體が筋肉の描寫に向ふこと、玉眼があることの程度の類型しか無い されば鎌倉彫刻の實踐性は、普遍性ではなくて、特殊性である。しかし運慶或は快慶による寫實性は、門弟に繼がるるに及んで、忽にして類型性となる。創意なければ普遍性による外はない。これは完全に普遍的であつて、類型的である。

されば天才の言葉は、類型の語を、個性の語にかへたものである。論理語を感性語に歪曲するのが天才語である。天才は普遍と感性との兩性質を持つてゐるが、その中天才の特質をなすものは、感性的歪曲の側面である。故に天才の言葉の問題は、普遍の側面ではなくて、個性の側面であり、歪曲の側面である。ただ歪曲の大なるが爲には、普遍性、論理性共に大でなくてはならぬ。換言すれば、天才とは最も普遍的なるものの中に、最も感性的なるものを見る才能である。これが實踐性の豐富である。この豐富、即ち感性歪曲によつて、文化は作られて行く。

或る日の正午過ぎ。末の子が學校から歸つて來て、帽子を脱いで晝食の箸を握るなり、けふ算術の考査があつたが、一題とても變なのがあつたと言ふ。どんなのだつたと訊くと、一本二錢するバナナを十五本と、林檎一個四錢のを十五個買つた。それを五十錢銀貨で拂へば、いくらお釣がくるか、といふのだつた。それで僕は乘けて、寄せて都合九

十錢の買物になるわけだから、お釣がくるわけはない、四十錢不足だと答を書いた。すると先生はそれを御覽になつて、いや、やはりお釣がくるのだ、よく考へ直して見なさいと仰しやつた。變ではないかと、鈍兒眞顏になつて他愛なく鈍性を發揮してゐる。

鈍兒をして斯くあらしめた抑もの原因は、說明するまでもなく、五十錢銀貨で支拂ふことを、五十錢銀貨一枚で支拂ふことにしてしまつたところにある。物物しく言へば概念の凝結が然らしめたのである。十全な現實意識で生かさるべき筈の概念を生かすことなくして終つたことが然らしめたのである。佛蘭西十八世紀の兒童ならざりし觀念論者が、平氣ではまり込んだ現實意識の硬化とおぞましくも似通つた一つの現象である。たかが小學校で課せられる算術の問題ひとつだが、事を斯う考へて行くと、なかなか油斷ができない。

考へると、鈍兒は恥しながら、すでに一度同じやうな見當ちがひを行つて、頭を掻いた經驗をもつてゐる。全部で千字ほどの文章を一頁百五十字に書けば、みなで何頁になるかといふ問題を出されて、六頁と餘が百字とやつてのけた。計算に間違ひはないが、それでは何頁になるかと訊ねてゐる問題の答へにはならない、と言ふと、しばらくぢつと考へてゐたあとで、やつと答の七頁に行き着いた。考へてゐるあひだのテンポは、甚だしく澁滯を極めた。マダム・ド・スタアルの言草をまねるではないが、こちらでは、音樂家が或る曲の節拍を餘りに緩くしてゐる場合に感じさせられるのと同じ焦かしさを感じたものだつた。しかし一たび問題の焦點が摑まれると、鈍兒の暗かつた額がさつと明るくなつた。生きた現實の風が、一擧に固着概念を吹き拂つたのである。

一たびさうして生きた現實の風に吹かれた小さな腦髓は、五十錢銀貨が問題として提供されるに及んで、またしても單なる概念の世界へ引き戾されてしまつた。現實と概念との間を往きつ戾りつして、概念を現實意識で生かし、現實意識を概念で整理しようとしてゐるのなら、けだし素晴しい心意氣だ。しかし鈍兒の頭の中では、そんな作用が意識的に行はれてゐる筈はない。こちらの胸の中がつい暗くもなるのである。

これでは鈍兒の鈍性が、まだ當分は混迷のうちに低徊しさうである。そのうちに今度は二十名の人を三名づつ舟に乘せて向ふ岸へ渡すとしたら、全部の人を何度で渡し終るか、とでも言つたやうな問題が出現に及んだら、鈍兒さらに鈍性を發揮して、六度と餘り二名などと焦點のはづれた答へを出してしまひさうである。氣が揉めること夥しい。

小學校の算術敎科書の頁を繰つて行つたら、五十錢銀貨的な問題が相當見出されるかも知れない。そしてさういふ問題が見出されるごとに、世間には、ひねくれた問題だ、引つかけた問題だと事もなげに言ひ切つてしまふか、或は一笑に付してしまふ人がないとは限らなからう。だがさういふ人は、本質的には死んだものである筈の數を、恰も生けるものの如く、ただ机の上のみでいぢり廻すことを算術だ數學だと、無理やりに思ひきめてゐる人だ。たとへば操人形を觀て、人形がひとりでに動いてゐるのだと思ひ誤つてゐる人だ。

懷から取出した金嚢の中に、一圓紙幣一枚と五十錢銀貨が見出された場合、例外なしに必ず一圓紙幣で九十錢の買物を支拂ふ人だ。商店の賣臺を前にして、くだんの金嚢を覗いた瞬間、紙幣と銀貨のいづれが、よりよく保存に適するかを知るところから、先づ銀貨の方と袂別する複雜なれども生きた心境に對して全く盲目なる人だ。問題そのものがひねくれてゐるのではない。ひねくれた問題だと思ふ人が、ひねくれてゐるのである。

それとは事變つて、事實が五十錢銀貨二枚で支拂ふのである以上は、さういふはつきりした物言ひをして、強ひて陷穽を設けずともの事だと、問題に對して抗議を持出す人も世間にはありさうに思はれる。鈍兒にとつては、けだし大きな味方であらう。だが、私をして言はしむれば、さういふ人こそ動もすれば算術のための算術、大きくしては學問のための學問をしたがる憎むべき存在で、今日の敎育が願はくは一齊に排斥すべき人だ。一圓級の買物に對しては勿論、二圓級の場合にしても、または三圓級の場合にしても、差別なしに五十錢銀貨で支拂ふといふところには、むろん言葉が暈され、同時にまた數がぼかされてゐる。しかしこのぼかしは、言葉の持ついのちであつて、陷穽などいふ

汚名は斷じて與へらるべきでない。

いくら數を取扱ふ學問の場合であるにしても、二枚とか三枚とかいふ數字を故意に持ち込んで、一面においては分析的精神を逞しうする暴を敢へてし、また他の一面においては、折角のいのちある言葉をして、强ひても非常識に墮せしめ死灰に歸せしめる謂はれは毛頭ない筈だ。私はむしろ、世間にありさうに思はれる或る種の人人、味はひはなくとも、或は味はひを排除してまでも、ともかくはつきりした物言ひをしたがる人人とは逆に、かういふ味はひを持つた言葉が、それとは相容れざる關係に在りさうな算術の問題ひとつの中から、意外にも見出されたことが意外に嬉しいのである。

由來數の事に甚だしく疎い人間ではあつても、生きた現實、暈された言葉によつて深さを來す現實のための數こそ、謂ふところの數であらうことが、ゆくりなくも鈍兒に與へられたくだんの問題から、仄かにも察せられるからだ。私にとつては旣に遠い昔の夢魔である數が、試驗を明日にひかへた陰鬱な夜の机を繞つて、あらん限りの雜音を軋ませるのみであつた數が、今や紛らうかたなき人間的な節奏をもつて私の前に動いてゐるからだ。いはば暈された數が與へる感激である。そしてこの感激が、鈍兒の鈍性によつて暗くされた心を明るくもして呉れるのである。果然暈された物の姿はすべて美しい。（内藤濯氏、暈された數に沿うて、昭和九年八月廿二、三日、東京朝日新聞）

歪曲が活き活きしてゐることは、流行語を見てもわかる。もともと流行語は、必ず一つの歪曲である。この歪曲がその言葉を使ふ人達に面白いのだ。とにかく流行語は、辭書的には素直な言葉ではない。ところがその素直でない、變に曲つた言葉であるにも係らず、その時代の情勢とひどく共通した意志と感情とを持つてゐる。著しく感性的で、人達に訴へる處がある。こ

れは論理の故ではなくて、感性の故である。この語の成立は、必ずしも辭書的には說明し得なくとも、この感性の故に萬人に自然に理解し得らるる程、一般的である。隨つてこの感性を缺けば、換言すればこの言葉と社會情勢との間に一致性を缺くに到れば、この言葉は直に廢語となる。ここに言葉の實踐性が見られる。

かかる感性語、かかる感性視の一例として、ここに森田恒友氏の「夏の野味」をあげることが出來る。

川——沼——田——さういふものから、夏の野味が生じます。

夏の野外は、畫を描くといふ點からいふと、光がギラギラしてゐるので、畫にはむかない。しかし、野趣を味はうといふことになると、なかなか面白い。ことにこのごろのつゆ時は、格別によろしい。シトシト降る雨が、何か妙な簾のやうに、それを通して、長い堤がほのかに見える。どこまでも打續いてゐる感じがことに深い。野一面に、弱い陽が一杯にあふれてゐて、川からも、田からも、にぶい光が反射する。野味としては上乘の趣があります。朝でも、晝間でも、夜でも、それぞれに味ひが深いのです。

夏の野の幸、これがまた、私などには、心を樂しませるものが多いのです。鯰は冬のもの、野川の魚は、泥くさくて肴としては一寸困ります。まづ初夏の食べものとしては、田ではどぜう、沼では蓴菜でせう。

どぜうは野味のある食べものの中では、王者です。捨難い味があります。關東では田のどぜう、ことに燈心をつくる田から捕れるものを、燈心田のどぜうといつて、賞美します。よく太つてゐて、卵なども、澤山はいつてゐる。味の

つけ方も、割いて鷄卵で煮る柳川などはわたしの好みに合ひません。鹽辛く煮付けたのが、どぜうにはふさはしいのです。

蓴菜は六月末から食膳にのぼります。關東では茨城縣の牛久沼（うしく）のものを最上とします。この牛久の蓴菜は、ずつと昔から牛久の城中に住んでゐる畫人院展の小川芋錢さんから贈つて貰ふのを毎年の例とします。酢で食べてもよし、また味噌汁や、すましに入れてもよろしく、お酒が、ことにおいしく飲めます。

夏の野川からの食べものを、拾ひ出してみると、さあ、やはり鯉でせうか。これなども、わたし一流の食べかたをいへば、田圃の眞ん中に昔ながらにチヨボンとある田舍の料亭、こはれかかつたやうな建てもので、壁には雨のシミが方方ににじみ出てゐる。床の間を見ると、印刷ものの風景畫が掛物になつてゐる。緣さきはすぐ一面の紫蘇畑につづいてゐる。水でも浴びて鯉のあらひの運ばれるのをジツと待つてゐる、といつた調子です。

かうなると、普通いふところのうまい、まづいとは別の境涯です。わたしは、一體、食べものに、好き嫌ひはありません。ただ、うまいものはうまい、まづいものはまづい。そして、場所と、場合とによつて、それぞれ味はひがちがつてくるのです。（畫生活より）

以上の如くであつて、言葉は普遍性と特殊性、論理性と感性性との相反する二つの性質から成つてゐる。而して前者は言葉の分析的性質であつて、定着性を持ち、言葉の理解の依據する處である。けれども言葉はこの論理性のみでは理解され得ない。この言葉を背後から貫いてゐるものを知らなくてはならぬ。この具體的な性質があつて、はじめて分析的抽象的な論理性は生かされる。論理性の基礎となり、支持となるものは、感性である。感性は論理性よりも語る態

度の直接なるもので、論理性を超越することが多い。同一の言葉が、語る意志によつて樣樣であることは、論理性の絶對的でない證據である。故に言葉を論理的意味によつて追究する時は、必ずそこに何等かの追究し得られぬ殘餘がある。この殘餘は時に餘韻或は餘情ともよばれて論理的意味の外にある。この殘餘を感性的意味によんで行くのが、「讀み」である。されば「讀み」の働は、第一には論理的意味でよみ、第二には感性的意味でよむのである。そしてこの兩者の相反性の上に、言葉の働は立つてゐる。第一の論理的意味が、第二の感性的意味に位置を讓つて行くこの移動の上に、言葉のしなやかさがあり、言葉の厚みがある。もと論理的意味は言葉の働を抽象的に定位したもので、その定位の下に前の具體的なる形が殘つてゐる。隨つて論理的意味はその以前の姿を思ひうかべることによつて、感性的意味に還へすことが出來る。この還元作用が言葉の相反性の持つ價値であつて、これあるが故に言葉は最も柔軟である。言葉の實踐性とはこの相反性の還元的一致をいふのである。

第六章　言葉の持續性

嘗て獨逸の醫者が、オリンピック出場選士について調査した。その折マラソンの日本選士三人は、競技後、血液内の糖分の量が非常に多いので、日本人は特別の人種だと驚いて居たさうだ。普通の人では〇・一一%が血液内の糖分の量であるが、日本選士は競技後にもかかはらず、〇・〇七五―〇・〇八五%あり、他國の選士は〇・〇五以下で、生命が危險だといふ所迄低下してゐた。この糖分含有量の問題は、食物から來てゐる。これについて河本禎助博士の語る處は次の如くである。

鼠では三代から五代前の祖先から肉食だけで育つた一群と、米食だけで育つた一群、犬では離乳後肉食だけで育つたのと、米食だけで育つたのとを、運動機械にかけて實驗した。一時間に犬は八千メートル、鼠は八百メートル走るが、その後で血液調査をしてみる。

1. 糖量。米食の一群は減り方が少い。

2. 蛋白の分解と脂肪の分解。米食の方は殆ど變化がないが、肉食の方は脂肪と蛋白の分解

が激しい。

3. 糖量の回復。運動休止後の糖分回復が米食群では順調でしかも早い。故に
　休憩して次の運動に能力を強く發揮し得ること。
　運動の最後に頑張がきくこと。
これが日本の軍隊が强い一因であらう。

4. 脈。犬は平時百―百二十。米食の犬百八十―二百で、割合に落ち付いた狀態で走る。肉食の犬は三百を超えてはかり難くなり、三時間に及ぶと、脈は絕え絕えになり、大部分は倒れる。

5. 呼吸。犬は平時五十―六十の呼吸數。米食の犬は百五十から百七十。肉食の犬は一時間で三百以上、三時間に及ぶと氣息奄奄として大部分倒れる。然るに米食の犬は大體堪へる。

これは糖の分解には餘り多く酸素の必要はないけれども、蛋白と脂肪の分解には多量の酸素が入用だから、自然肉食のものは、呼吸回數を多くし、血液の循環回數を多くする必要が起り、遂に呼吸と脈とに堪へられなくなる。且糖が完全に分解すると、水と炭酸ガスとなり、體外に簡單に排出する。蛋白や脂肪特に類脂體の分解には、樣樣の有害な窒素化合物が出來て、これ

が血液中に多くなると、脳その他の部分を刺戟して不快になり、腎臓を刺戟して故障を起すので、運動には米食が極めて有利である事が明瞭になつた。

隨つて米食は、運動に對して持續力と回復力とが強い事になる。然るに回復力は、もともと持續力の特別の現れ方である。持續力の障害が除去せられるのを回復力といふのであるから、持續力の一時的障害に對する持續の再興である。隨つて回復力の問題は持續の問題として取扱つてよい事になる。

次に運動に持續が強い事は、最後の頑張のきくことになり、最後の持續を一層大にする運動型となり得る。かくの如くして持續の障害除去についても、また持續の終部の低下防止についても、常に大きい力のある持續狀態である。故に自然に運動の進行は平靜である。平靜とは持續が起伏しないことであるから、持續力の大なる運動狀態は平靜である。ここに於いて米食性運動は回復力の大と、運動後部の强力を特色とする持續力の大なることとを、その性質とするのである。

かかる運動の形の特色は、一般の植物食性動物の運動に共通してゐる。虎や獅子の如き肉食性動物と、牛馬との勞働狀態を比較すれば直にわかる。虎や獅子を農耕や運搬の勞働に使ふこ

とは、不可能である。一時的に强力ではあるが、持續力は小である。米食その他植物食の生活活動における特色は、米食に於いてみられた如き持續性なることを知り得る。しかしこの持續の平靜性とても、最後の强度持續卽ち頑張に於いては、肉食性運動よりも强いことを注意しなくてはならぬ。

ここに何故、こんな言葉の問題と直接に關係のない食物のことを書いて來たかといへば、この食物のことが、直接に日本の言葉と關係がつくからである。

しかし日本の言葉も名詞には回復力がない。「來る」といふ言葉の主語になる名詞が除去された時、それを回復する力はない。「犬が來る」のか、「友人が來る」のか、「郵便が來る」のかわからないからである。しかし名詞にも回復力がない譯ではない。「源氏物語」などは、主語や客語にあたる名詞代名詞を平氣で除去し、時には一文の中に別別の名詞代名詞が主語や客語になつてゐるのに、それを平氣で兩方共に除去して、讀む働の中で回復させようとしてゐる。例へば「帚木」の中の次の一節の如きはその例であつて、括孤中の言葉は要求せらるるものの回復である。

(夫は)朝夕の出入につけても、公私の人のたたずまひ、善き惡しき事の、目にも耳にもとまる有樣を、疎き人に、わ

ざとうちまねばむやは、近くて見む人の、聞きわき思ひ知るべからむ（人）に、語りも合せばやと、うちも笑まれ（笑まるること）、涙もさしぐみ（さしぐまること）、もしはあやなきおほやけ腹立たしく（腹立たしきこと）、（夫の）心ひとつに思ひあまる事などおほかるを、何にかは聞かせむと思へば、（妻に）うち背かれて、人知れぬ思ひいで笑もせられ、（夫の）哀ともうちひとり言たるるに、何事ぞなど（妻の）あわつかにさしあふぎ居たらむは、（夫には）いかがは口惜しからぬ。

しかしこの名詞、代名詞の回復は、相當に困難である。それに比べると助詞の回復力は遙かに大きい。もともと回復力は、持續力の一指標であるから、回復力の大きいことは、持續力の大きい事の證據である。

助詞は省略に對する回復力が大きい。「春來る」の「春」と「來る」との間に助詞を回復することは困難ではない。

春が來る。

春に來る。

春も來る。

そしてその中、「が」であるか、「に」であるか、「も」であるかは、文の前後の關係で明かであ

る。「毎日暖かになつて、霜も薄く」といふ風に續いてくれば、それが「春が來る」となること
は明かである。「が來る」の上の名詞を回復させる困難と同樣ではない。「今迄下を向いて歩いて
ゐたが、ふと顏を上げると、向ふから□が來る」の□は、回復が容易でない。
それならば何故、助詞は回復が早いのであるか。

助詞は自分では形を變化しない。時間による變化も無ければ、語尾の變化も無ければ、全く
平靜な持續である。助詞はあらはれる何も持つて居ない。ただ言葉の序列においては、上の言
語を下に通過させる、一つの通路である。「春の花」と言へば、「春」を「花」に通過させるので
ある。「春」は「の」を通過して「花」に達し、この持續力の中で、「春さく花」の意味が成立
する。自らは主張するものなく、他を通過させる持續の力である。隨つてアクセントの場合に
於いても、助詞自らはアクセントを有せず、語序の前後のアクセントの傾向を繼續するのであ
る。この中を通過することによつて、助詞の前後の言葉は、自分の持つてゐる味を、明瞭にす
る。中にかくれてゐたものが、明かにされ、確定される。この點に於いて助詞は、化學の觸媒
の働をしてゐる。自分は變化せずして、他を變化せしめる。例へば所謂係結の助詞の如きは、
言葉がここを通過する事によつて、文全體の意味が强まつて行く。

助詞「だに」「すら」「さへ」の中、

「すら」はもつとも古いもので、一端を擧げて他端を推せしめる意味を表す。平安朝時代には旣に衰滅に近づいて、「だに」が之にかはることが多く、「すら」といふ形は山田博士の統計によると、延慶本平家に唯二つの例があるばかりで、口頭語では恐らく當時みな「そら」と云つたものだらう。しかも「そら」も用法が局限し、主格に附屬するものばかりであることは、後に亡びる前兆を示してゐるものであらう「だに」は本來、最小限を示す助詞である。この用法は室町時代にも引續きなほ生きてはゐるが、又これを「さへ」で代用してゐること今日の用法の如きものが多くなつた。「だに」は「すら」に比べれば、生命は長かつたけれど、その後間もなく用ひられなくなつた。「だに」は「すら」を兼ねて意義の擴張を行ふと共に、「だに」に「も」が附いて約つた「だも」を生じた。「さへ」は一つの物事の上に更に他の物事を添へる意味を持つてゐるもので、古今に通じてゐるが、室町時代には「すら」や「だに」の用法を代へてするやうになつた。（小林好日氏、日本文法史　摘錄）

すると、

すら。一端を擧げて他端を推せしめる意味。
だに。最小限を示す意味。
さへ。一つの物事の上に更に他の物事を添へる意味。

であつて、「すら」は同類の中の一方を言つて、言はざる他方を類推せしめる同類指示である。「だに」は最小限、卽ち最低によつて最高を示さうとする上位指示である。一方は水平の方向

に進むものであり、他方は垂直の方向に進むものである。然るに「さへ」は、一つに一つを重ねて行く重積指示である。これは方向的には同類指示の如く水平でもよく、また上位指示の如く垂直でもよい。方位を決定せぬだけでも、助詞としての通過體に適してゐる。自分は未決定であつて、他を通過させるといふ性質には、この「さへ」が最も適してゐる。随つて今日の口語では、「だに」「すら」は「さへ」「でも」となり、「さへ」は「さへ」「まで」となつてゐる。「でも」は縮少限定であり、「まで」は擴大限定である。「さへ」が「まで」となり得たのは、「さへ」が重積であつた性質によるものである。以上の如くにして、「すら」「だに」が消失して、「さへ」だけが殘つた理由が明かであり、これは同時に、助詞の示す意向を明かにするものである。

然らば助詞は、未決定な平靜な持續をするのみで、米食性運動の如く、終部運動の大さは有たないであらうか。助詞のこの性質を示すものとして反語、感嘆詞がある。助詞が反語として用ひらるる場合には、文の終部に於いて、上述の意味を一轉して、新らしい意味を發生せしめる。

爲さざらんや。

において、「爲さざらん」は、「や」に來て、終部の活動をおこし、意味を一轉せしめ、盛な運動

を示して居る。而して「千萬人と雖も吾行かん」の如き漢文的語法においては、反語を持たずにゐるが、「と雖も」を通過する間に「吾行かん」をそのままの形で、終部運動にうつしてゐる。これは助詞の反語的使用ではないが、そこに反語的終部活動を有するのである。

また芭蕉の

野ざらしを心に風のしむ身かな

の如きに、「野ざらしを」といつて、「を」を通過して、「心に風のしむ身かな」と「かな」に來てゐる。「を」は「かな」によつて囘復せられると共に、心に風のしむ身もここにあらはれて、この「かな」の終部における活動によつて、この句全體が安定緊張してゐる。

かくの如く考へてくれば、吾等の食物と、吾等の言葉との間には著しい共通性があり、この共通性が、つまりは吾等の文化一般の基礎的特質を示すものなることを知り得るのである。そしてかかる共通性は、これを吾等の風土にまで及ぼし得るが如くである。

その一例として井上秀夫君のした、日本產植物性染料の色彩研究を擧げることが出來る。井上君は鹽基性明礬と、重クロム酸加里と、木錯酸鐵との三種によつて起る變化を吟味してゐるが、その一般性として鹽基性明礬によつては明、木錯酸鐵によつては暗、重クロム酸加里によ

りては中位の光度をあらはしてゐる。スワウは鹽基性明礬によりては桃色、木錯酸鐵によりては紫となる。同様に黄蘗は黄、しかも實におだやかな黄、鶯茶、茜は赤、茶、犬蓼は黄、茶となつてゐる。しかも中間の重クロム酸加里に於いては皆一樣に茶をふくんでゐる。その何れをも通じて平靜なる感である。しかしかかる桃、黄、赤等の色彩は特殊なもので、他の一般は何れも茶の系統である。

梔子は、鹽基性明礬では茶、重クロム酸加里では金茶、木錯酸鐵では黑茶であるが、次の各種、何れも多少の個性的相違がありながら、皆おしなべて茶の系統である。

椿、茶、櫟、艾、桑、楢、梅、黑豆、コブナグサ、栁、紫蘇、梨、柿。この中、紫蘇は他と異つた靑味をもてる茶である。かかる茶の系統が、吾等の周圍に多く、また吾が國の古來の色の好みが主として茶であつたことも、意味あることに思はれる。「萬葉集」にあらはれる染料もかかる系統が多く、吾等の祖先も古くからこの茶系統の色に親んでゐたのである。茶及び各種の色の中で、最も平靜であり、持續的であり、この點で日本の言葉の性質と相通ずるものがある。かう思つてくると、吾等は、吾等の文化に流れてゐる最も基底なるものの上に、宿命的なるものを感ずる。

第七章　言葉の中軸

世界の陶器の中で、おそらく形の完全に發達してゐる點から言つても、釉の色澤、肌ざはりの點から言つても、支那陶器は、はるかに群をぬいて居る。ことにその色澤が柔かで、底光りする中に湛へた味は、世界のどの陶器も及び難い質を持つてゐる。支那の陶器の眼ざしたものは、玉の有つ味の世界であつた。随つて中にふかく湛へた味が、支那のすべての陶器を一貫した質になつてゐる。

日本の陶器で名品と稱せられるものは、多くは作者の名前がわかつてゐる。ところが支那の陶器には作られた土地はあつても、作者はない。泥をこねる者は、先祖代代、泥をこねてゐる。色づけをする者もこれも、代代の世襲である。しかも其の色の中で綠を專門とするものもあり、黑を專門とするものもあるといふ様に、その間に專門の世襲がある。であるから帝室御用品の様な作品になつて來ると、どんな簡單なものでも八十人の手を經てゐる。よいものになつて來ると、三百人もの手を經てゐる。八十人乃至三百人の手を經て一つの作品が出來る。しかもそ

の作品は千の作品の中から、僅に十をとる割合である。八十人乃至三百人の手で千個作つて、それが十個とられるのであるから、作品の背後に働いてゐる力は、非常なものである。ところがさういふ澤山の人の手を經た作品が、ちやんと明らかな土地土地の特色を持つてゐる。

一人の人の手で作られた作品に作品としての個性のあることとは、當然であるが、かの二百三百といふ人の手を經た作品に、かういふ個性を持つてゐるのは、はなはだ參考になることである。卽ちさういふ一一の仕事が孤立しなくて、ちやんと結び合はされてゐることである。一つ一つの手の働の背後に、一つの統一的な力が、完全に存在してゐることである。個個の仕事を連ねる統一が存在してゐることである。このすべての個個の仕事の背後にあつて、それを一貫してゐるものは、當爲である。中に無限の可能性を持つて、そして個個の仕事を繼續させて行く傾向性である。傾向性そのものを、單に傾向性として取り出す事は出來ない。その傾向性は個個の仕事、泥をこね、色をつけ、窯にやく、さういふ個個の仕事の中で見るだけである。しかしさういふ個個の仕事を全體として考へる時に、その個個の仕事の根底を通じてゐる統一を見出すのである。先づあるものはこの全體的統一である。それから個個の仕事があらはれて來る。しかしこの個個の仕事は、全體を考へなくては、存在の意味すら持たぬものである。

この全體を通ずるもの、細部を統一づけてゐるもの、無限の可能性を有つて、たえず細部となるもの、之が繪畫では骨法と稱せられるし、文學では文體と稱せられるのである。

文章の中で一字二字乃至數字の虫喰ひ等の缺落があり、或は誤植があつても、私達はこれをずつと讀み通す。一字位の誤植の場合には氣がつかぬ事さへ多い。かういふ缺落誤謬を、難なく通過することの出來る所以は、讀者がその文體の上に乘つてゐるからである。

建築は衰退して、荒れ朽ちた時に、その固有の美がはじめてあらはれるといはれてゐる。荒れ朽ちた形は、建物の細部を除去して、根本の全體に還元した形である。隨つてこの荒廢の中で、はじめて建築の原始形、全體形をみ得るのである。骨法の美を見得るのである。繪畫や彫刻は、それが破損し缺落しても、殆どその價値を損じない。骨法が歷歷として存するからである。

私はここで、ある大工の話を、一つの挿話としてはさみたい。

信州諏訪の矢ヶ崎に、矢崎といふ宮大工があつた。幕末の頃には槍を立てゝあるいたといふ格式を持つた大工である。その大工が上州の妙義神社を造營してゐる時の事である。大工の弟

子の中に上諏訪の大和から行つてゐる若者があつた。高い樹の上で枝を拂つてゐると、足がはづれてぶらつと枝に吊り下つてしまつた。枝は垂れてゐるので、枝をたぐつて幹の方にはかへれない。下には師匠が他の大工達に世話をやいてゐた。師匠は上を見上げた。

「思ひきつた事をしやがつたなア」

さういつて上を見上げてゐる。どうしろとも、かうしろとも言はない。さういつたきり、上を見上げて笑つてゐる。若者は枝にぶらさがり乍ら、師匠を不人情だと思つた。その不人情か身にしみた。どうにかかうにか幹にたぐりよつて、命を助かつた。

しかしそれからといふものは、どんな高い所でも、決しておそろしいとは思はなくなつた。梯子乘りも、全くの手離しですらすらとやつてのける。今ではその息子が父の業をついでゐるが、梯子乘の手離しは、とても親にはかなはないといふことである。

大和から中央線の線路をふみきつて、新道に出る處に西洋まがひの新築家屋が出來た。それは老衰してもう尺(ものさし)の目もみえなくなつた、親大工が建てた家である。今になつてみると、ようやく師匠の有がたさがわかると言つてゐるさうである。

これは私が嘗て書いた「卓上雜筆」中の一節である。

この老年になつてはじめて、大工をして感激せしめた師匠の有がたさは、何であらうか。師匠が木の枝にぶらさがつてゐる若かい弟子に傳へ得たものは、何であらうか。これは「骨法」である。「文體」である。全體的なもの、すべての作業を一貫してゐる全體的なるものである。即ち「大工の道」である。大工の骨法である。この一つの基礎から、彼のその後の數數の建築が生まれ、尺の目さへ見えなくて、それでも獨力で一つの家を建てあげる。貫いてゐるものの一つの力を見ることが出來る。よく德川期の職人のとつてゐた職人氣質、特に名人氣質はこの「骨」を持つほこりに外ならなかつたのである。

作家の何十何百とも知れぬ數數の作品、その作品の取扱つてゐる事柄はちがひ、その作品にあらはれてゐる筋はちがつてゐても、その個個のものを通じてゐる一貫せるものによつて、變らぬ一人の作者をそこに見出すのである。梅をかき、鳥をかき、秀吉をかき、瀧をかく。梅と秀吉と瀧とは、大變なちがひである。その大變にちがつてゐるものの底に、ちがはぬものが貫いてゐる。文章では文體であり、畫では骨法である。

これは數數の作品の間の一致である。どんなに服裝がちがつても、その異つた服裝の下に、變らぬ人が居るのである。次に一つの作品をとつてみると、その作品のすべての細部が、その基本的なるものの展開した、まがふべからざる特色を持つてゐる。一つ一つの言葉の吟味の上

にも、一つ一つの句讀の切り方の上にも、一つ一つの節の立て方の上にも、すべて一貫した特色がある。幹は黒くてかさかさに乾いてゐ、葉は綠で柔かであつても、花は赤くて五つにわかれてゐても、そのちがつたものを通じて、海棠といふ一つの特色に貫かれてゐる。更に花一つとつても、その花の花片と萼と雄蕋と雌蕋と花梗と、すべてそれぞれにちがつて、花片は雄蕋でなく、花梗は雌蕋でないにも係らず、それが櫻でもなく、蓮でもない一つの共通した特色がある。ここに植物がその種を立て、屬をわかち、科をまとめる可能性がある。この植物分類學を文學の上に求めるならば、ここに文學形象の學を得るのである。

すべての部分を、その展開した基礎にかへして、その基礎から全體の各部分を求める。一つから展開した部分であるから、部分から全體を求める。次にその一つから展開して行つたそれぞれの部分を求める。この全體と部分、一と多との間の、融卽の完全なる程、その作品を天衣無縫と感ずるのである。

されば如何なる大きい形も、之を極めて小さい形に要約し得なくてはならぬ。如何なる長篇も、それが基本的なる一點に集中せられ、如何なる大作も、それが基本的なる素畫に集中しなくてはならぬ。でなくては文體があるとは言ひ難い。

去年の末のことであつたが、十數人の友達の集つたたのしい夕食のあとで、いろいろ雜談がかはされた。一人の友達が露西亞は非常に大きい建築史を持ちその大きさで世界無比であらうといふことであつた。その時他の一人が「しかし君、あんまり大きい本をかくのは、頭の惡い證據だ」といつて、それで皆でわらつてしまつた。大きい本は何故、頭の惡い證據か。蓋しこの斷定はすべての書物について言つたものでなく、頭の善い證據になる大著もあるには相違ないが、この場合この言葉の中にふくまれた大著は、文學でいへば、文體のない大著、繪畫でいへば素畫を缺いてゐる大作、東洋の言葉では骨描を缺いてゐる大作の意味であるに相違ない。新聞紙の報ずる處によれば、某地に、現在の「思想國難」を救濟するために、大鐵筋コンクリイトの觀世音菩薩像が、某造船所の手で造られるとかいふことである。この大作にして、もし骨法を有せざる時は、竟に頭のわるい證據になり、頭がわるくては「思想國難」をすくひ得るや否やを疑はしむるであらう。

東洋の畫壇に小品と思はれる畫の現れたのは、唐の中期後である。「唐朝名畫錄」をみると、王維が京都千福寺の西塔院にある掩障に青楓樹をかいたとある。青い楓の樹を何本もかいたものか、それとも一本かいたものか、東洋の名詞は、單數複數の區別を立てないから、はつきり

わからないが、しかし王維のことであるから、清爽な一本の楓を描いたのではないかと思はれる。この青い楓の樹は、當時の人達にはあまり平淡すぎて、創意經圖を缺くものであると考へられたらしい。この創意經圖を缺くといふ批評の言葉は「舊唐書」にみえるのであるが、青楓樹などもまさしくこの範疇を脱しないものであらう。

王維の畫風はまだこの時代には認められず、二流程度の畫家とされて居た。しかし暈のぼかしを創めたのは王維であり、王維の畫は清淡であつた。それで厚い彩色の重んぜられた唐代では、まだ價値が認められてゐない。王維は彩色が下手だつたと記されてゐる。是等の事情から想像すると、青楓樹は、おそらく一本で色も淺く、清淡なものではなかつたかと思はれる。果してさうだとすると、これ等が小品のはじめのものかと思はれる。小品が人達に認められるには、人達の認識力が高まつて居なくてはならぬ。小品は大作に比べれば、第一に畫面は小さく、第二に構圖も單省であり、材料も少くて平淡である。さういふ畫が認められるのには、畫についての認識が進んで居なくてはならぬ。唐代にはそれ迄の認識はなかつたらしい。かかる認識は、支那でも宋代に入つてから特に宋代中期になつてからである。宋代の畫は、一草一木を描いて、その世界に沈潜する態度が中心になつてゐる。

宋代の畫は好んで一草一木、一鳥一蟲を描く。この些少なる形體の中に、深い意味をもたせて居る。一本の草、一疋の蟲、それが單なる一草一蟲として終らず、一草一蟲によつて示される深い意味の世界となつてゐる。荊浩の著と傳へられる「筆法記」には「思」が藝術の重要なる性質であると述べてゐる。形を描くだけでは藝術として十分な形ではない「思」がふくまれて、はじめて形は藝術の形となり得る。一草一蟲が完全なる藝術形體となる爲には、特にこれが必要である。王維の畫に「思」があつたことは「舊唐書」が、王維の傾向を論じて「思」と評したのでも明かである。「思」があつて「創意經圖」のない畫が王維の畫だと見られてゐる。王維の畫に創意のない筈はない。手法の上でも王維は渲淡の一法を開いて、支那繪畫史の上に一時期を劃する人である。ただ王維の創意は時代の人に理解し難かつたのである。「經圖」とは畫面の構成であるから、經圖を缺くとは、畫面が卒然として成り立ち、刻苦構成の跡のないことを言ふのであらう。さうするとこの「思惟性」と「卒然性」とが王維の特色となるであらうし、このことは、王維の畫面が小品的であつたことを意味する。「思惟性」と「卒然性」とは、小品の重要な特色である。王維の青楓樹の畫から想像されるものは、是等の性質である。宋代の畫は、王維のこの傾向を成熟せしめたものである。

もと小品の性質は、第一に作品の小さいことである。これは直にわかることであるが、しか

しこれだけでは小品かどうかを決定する事にならない。作品の形は小さいが大作的性質のものがあり、形は大きいけれども小品的性質のものもある。作の大小だけでは、作の小品大作の區別には不十分である。

然らば小品の他の性質は何であるか。小品の構成が卒然性卽ち偶然的特殊的局部的なることである。大作の場合には構成が正面的で堂堂として居なくてはならぬ。大軍の戰法が正面から堂堂と敵を壓するのと同一である。小軍の戰法はそれではいけない。正攻法でなくて、奇襲を用ひなくてはならぬ。偶然的な事情を捉へ、特殊的なる狀態を利用し、局部的に意外の方向から襲擊しなくてはならぬ。これが同時に小品の作法である。木の枝に居る鳥を描くのに、姿勢を正し、整然と描くのは、大作の手法である。然るに小品の鳥はこれではいけない。例を徽宗の「桃鳩圖」にとる。これは畫面の左半分に描かれてゐるが、桃の花は其の花瓣の綴り方で、春の暖かい日光の中にあること、その日光に輕く壓されてゐること迄明かである。葉は花よりももつと打ち開いた心持で、空氣の中一ぱいに展いてゐる。これ迄の觀察は大作にも共通するものである。桃の花を描いて、この心持を描かぬならば、桃の花にはならない。鳩を描くに到つて、小品の樣態を備へてくる。枝は鳩の體の重さにおさへられて居る。その重い心持は、枝の曲りと枝についた蕾とで、撓ひつつ現されて居る。卽ち枝は全身で鳩の重さを感じてくるの

である。鳩の感情は丸く見開いた眼と、閉ぢて居る嘴とに集中して居る。體の重さの爲に枝からずつと下がり、廻轉する力の方向を取りかへさうとして、尾を稍前方に曲げてゐる。不安の中に安定の釣合を保つて居、その釣合はまたつぶらな眼と、事もなげに閉ぢて居る嘴とにかかつて來る。その中にあつて足は鋼の如く強くしなひながら、枝をつかんで苦澁なる支持をなして居る。色も形も自然の推移の中にあるのに、この足だけが惱みの中に耐えて居る。

かういふ特殊な狀態にゐる鳥は、大作では不安定で甚だ困難である。小品ならば、この困難な狀態がかへつて鋭く鮮かで、畫面を活活とさせる。かういふ特殊な狀態、かういふ偶然な狀態、場合によつては一度きりしか有り得ない狀態で、卽ち卒然たる狀態で小品の畫面は活きてくる。しかしこれを大作にしたならば、可成り無理がある。正正堂堂と力量でおして行くのが大作である。かかる奇警な形では、特に奇警な點のみが眼立つて、畫面を危くする。他の例をとるならば、藤井浩祐氏の小品によくみるやうな、特殊な姿態がある。あの姿態は必ずしも常住の姿態ではない。モデルが五分とは耐えられぬかと思はれる程に特殊な歪のある形がある。小品だからよい。もしそれを丈六像大佛像の如き大像にしたら、とても危くて見て居られないに相違ない。大佛像の如きは、多少形式的な傾はあつても、端然として左右相稱的なきちんと

した形でなくてはならぬ。大佛像が形式的であるのは當然である。

小品が偶然的、特殊的なる形態卽ち卒然的なる形態に適し、大作は之に反して、常態的、普遍的なる形態卽ち必然的なる形態に適して居る。形式的、論理的、卽ち不變化性の法則に適するものは大作の構成である。然るに小品で畫面を貫くものは、變化性の法則でなくてはならぬ。小品は形式的、論理的構成をとらずに、もつと歪のあるもの、もつとかたよつた形でよい。「桃鳩圖」の如き歪と偏とがあつて、畫面は活きて來る。

かかる形態であるから、小品はその切り取る場面も、一部的、局所的でよい。自然の一隅でよい。一草一木でよい。小品の構成が小でよいといふ理由の一つは、それが局所的だといふ性質によつて居る。徽宗皇帝の作でいつも「桃鳩圖」と並んで考へらるるのは「水仙鶉圖」である。この「水仙鶉圖」は、細い線を以つて一一細部を描き進んで行く。小杉放庵氏は、

つくづくと彼の鶉と水仙の小品をみれば、精細極まる描寫、それで居てゆつたりと大きな心持の失はれぬ、まことに天子の位に在つてしかもよき美術家なりしを思はしむるものがある。

と言つて居る。地は僅かな一線で描かれて居るに過ぎないが、その一一の爪、一一の皺迄、細寫した足があつて、その撓ひ方と、延び方で、地に立つことを示し、しかもその地の稍堅いこ

とをも、併せて示して居る。この細部からはじまつて、全體となつて行く形體の發展性は、鶉の體一つにも示される。その頭上には、水仙の花と葉とが僅かに描かれてゐる。實に小なる庭の一隅である。この局部性が、この畫をして小品たらしむるのであるが、しかし此處には更にも一つの性質を有つことを見逃し得ない。この一羽の鶉と、一株の水仙にして、初冬のつつましき天地の悠久を示して十分であるのは、これが局所的であるといふ事以外の性質によるのである。

　この畫面の構成を見るに、鶉は畫面の右下四分の一の空間に描かれ、左上四分の一には水仙の花の頭部と、葉の數本とが僅かに描かれて居るのみである。その他は總て餘白である。しかもその餘白は決して無意味な餘白ではなくて、鶉の住む、そして水仙の花さく期節の空間を示して居る。其等の全體に浸されて、鶉は靜かに己が身に思ひ入るが如くに、地に居る。然らばこの畫面で重大なものは、描かれて居る部分よりもかへつて廣い程の餘白である。この餘白の持つ意味を考へなくては、畫面の性質は、理解し得られないと思はれる。卽ち局部的取扱の水仙と鶉との描かれたる部分と、それを包んで更に廣い餘白の部分とを考へなくてはならぬ。描かれたる部分の性質は旣に考へてゐる。然らば小品の第三の性質が明かになる。卽ち餘白が、描寫部分と同樣の價値を有する事である。餘白の持つ寡默とその寡默の示し得る微笑との二つ

が、小品を支持し得る重大なる性質である。これが卽ち思惟性である。

大作と雖も餘白はある。池大雅は桑山玉洲に、畫面では描かれぬ處が一層大切であると語つて居るが、この重要さは、大作に於けるよりも小品に於いて一層大である。大作の構成は正正堂堂たる論理的構成であるから、語るべきものは、描かれたる部分で十分に語り盡してゐる。描いて語り盡くせぬやうでは、それは大作の構成ではない。小品は語ることの少いものであるから、この餘白の重大性は甚だ大きいのである。餘白のない小品は小品として存在しない。大作の縮寫となつてゐる。

かくの如くであるから、小品の畫面的特色は、

第一、畫面の小形。

第二、畫面構成が偶然的、特殊的、局所的。――卒然性。

第三、餘白の重要性。――思惟性。

の三である。隨つて大作を貫く方法が、堂堂たる論理主義であるのに對して、小品を貫く方法は、鋭敏な直觀主義である。

第四、鋭敏な直觀。

かくて、小品の持つ味は、普遍的な形でなくて、特殊的な形であり、形式的な形でなくて俊敏な形である。畫面が小さくて鋭くて、大きい空白に圍まれてゐる。これが小品の形である。常態を論理的に組織的に描がくのでなくて、特殊な形を直觀的に描がくのが、小品の形である。隨つて小品の構成はそれを如何に大きくかいても、それは結局大形の小品であり、大作の構成はそれを如何に小さくかいても、それは要するに小形の大作である。小品と大作との相違には大さの相違よりも更に根本的なものがある。

一つの表現には、必ずその表現に先行し、その表現の基礎となつた形體がある。畫面をちらつと見た場合、畫面の描いてゐる形體が何であるか、それはわからない。何かである。しかしこれでもなくあれでもない。漠然としてゐる。漠然としては居るが、外の何物にも代用し難いある漠然たる一つの形態である。漠然として居ながら、心を打つて來る或者である。それはやがて確然となるべき或者である。確かさを中にふくんだ漠然である。この不思議な漠然が、畫面をちらつと見た眼に飛び込んで來る。この形態をなさぬ形態が、はつとさせる。すぐれた作品は、それを一瞥した瞬間に、はつとさせる。さういふ顏一面におほひかかつてくる、心一杯に滲みてくる漠然さである。

しかしこの漠然さは、いつ迄もそのままでは居ない。漠然さの中にあつた、かすかな確かさが、みるみる發展する。そしてその漠然さを滿して來る。滿された漠然は、旣にはじめの漠然ではない。今ではかへつて「全體的なもの」と感ずるのである。根源的なものと感ずるのである。漠然たる確かさが、この根源的なるもの、全體的なるものになつたのである。この時畫面の形態は、あれでもない、これでもない、外の何かであるといふ様な、體をなさぬものではない。確かなる一羽の鳥であり、或は一つの風景である。形態をなさぬ形態が、形態をなせる形態に變つたのである。顔に覆ひかかつて來る感は、顔からだんだんに、霧の様に晴れて、心にたまつてくる。心にしみる感、心をうつ感が、心にたまり、心をおしつける重さになつてくる。そして立つてゐるのも、苦しい程に、心が重くなり壓しつけられる。さういふ重壓の中にも、猶前の感は殘つてゐる。それは性質的に別なものではなくて、前の漠然たるものが凝集し、且明確になつたものである。故に最初のものは、これは畫面の漠然たる力の感であり、後に胸に滿ちて來た重さは、明確に形態に結合せる力の感である。之が畫面の迫力である。

されば最初の力感は、未だ自分の形を示す程に、明確ではなかつたが、しかし決して曖昧なものではない。中に無限の可能性を有する全體であつたのである。旣ち純粹なるものであつた

のである。故に此の力は、傾向として、衝動として、畫面の形態を貫いてゐる。かかる最初にして且終極なるものを、畫では「骨法」と呼んでゐる。これは畫以外にも用ひられて、「平家物語」には武士の骨法といふ語があり、職工の間には仕事の「こつ」といふ語がある。これは武士としての最初にして且終極なるものである。「こつ」は仕事として一切の細部を分化し來るべき根源なるものの意味である。純粋なる武士の存在、純粋なる技術の意味である。

かくて骨法は、畫面にあつては總ての基礎をなす形態であり、一切の形體を貫いて、その底に存する形體である。體形の形體である。もし骨法そのものの形體を想像すれば、最もたしかにして、しかも最も簡素なものに相違ない。最もたしかと言ふのは、基礎をなす形體だからである。最も簡素といふのは、展開すべき可能を有する形體だからである。支那の宋代に、梁楷の描く畫面は、非常に簡素であつて、確かであつたが、それが卒然として描かれてゐるので、世に之を呼んで、「草草たる減筆」といつた。後には線描法の一つとして、減筆描といふものが立てられた。もし骨法に最も近い形體を求めたならば、おそらく支那にあつて馬遠、夏珪、梁楷、日本にあつて雪舟、宗達、大雅の如きを適例として擧げる事が出來るのである。

骨法の畫面形體は、最簡形體である。最簡基本形態である。しかし畫面に形をあらはしてゐ

る形體は、既に骨法形體ではない。畫面に形體をあらはさず、しかも畫面の形體を貫いてゐるのが骨法形體である。故に最簡形體といふも、既に畫面を作つてゐる形體ならばそれは更にその下にも一つの先行形體、基本形體をもつてゐる筈である。その先行形體、基本形體は、畫面に形をあらはさずして、畫面を支持してゐる。視得られずしかも感じ得らるるものである。直接に胸にたまつて來る所以である。

骨法とは、現はるる處最も少くして、ふくむ處最も多き形體である。故に骨法が吾等の感受を動かす方向は、細かく美しい方向でなくて、最も基本的な力感としてである。細かく美しいものも、この力感に貫かれて、はじめて確かになる。されば骨法は、作者その人の、性格の深さを語るのである。雪舟の畫面は、畫面の形としては、岩石であり、樹木であり、枯蘆である。しかしその岩石樹木枯蘆は、雨にぬれ、風にふかれ、日に照らされつつ、岩石ならぬもの、樹木ならぬもの、枯蘆ならぬものを語つてゐる。雪舟を語つてゐるのである。雪舟を語るものは、雪舟の傳記ではない。雪舟の畫面である。藝術家の生涯は、藝術の作品が語るものであつて、傳記が語るものではない。

骨法は直下に、他の何者よりも先に、顔と胸とに感ぜられる。藝術の感受性の中心をなすものは、骨法である。骨法がやうやく分化し、展開して行く過程が、形成作用であり、鑑賞作用

である。藝術家はこの形成作用の外に、生活を持たない譯である。この形成作用の中で、作者の骨法は確定し、畫面の形體も確定する。畫面形態は、骨法に貫かれた形體の確定であつて、作者の骨法を示すと共に、對象の形體の存在をも確定する。對象の形體は、骨法に貫かれてはじめて、畫面形體となる。それ以前の形體は、博物形體であつて、畫面形體ではない。この畫面形體は作者の營みを示すのである。作者はその營みの中で、最もよく作者を語るのであるから、作品はその中で、最もよく作者を語るのである。故に雪舟の畫は、岩石樹木枯蘆を語ると共に、それ以上に雪舟を語るのである。骨法形體、基本形體といふも、もとよりかかる形體が、對象の世界にそのまま存在するものではない。作者によつて作られた骨法形體であり、基本形體である。骨法形體の完成、既ち畫面の完成作用は、作者の生活の作成であり、形式である。故に骨法とは、作者の營みの基礎である。作者の實現傾向としての力、可能態における作者の全體を示すのである。換言すれば作品になつて行く、最初なるものにして、しかも基本なるものの姿である。されば「鳥獸戲畫」の畫面は、秋草を語り、兎を語り、猿を語るが、その畫面の中より立ちのぼる香氣は、ひたすらに作者を語る。香氣は骨法の別名である。「信貴山緣起」の語る畫面の在在形體は、「鳥獸戲畫」とは異つて居るが、その畫面の香氣が、卽ち骨法が近似してゐることを、重大なる要素として、美術史家は兩者が同一の作者によつて作られたもので

あらうといふ批定を下すのである。骨法が最もよく作者を語るといふ信頼に依るのである。

以上は繪畫に就いてである。しかし文學にも亦この事がある。文學の概念として骨法の用語を用ふることは、或は不適當であらう。繪畫では支那の六朝の時から「骨法」の概念が用ひ慣れてゐて、之を不思議とはしないのであるが、文學にはこの事はあるまいと思はれる。けれども文學にも亦かかる要素のあることは、疑ふ餘地のないことであつて、島崎藤村氏の香氣は、森鷗外氏の香氣とは全く異り、また夏目漱石氏の香氣とも全く異り、更に「徒然草」や「枕草子」の香氣とも全く異るのである。

この香氣は、文學に接する場合には、最も直接に面を打つものである。かういふ香氣が、文學の形式では何處にあらはれるものであらうか。畫面では、それが最も多く線の上にあらはれてゐる。線は形としては最少のものであるが、線の上で之を感知する事が出來る。線は力の感の直接の表示であるから、骨法は色にあらはれるよりも、線にあらはれる。色は展びて面となららうとする。面となつてはじめて、色はその特色の熱と輝とを明かにする。然るに面よりも更に簡單な形體は線である。線はもと面の象徵として發展したものであるけれども、あらはれてゐる形から言ふと、面よりも簡單である。この線の形體を、直接に、且短少に表す。故に色で

はない線、即ち墨線が、畫面の骨法形體を直示するに近い。されば支那で骨法の概念が確定した時には、同時に線描の概念も確定した。骨法と線描とは直接に接合して現はされた。「骨法用筆」が之である。六朝の謝赫によつて、之が明確に設定された。骨法の畫面形式は線、特に墨線である。これが東洋畫の疑ひなき形式である。雪舟の畫面では、線は沈着で、行く所まで、急がずせかず、堂堂として紙を擦つて行く。墨は紙にしみ通り、墨の深い光澤を生ずる。これが雪舟の骨法用筆である。「鳥獸戲畫」の畫面は、筆が紙面に落ちると張つた、しかも係らぬ曲率で、卒然として尾端を作つて行く、運動の線である。紙面に筆のふれた時から、もう尾端が用意される程に、その卒然で、しかも用意に滿ちて居るのである。故にこの線では、壓が走りになつて行くのが特色である。形體は運動に充ち、緊張した形體である。雪舟にも鳥羽僧正にも、共にかかる線の特色を有つてゐて、これがその骨法の指標となるのである。然らば文學にもかかる指標を有しないであらうか。句讀は正しく、この骨法の指標となるものである。

然らば句讀を以つて、骨法の指標とする理由は何處にあるか。

第一に句讀は、最小形である。句讀點として文體の上に表はれるとしても、或は句讀點としてあらはれず、文章の中に埋れて、僅かに一つの起伏を示してゐるに過ぎないとしても、何れ

にしても、句讀は最小形である。句讀は文章の上では、形にあらはれぬ呼吸、或は脈搏の一種である。形といつては、既に大きくかたすぎる程に、細かいものである。

第二に句讀は、不定形である。文法上でも句讀の法則は、甚だ漠然として居て、定形を持たない。句讀が定形を示さぬのは、句讀は甚だしく可動的であり、可變的だからである。これ呼吸の如く、脈搏の如しと言つた、一つの特色と相應ずるものである。隨つて句讀は任意に個性的な移動をなし得る。即ち最も個性化し得る可變性を持つのである。寧ろかく可變的に用ふるのでなくては、句讀は句讀として活きて來ない。呼吸の速さ强さには自ら各人の差があるのみならず、同じ人であつても、坐作進退、平靜緊張弛緩、それぞれによつて、呼吸は直に變る。しかもその呼吸は如何に變化しても、結局その人の呼吸であつて、決してその人以外の誰の呼吸でもない。故に句讀は、作者の個性を明示すると共に、その個性の、その時その時の變化をも明示する。ある一定の句讀法を制定して、如何なる感情をも、如何なる意志をも、その中に一様にはめて行かうとするのは、愚かである。一定不變の句讀法を制定する人は、文章上の呼吸と、脈搏の不變化を假定してゐるのである。表情を有する文章が文學とせらるるならば、無表情の句讀を制定するのは、文學を人世から抹去することになる。されば國定教科書の採用した句讀法は、國定教科書の骨法をあらはし、「新生」の採用した句讀法は、藤村氏の骨法をあら

はしてゐる。かくて句讀は、文學における骨法の一指標となし得るのである。

第三には句讀は、容易に讀者並びに作者の意識にのぼらない。意識にのぼらぬとは、骨法の漠然性と相應ずる。意識に上らぬとは、その存在が薄弱だといふのではなくて、感ぜらるるにしては、餘りに基礎的であるといふ性質に基いてゐる。故にもし一度それに注意を向ければ、それからは續續として、作者の深い內生活がそこから感ぜられる。しかしもし漠然として之に對するならば、吾等はその存在すら感じ得ない。されば句讀のことに思ひ到る每に、父母の愛や、自然の愛を思はずには居られない。父母の愛を日夕感じないといふ事は、それは父母の愛を輕ぜしむる理由とはならない。空氣を感ずることの少いのは、空氣を無價値とする理由とはならない。隣人の愛は事事に感ずるが故に、之を父母の愛に優れりとすべきであらうか。意識は缺乏の感である。缺乏なき時は、自然のままでは意識に上らない。吾等が步むことを感ずるのは、履き物の具合の惡い時か、足の具合の惡い時である。

しかし常には感ぜられぬものでも、その中には自ら二つの種類がある。一つは無價値なものであり、他の一つは有價値なものである。前者はたとへそれに注意を向けても、何等の態度をも要求せぬものである。然るに後者は之とは反對である。注意するに從つて漠然としてゐるも

のが、明かになり、一層深まり、一層確かになつて行く事を感ぜしめる。吾等の句讀に對する不注意は、實に後者である。

文學の上で、かかる香氣を持つものは、句讀の外に助詞がある。助詞も亦、その最小形なること、意味の漠然たること、不定形なること、卽ち可變的なる事に於いて、句讀に相次ぐものである。助詞の意味が不明だといふ事は、もとより助詞そのものが不明だといふ意味ではない。助詞の有する意味を理知形體に言ひ換へることが困難だといふ意味である。助詞は直下に理解せられ、同感せられるものである。何等説明を要せず、また説明しようとしても、説明は困難である。卽ち助詞は論理形でなくて、感性形だといふ意味である。感性の陰影は、論理形とするのに、困難だといふ意味である。助詞それ自身は、明瞭な響で吾等のうちに響いて來るのである。

助詞の形が短少だといふことは、説明を要しない。それが不定形だといふことは少しく説明を要する。助詞は不定形なるが故に、使用者の要求の儘に形をかへる事が出來る。この形體の可撓性が、助詞では重要な性質である。「は」を「を」の意味に用ひ難いことは勿論である。しかしその情緒の響は、可動的であり、それ故に自由に之を使ひ得るのである。松は松であつ

て、鯨は鯨であつて、他の場合に之を使ふことは、絶對に出來ない。「松」を「待つ」にかけ用ふるのは、「松」を變へたのでなくて、「まつ」の發音の中に、同音關係の「待つ」の性質を誘導したのである。「松」は依然として「松」であつて、「待つ」とは截然として區別せられる。故にこの掛け詞では、「松」と「待つ」との間に、一つのかるい紛糾が生ずる。この紛糾を解いて行く所に、一つの輕い、謎を解くやうな知的な愉快さがある。故に掛け詞では、「松」と「待つ」とが判然として融和しがたく、少しく混合してやがて二分する程のところに、輕い興味を持つて居るのである。

名詞はその意味が確立してゐる。それがつつまれてゐる空氣は、確立してゐる意味から分離せず、また他の意味の持つ空氣とも重なり合はない。之に反して、助詞は意味が漠然としてゐる。意味の外を包む空氣の方が豊かである。「は」は自己の決定判別の力を暫く堪へて、之を反省にうつすものであつて、この時に詠嘆感慨に變つてくる。「を」は行爲の目標指示の力を暫く堪へて置いて、之を反省にうつすものであつて、この時その目標指示は、目標詠嘆の力に變つてくる。「は」は「を」とはならぬのであるが、「は」も「を」も、その意味の中心を堪えて置いて、反省にうつすと、詠嘆に轉廻して行く。中心の意味を周圍の空氣の中に滲潤させると共に、この滲潤した空氣を以つて、再びそれが働いてゐた名詞に向つて歸つて行く。名詞はここで自

己の位置を反省して、感慨にふけるのである。かかる働の中で、「は」と「を」とは接續する。「松」と「待つ」とが一度混在して、更に分離するのとは、異つてゐる。「松」と「待つ」とは更に明瞭に分離する爲に、暫く混在するのである。「は」と「を」とは、同樣な感性の遮斷と後退浸潤とによつて、等しく詠嘆に向ふのである。これが助詞の不定形といふ意味である。その詠嘆化の後に於いても、「を」及び「は」は、それ以前の指示と判別とのそれぞれの性能を支持して、互に混雜されない。「を」と「は」は詠嘆の中でもかくして區別せられる。これが助詞の微細に情緒を擔ひ得る所以である。「か」はもと疑問である。この疑問を中に持つてゐて、この心で詠嘆に移つて行くから、「は」及び「を」の咏嘆とは感性を異するのである。かくの如くであるから、感性の多い女性の言葉には、名詞よりも助詞をより多く有效に用ゆる場合が多い。女性の語る言葉は、感性そのものである。

少しく問題が横道に入つたが、再び句讀にかへつて、句讀が骨法の指標であることを、實例について檢べてみたい。

老年

老年は私が達したいと思ふ理想郷だ。今更私は若くなりたいなぞと望まない。どうかして、ほんたうに年をとりたい

ものだと思ふ。十人の九人までは、年をとらないで萎れてしまふ。その中の一人だけが僅に眞の老年に達し得るかと思ふ。

これは島崎藤村氏の「飯倉だより」中の一章である。この章でみらるる樣に、藤村氏の文章には如何にも句讀が少い。一般にいつて、句讀の多いことは、文章の進みを一歩一歩注意させて、克明にはするが文章が冷却する。理路を追つて、意識の上にその進行をひたひたと確かめる。然るにこの文章の如く句讀が少くて、長く續くものは、論理形ではなくて、連綿たる感性形となる。その一つ一つが明瞭に、存在を確かめるよりも、全體の流の上に、空氣としての連綿たる感性を感ぜしめる。故に藤村氏の文體に感ずるものは、連綿たる靜謐である。しかも靜謐がもの閑かに續いて行つて、さてその結果を、明晰にぴつたりと言ひ切るのであるから、連續と靜謐とは判然たる結末に對して、一層澄みとほるのである。かういふ斷續と靜謐との中には、靜かにして强き心臟の鼓動を聞く思がする。

之を夏目漱石氏の文章と比較したならばどうであるか。

木の葉の間から高い窓が見えて、其窓の隅からケーベル先生の頭が見えた。傍から濃い藍色の烟が立つた。先生は煙草を吞んでゐるなと余は安部君に言つた。

此前此處を通つたのは何時だか忘れて仕舞つたが、今日見ると僅の間にもう大分樣子が違つてゐる。甲武線の崖上は

軒並新らしい立派な家に建て易へられて、何れも現代日本の產み出した富の威力と切り放す事の出來ない門構計である。其中に先生の住居だけが過去の記念の如くたつた一軒古ぼけたなりで殘つてゐる。先生は此燒ぶり返つた家の書齋に這入つたたり、滅多に外へ出た事がない。其書齋は取も直さず、先生の頭が見えた木の葉の間の高い所であつた。

これは「ケーベル先生」の始めの一部分である。漱石氏の句讀は、藤村氏の句讀とは著しくちがつて居る、漱石氏の句讀は、ひたひたと、吾等の意識に徹ほる樣に、寸分の隙もなく打つてある。故にこの句讀に、特に注意を向ければ、響を持つてゐるかと感ぜられる。ピシピシと言ふ音を感ずる。故に此の文章は、明るすぎる程に明るい。藤村氏にあつては、すべて情緖の薄明の中にあるが、漱石氏にあつては、すべて明快な外光の中にある。表象がぎしぎしと、後から後からとおしよせて來る。讀者はそれを一一眼でみる。この故に漱石氏の文學は視る文學である。眼の文學である。漱石氏の正確な意識の解抒と血行とを、この句讀の中に感ずる。しかしこの事は漱石氏の文學が藤村氏の文學と區別せらるる特色であつて、價價の高下をつける特色ではない。味の異ることであつて、價値の高下ではない。ここに兩作家の骨法の差を明かにするのである。

次にも一人森鷗外氏の句讀を比較の爲に擧げる。

越後の春日を經て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群が歩いてゐる。母は三十歳を踰えたばかりの女で、二人の子供を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十位の女中が一人附いて、草臥れた同胞二人を、「もうぢきにお宿へお著きなさいます」と云つて勵まして歩かせようとする。二人の中で姉娘は足を引き摩るやうにして歩いてゐるが、それでも氣が勝つてゐて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折折思ひ出したやうに彈力のある歩附をして見せる。近い道を物詣にでも歩くのなら、ふさはしくも見えさうな一群であるが、笠やら杖やら甲斐甲斐しい出立をしてゐるのが、誰の目にも珍らしく、又氣の毒に感ぜられるのである。

これは「山椒太夫」の最初の一節である。鷗外氏の特色は、藤村氏程に感性形式でもなく、また漱石氏程に視覺表象形式でもない。感性をふくんだ視覺、視覺をふくんだ感性である。藤村氏の句讀は轉してゐる。漱石氏の句讀は靜かである。鷗外氏の句讀は朗かである。これは句讀の可動性可變性を最もよく表はしてゐる。句讀の自由、換言すれば、性格骨法の自由にして厚く、柔くして濃やかなる點に於いて、著しい特色をなしてゐる。隨つてその文章はよどみなく流れ止り、廻り行き、行く水の極まらざるが如くである。

句讀は必ずしも句讀點として形にあらはれたものではない。文章の起伏斷續の中に、既にそれがふくまれて居る。句讀は文章の呼吸であり、脈搏である。呼吸と脈搏とを考へずして、人の生活を考へることの出來ない樣に、句讀を考へずしては、文章を考へることは出來ないか

くて句讀は文章の內に、文章を貫く神經として、呼吸脈搏として、むしろ文章以前より存してゐる。文章の最も原始なる形、卽ち文章が文章として未だ分化しない最初の情感の中に、句讀は既に備つてゐる、その情感の起伏斷讀が句讀である。故に文章の展開は、句讀の展開であるとも考へられる。隨つてよしそれが句讀點の形になつて、文章の形體にあらはれないでも、文章の中には自ら句讀があつて讀まれる。句讀點のない文章から、句讀を讀むのは吾等である。句讀點のあらはれぬ文章でも、文章のその情感の起伏を讀めば、そこには自らにして句讀があらはれてくる。

今坐右の「有朋堂文庫」には、「枕草子」と「方丈記」と「徒然草」とが一冊にふくまれて居る。これについて、その起伏斷續をたどつて、句讀點の生成を吟味することも、一つの參考であらう。

例によつて「枕草子」の最初をとる。

春は曙、やうやう白くなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜、月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋は夕暮、夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、鳥のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなんど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとち

ひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫のねなんど、いとあはれなり。

この句讀は、「有朋堂文庫」本の句讀によつてゐる。この文章には、明瞭適確な斷續がある。隨つて句讀は自ら明瞭である。この文章に對して先づ思ひおこすのは、古土佐の繪卷物の線描法である。この描法では、線の最初には必ず筆を立てる。直筆である。それが線の中途では倒れたり立つたり、起倒自由であつて、手首も使ふ。しかも線の最後においては、また必ず筆が立つ。卽ち線の首尾に於いて直筆、中央には直倒自由である。この手法は、そのまま「枕草子」の文體である。「春は曙」と筆を立てて、やうやうから筆を倒して行くが、「紫だちたる雲の細くたなびきたる」と立ててゐる。「夏は夜」と立て、「月の頃はさらなり」と筆を倒して行つて、「雨などの降るさへをかし」とちやんと立ててゐる。これが此の文章の特色である。かういふ首尾を正しくして、その中間を自由にする起伏の自由さは、正しさの中にあるくつろぎ、確かさの中にあるくつろぎである。この態度は同時にまたこの作者の人生に對する觀照の態度でもある。かくの如くして「有朋堂文庫」本の句讀點は正しいのである。ただ「やうやう白くなりゆく山際すこし」と連續して行くのは無理である。この文脈は、次の「夏の夜、月の頃はさらなり」で切つてゐる文脈と同一である。ここで一度倒した筆をおこして、次に進む呼吸である。ここはやはり、「やうやう白くなりゆく」で切らなくてはならぬ。その他に於いては無理はない。か

くてこの句讀は清少納言の骨法を明かにして取出してゐるのである。

次に「方丈記」を取る。句讀はまた「有朋堂文庫」本による。

行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。玉敷の都の中に、棟を並べ甍を爭へる、尊き卑しき人の住居は、代代を經てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。或は去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれにおなじ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、僅に一人二人なり。朝に死し、夕に生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。

この文章の特色は、いつきに延べて行つて、結末で靜肅にかへる點にある。この文章の語るものは、それが讀まれてゐる間よりも、讀み終へた靜肅の中で、その沈默の中で、感ぜらるるのである。卽ち一氣に間斷なく繼續して行つて、それがぴつたりと止まり、そして更に深く、過ぎ來し文章の繼續を味はせるのがこの文章の骨法である。「枕草子」にあつては、文章の斷絶し起伏してゆく所に特色があつた。一度ピタッと切つたものを、ひよつと起してつづけて行く。切れたことが切れたことにならぬ。この屈曲が文章の力となり、起伏となる。「枕草子」はこの緊張と弛緩との連續の中に、透みとほつて進んでゆく。そして終末の切れ方は如何にも明晰である。何の遲疑なくはきはきと切れて行く。そこには少しの雜音も殘らない。實に眼ざましい

ものである。名人の鼓は、ぴたつと響を切つて、あとに音を殘さぬ。うつよりも離れる速度の大きさを、その音の中できくのである。この様に、この作者の筆は、一一明確に決定的に結末をつけて行つてゐる。これにくらべると、「方丈記」の作者は、連續的である。これは最初から終迄こまごまとして續いて行く。つづいて行つて、そこでぴつたり切る。この最後の切り方だけは「枕草子」に似てゐる。しかしあゝいふ自由な起伏はない。最初にも明瞭に筆を立てない。連綿體である。故に連續を寸斷して、歩歩に反省せしめる句讀點は誤である。この「有朋堂文庫」本の句讀點は、ここでは無理をしてゐる。連續を寸斷してゐるから、句が重くなつて、文が輕くなる。句は斷絕して、文の根源的情感卽ち骨法を枯死せしめる。文學が吾人に語らんとするものは、特に「方丈記」の語らんとする如きものは、論理形ではない。「方丈記」の語らんとする眞理は、決して妥當ではない。自らは與へずして、しかも他より得んとする甚しき利己主義である。けれどもかかる誤謬を誤謬とせずして、吾等がその思想とその態度とを受け入れるやうにうながされるのは、それの有する情感の間斷なき發展によるものである。故に吾等が「方丈記」に感ずるのは、この間斷なき連續の形においてするものであり、句讀點もその形で施されなくてはならぬ。さればこの句讀は、やがて次の如く、

行く川のながれは絕えずしてしかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどま

ることなし。世の中にある人と住家とまたかくの如し。

となくてはならぬ。實に句讀は文體である。

この連綿體を、更に一層進めたものは、「徒然草」の文體である。「方丈記」は連綿體を、かつきりと切つて居る。「徒然草」にはこの切斷がない。また最初の一節をとると、

つれづれなるままに日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。

である。もし之を、

つれづれなるままに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく、書きつくれば、あやしうこそ、物狂ほしけれ。

としては、それが裁斷されて、連綿としてのびて行く骨法が失はれる。第二段は長いから、第三段をひく。如何に連綿體であるかは之で明瞭である。

いにしへの聖の御代のまつりごとをも忘れ、民のうれへ國のそこなはるるをも知らず、よろずにきよらを盡していみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたて思ふところなく見ゆれ。…‥順德院の禁中の事ども書かせ給へるにも、おほやけの奉物はおろそかなるをもてよしとすとこそ侍れ。

そして最後が「よしとすとこそ待れ」で終つてゐる。でまだあとがあるかと思ふと、それで輕輕と中止してゐる。「枕草子」のやうな重壓によつて終つてゐるものではない。これが態度の差、骨法の差である。

かくの如くにして、意識に上らぬことの多い句讀が、實は言葉の中軸をなし、その傾斜が最も强く働いてゐる、文體の特色も亦、この中軸より生じてゐる事に注意しなくてはならぬ。

第八章　吾等の視

一體に小さくして見るといふ見方は、東洋では昔から發達してゐる。支那でいふと六朝の頃、山水畫が形をとりはじめるが、その山水畫の一番基礎になる考へ方は、風景の特色を取り出すといふ事である。それから山水畫が唐に入つてだんだんに發達する。その發達の完成を見ない中に、もう松石圖が出て來る。松を一本畫いて、その下に石を据ゑる。この松石圖を唐から山水畫の一種にして考へてゐる。その考へ方が、庭にくると、景色の特色を取り出して、それを小さい形にしてみやうといふ事になる。さうすれば要らないものは、畫でいへば餘白の形にしてはね除けてしまつて、その餘白は外の所、塀で活かしたり、建物で活かしたりして、庭に現れてゐるものは、ひどく小さいものにして見ようといふ、さういふ行き方が出てくると思ふ。茶室で今日も感じたのは、部屋の中で灯が動いてゐることだ。それを大變に面白く思つた。私達が平常見てゐる灯は、動かない灯である。じつと動かないでゐる灯である。だのに、ここの灯は動いてゐる。動いてゐると形が生きてゐるやうに思はれる。この動く光で、壁にかかつて

ゐる床の花を見てゐると、今迄うつかりして氣のつかないで居たことに氣がついた。動く光で花を見ると、花鳥畫、特に植物畫を描く時に、どういふ條件の中で見るかといふことに氣がついた。これを支那では古くから吟味してゐる。主に、月の光で障子や壁に映つた形を見るのであるが、それを實はひどく簡單に考へてゐた。壁にうつれば陰畫になつて、はつきり物の形が見える。細部をなくして、しかも平面の上にはつきりあらはれる。さう思つてゐた。ところが今見ると、光が動く爲に壁へうつる陰が動いてゐる。壁へどんな陰がうつるかと見て居ると、粟の穗が葉のやうに非常に細く見える時がある。さうかと思ふと、大變に太く見える時がある。葉自身も太く見える時と、細く見える時と、大變に違ふ。どの形が本當の形か、描くとすればどの形を描くかといふ事が問題になる。この問題を解決したのが水墨畫である。細く見えた時の感を中心にして、太く見えた時の姿を描きあらはすといふのが、紙本墨畫の心であると思ふ。だから墨がにじんだり、ぼけたりして太くなるが、その基礎は細い形である。實は細い形で見て居ながら、生の紙で、墨がにじみやすいから太く描かれてゆくことになる。基礎が細い形であることが、形をしめて見せることになる。壁にうつる陰をみると、粟の葉の肉づいて太く見える時もあり、ずつと痩せて蘭の葉のやうに細く見える時もある。細ければ鋭い形になる。太ければ豐かな形になる。細い形に居て。その細い形を保存しながら、ふくよかな豐かな形にし

て行く。この行き方は、動く形で見る行き方である。動かない形でそこに置かずに、光の動きにつれ、瞬きにつれて形が變化する。その變化する形をじつと見てゆく。しかしそれも月夜であるから、極めて單純な形で、その上にあつても映らないものが多い。遠いものは勿論うつらない。障子に映らないものは一切除けしまつて、さうしてその動きの中で物を見たいと言ふことが、物の見方の、或は考へ方の中心になつて居はしないかと思ふ。動きの中で、物を限定して、小さくして見て行く、小さい形にして取り出してくる、さういふ態度が古くから馴致されてゐると思ふ。

茶室の中に入つてゐると、音にしても、形にしても動くものが少い。立ち上る湯氣と瞬く灯位のものである。音がないから外界を遮斷してゐるにも係らず、何かと外の物音が聞えて來る。風の音、葉の散る音、それから遠い物の音が、聞えて來る。常にはあまり氣をつけぬ物音が、聞えて來る。その音を聞いてゐると、物の音を聞き直す心持がする。物の音がこんなに微けく、しかもこんなに違つてゐるのかと思ふ。葉の音にもこれ程種類があるかと思ふ。それなら小鳥の聲と同じではないかと思ふ。物の形が動かないから、あるものが注意に上る。普通には氣にもつかぬ疊の目が氣につく。疊目を數へたといふ茶人のあるのも無理はない。疊の並び方にも

氣がつく。爐緣にも氣がつく。細かい自分の心の底まで氣がつく。ものの一つ一つが自然に自分の價値を中から出してくる。限定の中で物が明かになつてくるのである。この中で動くのは湯氣だ。釜の蓋をつつみ、杓柄をつつんで湯氣が立ち、動く。それが白くて柔かで、湯氣を美しいと思ふ。動くものは一二。あとは動かない。體を動かしても、物をいつても、四方の空氣がざはめき、周圍の關係が崩れるやうだ。體を動かすのもはばかられる。動くものを少くし限定して來ると、却つて音だとか、湯氣だとか、灯だとかいふものの動きが、現れてくる。それから熱の動きも感じてくる。お茶碗を手にとり上げると、暖か味が手にくる。熱は平常感じてゐる。始終いろいろなもので暖かさを感じてゐるが、この感じ方は、かなり深い感だ。體溫ともちがふし、それでゐて體溫とも非常に近い感、それが陶器を通して來るのだから、餘分に、體溫に近くて、同時に體溫と離れた、さういふ熱を感ずる。熱は幅をもつて存在する。これは音の場合でも同樣である。自分の身に遠い音で、それが同時にひどく身に近い音である。枯れた木から芽が出てゐる。この床の花をみると、枯れたものが、若かい木の芽の爲に一層枯れた感があり、木の芽は枯れた幹によつて一層生きてゐる。枯れたものと、生きたものとを同時に感じさせる。かういふ幅が茶室にはある。東洋で「自然」といふのは、かういふ見方、感じ方の上に成り立つのではないかと思ふ。

宋の郭熙の「林泉高致」に

花を畫くを學ぶには、一株の花を以つて深坑の中に置き、其の上に臨みて之を瞰るときは、則ち花の四面を得ん。竹を畫くを學ぶには、一枝の竹を取り、月夜に因りて其の影を素壁の上に照らすときは、則ち竹の眞形出でん。

といふことがある。坑を堀つて中に花を置いて、それを一方向からだけ見よといふ。それは一方向からだけ見させるのである。一體東洋畫の遠近法では、目を動かして物を見るのが習慣になつてゐる。西洋の遠近法で、地平線に直角な正方體はあの通り歪んでゐる。東洋では目を動かしてみるのに、何故この時ばかり、歪の生じやすい目を動さないで、一方向のみよりする見方を主張するのであらうか。蓋し態度を限定するのである。はじめから不動的な限定された態度をとつてゐる處で、一方向視を主張するのは別に特別の意味は無いが、多方向視を習慣にする中で、一方向視を主張するのは、物の視方を限定する立場である。かういふ特定の立場で、特定の物を見る。正面からのみ見る。側面からは見られない。そこで平常の態度が、きつと限定される。この特定の物をみれば、却つて物の形が、歪は歪で、明瞭に出てくる。歪まない處で、明瞭に出てくる。形が限定されて、小さい形でみる事になる。この限定の立場からかへつて「花の四面を得る」のである。一方を寫すのも同じである。ただ月影婆娑たりといふ感、その中には運動がある。婆娑は舞ふ貌であり、衣裾のあがる貌、琴の音の細くして抑

すある貌、徘徊の貌である。月影婆娑は動く感である。竹の陰の動きをそこに見るのである。竹の陰の中に動きを入れて、そこに變つてくる形の中から、ある形を限定してくる。ここに物を見る立場がある。

阿杏の鳥飼

小鳥にも色色な種類がある様ですが、まづ我我が鳥屋の店頭に起つて、第一に見別けのつくのは、舶來の鳥と内地の鳥との區別です。内地の小鳥は鶯・目白、蒿雀・鶸など凡て羽色が地味で、二色以上の色と色との間の遠くない落ちついた調子をして居り、舶來の鳥は、みんな其反對とは限らないけれども、大體色の配合に突拍子もないのが多い様です。一番目だつのは色色な種類の鸚哥です。外國の趣味を愛する爲に、知らない自然の破片を慰しむ爲に小鳥を飼ふとすれば別ですが、ただ小鳥そのものとしては私の好惡から云へば、内地産の小鳥の方が羽色丈から云つても外國の鳥よりは遙かにいい様です。凡てが人の目を勞らせない、華麗ではないけれど靜かに美しい調和をしてゐる様に思ひます。

しかし内地産の鳥と舶來の鳥とを羽色で選定するのは寧ろ第二の事で、私は何よりもその鳴き聲の我我の耳に快い點から舶來の鳥よりも内地産の鳥の方が好きなのです。外國のにだつていい聲で鳴く鳥が澤山居るには相違ないと思ひますが、日本へ舶來する鳥では、そんなに鳴き聲のいいのはない様です。カナリヤなどの鳴き聲は舶來鳥の内ではいい方ですけれども、それでもカナリヤに一寸似た鳴聲をする雲雀に比べたら丸で御話になりません。カナリヤの鳴き聲はただ一寸聞いた丈では決して惡い聲ではないけれども、長く聞いてゐると少少八釜しくなり、しまひには聞いてる方でいらいらして來ます。いやに景氣がいい許りで、ちつとも聲にうるほひがありません。雲雀の聲の高音の底に何ともいへない哀愁を含んでぬれた様な鳴き聲とは迚も比較になりません。うららに照れる春日に雲雀あがりここ

ろ悲しもひとりし思へばの趣きは電車の走つてゐる街の軒端につるされた雲雀籠にも味はうことが出來るのです。けれどこれは、雲雀の方には昔の傳說や詩などから來る聯想が其鳴き聲を聞く我我の心に色色な準備をするのに反して、カナリヤには何もそんな聯想のない爲かもしれません。大西洋のカナリヤ群島へ行つて、何處かの樹の蔭の青葉の隙から雨の樣に降つて來るカナリヤの囀りを聞いたら、又別な感興があるのかも知れません。

しかしカナリヤはいい方です。日暮れ方に鳥屋の門の前で色色名の知れない鳥共が悲鳴に似た聲をあげてゐるのを聞き過ぎるのは餘り氣持のいいものではありません。鸚哥の中には、地鳴きに猿の泣く樣な聲をするのがありますが、何といふのか知りませんけれど、私は金をつけてやると云つてもあんな變な氣味のわるい鳴き聲はいやです。（百鬼園隨筆、內田百閒氏）

日本の自然にも見らるるやうに、表現は必ず小さい形になつてゐる。この形はそのまま東洋の祝にあらはれてゐる。

とにかくあるものを取り出す。それも限定された小さい形にして取り出す。そこに東洋の苦心があつた。形を限定して小さくして見る。さうするとかへつて平常見落してゐるものが見えて來、深い意味があらはれて來る。この中から石を取り出すとか、苔を取り出すとかいふ風に、取り出す態度が可成り吟味されて來て居る。茶室で一番强い色は何かといふと、自然の花ならば大體かまはないとは言ふものの、牡丹の花などになると、使ひ難いと聞いてゐる。赤い牡丹では赤い色の量が多すぎる。蕾は色の量が少い。それだから牡丹では蕾を使ふ。でなければ散

つた後の形を使ふ。椿なども咲いたのは使はずに、蕾を使ふ。蕾からちよつと花の色の出た處がよいといふことを、西川一草亭氏から聞いた。小さいものを取り出すのである。限定して小さくして見るのが、吾等の視る働である。

かくして小さくして見るといふ事は、その小さいものを存在の形として見る事ではない。存在の形としてみては、小さいものは、如何にも貧しい形である。小さいものの中にみる形は、それが常に展開して行くもの、展開する可能性を持つものとして見る事である。そこには實現に向ふ傾斜がある。この傾斜は常に日本の文化の上にあらはれて居るものである。今この傾斜に就いて、考へてみたい。

私達のやうな素人が、地勢を見ていつも面白いのは、傾斜地である。傾斜地は山地でもない、平地でもない。山の味と同時に平野の味を持つて居る。傾斜地は山と平野の中間狀態といふ、さういふ單なる消極性ではない。山であると共に平野であり、平野であると共に山であるのが、傾斜地である。早春、初夏、或は初秋、初冬。さういふ季節である。早春では冬はまだ去らない。しかも春は先にまつてゐる。冬を背後に持ち、春を目の前に望んで、しかも冬と春との氣はひをそこに感ずる。花の盛の春ほど春はあふれて居ない。寒い冬のうすらぎ行く中に、漸次

に濃くなつて行く春がある。冬の記憶と春の希望とを同時に持つてゐるのが早春である。初夏は春の記憶と夏の希望との中にある。この希望と記憶との中にあるのが、傾向性の季節である。傾斜地はまた傾向性の豊な一地勢である。

傾向性とは、實現せらるべき性質が、實現に向つて進みつつ、しかも未だ實現し盡されぬ情勢である。卽ち傾斜した實現性である。傾斜地は野の方向から山に向ふ實現の傾斜であり、また山の方向から野に向ふ實現の傾斜である。これを山から野に向ふ傾向性から見る。

水の動勢は、山の頂に於いては動くことに專念して輕浮である。野に於いては悠悠として重厚なる味を持つて居る。この重厚なる水の實現の傾向性は、一方には激しい動勢の中に、急峻なる山の性質を背後に持つて、瀧となり、瀨となると共に、他方には淵となつて、平野では見られぬ深刻なる水の動勢を示してゐる。これは傾斜地がふくむ溪谷の水の動勢の變化ある美しさである。ここに水は山を想はせると共に、野を望ましむる傾向性がある。

地表の起伏に於いても、山の高峻が野の平遠に進む實現の中間にあつて、高峻と平遠との間の傾向性を示して居る。傾斜地は山にも野にもみられぬ靜かなゆるやかな傾斜と縱襞とを持つてゐる。縱襞は傾斜を複雜に切つて、可成り交錯した地貌を形成する。ここに山と野とに見ら

れぬ趣があり、地表はここに最も動的な表現をしてゐるかに見える。これが高峻と平遠との中間にある地表の傾向性である

この事は植物に於いても動物に於いても同樣に言へる。例へば麓といふ字は林の中に鹿が居る形である。これでもわかる。日光も山の激しさはなく、また野の平板もない。地襞の形狀によつて、受光の關係は樣樣であるが、その狀態を適度に選ぶことが出來る。風の狀態も變化の多い地形によつて、これも適度に選ぶことが出來る。

かくて傾斜地は、實に傾向性によつて多樣的に成り立つて居る。而して傾向性とは、決定的な性質を示すことでなく、表出未完成を示すことである。表出未完成であり、未決定であるから、表出は自然に變化的であり。隨つて多樣的である。かかる地形を使ふことは、自然に住むには便宜であり、且最も親しみが多いに相違ない。

平野程の濕度がなく、平野よりも清澄な水を得やすく、平野よりも風と水との害を避けやすく、しかも山地程に日光と空氣とが峻烈でない。これは傾斜地の自然の特色である。この特色は一言にして言へば中和である。

その上に傾斜地の地貌は複雜多樣であるから、山の褶襞の間に自ら限られたる一小地劃があり、この地劃が大概狹少であるから、ここは自然に人の住むにふさはしい一地域である。この山峽には自然に對して親しみを持ち、自然を愛する心が發生する。これは日本の美術の上にもあらはれてゐる。日本の美術は中和な紙と墨と繪の具と水との性質を以つて、傾向的な、未完成なるものの表現に向つてゐる。西洋の油繪の具の樣に、完成し決定した畫面を描くのではない。將に完成しつつある、將に實現しつつあるものを描くのである。日本の畫面が西洋人からは卽興的であるかと見ゆる程に、素畫であるのは、この中和性に基くのである。しかし日本の文化や國民性がさうであるやうに、決して中和のみではない。事あらば激流の持つやうな激しさを持つ。西洋の油繪の具は風や雨を描くのに、日本畫の如くに自由ではない。日本の美術はかくて著しく傾斜的である。

この中和なる傾斜地の性質は、特に貧弱な狀態で自然の中に住む吾等の祖先にとつては、親しみやすく、住みやすい土地である。空漠なる平野よりも、嶮峻なる山岳よりも、傾斜地は安穩な安靜な土地であつたに相違ない。ことに山懷の一地點は地を拓くにも耕すにも、自分の勞力を育てるにも、明かな地域である。垣をめぐらして、中に庭園を作る吾等の心と相通ずる。平野は地を拓くには、あまりに空漠である。山は地を拓くにはあまりに嚴格である。耕作力、開

拓力の微力であつた上代では、山懐の傾斜地が、生活に最も好適なる地である。随つて吾等の祖先が先づ住んだのは、武藏野の平野の眞中ではなくて、秩父山塊の周邊の傾斜地である。東海道でも山寄の傾斜地であつた。そこに古墳と遺物とを留めてゐる。で「萬葉集」にも山懐を母の懐に思ひつらね、思ひ聯ねぬ迄も特になつかしく思ひ親んだ樣子が見えてゐる。

日本の最初の建築樣式と信ぜられる天地根源造は、あの形からみるも、排水受光についての考慮のない點からみるも、また風に强いとは思はれぬ材料から見るも、共に日光の豐かな、風を防ぎうる、そして水濕の排除し易い傾斜地にはじまつた樣式だと思はれる。吾等の祖先が、日本には特に多いこの傾斜地に親み住んで、先づ工夫し成したのが、この建築樣式に相違ない。これと比較すれば鐵筋コンクリートは如何にも、がつちりと平野に住む建築樣式である。

奈良の都で、完全に平野に住む都市の形式を採用した。これがまだ完成せぬ間に恭仁に都遷しの計劃が建てられ、半成の奈良の都を壞してはこんだりした。それがまた難波に模樣がへになり、また恭仁にかへり、後奈良にかへる。この構都動搖の原因がどこにあつたかは明かでない。しかしその原因中の一つには、まだ吾等の祖先が平野居住に慣れて居なかつた事がふくまれて居るのではあるまいか。奈良の都の一部卽ち西南部は卑濕であつて健康によくなく、また

排水工事が十分でない。然るに他の部分には給水が十分でない。平野をふく風は寒く烈しく身に感じられ、この心持が「萬葉集」にもみられる。奈良の都が舊都となつてからは、春日神社、東大寺、興福寺等の社寺の力が重大になつたからに相違ないが、それにしても大安寺なども取殘してずつと山によつてしまつた。ここにも吾等の祖先の傾斜地居住の心理の復活を見ることが出來るのではなからうか。

貴族は飛鳥の都以來平野に慣れたとしても、各地から都會に集つた一般市民は、まだ平野生活に慣れなかつた。これが咲く花の匂ふが如く盛りだと口には言ひながらも、平穩になれぬ心持をどうすることも出來なかつたのであらう。天地根源造の家は捨てても、まだそれに住む心持は捨て得なかつたのである。

西洋畫よりも、日本畫は好んで傾斜地を描いてゐるやうにみえる。日本初期の山水畫も、まづ山地から描いてゐる。のみならず日本の畫が面でかかず、線でかく方向に進んで來たのも、この故ではないかと考へられる。傾斜地は、地面の擴がりであらはれず、地面の褶襞であらはれる　褶襞は線でかく。褶襞を線でかく爲に、西洋畫には全くない二十以上の「皴法」といふ特殊の描法が發達した。

かういふ風にして傾斜地を考へてくると、吾等の生活にも、文化にもいろいろの指唆を與へる。おそらく傾斜地の產業は、山地の產業、平野地の產業と異る特質を有するであらうし、養蠶業などもその顯著な一例であらうと思ふが、それから先は私のやうな素人には考へ及ばない。とにかく平野地理學、山地地理學と並んで傾斜地理學が出て來てもよいことだけは私にも考へられる。

日本の視のかういふ性質を、次の三つの隨筆で示してみたい。「秋日雜記」「續秋日雜記」「代代木より」は森田恒友氏の隨筆で、私の愛誦措かざる中の三篇である。是等はそれぞれの視角から吾等の世界を語つてゐる。

秋日雜記

あれもよい、これもよいでいろいろな蔓ものを蒔いて見、移植して見るが、矢張りどうもぎつしりと垣根に圍はれた風通しのわるい屋後の小園などでは、ほんとの彼等の充分な自然には伸びないらしいが、それでもどうやら初秋になると、彼等の風情が如何にも彼等蔓ものの風情になつて來る。去年はとうとう、胡瓜や糸瓜を眺め樂しんだあとで描かうと思つてゐるうち

に、胡瓜は五六本ぶら下つてた時分にひどい油蟲がついて枯れてしまひ、糸瓜はあの地震騷ぎで日を過すうちに彼れもとうとう枯れてしまつた。

今年はまさかに去年のやうなこともあるまい。一體彼れ等蔓ものの風情は、秋になつてあれ等のすがたがそよそよと秋風にそよぎ動く頃私は一番ああ云ふものを好む。胡瓜なども大凡もう伸びきつてしまつて、葉が黄色となり採り殘りのへぼが蔓先にぶら下る頃秋風が立つ。其何となし淋し味を現ずるすがたが此の蔓物らしいすがたになる。元元肥え太つた容を誇る性質の植物ではないから其の盛りを過ぎたすがたが何となし畫趣をもつ。

日向葵が實になつて、もう葉も莖も半ば枯れて立つて居るのに、朝顏がからみついて一つ二つの末花をつける。可憐なすがたが庭隅に現ぜられる。

朝顏といふ花は何處か意氣で、眞夏の朝朝を盛んに咲くすがたは遂ひ未だ筆を執る氣にならぬが、末花から實になる秋のすがたを私は愛らしく思ふ。あへて凋落し行くすがたを好む心ではない。蔓草のすがたは自然をやはらぐるもの、こつこつとした硬い樹木の幹へ彼等の蔓草がからめば軟かになり、凋落の秋の自然にも彼等の可憐なすがたが點ぜられて情趣を添へる。茅の株にからみついた夕顏の蔓葉の黄ばみたる、土塀に匍はした蔦の色ばんで來た樣など、みん

な硬いものを軟らげる役目を彼等の可憐なすがたが務めてくれる。

近頃は樹樹に秋を迎へることより、草の亂れ、實になることの方に秋の心を呼ばれがちになつた。

だが少年の頃などは決してさうではなかつた。秋が來れば第一栗や柿やが實り、それが喰へるのが嬉れしかつた。曉起して露草の中に鈴蟲を捕へるのが嬉しかつた。今年十一になる女兒が、ほほづきのあからむのを見て、毎日學校から歸るとほほづきの下にしやがんでは、一つ採り二つ採りほんとに赤らむ頃にはもうほほづきが無くなるやうだが、十歳前後にはさういふ慾望が外の子供とも一致してゐたやうだ。それが十三四歳からさういふ慾望が遊び仲間と私はそろそろ一致しなくなつて來た。段段採るより見てゐたい方になつて來た。—その眼の慾も亦、近頃は滿山の紅葉よりは、うらがれ行く野草の秋を好くやうになつてしまつた。

秋は、私には初秋の内がよい。九月といふ月はまだ殘暑に惱む月ではあるが、、、かつと照る日も何處やら弱くなつて、空の蒼さを背景にした草原の景色などに兎角心をとられがちだ。未だ草いきれのある野道を、咽喉を乾かしながら歩いて居ると、向ふの葦の茂みから、何鳥

かは知らず一聲耳を驚かすやうなことによく遭ふ。夏の著さに疲れきつた地上が、之れから秋風を迎へようとする時のぢしつとした靜かさは、小鳥の聲にも驚かされる。それは晩秋の寂寥さではなく、晩夏初秋に於ける唯天地の沈默さである。

秋の色に紅葉を好く人は多い。だが私は紅葉よりは黃葉を好む。からりと晴れた秋空の下の黃葉はよいものだ。だがそれよりも寧ろ心を突くものは、未だ紅とも黃とも色づかぬ老綠の樹立が、折折ざわりと來る風に驚く新秋の樣だ。

だがさういふ心持の繪は、お愧かしながらどうも描けさうもない。(平野雜筆)

續秋日雜記

唐がらしといふものを何だか私は面白いものだと思ふ。秋の畑に眞紅な唐がらしの色を見つけた時の心持は、オヤツ、といふ驚きの心が湧くものだ。私の今の住居の中野にも未だ折折唐がらしの畑があつて、あれが紅くなるまでは遂ひ氣附かずに通り過ぎて居るが、そろそろ秋が更けて來るとあれの紅くなつたのが眼について來る。其の畑の側を通る每に何となく脚を止める。かがんで覗いて見る氣にもなり、一寸摘んで見たい心さへ湧く。それは丁度ほほづきを見

るのと同じやうな感じで、唐がらしの眞紅な色を愛する單純な心だ。親父になつた私も子供のことばかりは言はず、ほほづきも、烏瓜も、唐がらしも、彼等の眞紅な色を見つけると遂ひ矢つぱり採りたくなる。時時子供と一しよになつてほほづきのそばへしやがみ込んで一採つてはいけぬ、見て居るものだよ」などと言ひながら何時か一つを自分が摘んで居る。

一體日本の秋には、葉の紅くなるものは隨分多く、其の紅葉だけを周圍から切りはなして見ると實に美しいのだが、どうも周圍に杉などがあり、杉でなくても樹樹の間に點ぜられた紅葉を私はどうもあまり今まで描いて見る氣にならず、寧ろ黄葉の方を好む癖があるが、近年になつて秋の實の紅さをひどく好むやうになつた。烏渡思ひ出すままに秋の紅い實を數へて見ても、ほうづき、烏瓜、唐がらし、梅もどきなどを始めとして、ざくろのぱつくり口を開けた紅さも、何だかその周圍にかまはず突飛な紅さが葉の場合と違つて面白い。梅もどきは霜が降り出してから紅くなる實だが、あれも面白い。點點として無數の紅い實がつくさまが何とも云へず捨て難い美しい實だ。不思議とあれ等の實の紅さは周圍になどは一向かまはず、己れは己れだ、己れは唯紅くなつたんだと言はんばかりに紅いのが反つてよい。

斯ういふ自然美觀といふものを、私は秋になると折折考へ合せて見るのだが、自然の中には

周圍との調和が無ければ畫にならないものと、其調和が無いから畫になるものとある。其畫心になる美しさに異りは無いが、周圍といふものを全然無視した美しさといふものが在る。秋の紅い實の美しさなどが其最も適例だと言へるかと思ふ。一つの畫面になつた場合背景(バック)といふものがいらない。寧ろ背景といふものは邪魔になる。其處で賢い東洋畫の先輩は、畫面に餘白といふものを生み出したであらうが、其の餘白こそ、極めて暢氣な畫面の表情であつて、實は極めて潔癖な産物なのだ。

周圍にかまはず畫面におどり出す自然の個性美とでも言ふものが東洋畫には在つて、それが西洋畫などの前に異狀な强味を持つやうにも感ずる。

私も十年前に西洋旅行などをして歸つて來るまで、調和といふものを唯畫面上の問題として考へて居り、背景の色調が念頭を去らなかつたが、調和といふものは、畫面の中にのみ在るのでなく、畫面の外にもあつて、或る時は不調和の調和が存在することが近年になつて分るやうになつた。私のやうな凡才は兎角周圍との調和が氣になつて、それを破ることとの美しさを感じながら、それを突破することが出來難い永い年月を經過して來たが、近年になつて漸く自然がそれを敎へてくれた。私は古人が樣樣の苦勞を經て煉り上げた畫法を無視するものではないが、それは私にとつては參考品であつて、私は其古人の畫法を生んだ本になつた宇宙に敎を仰

ぐ念慮を愈深めつつあるものだ。

古人の花鳥畫譜などを開けて見ると小鳥が木の實をくわへて居る圖など面白い圖があつて、大きさと可愛らしさとがぴつたりと合つて居り、よく自然を見た人の圖だといふ感じがある。だが私は未だ此頃までさういふ自然の有樣を自ら見たことが無いからさういふ圖を唯面白い圖だとして見たに過ぎないが、此頃になつて、家の庭の日向葵が實になり、その枯れ行くすがたが捨て難いので、其まま切らずに置く日向葵の實を、毎日のやうについばみに來る小鳥がある。鳥の知識の淺い私は、その小鳥が何鳥であるかどうも分らないけれど、毎朝のやうに日向葵の實を喰ひに來る美しい小鳥を、茶の間の窓から見附けて、彼れが丁度カナリヤなどのやうに一と粒の實を口にしては其殼を喰ひ棄てながらついばむ樣子が如何にも面白い。私はそれを興じて、朝めしの濟んだ後、窓に倚つては今日も彼れが來さうなものだと心ひそかに待つやうになつた。雀が庭へ來てこぼれ餌を拾ふ樣などは、少時からあまり見慣れて居るせいか、物珍らしいとも思はず見過してしまひ勝ちだが、郊外に閑居するお蔭で彼等の可愛らしさを今更のやうに見とれる日がやうやう多くなつた。

田舍育ちの私は、少年時學校の行き歸りなどに、よく道端の枯れ草に百舌鳥が突き挿した蛙

のひすばつたのを見附け、秋から冬の野道には當り前の景物として見慣れてしまつて居たが、都會住ひの幾年かの間、さういふ自然の樣を忘れるともなく久しい間を過ぎて來た。ところが中野へ來り住んでからの秋日和每に、庭前の枝端にけたゝましい百舌鳥の鳴き聲を聞くやうになつた。秋晴れの日の午前、ざくろの黄葉のまだ少し殘つた枝端に彼れが止つて、けたたましい鳴聲を立てるのを、畫室の窓からひそかに眺めて居ると、何となく武藏野に住む秋の面白さを感ずる。

ざくろの葉がすつかりふるひ落されて、蒼空を背景にした無數の小枝の端に、何だか一つ異樣な塊が附いて居るのを見附けて、其枝を折つて見たら百舌鳥の奴の何時の間にか挿した蛙であつた。

斯ういふ小さい出來事が未だ中野の邊には兎も角殘る嬉しさを感ずる。私は未ださういふ自然に筆を染むることをおつくうにして居るが、突飛な秋の木の實の色や、秋鳥のけたたましい聲やが、心の鈍つた時のどんなによい藥になるか知れぬ。(平野雜筆)

代代木より

十月の終から十一月にかけて、私は丹波丹後の邊を旅した。あの邊の景色について私が面白

く思つたことは、小さい里山が幾つも幾つも重なる處に雲煙の去來する樣だつた。私はあまり山は好きでないので、今迄高原などに雲の往來する樣は見たが、どうもそれには親しみを持たなかつた。ところが今度小さい里山に雲の去來するのは、なかなか面白いと思つた。百姓が稻を刈つて居る頭の直ぐ上に、輕く雲煙が往來する。又は村爺老媼が街道に立話などして居る頭の上を、煙の樣に雲が去來する。それにはちつとも、恐ろしい氣などはなく、雲といふ變なものが、變なものでなく、至つて親しいものに感ずる。關東平野などでは、雲はただ天上にあるもので、人里などとは緣の放れたものだが、又大きい山などでは唯恐ろしいものだが、あの邊の雲はちつとも恐ろしいものでなく、淸明に親しい感じを加へて居る。南畫などには數數—寧ろ常套手段として、一枚の畫の中には幾つも雲煙が擴つて居る。だが大抵南畫中のこの雲煙は唯遠近を分つ爲めや、詩趣を添へる爲めの手段になつて居る樣だ。だから有るべからざる處に矢鱈と雲煙が去來したりして居る。之れは支那の自然にはきつと雲煙を見ることが多いのであらう。そしてそれが南畫の發足になつて居るのだと想ふが、さすがに支那の南畫を見ると、雲に對する恐ろしさとか、不思議さとかの感情を描いて居るのを見る。それは實際に此の感情を山河から受けたからに違ひない。然し私などにはそれ等の畫中の雲はどうも親しみはない。恐ろしいとか凄いとかの感情に接するか、然らずんば唯雲が在るといふ趣、形式の詩に接するだ

けで、どうも未だ雲に對する愛情には接しなかつた。雲といふものも或る自然に在つては、可憐な親しいもの、人間と干渉のある親しいものといふ印象をうけたのは、此の旅が私には始めてであつた。

丹波丹後のあちこちを歩いて、山村の景色などに接すると、蕪村の畫を見る樣な處が數數ある。尤も蕪村は與謝郡の一村に住んだといふことは聞いたが、手近に其處此處を寫生したものだらうと想ふ。古畫を見ることの機會の尠い日本では、私が蕪村を論ずる材料は無いが、直覺するところ、あの才氣煥發の蕪村のことだから、あの邊の自然に感ずることも多く、畫材にした山村が多いだらうと思ふ。然し惜むらくは、蕪村は漢趣味が多過ぎた。其先入の豐富な漢趣味に、寧ろ周圍の自然を當てはめて見た丹後の山村の景が、直接蕪村の畫趣詩趣をそそり湧かしたのでなく、つまり蕪村の人間性と自然との融和でなく、彼れの先入の趣味に自然を混和したものと私は直覺する。古來才人の仕事が多く此處を出ない樣だ。此處を一つ突破すれば、其處に吾吾を打つもの、魅するものが輝く。直接人間性の力、澄んだもの、温かなもの、凡てが一つの魅力となつて來ると言へる。斯う云つた處で、私は今蕪村を批評するつもりではなし、彼れをつまらぬ人として物を言ふ譯ではない。此處へ蕪村を引いたのは當を得ぬかもしれぬが趣味と言ふものは、藝術家の生涯にとつて、かなり重いものになるべきだと思ふ　私は趣味と

いふものをつまらぬものだとは決してして居ない。唯趣味の爲めに、ちつとも先へ進めない人を惜まうと思ふ。絶へざる直接の精進には、其處に趣味が自然とついて來る。其趣味を私はよしとする。渾然とした藝術の輝きは、趣味を過重したらば決して得難いものだ。

私は今洋畫家諸君中の多數の人人にも亦、此の言を呈したい。趣味を過重し過信する勿れ。趣味はたしかに面白いものだ。が要するに趣味を過重したものは大抵氣取り屋の仲間である。どうか趣味をして、性の成長の伴侶にしたいものだと思ふ。

蕪村はたしかに、當時の學者で、ハイカラで、豊富な趣味をもつた才人に相違なかつた。然しどうも私の見る範圍で直覺した處では、私はその學者臭く、才人臭いのが氣に喰はない。坊主の坊主臭いと同じ様に、どうも氣に喰はない。

此四五年毎年の春か秋かに一度位私は、奈良に足を運ぶ。大てい態態行くのでなく、あの附近に行つた序に立寄るのだが、實は私は奈良といふ處があまり好きではない。奈良を好んで畫く人の氣が知れないと思ふ位、私は奈良の様な景色は、私にはピッタリと合はない。私も奈良へ行く毎に、綺麗だと思ふ。普通に畫趣も感じる。其處で折角來たんだからといふので何か一枚位、素描か油繪か描いて見る。又手帳のスケッチなどもせぬこともない。だがどうもああい

ふ景色は、私にはピッタリと心に喰ひ合はないものがある。(京都も亦さうだが)之れは私の樣な、關東育ちの野人には、其景色があまり綺麗過ぎるのかも知れぬ。それで私は每もさう思ふ。奈良は女子供を伴れて遊ぶには如何にもよい處だが、自分にはどうもしつくり合ふ處でないと。それでありながら、關西へ行けば私は大てい奈良へ立寄る。だから奈良で顏を合せる人達は、私が奈良の景色が好きだと思つて居るらしい。

　奈良の景色を私は好きではないが、奈良には私をひきつけるものがあるからだ。私は奈良の佛像が好きだ。建築にも私はあまり興味が無い。唯佛像だけは私を奈良へ呼びよせる最大の力だ。其佛像も、私にとつての最大の力は、極く少數のものに過ぎない。あれ程澤山の、古美術の中へ足を運んで、勝手なことを言ふ奴かも知れぬ。而し私の樣な我儘者をひきつける、藝術の力の大きいことを思つて、每も淚ぐましい嬉しさがあるのだ。

　私は奈良の佛像の十大弟子が好きだ。私は每もあの彫像を、近代のよい彫刻の側へ並べて見たい氣がする。ロダンやマイヨールの傍らへ持つて行つて陳べて見たい。そしてあれが彼等の傍らに立つて、遜色ありといふ想像は私にはつかないのだ。兩者の間には何物かの相違はあらう。それは恐らく東西文化の經過によつて出來た性の現はれの相違に止るものであらうと思ふ。あれ程直接で、單純で、渾然とした藝術を吾吾の過去が有したことは、世界に向つて新た

に吾吾の誇りとしてよいものだ。と同時にあれを思ふと東洋の文化が、天平の初期以來進んで居ないことを吾吾は悲しい心持がする。私達は常に佳いものを單に佳いとしたい。決して藝術の上に東西の感情を持つて居ない。だが東洋に生れた者は矢張り東洋を愛する念が強い。西洋人が東洋の美術國だなどと日本に對して言ふ言葉の樣な意味の美術國として、吾吾は安じて居たくはない。彼等のいふ美術國といふ言葉の意味は、要するにエキゾチックの意味に過ぎないことは、吾吾が直接西洋に行つて、非常に不快に感じた處だつた。吾吾が今佛蘭西の近代藝術に對する敬愛の情とは餘程違ふ意味合ひのものに吾吾は感じてゐる。だから吾吾は新たな意味をもつて、藝術の敬愛を要求したいと思ふ。八部衆は十大弟子と同じ作者とされて居る。たしかに十大弟子の次に價値の位するものであらうと私は思つて居る。私はこの二つの彫刻を敬愛して居るのだ。此の二つの彫刻なら私は世界の何處へでも持ち出して見たいと思ふ。此の外の多くの佛像に對しては、私はさういふ勇氣を持ち得ない。東洋の美術國の人達は、兎角玉も石も一しよに持ち出さないとも限らない。どうかさういふ人達は、強い愛情をもつて明快な批判力をもつて、藝術の前に立つて貰ひたい。

私が奈良に對する愛着は、至極單純で且狹いが、マイヨールの彫刻を見る爲めに、足を運んだ巴里の氣持と、ちつとも變りはない。誰でも或る家庭に、よし其家庭が自分の嫌ひな家庭で

あつても、其内に一人の愛人が居れば、嫌ひな家庭などは問題にならないで、足を運ぶに違ひなからう。繪や彫刻に對しても、かういふ風な愛情があれば、これがよいと思ふ。（畫生活より）

日本の文化は實に深い淵源を有して居る。その舊いこと、その續いてゐることについて、他に比なしと言ひ得るであらう。單に舊いといふ事だけならば、或は他に數國を數へる事が出來る。しかしその古い文化が今日迄續いてゐる國は、日本の外にない。之を美術に例をとつてみるも、日本の如く舊い國は、支那、印度、埃及、波斯、希臘、羅馬等決して少くはない。しかし其等の諸國の今日は如何。今日美術に於いて日本と匹敵し得る國は、西に佛蘭西一國あるのみである。しかも佛蘭西は最近二三世紀の舊さしか持たない國である。新しさに於いては日本と匹敵し得ても、舊さに於いては全然日本と匹敵し得ない。舊くしてしかも新らしい國は、日本以外にはないであらう。

然らば日本は如何にして、この舊さと新らしさとを、同時に持ち得るのであるか。これは日本の文化を考へる上に最も大切な一視點である。

これ迄の日本文化の考察には、よく日本に創始がない、日本にあるものは摸倣ばかりである

として、日本の文化を外國摸倣だけで説明しようとする風があつた。甚しきは日本と支那とに同一性質の文化が同時にあれば、何等の考察をも經ずして、支那が本源であり、日本は之を學んだものとして、吾も他も之を疑はぬといふ程の、輕卒さがあつた。そこには日本は宿命的に創始の不可能な國であると考へる、甚しい獨斷がある。

日本と支那とを二つ並べて考へると、支那は可成激しい變化を持つてゐる。支那の政治的變化は、支那の文化に直接に變化を與へてゐる。漢民族が勝ち、或は敗けても、結局は漢民族の文化で一貫する。そこに支那文化の特色がある。しかし漢文化で一貫しても、その中心勢力が蒙古にあるか、或は滿洲にあるかは、漢文化に激しい振動を與へずには置かない。故に支那には我が國では見ることの出來ない激しい動搖がある。されば文化の變化性が、吾が國に比して、甚しく多樣である。これに比べると日本の文化は如何にも、なだらかで、穩かである。其處にはさまで激しい動搖はない。平らかな伸展がある。一なるものの自からなる伸展である。日本の文化に多樣性を求めるのは、當らない。一つなるものの平穩なる伸展である。

日本の文化はかかる伸展であるから、之を他國の文化との關係に見ても、日本は他國の文化を靜かに同化してゐる。時には單なる流入と見え、或は單なる摸倣とみゆるものがある。しかしそれが單なる流入摸倣でなかつた證據には、其れは何時か、日本的なるものに同化して來て

ゐる。日本の歷史は、深淺の差こそあれ、實に靜かなる同化の歷史である。而して同化には、自己の力の確定と、自己の力による解釋とがなくてはならない。自己の確立と自己による解釋との無い處には同化はない。この同化力の旺盛なのが日本文化の著しい特色であるが、更にこの旺盛な同化が過去十何世紀を通じて、少しも衰へない。この同化力の繼續が、日本文化の第二の特色になる。

飛鳥は、支那文化を最も熱心に學んだ注意すべき時代であるが、その御代にもこの同化の特色は十分にあらはれてゐる。

飛鳥は、生活に對する意志の實に緊張した時期であつた。例へば十七條の憲法の第八條には官吏の出退の時間を規定して、早朝暮退を命じて居られる。この時間は後に孝德天皇の大化三年になつて寅の時、卽ち朝四時頃に出でて門外に整列し、日出でて廳に就き、午の時、卽ち正午頃になつて始めて退出したのである。然るに平安朝の中期後になつては、出勤は大抵午後、未の刻又は申の刻卽ち午後一、二時乃至四、五時となり、末期には日暮或は夜に入つてはじめて參內する事になつてゐる。その時代の政治的生活の頹廢に基くのである。

推古天皇の十九年五月五日に、兎田野に藥狩をせられた。これは重五の支那の風俗であるが日本にもまた行はれた。藥草をとつて、これを鳥獸の狩獵にかへんとせらるるのである。禮文溫和につかしめんとせらるるのである。鷄鳴に藤原の上池に集まり、黎明に兎田野に行く。舊風を改むる新らしい工夫が、絕えず行はれてゐた一例である。

しかし是等の新風は常に、日本の傳統を顧みて行はれたのであつて、その顯著なる例は、大化の改新である。大化の改新はその名の示すが如く、實に日本の政治生活に與へた新風である。これには支那六朝以來の政治が參用せられて居るが、同時に日本の國情が根柢になつてゐる。例へば口分田に於ける支那の制度と我國の制度との間には、次の如き根本的なる四つの相違がある。

1、支那制度の均田法の如く、稅の負擔と相對應して田を給授するのではない。
2、支那制度の如く、各戶の勞働力の多寡に應じて田を給授するのではない。
3、專ら各戶の現在人員數を標準とし、生活の必要に應じて田を給授する。
4、故に給田は富者に薄くして、貧者に厚い。

卽ち唐制が徵稅を目的として、田の給授をなしたのに對して、日本は生存保證を目的として、田の給授をなした。唐制を摸倣したと稱せらるる上代の田制でも、その根本にはかかる重大な

る態度の相違がある。

是よりも更に古く、推古天皇十五年の法隆寺金堂の藥師如來光背の銘は、當時既に漢文を使つて、日本風の文章を書くことを工夫し得た明かな證據である。

飛鳥期には大體重要な支那の書籍が輸入されて居、且充分に讀まれて居た事は、聖徳太子の十七條憲法の如く文獻的要素の示す處によつても知り得る。これは飛鳥より遲れるが、天武天皇の十一年三月に、境部連石積等に命じて「新字」一部四十四卷を造らせられたことが「日本書紀」にある。仁和寺宮の御藏書を、足利義教が大外記業忠に注進せしめたのが「本朝書籍目錄」で、一名「御堂書籍目錄」と言ふものである。「本朝書籍目錄」の字類の條に「新字、卌四卷」としてこの書が見えてゐる。「日本書紀」の四十四卷とは、卷數がちがふが、とにかく境部連石積等の「新字」が足利期に存在してゐる。散佚したか、或は筆寫の誤か卷數は一致しないが、字書「新字」が文武の頃に編纂せられてゐる。「新字」の何であるかについては諸説があるが、その多くは榊、杣の如き日本新造の文字であるとされてゐる。しかしそれにしては四十四卷は大にすぎる。「彼の魏晋六朝頃彼の國にて肆に造りて用ゐし漢字若しくは三韓交通以來用ゐしものを『古字』とし、當時李唐の世に用ゐらるるものを『新字』とせられしなるべし。

彼魏晉六朝の頃彼の國は競つて新奇の字體を創めて喜びて之を用ゐしことは、其の當時の金石文に多く存せるにて知るべし。…故に天武天皇の大聖斷を以て、從來書き慣れたる魏晉六朝三韓等の『古字』を捨てて、開明なる李唐通用の字を新字即ち標準文字とせむの叡慮なるべし」と佐藤仁之助氏は言つて居られる。飛鳥と奈良との中間に於いて、既に漢字の統一についての實踐がなされたのは、注意すべきである。飛鳥の次期に既に文字にこの用意のなされた處をみても、當時の漢文字の智識を想像することが出來る。

當時の金石文をみると、當時の人が重要なことを正確に漢文でかく力を持つてゐたことがわかるが、それ以上に重要なことは、漢文字を使用して、日本風の文章を書いた事である。法隆寺金堂の藥師如來像の光背の銘は「池邊大宮治天下天皇大御身勞賜時」と書いて、之を「池邊大宮に天の下しろしめす天皇(すめらみこと)、大御身いたはり給ふの時」と訓み、また「我大御病大平欲坐故、將造寺藥師像作仕奉詔」とかいて、之を「我が大御病たひらぎまさんとおもほすが故に、まさに寺を造り、藥師の像を作りて、仕へ奉らんと詔せらる」と訓むのである。かういふ文章と文章の書き方とは、如何にも日本的な同化の態度である。

しかもこれが單にこの藥師造像記のみかといふに、その外にも法隆寺をはじめ近畿に幾多の

例があり、遙かに都から遠い上野にも、山名村の碑その他の例があり、それが可成一般的なる傾向になつてゐたことを語つてゐる。當時朝鮮でも漢字を用ゐて文章を書いてゐたのであるが、しかしそこには漢文があつて、朝鮮文がない。日本人が自國語を重んじ、漢字をもその系統に組みかへてゐる態を見ることが出來る。

この適例がある。聖德太子の冠位十二階は、漢字で定められて居るが、しかしこれが漢音でよまれたのではなくて、日本讀みにせられたことが、近年に到つて發見せられた。太宰府西高辻男爵家藏の「翰苑」によつてである。これは今は支那にもない書であるが、この書に冠位十二階中の第一階の大徳の讀方が出て居る。大徳を「ダイトク」と讀まずして「麻卑兜吉寐」と讀んだと出てゐる。その他の十一階は何とよんだか不明であるが、この一例によつて、他の十一階もとにかく日本讀みしたことに疑はない。まだ自分の文字を持つてはゐないが、今手にある外國の文字を使つて、自分のものを表さうと工夫されたのである。ここに日本文化の根本的態度を知ることが出來る。

日本が漢字に對する態度は、以上によつて知らるる如く、明かに積極的であつた。そこには

自分の態度を基礎として、絶えず之を同化して行かうとする用意がある。その同化の態度は如何にも確かであり、鮮かであり、しかも其れが決して一時的ではない。相當の期間にわたつて繼續してゐる。しかしそれでも猶滿足出來ないで、これに續いて「古事記」や「萬葉集」の記載法も工夫し、苦心して見た。まだそれでも滿足出來ない。そこで假名文字が漸次に工夫せられる。ものは出來た形から見ると何でもない。假名文字もそれで、出來てしまつた形から見ると、何でもないやうに見えるが、そこまでに達するには、様様の苦心が集積せられたものである。假名字體の變遷がそれを十分に語つてゐる。假名文字もかうして同化に同化を重ねた苦心の末の創始である。この創始と同化との間の境界は明かではない。しかしこの基礎には絶えざる確かさと新らしさとの同化の繼續がある。この同化の體系こそ日本文化の特質である。

かういふ同化の體系を持つことは、吾等の愛用する茶の上にも認められてゐて面白い。

日常茶飯事といふ言葉さへ出來て私達はふだんあまりにも「お茶」に慣れすぎてゐます。ところが最近化學的、醫學的に急にこの綠茶の研究が盛になり、その結果は、これまで私達の考へてゐたやうた通り一ぺんなものどころか、この上もないむづかしい化學品であり、さまざまな病氣の藥であり、食糧問題の大切た役割を持たされてゐることが證明されました。まづ最初は、例の三浦環女史の夫君三浦政太郎博士が、青菜の不足から來る壞血病に綠茶を飲ますとたほるといふことを兎で醫學的に實驗しました。また牛乳（消毒乳は勿論生乳でも）ばかり飲んでゐると、やはりビ

タミンCが不足して病氣になる。それも綠茶でなほるといふのです――併しかうしたことは、既に數千年前に蒙古、チベツト、中央アジアなど、青菜といふものの殆んどない不毛の地で實驗濟みになつてゐたことで、それを學術的に研究し、分量などもきめて證明を與へたといふわけです。

次には辻村ミチヨ博士の研究、これはお茶の中の澁い性質のタンニンによく似たカテキン、これは今尚研究されてゐますが、一種のやはらかいシウレン劑で、腐敗を防ぐ力を持つてゐますが、大阪の衛生試驗所で行つたお茶がチフス菌を殺すといふ實驗、又大阪醫大の小東博士の研究されたもので、お茶は蛋白、脂肪の偏食中和劑になるといふことがあります。卽ち、我我の體は普通アルカリ性となつてゐなくてはならないのですが、蛋白や脂肪に片よると「アチドーチス」といつて血液が酸性になるのです。その結果は骨やその外の發育が非常に惡くなるのですが、茶はそれをアルカリ性にする力を持つてゐるといふのです（殊に抹茶にしたのがよろしい）。一方では又、大阪京都兩大學で、糖尿病に茶が效くといふ研究が行はれました。糖尿病とは御承知の通り糖分が完全に消化されないで小水に出て來る病氣ですが、これにアルカリが十分あると（茶を飲ますと）、大體消化させることが出來るのです。我我は片寄つた食物を食べてゐることがあるが、これをうまく中和させるのが茶なのです。

茶は野菜の働きをするとも云へます。しかも野菜は野菜でも上等な野菜の働きです。陸軍でも最近やはり非常に力を入れ、不毛の地の戰爭、飛行機、軍艦等には是非缺かすべからざるものとして川島少佐が熱心に研究されてゐます。兎に角茶の嗜好品としての茶道から離れて、學者が全力をこめて研究すべき對象となつたこのお茶を、皆樣もただ香氣や味をめでられるばかりでなく、さうした意義の深いことを知つていただきたいと思つたわけであります。（諸岡存氏、昭和九年十月廿六日、讀賣新聞）

かくの如く日本の文化のそれぞれの部面に、必ず日本的なる特色は示されてゐる。この日本

的なるものは常に必ず運命的に、吾等をつつみ、吾等を支へてゐる。吾等の活き方、吾等の進み方、そのものが、必然的に日本的である。日本的でない活き方は、全く不可能である。ただ一時期一部面には、非日本的なるものが現れることも珍らしくはないが、それとても決して永續的ではない。いつか日本的なるものにかへつて來る。この同化の歷史が、日本の永い文化史であつた。

民族精神、時代精神といふものは、行爲の直接目的ではない。必然的に現れるものである。しようと思はなくても出て來るものであるし、また出すまいと思つても、きつと出てくる。不可抗的に出てくるものである。鎌倉時代の畫にはどれにも共通して、鎌倉の色がある。足利期の畫にも共通して足利期の色がある。おそらく吾等の思想なり何なりの上にも、自分では氣がつかぬがやはり時代の色があるに相違ない。しかし民族精神はもつと根本的のもので、時代の各時代を通じて明かにあらはれてゐる。日本の畫か支那の畫かを區別する事は困難ではない。支那の畫家が何も支那らしく描かうと思ひ、日本の畫家が何も日本らしく描かうと思つた譯ではない。思ひもしないのに、いつかそれが色濃く出て居る。

吾吾の皮膚が黃色だとか、軟骨組織がどうだとか、吾吾の眼尻は上つてゐるとか、さういふ

體の上の相違がわかつてゐる。わかつてゐるけれども、それはわかつて居るといふだけで、分つてみた處が別に行爲の基本にはならない。日本人はそれを日本の特色として保つて行かうとは思ふが、それは一般原則としてさう思つてゐるだけで、決してこれを日日の行爲の目的とはして居ない。日日之を反省して、行爲の目的とするといふやうなことはない。

日本に胡粉がある。その胡粉のもとは支那であるが、どうして日本に渡り、どう日本でこれを使つてゐるか、その使ひ方の上にも狩野派と土佐派とではどう使ひ方が違ふか、さういふ樣の事實が、どうしてあらはれて來たか。さういふことを見て居ると、どうも自然に人人の仕事がその傾向をとつて居たのだと思ふより外ない。歐羅巴のホワイトが今日のやうになつて來たのが、不可抗的なら、日本の胡粉も亦不可抗的である。そこには人の意志を感ずるよりも、むしろ宿命を感ずる。しかもそれを宿命と感ずるのは、別に意識して居るのではないが、意識しない背後にあつて、常に實現して行くものがある。常に實現の傾向をとつてゐるものがある。これが日本精神である。日本精神は自然に胡粉を動かしてゐるが、しかし胡粉は日本精神に動かされるのを目的としたものではない。自然に日本精神に動かされたのである。胡粉の中に日本精神のあるのがどうにもならぬことは、皮膚の色がどうにもならぬと同一である。日本

の胡粉と歐羅巴のホソイトを混ぜることは、實にむづかしい。それだけ東洋の精神と西洋の精神とはちがつて居るのである。昔の小學讀本に「東西古今の粹をぬく」といふことがあつたが、そんな事がさう中中出來る譯のものではない。靴と足駄との粹をぬいて、いつたいどんな履物が出來るか、私には一寸考へることが出來ない。文明の粹をぬく、東西の長所をとり短を捨てるといふことは、如何にも穩健なよい態度のやうに思はれるが、それが實踐的には容易に出來る筈のものではない。すべてにそれぞれ民族精神が不可分的にくひこんでゐるからである。日本的であることも不可抗的であれば、支那的であることも不可抗的である。かういふ不可抗的に成立したものが傳統である。爲さうとするのでなくて、さうなる外仕方なかつたといふのが、文化の形態である。

足利のやうなあいふ社會組織があつた場合に、あの安土桃山の時代があらはれる。もし別の社會組織があつたら、また別の安土桃山の時代があらはれたのかもしれない。しかし何時の場合でも、その背後に働いてゐるものは、吾等の日本精神である。變化するのは樣狀である。發展とか退歩とかいふことのない、一つの連續である。それだから宿命的である。

日本ではじめ金銅像が出來る。推古から白鳳にかけてこれが盛であるが、奈良に東大寺の大佛が作られてから、もうあまり金銅像は作られない。金銅像にかはるものは乾漆像である。奈良で乾漆像が盛であるが、次に木彫になる。平安から木彫專行である。そこで金銅が發達して乾漆になつた譯でもなく、木彫になつた譯でもない。そこには樣式の變化があつて、進步の關係はない。推古より後になる程よい彫刻が出來るといふ譯でもない。惡い彫刻が出來るといふ譯でもない。とにかく變遷に變遷を重ねて續いてゐるのである。その變遷の中に、自ら一貫して日本的なるものがある。日本的なるものの現れる形は色色であるが、これが殆ど意識されずに背後に續いてゐる。

いはば吾等は土壤の性質を變へ得ないと同一である。肥料の仕方、耕作の仕方などで、多少の變更や改造はし得るが、しかしこれは本質的ではない。土地の素質を根本的に變へることは出來ない。それは吾等の前に宿命として擴がつてゐる。丁度それと同樣である。土地に對する吾等の働は極めて補助的であつて、從つて行きつつ多少の變更をなし得るといふ程度に過ぎない。吾等が日本精神からうくるものは、意識的でない。その意識的でない處が尊い。

それを教育でどうにかなると思ふのは、教育の力を過信する處から起る誤である。もともと教育の力は小さい。自分について來るものより、むしろ自分に叛いて行く中によい學生がある。

吾等も親に叛き、師に叛きして自分を作つて來た。教育で思ふやうに作らうといふのは無理である。そこへ行けば教育は無力である。この無力なる處が、教育の尊嚴なる所である。

日本精神は、國民生活の土壤にある。その一例として次の前橋電話をあげることが出來る。

群馬縣警察部衛生課勤務警部本多重平氏(四二)は、去る十六日天皇陛下桐生市に行幸遊ばされた御時鹵簿の先驅車に見城警部とともに奉仕申上げたが、緊張の餘り過つて機織天覽場たる桐生市西小學校に進むべき鹵簿を桐生高等工業學校に御誘導申上げた責任を感じ以來前橋市紅雲町四二の自宅で縣の深代、奈良兩防疫監吏の監視を受け端坐謹愼してゐたが、十八日朝妻むめを初め家族を奉送に外出せしめたあとで、午前九時八分御召列車の前橋驛御發車を知らせる花火を合圖に、制服のまま自宅奥八疊の間に端坐し日本刀を仕込んだ御警衛用の佩劍を以つて左咽喉部を掻切り、責任自殺を計り苦悶中を前記二防疫監吏に發見された。折柄駈付けた警務課菊池警部とともに縣警察部に急報し、桑原醫學博士及び玉木衛生課長並びに縣衛生課の技師數名が急行して應急手當を加へて居る。傷は長さ十センチ、深さ三センチ位で口を利くことは出來ないが、意識は明瞭で化膿しない限り生命は取止める模樣である。同警部は十六日失態以來先驅當時の制服を脱がずそのまま端坐し一睡もせず謹愼してゐたもので十八日朝はまづ妻むめに四男弘を背負はせ無理に奉送に出し、護衛の奈良、深代兩防疫監吏には「自分は決して輕擧しないから自分に代つて是非奉送してくれ。最早直ぐ御發輦になるではないか、何をぐづぐづしてゐるのだ」と叱るやうに再三懇願するので、兩人が外出を裝つて表へ出たところへ菊池警部が打合せに來たので立話をしてゐると急に屋內からうめき聲が聞えて來た。驚いて驅け込んだときは佩劍を握つたまま血塗れとなつてゐたといふ。(昭和九年十一月十九日、東京朝日新聞)

かういふ覺悟は、義務の觀念の如き自覺的な論理的な立場からあらはれるものではなくて、そ

の背後にある國民的意識から自然的に且不可抗的にあらはされて來るものである。どうにもならないものであり、實踐的には卒然として出て來る。それだけに根ざす處の深さを感じさせる。しかるに今の教育は、それが自分の思ふやうになると考へてゐるらしい。一體に今の教育は事を計劃的に考へ、その計劃の中で萬事が、意のままになるやうに思ひ込んでゐる。大切なことは一生に一度か二度いへばよい。それをくどくどと繰り返し、繰り返すことが多ければ、多いだけ効果があるやうに考へる。さういふものではない。大切なことほど口に出していふべきではない。言ふのにはよくよくの時でなくてはならぬ。それをあまり繁瑣に繰り返すものだから、かへつてこれに對して反動的にさせることがある。私達にもそれが有つた。吾等はむしろこの背後に絶えず働いてゐるこの尊嚴なるものに、頭を下げればよい。それをどうしようと考へるのは、むしろ分に過ぎた、思ひ上つた態度であると思ふ。吾等が吾等の宿命の前に、謹んで頭をさげる、それが吾等の國民精神に對する唯一の態度である。

言葉の實踐の場合にも、その中軸をなし、言葉を支へ、言葉を保ち、言葉を滿たし、言葉を培ふものは、この日本精神である。吾等が吾等の言葉を愛重し、愛惜する所以はここにある。

第九章　解　釋

平安鎌倉に於ける繪畫をみると、そこに使はれて居る銀に錆びたものもあるが、少しも錆びないで鮮かに殘つてゐるものもある。しかし今日の銀は數年にして錆びる。しからば錆びる銀と錆びぬ銀と何れが良質であるか。分析の結果によると、今日の銀は化學的に純粹である。だから錆びるのである。中世の錆びない銀は、かへつて化學的には不純である。銀の外に何かの挾雜物がある。挾雜物があるから錆びないといふことがわかつた。

ここで問題になるのは、化學的に純粹だといふことが、果して銀の性質として完全であらうか。銀の色を昔から「しろがね」と呼び、所謂銀白色を銀の色とするならば、錆びる銀はかへつて銀の性質として純粹だといふ譯には行かない。もし化學的に純粹なるを以つて銀の純粹と考へるならば、すぐ錆びて灰色になる灰銀色を銀の色としなくてはならぬ。特に「いぶし銀」と呼ばるる色を、銀の正色としなくてはならぬ。しかしこの銀色の考へ方は、吾等の通念と相反する。吾等の通念を以つて正しいとすれば、化學的に不純なる銀を以つて、かへつて銀の純

粹なる性質としなくてはならぬ。化學的純粹とは相反する關係にある。

かかる事は他にも多い。その一例として鐵をとつても同樣である。鐵は化學的純粹の鐵が、最も良質ではない。鐵の精として日本刀は考へられるが、凝つて百錬の鐵となつた刀の鐵は、化學的純粹の鐵ではない。その中に炭素をふくみ、モリブデンをふくみ、その挾雜物の故に、精銳鐵を斷つことが出來る。鐵の精銳は、化學的にはかへつて、不純なる鐵である。ここに於いて、吾等は純粹性について、抽象性純粹と、具體性純粹とを區別して考へなくてはならぬ。前者は單一性、靜止性の純粹であり、後者は複合性、實踐性の純粹である。この性質は言葉の上にも同樣に言ひ得る。

言葉には明かに外在性と拘束性とがある。社會的に規定せられて、個人の意志で變更し得られぬ社會的一般性がある。この性質によつて言葉は思想の傳達目的を果すものである。この目的が重んぜられる爲に、言葉の傳達性質が重要になる。言葉には社會的に定つた一つの意味があつて、誰にも理解せられ、隨つて正確に思惟が傳達せられるものと考へられる。これが言葉の符號性である。符號には必ず定まれる一つの意味があつて、この意味の知られる限り何の困難もなく、交互に思惟が傳達せられる。そこには何等の矛盾もない。かくの如くに言葉は考へ

られてゐる。

然らばこの傳達は如何なる性質を有するか。傳達とは言葉の聽手に對する側である。言葉の語手に對する側は、表現である。語手の表現は、聽手には傳達である。語手は內なる思意を表現する。表現はそのまま傳達となる。しかも表現がそのまま傳達である爲には、表現が既に聽手に對して誤解のないだけの社會的公認性を有つてゐなくてはならぬ。或る一定の意味を必ずふくみ、それ以外の意味は必ずふくまない。これが言葉の符號性である。言葉はこの社會的公認を有するが故に、表現そのままの形で、傳達となるのである。故に表現性と傳達性とは密着してゐる。隨つて傳達せられぬ言葉、讀み得られぬ文字の如きは語られず、書かれないと同一である。而して傳達には、言葉が完全に符號的であつて、その符號的性質以外の性質を持たぬことが、言語の唯一の性質として考へられる。言葉の外在性、拘束性の大きい程、言葉は符號的であり、言葉は決定的である。この限りに於いて言葉は正しく自己の責務を果たすのである。卽ち言葉は符號的であればある程、完全だと考へられる。かくて言葉は社會的決定性によつて成立するのである。

しかし言葉の意味が果して、符號的に一語一義に決定してゐるであらうか。

今手許にある「大字典」をとつて、解及び釋の二字をひいてみる。

「解」の意味は決して一義ではない。

1 **トク**、ワカツ、牛ヲ剖ツ、散ラス、ハナス、緩ム、舒ブ、**サトル**、シル、悟了ス、釋散ス、開ク、ヌガス、脫ス、ハヅス、ホドク、ホドカス、和ス、免ス、說ク、言辭ス、達ス、トホル、トホス、削ル、止ム、古義ヲ說明ス、訓詁、講義ス、樂曲ノ一節、戟多キ貌、易ノ卦名、足ノ跡、蠏、澥、蟹ニ通ズ。

2 **トク**、ワク、ワカツ、散フス、ハナス、サトス、懈ト通ズ、オコタル、邂ト通ズ、アフ、廨ト通ズ、ヤクショ、上聞ス、除ク、發ス、ススム、詭曲ノ辭。

の如く多義である。これは數種の意味に彙類し得るには相違ないけれども、しかし決して一義に約し得るものではない。

釋に於いても亦同一である。

1 **トク**、サバク、處理ス、ヲサム、イヒワク、講明ス、分疏ス、**ホドク**、ヌグ、ハヅス、サトル、チラス、トロク、トカス、消散ス、緩ム、**ハナツ**、**ユルス**、**スツ**、廢ス、去ル、**オク**、シタガフ、ウルホフ、米ヲ洗フ、講義、分疏。

2 ヨロコブ、懌ニ同ジ。

しかし一字一義の文字もある。「松」の如き名詞はそれであるけれども、「松」の前にある「杼」は、既に一義ではない。

1 **ヒ**、織機ノ具、薄シ、ソグ、長シ、苧ニ通ズ、ドングリ。

2 泄水ノ槽、汲ム。
3 ツルバミ、椽、栩。

である。辭典に於いて、一字一義の文字を發見するのは困難なる程、一字は多義である。

次に「とく」の語意を「大日本國語辭典」からひく。

とく。解。(自動下二)一、結び目はなる。ほどく。二、職に離る。罷めらる。免ぜらる。三、思ひ晴る。散る。消ゆ。四、心の隔てなくなる。心置きなくなる。互ひに打ちとく。五、心安く思ふ。心がかりなし。六、會得せらる。了解せらる。さとる。七、はなる。除かる。八、亂れたるがをさまる。

とく。解。(他動四)一、結び目をはなす。ほどく。二、職を罷む。免ず。三、はらす。散らす。消す。四、知る。さとる。理解す。五、止む。撤す。除く。六、亂れたるをさむ。

とく。溶。(自動下二)一、液體中に混じりて散亂す。二、ゆるくなる。融解す。三、とろく(盪)に同じ。

とく。溶。(他動四)一、液體にまぜてゆるくす。とかす。二、とろかす(盪)に同じ。

とく。說。(他動四)一、理を分けて話す。さとす。二、ときあかす。說明す。三、のぶ。告ぐ。陳述す。

「解く」を「和解」の義として、「手打」を試にひいてみると、

一、素手(スデ)にて打ち殺すこと。手捕る。二、手づから目下の者の首を斬ること。三、蕎麥切など、手にて打ち作ること。手製。四、手づから水を撒(マ)くこと。五、約束又は和談の成立したるしるしに、兩の掌をうち合せて鳴らすこと。六、轉じて約束又は和談の成立すること。七、劇場にて顏見世に、贔負連中が土間に立ちて賀言葉をなし、これに伴ひて手を拍つこと。

とある。實に多義である。一つの言葉が一つの符號となるのは、固有名詞の場合位である。

更に一語多義の著しい例をひく。「大日本國語辭典」は、「出す」について次の三義を擧げて居る。

一、内より外へ遣る。是れより彼れへ遣る。だす。やる。

二、現はす。「見出す」。「きき出す」。

三、言ふ。歌ふ。吟ず。「口に出す」。

然るにこれ以外に可成り多い。

1、顔を出す。(出席)2、頭を出す。(拔群)3、角を出す(嫉妬)4、口を出す。(差出口)5、舌を出す。(輕蔑)6、唾を出す。(食慾增大)7、よだれを出す。(同上)8、あくびを出す。(倦怠)9、涙を出す。(泣く)10、芽を出す、(順境に向ふ)11、目が出る(好運出現)12、手を出す。(手向ふ)(異性に關係する)(本業以外の事業に關係しはじむ)13、足を出す。(勘定不足)14、尻尾を出す。(露現)15、咲き出す。(開花、開始)16、吹き出す。(失笑)17、割り出す。はじき出す。(算出)18、計り出す。(算出)(實質以上の量に計る)19、引き出す。(說きつけて要求を滿す。會話等について)20、家を出す。追ひ出す。(絕緣)21、汗を出す。(恥づ)22、ぼろを出す。(缺陷暴露)

等はその著しい例である。また「手も足も出ない」は「策の施しやうなし」、「かけ出し」は「着手後日猶淺し」である。

若し一語一義に限られたならば、語數は甚しく增加する。例へば道具が一つの目的に對して

使はれるに過ぎないならば、紙を切る小刀、木を削る小刀、鉛筆を削る小刀といふ風に、小刀だけでも何本も机邊に備へなくてはならぬ。これではその繁に耐へない。一つの小刀を以つて出來るだけ多くの用に充てなくてはならない。そこで一つの語が、ほぼ類を近くする數種の意を負ひ、或は一つの語に向つて、ほぼ類を近くする數種の意が集つて、一語が多くの意を負ふのである。故に一語多義は自然の傾向である。

かくの如くして一語多義なるに及んで、言葉の符號的性質は少くなる。符號とは一記號一意義なる性質であるから、一語多義では符號とはなり得ない。卽ち言葉の限定性、言葉の決定性はゆるくなる。隨つて言葉の單一性純粹は成立しない。言葉の性質は具體的純粹性、實踐的純粹性である。言葉の性質は動勢である。働きの中で一つに定位する。

實踐的純粹性は、一部に未決定性を持ち、一部に決定性を持つてゐる。この組織が、言葉を以つて表現と傳達とを同時に可能ならしめるのである。傳達には言葉は決定的である程、具合がよい。しかも思意は決して決定的ではない。ただ、ある場合には決定的な形でする。4+5=9の如き思意は決定的な形で、決定的に行はれる。思意に隨つて正確に傳達せられる。しかしす

べての思意が決定的だとは言はれない。決定的でない形の方がむしろ一般である。「茶はうまい」といふ同一の表現でも、それのふくむ具體的實踐的の意味は決して同一ではない。「茶はうまい」と言ふ表現を、吾等は蓋し生涯中、二度と全く同じ心持で言ふことはないに相違ない。同じ言葉を生涯には何遍となく用ふるけれども、同じ意味では決して用ひない。その度毎にちがふであらう。さういふ相違せる生活をあらはす爲には、言葉がはしからはし迄決定的にきまつてしまつて居ては、不便である。言葉が思意の一一の場合に適應する程、豐富であることは望み得ない。またそれ程豐富であつては、語數は增加し、言葉の收得の困難が吾等の心力を超過する。それ程夥多の言葉を作り理解し、且使用することは不可能である。そこで吾等の言葉は、一つの言葉を多義にしなくてはならぬし、一つの言葉を多義にして、多くの生活に適應させなくてはならぬ。一語多義ならば、言葉は決定的でなくて、未決定的である。言葉の決定的部分は傳達性を持つものであり、この未決定的部分は表現性を持つものである。未決定性を以つて、複雜な生活をあらはさなくてはならぬ。而してこの現し方は決定的ではない。未決定的にあらはす外ない。勿論表情や語勢や、斷續やその他樣樣の狀態が之に參加して、出來るだけ決定的に之を組織しようとしてゐるが、しかし最後迄未決定的部分が殘る。この未決定的な部分が、それが言葉の眞情である。それ故に言葉は合理的でなくて、非合理的である。されば同

じ言葉が、反對の意味にさへ用ひられる。修辭學の一つに倒置法がある。倒置法は語序を倒置して、急迫せる狀態を示すものとしてゐる。しかしこれが急迫を示し得るのは倒置せる故ではない。倒置といふのは語序の一般狀態を以つて徹頭徹尾合理的だと考へるからである。語序が一般的に規定せられるものと考へ、この規定を合理的と考へることは、即ち是を純粹規定と考へることである。言葉のかかる規定は實踐的純粹性ではない。單一的純粹性である。この單一性純粹によつて言語の合理性を決定するから、急迫せる場合の語序を、倒置法とすることになる。しかしかかる生活狀態では、かへつて實踐的に合理的であり、純粹である。かくの如く語序を反對にする事の出來る程、變化的であり、未決定的であるのが、言葉の姿である。

かくの如く、言葉が未決定的表現であるとすれば、傳達も亦この未決定性に支配せられぬ譯には行かない。かくて決定的である傳達さへも、必ずしも決定的ではあり得ない場合が生じてくる。然らば言葉は遂に符號ではない。符號は決定的であつて、未決定的ではない。傳達が符號的であり得ないならば、そこに何がおこるか。

傳達の未決定性とは、表現の形と、表現の意味とが、相矛盾する性質である。表現の形がその儘意味でないことである。故に傳達せらるるものが、またその儘意味ではない。そこに於

いて、傳達せられたものが、意味を如何にみるべきかといふ問題がおこる。もし言葉が符號ならば、傳達せられたものは、其儘意味である。しかるに言葉は符號でないから、そこで傳達せられたものを、如何に知り感ずべきかの問題がおこる。これが解釋である。故に解釋は言葉が符號でないこと、卽ち言葉が未決定的であることに基いてゐる。言葉を多からしめない爲の節約の工夫をする。それが同時に言葉は解釋を待つてはじめて理解し得るといふ困難を與へてゐる。しかし言葉が無限に増大する爲におこる困難よりも、この困難の方が遙かにその度合は少ない。

ここに霞、靄、雲、霧等の甚だまぎれやすい名詞がある。この四者は何れも空中に浮んでゐる微小なる水滴である。霞は霧よりも水滴の小さなもの、靄は霧の深いものである。霞は春、霧は秋生ずるやうに言はれて居るが、それは氣溫の關係で、一般に春の霧の水粒は小さく、秋の霧の水粒は大きいためである。霧と雲とは、いづれも普通に微細な水滴である。地面に近いものを霧といひ、遠いものを雲といふのである。しかしこれも觀者の位置によつて違つてくる。例へば山にかかつた雲を、山麓の人は雲と呼ぶが、雲の中に居る山上の人は、霧だと考へる。隨つて霧は近くで見た雲で、雲は遠くから見た霧である。

言葉に於けるかかる符號的決定が一一行はれて居るならば、傳達は容易である。しかし符號になし得ない思惟或は觀察は、表現する事が出來ない。そこでこの符號性を改訂しなくてはならぬ。符號性は常に如何なる場合にも、一定の性質を持ちつづけ、永久に存在するから、それは眞である。眞とはここでは體系を持續する傾向であるから、言葉の持つ永久の符號性は、言葉の眞である。隨つて言葉の多義とは、その多義中の符號性たる一つの意義を中心にして、それぞれの方向に歪曲したものである。多義中の一義だけが傳達性、表現性を持つ符號性であつて、言葉はこの符號性によつて代表せられる。これが言葉の眞實である。しかしこの符號性は漸次に歪曲をはじめる。例へば「解く」の符合性は「ほどく」であるが、この結合關係の分散から、離職の意となり、心の交通の障礙解除となり、親愛となり、了解となり、除去となり、平安となるが如くである。而してこの「解く」の眞は「ほどく」であり、その歪曲によつて多義となり、この多義は「解く」の意を可成り豐富にしてゐる。言葉の餘韻はこの非符號性の豐富、歪曲性の豐富である。符號性を眞とするならば、非符號性は虛である。言葉は符號的永久性から隔離して、一時的、部分的に歪曲する。この虛によつて言葉は立體的になる。符號的なる一方向性が、非符號的なる多方向性となるからである。故に言葉の進行は、語數の增加よりも、第一に言葉の組合せの增加による言葉の歪曲と、第二に言葉の直接の變質による歪曲とに

よつてなされてゐる。かかる歪曲性は、その時時の流行語によつても明にされる。「インチキ」といひ、「クサル」といひ、「ノス」といひ、何れもこの時代の特殊の傾向に基く組合せ乃至は變質による歪曲である。

支那の晝論に眞は直に窮るが、虚は窮らずと言つてゐる。これは大變に面白い觀察である。虚僞は何故に無限であるか。銀の單一性純粹を眞實とすれば、實踐性純粹は虚僞である。この虚僞は、所謂「しろがね色」を永久に持續させるからである。虚僞は極めて特定の條件の中でなされる。虚僞の語られる條件と事情とは甚しく特定的である。眞は特定の條件を持たない。「太陽は輝く」のは眞である。太陽が曇るならば虚である。この曇るためには、何か特定の條件が無くてはならないし、この特定の條件は決定して持續的ではない。自らある限定がある。この限定内の眞が虚である。虚は徹頭徹尾眞をふくまぬものではない。徹頭徹尾眞をふくまぬ虚は、この世には存しない。特定的に虚なるものが、特定の條件を撤去してみれば、眞である。虚はこの點で甚しく實踐的である。虚を直に永久的ならしめようとすれば、實踐性を失ふ。いつ迄も永久性ならしめぬ處に、實踐性がある。一例をとれば尊王攘夷論は、幕末における一實踐である。尊王と攘夷とを結合することは決して永久的眞實ではない。隨つて當時の尊王攘夷

論が一度徳川幕府の覆滅を完成すれば、その綱領を何のことわりもなく撤去して、尊王攘夷とは單に尊王であるかの如くに變更してゐる。けれどもこの虚僞は當時の情勢としては、實に具體的實踐的であつた。永久的に眞理ではないが、具體的實踐的には眞理であつた。「解く」は、離職を意味する點には、具體的に、且一時的に眞である。しかし「解く」は永久的に「離職」を意味するとしては、論理的に不擴充であり、隨つて虚僞である。しかし虚僞は實踐的に窮る處がない。眞理の適用は、これ眞理の歪曲であり、眞理の虚僞である。しかしこの場合永久に有する眞理よりも、實踐的に存する眞理適用の方が、窮る處がない。窮る處がないとは、常に實現的であることの意味である。また言葉に於いてもこの關係は同一である。符號性は窮らざることを目的としてゐるが、しかし眞に窮らざらしめんとすれば、言葉は非符號性になる。故に言葉の實踐性は歪曲性である。非符號性である。ここに方言の永く窮らざる生命がある。方言は眞理の問題でなくて、實踐の問題である。方言の傳達性は局限されてゐる。しかし特定の條件內では、方言はかへつて實踐性がある。方言には著しい歪曲がある。

植物分類學の牧野富太郎氏は、植物圖譜の畫圖が、植物の性格を傳へないことを問題とされたさうであるが、植物學的寫生は、その念とする所、植物形態の眞である。植物の標準形態、合理的形態である。しかし植物の實踐的形態は、多くは方言的にあらはれてゐる。この方言的

狀態をとらへることを念とするのは美術である。美術はその故にかへつて植物の性格を傳へてゐる。

傳達の問題は符號性の問題である。解釋の問題は非符號性歪曲性の問題である。言葉の虛、言葉の餘韻の問題である。言葉が言葉としての味、特に立體的の味を持つのは、この虛の問題である。これ古くより文學に「虛實」の論議ある所以である。

ここで解釋と註釋との實踐的意義を考へなくてはならぬ。

解釋とはもともと傳達性の問題であるから、常に二つの方法が考へられる。第一は言葉の歪曲を、もとにかへすことである。非符號性を符號性にかへすことである。この形で言葉は一先づ傳達性を容易にする。そして第二には一度符號性にかへしたものを再び歪曲性にかへして、その實踐性をみる。この歪曲性への反復作用が解釋である。

例へば「源氏物語」の最初の一節

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

についてみるに、「花鳥餘情」に「女御」を「后に次げる女官也」と言ひ、「更衣」を「女御よりは次の人也」と言ひ、「細流抄」が「すぐれて時めき給ふ」を「時を得たる也。時宜にあへると也」と言ふが如きは、何れも言葉を符號性にかへす働である。かくの如くしてこれを符號性にかへして、「どの御時であるか、女御更衣が澤山に」云云といふ風に言ひかへつて行くのは、解釋の第一性質である。しかし「いづれの御時にか」を「どの御時であるか」と符號性に言ひかへてみても、まだそこに「源氏物語」の歪曲が殘る。故に「河海抄」は「延喜の御時と云はんとておぼめたる也。河原院を何がしの院と云ひ、鞍馬を北山のなにがし寺など云ふに同じ」と言つてゐるし、「玉の小櫛補遺」は「此物語はすべて作り物語にて、今の世にいはゆる昔ばなし也。さる故にむかしいづれの御時にかありけん、かかる事の有りしといへるにて、此詞一部にわたれり」と言つてゐる。

これを醍醐の帝の御時とみるのと、全くの昔物語として時代を考へる必要がないとみるのとは、結論は反對であるが、その態度は「いづれの御時にか」を歪曲性にかへして、「源氏物語」がこの時代に對して如何なる歪曲を持つかを示さんとしたものである。これが解釋の第二性質である。ここで解釋が成り立つのである。

また「老子」の巻頭の

道可道非常道。名可名非常名。

を、「道の道とすべきは、常の道にあらず。名の名とすべきは、常の名に非ず」と讀み、或は「道の道ふべきは」云云と讀む。これは解釋の第一性質である。また「常」を「不變不易」と解するも、言葉の符號性還元である。之を更に老子の歪曲性に還元して、

人の思議し言說すべきものは皆相對的なり。故に道の指すべく名の指すべきものは不變不易の道と名とに非ず。（小柳司氣太氏、國譯老子）

といひ、また

われわれが眞理と思惟してゐるところのものは實は眞理の本體とは異るものであり、われわれが形象と認識してゐるところのものは實は形象の本體とは別なものである。（支那古典叢函、老子）

といふのは、何れも解釋の第二性質である。「支那古典叢函」は、之につぐ「無名天地之始、有名萬物之始」を「無名は天地の始めにして、有名は萬物の母なり」と讀み、

形象を超えたところに本體がある。が・形象によつて一切は認識される。

と解釋してゐる。この解釋の妥當如何をここでは論じないが、とにかく如何にも味はれた歪曲性還元である。

についてみるに、「花鳥餘情」に「女御」を「后に次げる女官也」と言ひ、「更衣」を「女御よりは次の人也」と言ひ、「細流抄」が「すぐれて時めき給ふ」を「時を得たる也。時宜にあへると也」と言ふが如きは、何れも言葉を符號性にかへす働である。かくの如くしてこれを符號性にかへして、「どの御時であるか、女御更衣が澤山に」云云といふ風に言ひかへつて行くのは、解釋の第一性質である。しかし「いづれの御時にか」を「どの御時であるか」と符號性に言ひかへてみても、まだそこに「源氏物語」の歪曲が殘る。故に「河海抄」は「延喜の御時と云はんとておぼめたる也。河原院を何がしの院と云ひ、鞍馬を北山のなにがし寺など云ふに同じ」と言つてゐるし、「玉の小櫛補遺」は「此物語はすべて作り物語にて、今の世にいはゆる昔ばなし也。さる故にむかしいづれの御時にかありけん、かかる事の有りしといへるにて、此詞一部にわたれり」と言つてゐる。

これを醍醐の帝の御時とみるのと、全くの昔物語として時代を考へる必要がないとみるのとは、結論は反對であるが、その態度は「いづれの御時にか」を歪曲性にかへして、「源氏物語」がこの時代に對して如何なる歪曲を持つかを示さんとしたものである。これが解釋の第二性質である。ここで解釋が成り立つのである。

また「老子」の巻頭の

道可道非常道。名可名非常名。

を「道の道とすべきは、常の道にあらず。名の名とすべきは、常の名に非ず」と讀み、或は「道の道ふべきは」云云と讀む。これは解釋の第一性質である。また「常」を「不變不易」と解するも、言葉の符號性還元である。之を更に老子の歪曲性に還元して、

人の思議し言説すべきものは皆相對的なり。故に道の指すべく名の指すべきものは不變不易の道と名とに非ず。（小柳司氣太氏、國譯老子）

といひ、また

われわれが眞理と思惟してゐるところのものは實は眞理の本體とは異るものであり、われわれが形象と認識してゐるところのものは實は形象の本體とは別なものである。（支那古典叢函、老子）

といふのは、何れも解釋の第二性質である。「支那古典叢函」は、之につぐ「無名天地之始、有名萬物之始」を「無名は天地の始めにして、有名は萬物の母なり」と讀み、

形象を超えたところに本體がある。が、形象によつて一切は認識される。

と解釋してゐる。この解釋の妥當如何をここでは論じないが、とにかく如何にも味はれた歪曲性還元である。

然らば註釋とは如何。註釋は最初には解釋の第一性質である。符號性の追求である。しかし讀む働、聽く働は、決して符號性の追求のみでは終らない。何等かの形で第二性質に向ふ。故に註釋は自然の發達によつて解釋になる。どんな原始的な形でも、必ず多かれ少かれ解釋になる。然るにかかる解釋はやがて次の讀みに對しては、その各が全體として、註釋となる。換言すれば、前の解釋は、後の讀に對しては皆註釋となる。これを註釋として、自己の解釋に進むのである。斯くの如くして「源氏物語」も讀み進められ、「萬葉集」も讀め進められ、「古事記」も讀み進められた。如何に本居宣長の「古事記傳」が精緻であるといつても、その以後の讀みは漸次に讀み進んで、「古事記傳」以上の註解を成立させてくる。讀みとは前の讀み、前の解釋を註釋とすることである。前の解き前の讀みを出發として、更に一歩を進めることである。その進みは符號性に向ふ場合もあり、或は歪曲性に向ふ場合もある。それは何れであつても、既に前代よりも一歩を進めてゐる。

子供の頃の事をふりかへつて見ると、私達の書物の學び方は可成りちがつて居た。「論語」を習つたのは、尋常三年の時で、學校に行く前に、先生の所に通つて、素讀を習ふ。時に簡單な講義もつく。歸つてくると父は私に習つた處を暗誦させる。意味のわかつた處もある。わから

ぬ處もある。わからぬ處はわからぬなりに、子供相當の解釋をつける。そしてわからぬ處があつても、少しも不安ではない。それから後師範學校で「論語」を習つた。その時になると、わからぬ處があると、そこがひどく不安で、先生にも質問したり、自分でもしらべたりした。尋常三年の時よりも理解は進んでゐた。その後女學校の專攻科で教へた。教へるとなると、習ふ時よりも不安が深刻になつて、理解はもつと深くなる氣がした。その後「論語」の校訂本を作つたことがあり、それには私も出來るだけの力をつくし、それをやつてゐる間に、理解が更に深まつたやうに思ふ。讀む働は生涯を通じて深まつて行く。

理解の性質には二通りあると思ふ。算術とか理科とかいふやうに、その時間に教へた事は全部理解しなければ完結しないやうな、さういふ理解がある。そのかはり理解したとしないとの境がはつきりしてゐる。

ところが國語、ことに古典などを扱つた場合には、何處から何處までが理解されたものか、理解されないものか、その境がはつきりしない。中學に行き、大學にゆき、同じ本を繰りかへしてゐると、だんだんに理解が增してゆく。理解はそれつきりと言ふ事はない。Aの時にはA、Bの時にはB、Cの時にはCといふ風に、理解は年と共に漸次に深まつて行くもので、理解の

深さは生涯極ることはない。それを考へてくれば、今の讀本の形には、古典的理解を中心にするやうな、さういふ理解は考へてゐないやうに思ふ。地理や理科のやうな論理的理解、徹底的理解は考へてゐられるが、體驗的理解、漸進的理解は考へてゐられないやうに思はれる。子供の時には消化しきれなかつたもの、敎へ殘されたものが、ずつと殘つてゐて生涯の糧になり、生涯の宿題になるといふやうなものが、工夫されて居ない。不可知の範圍が殘されない。不可知のものを殘して置いて、それによつて生涯敎へられるといふ工夫がない。今の敎育にはかういふ後の爲めにとつて置く餘剩がない。有限のもののみが敎へられ、無限のものは敎へられない。これが讀本の缺陷だと思ふ。深さを殘すこと、それがないのが缺點である。

算術の理解では、理解出來ないものが殘れば、その理解は未完結である。しかも國語の理解は、理解出來ない部分があつても、はじめの時期では少しも不安心でない。わからない處を、平氣で暗誦したりして、少しづつでもわかると、それがひどく滋味である。さういふ處があつて、かへつて、讀本を敬虔な心持で讀ませる。かういふ餘剩の常に殘留する理解が第二の理解である。

私に「論語」を敎へた先生は、「論語」に非常に感動してゐられたから、習つてゐてわからな

くても、それでも私は感動した。坪内逍遙先生の「ハムレット」の講義を聞いてゐると、實によくわかる。先生が原文を讀まれただけで、何だかすらすらとわかつてしまふ。家にかへつてみると彼處も此處もわからない。ところが先生が讀まれるのを聞いてゐると、それだけでわかつてしまつた。波多野精一先生に「カント」を讀んで頂いた時も同樣であつた。五十嵐力先生に「源氏物語」を讀んで頂いた時も同樣であつた。わかつてゐる先生に讀まれると、魔法にかけられたやうなもので、譯もなくわかつてしまふ。讀みといふのはそれだと思ふ。疑はしい處、わからない處がある。あつてもそれが不安にならない。安心してまかせた心でゐられる。それでよいのが理解の第二の種類である。文章の場合には、文字が缺けて居ても、一二わからない文字があつても、それを飛び越えて進める。しかし論理的理解の場合にはそれが出來ない。それが第一の理解との相違である。

中學三年生に微積分を敎へることとは、理解の性質上甚だ不適當であるが、古典ならば數學の微積分に當る程度のものを、敎へることが出來る。中學三年生は三年生の程度で理解するからである。しかし微積分には、中學三年程度、高等學校程度といふ風な理解の段楷はない。だからなるべく天下第一の書をはじめから敎へる。そしてそれを生涯よむといふことにしたい。數

學のやうに一年には一年の理解の完了、二年には二年の理解の完了といふやうに、段階をつけることは無意味だ。三年では難解だつたが、四年になつたら馬鹿氣て居たといふやうでは困る。五年になつても六年になつても成る程と思ふものでなくてはならぬ。私は「論語」をやつた後で「皇朝史略」、「日本外史」、「竹取物語」、「萬葉集」、「平家物語」、「古事記」といふやうに一通りの古典をよんだ。十七八歳迄のことである。それが私には苦痛でも何でもなかつた。

「朝日新聞」に、小學校の新讀本の紹介が出た。丁度卷一の「コイコイシロコイ」の處の畫が出てゐる。それを見て五つ位の子供であつたが、お父さん變だといふ。犬がこつちに居て、子供が遠景にゐる。そして遠くから「こいこい」と言つてゐる。しかし子供には傍觀者にはなれないから、自分のそばに居る犬に向つて「シロユケユケ」といふことになる。かういふ立場の合はない處もあるが、しかしそれは少い。子供はよほど親んで今度の讀本をみてゐる。親しめるのが非常によい。しかしどうも苦しませることが不足してゐる。も少しにがい處があつてもよいのではないかと思ふ。

新秋の氣が、今年は思はず早く來た。この頃意外に雨が續いて、紙の障子にふれてゐる木苺

の葉が青く透いてみえ、風がくると先づその葉がざわざわと音を立てるのである。あの著さを越えて來て、清涼な秋にあふのは、勿體ない程尊い氣がする。

在來の國文學の研究は、作品研究では訓詁を以つてはじまるのではなくて、訓詁を以つて終つてゐる。文學史研究ではその作者及び作品の周圍の研究を以つてはじめるのではなくて、それを以つて終つてゐる。故に作家研究は辭書の適用であり、文學史は文學の歷史でなくて、文學的の歷史である。これは必ずしも文學研究に於いてばかりではない。美術史に於いても同一である。今の美術史は形容詞だけで書かれて居る。典雅、勇偉、壯嚴といふ風な形容詞だけでかいてゐる。作品の出來た因緣や、作品題材の說明や、それ等ももとより作品研究の一つであらう。作者の生涯、生年月日、さては墓地墓標の詮議、それも亦文學史の仕事の一つであらう。しかしせいぜい文學史の仕事の一隅である。中心の仕事ではない。文學史は作者人名辭典の年代的排列に終る筈ではない。作者の履歷書はこれを參考に置き、形容詞は之を除去して、直接に作品を對象とした批判でなくてはならぬ。文學史の對象は、作者に非ずして作品である。在來の美術史文學史をよんで、果して與へられた作品の時代を判定し、その價値の批判をなし得る迄になる人があらうか。美術史文學史は現在では、鑑賞の教養とは無關係である。批判を缺

くからである。かかる點で未だ文學美術の歴史は、學術とはなり得ないのである。故に國文學を精神科學として成立せしむるのは、現在における重大の事業である。

明治の維新もやうやく六十年を經て、その後の生活を反省し批判して、明治維新の意味を新にする時期に到達してゐる。西洋文明―之を先にしては切支丹宗に伴はれて來た文明、之を後にしては和蘭に伴はれて來た文明―それ等の西洋文明の性質や效果が、新に研究せられて、時に一時の流行とさへ見ゆるに到つてゐるのは、この批判の意識を表明するものである。

新らしき命は常に、その源から汲まねばならない。この遡源の精神は、吾等を遠く古代にひきつけると共に、吾等の祖先が出發した處から、吾等を出發せしめる。自然科學は今日の學術である。今日は今迄の科學發達の最もすぐれた結果を示してゐる。然るに文學や藝術や哲學では、今日の結果は單に今日をあらはすのみである。德川は德川として、平安朝は平安朝として、今日のものと全く別な味を有する文化を實現してゐる。故に、遡れる處迄遡つて、その源から學びはじめなくてはならぬ。新生は復古を前提とする。西洋の文藝復興が、復古をその第一の前提とした事は、之を明らかにするものである。

明治維新の新生は更に昭和の新生とならねばならぬ。そこではじめて明治維新は完成する。昭和の新生を云云することは、ただそれだけでは空疎に墮ちる。先づ深き反省を作はねばならぬ。近時日日の新聞は、殺人、强盜、凌辱、自殺の如き、罪惡と悲慘とを傳へて止まない。政事の腐敗を傳へて止まない。これが何の新生であらうか。

吾が鄕里の先行は、今春信州木曾福島の大火に全町を燒き、並びに信濃一圓の霜害に桑園を全く凍結せしめた慘事を詩にして、「唯看流水徹心底」と結んでゐる。この慘害を知つて、流水に對する時、流水の心底に徹するを覺ゆるのである。そして去る夏余が北信濃に於いて貧しい講莚をひらいた時、またその席に列せられて、「山內夏期大學開講中偶成」として余に示された詩に、

先人嘗示永遠光　返照山中白雲鄕
靜想幽玄第一義　萱峰映處則芳流

があつた。萱峰はその地に聳立する岩菅山である。土地の人は之を「イワスゴ」とよんでゐる。「日中猛火舐全邸、一朝桑園失青體」の時に、「唯看流水徹心底」となげいた心は、先人の嘗て示したる永遠の光にふれて、「靜想幽玄第一義」に居る心である。かういふ心に住して、ますます、心底に徹するものの深きを感ずるのである。

世の道は多い、しかし吾等の道に歩みいつて、そして吾等の批判を履くより外に道ありともおぼえぬのである。先人の道の解釋から、先人の道に教へられ導かれてから、はじめて新らしき歩みも生れて來るのである。昭和の新生をして眞に新生たらしむる道として、吾等に許された唯一の道は、この遠く遡つて、そして新らしく生れて來るといふ、この解釋の道より外にあらうとは思はれぬ。

吾等が深く學ぶことは、先人の業蹟に深く學ぶことは、漫然たる心ではなし得ない。卒然たる心ではなし得ない。それを一つの確然たる實踐に於いてしなくてはならない。散漫は深さではない。實踐でなくてはならぬ。この實踐化、即ち行爲によつて支持せられた解釋を希ふのは假初の心ではない。

私の鄕里は信濃諏訪の山村である。村のはづれに一人のお婆さんが居た。二十年前に村に電燈が來た。そのときに、自分の家へも十燭を一つつけた。それからは、胡瓜の初なりも先づ佛壇に供へ、電燈に供へる。「お電氣樣」といつて供へるのである。珍らしいものを隣からもらへばそれも電燈に供へる。花がさくとそれも供へる。そのお婆さんは數年前に死んだ。

おそらくこの話を人達は笑ふであらう。このお婆さんはこれ迄神佛に對するが如くにして、電氣に對してゐる。しかし今の所謂科學的教育をうけた人人には、果してそれがないであらうか。今日の婦人は病氣には一にも二にも醫者を信ずる。藥品を信ずる。婦人の生活を見てゐると、そこにはこのお婆さんにあらはれたやうな、絕對信任が見られる。科學に花をあげ、胡瓜の初なりをあげはしない。何故といふに今日の婦人には禮拜の心持がないからである。がしかし科學に對する態度には、お婆さんと同一なるものがみられる。お婆さんが禮拜するときに、これを理解する。理解すると理解しないとの相違だけである。私の家庭にあつても、何かと藥品や器械をかつてくるのは、私でなくて、妻である。信仰に代ふるに理解を以つてしてゐるが、その根據をなす「こころ」は同一である。必ずしも笑ふを要しないと思ふ。

「理解」は今日に於いて著しい社會的特色をなしてゐる。これは子供にも猶見ることが出來る。子供の雜誌にはこれ迄の樣に、涙をさそふ樣な人情物語や、孝行物語よりも、理知的な科學的なものが要求されてゐる。子供にも空想的夢幻的な立志物語よりも、現實的な自然科學が要求せられて來た。そしてそこには知的で明快なものがある。理解に貫かれた實踐がある。實踐の構成を理解しようといふのが、今日の子供である。

大正の半頃であるが、大同電氣が天龍川のある箇處に發電工事をおこさうとした時に、その農村の人達は擧つて反對した。會社の人達にはその理由がわからなかつた。使つた水はそこへ落し、その村では水に不便を感じない譯である。反對して會社から金を寄附させようといふのでもない。だんだんきいてみると、かうである。もともと田に水をかけて、稻がよく生長するのは、水に電氣があるからである。その電氣を水から取つてしまへば、あとの水は養分のない滓の樣なものだ。それではこの村は滅びるばかりだと言ふのである。その理由は明瞭である。かういふ理解を、今日の少年も婦人も決して承認しないに相違ない。そこには科學的な空氣が全くないからである。しかし今日の科學が果してそれを笑ひ得る迄に完全であらうか。今日の科學が吾等に便宜を持ち來してゐることは事實である。しかしそれは單に部分的である。科學的態度は、この側面を、もしくは他の側面を滿すものであるが、すべての系統を滿すものではない。全體を滿すことは出來ない。部分を考へることは出來るが、全體を考へることは出來ない。隨つて科學的なる部分の完備と共に、全體を通じての著しい不安があらはれて來た。如何なる時代に於いても、貧者が社會の九〇%以上である。我等の貧窮は今日にはじまつたことではない。故に經濟史はどの頁を開いても、必ずそこに語るのは貧窮の歷史であつて、富有の歷史ではない。人生れて貧窮なるは必然である。富有なるは稀有である。貧困を語ることは生活

史を語ることである。ただ今日の貧しさと、昨日の貧しさとには、そこに著しい相違がある。それは何故であるか。今日の貧しさはその貧しさの原因が考究せられ、理解せられてゐる。しかもその貧しさから離脱出來ない。故に人達は明かな意識の中で、貧しさと、貧しさの原因とを持つてゐる。ここに於いて、物の貧しさに終らずして、そのまゝ心の貧しさになつてゐる。故に今日の貧困は昔日の貧困と異つて、心の隅隅迄嚙むのである。昔の貧しさはその貧しさに身をまかせて、安心してゐる處があつた。今日のこの安心のない貧しさに對すると、世相のけはしさを思はせる。そして世相をけはしくしたものは、それは「理解」である。

かういふ生活の中にゐるので、都會の人の生活は、實に鋭くて動きやすい。少しのことにも大騷ぎをする。そのよい例が大正十二年の震災である。あの騷ぎはもつと落ちついて處理出來たではないかといふ氣がする。都會人の生活はみてゐて笑止である。おちついて持續的に事をすることが出來ない。これは理解に安心が伴はないからである。常に浮動し、常に動搖してゐる。この浮動性は近代生活の一つの特色をなしてゐる。しかるに過去の生活には、もつと安心があり、落ち着きがあつた。この故に過去に於ける理解の中には、今日に於いては見られぬ樣な、深さを感じさせるものがある。

本居宣長自筆の覺書によれば、寶暦八年彼の二十九歳の夏に「源氏物語」全講の講義をはじめ、三十七歳の明和三年六月卅日の夜に講義を終つてゐる。滿八年で、聽講者は九人であつた。長い講義である。今ならばこの間に中學三年生が大學を卒業してしまつてゐる。その講義が一先づ終へてほつとしたと思ふと、その翌月の七月二十六日には第二回の全講をはじめた。今度は聽講者が一人だけふへて十人である。それが終つたのはそれから八年五ケ月たつた安永三年十月十日夜である。この講義は夜であつて、月の二、六、十の夜を式日としてゐた。宣長はこの時四十五歳になつてゐる。二十九歳にはじめた「源氏」の全講が第二回目を終つた時は、もう四十五歳になつてゐた。これでやめたかと思ふと、また第三回をはじめた。十月十日夜にをはつたので、それから年末まで休んでゐる。流石に第一回の時とはちがつて、すぐ翌月に次をはじめるほど、英氣に滿ちては居なかつた。年も明けて翌安永四年の正月になると、その二十六日夜からはじめた。聽講者は前回と同じに十人である。そしてこの第三回の終つたのは天明八年五月十日夜である。今度は前前回の八年、前回の八年五ケ月よりはずつと年數ものびて、十三年かかつてゐる。年は四十六歳から五十九歳迄である。宣長もやうやく年をとり、氣もゆるやかになり、その上講義の材料も豐富になつたものと思はれる。とにかく二十九歳から五十九歳まで、人間の盛の滿三十年間、それを源氏の講義につかつた事は、私達には眞似も出來な

い根氣である。しかもその年の六月二日に第四回を開講してゐる。この終講は知らない。宣長の死んだのは七十二で、これから十三年後である。すぐれた藝術の研究には、生涯をつひやしても悔ないと、西洋のある批評家のいつたことを、宣長は實行してゐる。

然るに今日の研究は之と相反する。私達の學生時代には、註釋をよむことを、一種の恥辱と思つてゐた。註釋をみるにしても先づ何回も何回もくりかへして原典をよみ、その後でそれをみようとした。先づ自分の力でよまうとするのである。それが今日の學生は、先づ註釋書をたづねる。そして原典をよむよりも先に、註釋書をよむ。原典を讀むのでなくて、註釋書をよむのである。全く他の力にたよるのである。他力本願の中には、先づ自力の極限を究めた深さがある。その力を究めることなしに今日の學生は、先づ他の力にたよらうとする。勞せずして、理解を早からしめんとするからである。理解を深さに於いてせずして、早さに於いてせんとするのである。理解はここに於いて、受納であつて、實踐でない。吾等は學生の時には、人生觀の上に一つの解き難い疑惑を持つてゐた。今の學生はさういふ疑惑を持たず、平明にして、容易なる理解の中に安住してゐるのである。そして學生の苦しむのは、理解されたる貧困である。

吾等の郷里では夏山に、山野の生草を刈り、それを天日に乾かす夏の仕事があつた。これは冬日の馬の食料である。この草かりにゆくのは青年の夏の一つの樂しみである。木を曲げて作つた春慶塗の飯入があつて、これをめんぱと言つてゐる。これには飯が一升つめられるのである。草刈の若者は山盛りの飯のめんぱに、二本の箸を一握りにして、上からずつとつき刺す。手をあげた時に、めんぱが箸と共に上がればよい。箸がぬけてはだめである。こんなめんぱを持つて行つては、草はかれないといふのである。若者はそれに味噌漬を入れて、清水をかけて、ざくざくと食べる。これが何よりの樂みである。家の祖父が老病で死期がせまつた時に、醫者はもう望みがないから、何でもほしいものを食べさせてよいと家人に告げた。母が何か食べたいものがあるかとたづねたらば、祖父は何もかもたべてもうたべたいものはないが、も一度あの清水をかけためんぱの飯をたべたいといつた。母達は死の床に侍することも忘れて、聲をたててわらつた。祖父も一緒にわらつた。これが生涯を勞働にささげた農人の、最後の望であつた。そこには營養食といはるるものとは全然ちがつた、原始的な重量がある。今日の生活の、うてば直に響くやうなのとは、更にうたざるに響くやうなものとは異つてゐる。そこには今の時代が念願としてゐるものとは異つた、更に深い理解、身を以つてした理解があるやうに思ふ。それは容易に言葉にはならないであらうが、言葉にならないだけに意識的ではないが、生涯を

つひやして來た理解があつたのである。もし果して然りとすれば、電燈に先づ胡瓜の初なりを供へた老婆の心を笑ふことは出來ないではないかと思ふ。

吾等は實際家だ。理論は理論だ。實際は理論の樣に固定したものでなくて、もつと活きたものである。その道に月日を重ねたのが、最もよくその事情に通じてゐるといふ考へ方は、可成り一般の間に行きわたつてゐる。これは「實際家」が自分を護る唯一の方法であると共に、また自分を主張する唯一の方法である。

しかしもし果して然りとせば、世の中で一番よく芝居のわかるものは、毎日芝居をみてゐる道具方か、でなくては藝者達であらう。しかるに芝居を動かす力は道具方や藝者からは出ない。一生の間にただ二度しかみなくても、ダンテは彼女をかくの如く知つたではないか。婦人は勝手で働き、勝手で老いるのである。しかしその「實際家」たる婦人の間から、料理の改良と、勝手元の改良の行はれた例は甚だ少い。

芭蕉は「奧の細道」の旅で、全昌寺にとまつて、

よもすがら秋風きくや裏の山

の句を殘してゐる。全昌寺で秋風をきいた人は芭蕉一人ではない。この寺に住み老いたる幾十の人人は、その秋風について、芭蕉以上の「實際家」である。芭蕉はただ一夜ここに宿かりて、たまたま一夜の秋風をきいたにすぎない。その芭蕉と、この寺に住みて老いたる老僧と、何れが眞によく秋風を聞き得たか。

識ることは經驗の度數に關しない。經驗の度數を重ねて、しかも遂に識らずに濟む人もある。「實際家」必ずしも尊からず。非實際必ずしも賤しからず。實際の語の陰にかくれて、僅に身を護らんとする陋をあはれむのである。一枚の畫を見て、直下に畫を知り得た人がある。もし眞に知り得ることを以つて實際家とするならば千枚をみたると、一枚をみたると、果して何れが實際家であり得るか。この頃ある人の國語教授に關する序文を見て、少しく之に慨する所があるのである。

七十年見慣れてしかもこの山川を識ること、尚芭蕉半日の遊に如かざる農夫がある。五十年白堊の粉にまみれて、なほ兒童を識らざること、はじめて教壇に立つた最初の一日とかはらざる教師がある。毎日國語を語り、國文を讀んで、しかも國語國文を識らざる人がある。識と不識と、年月に關せざるものを語るのである。

文章を讀むのは、先づその文意をよむことである。文意をよまなくては、文をよんだとはいへない。女人の手紙をよむには、行と行との間を讀めといふ注意がある。行と行との空白をよむのは行と行とを連結してゐる意向をよむことである。連繫をよまなくては、そこには雜然たる文字群があるのみである。連繫のない言葉は、散亂したる音の一群にすぎない。行と行とを連繫せしめ、文字と文字とを連繫せしむるものは何か。これが文意である。この文章をよみ得てはじめて、文は讀まれたのである。しかし文意をよんだのみでは、まだ完全によまれたのではない。その表現層を通じて形象を讀まねばならぬ。この文意と形象との連繫は、同一なる物の展開としてのみはじめて理解せられる。この關係を明かにしなくては讀方の敎授はなし得ない。この關係を明かにせずしては、何十年敎室に立つて居て實際家とはなり得ても、指導者とはなり得ない。今國語敎育の上で必要なものは、指導者であつて實際家ではない。

かくて解釋とは、讀みを重ねることである。讀むことによつて表現の歪曲に深く入ることである。讀まれるのは歪曲である。しかも讀むのは、また讀む人自身の歪曲を持つてゐる。隨つて讀む働は作者の符號性に讀者の符號性を重ねるのみならず、更に作者の歪曲性に讀者の歪曲性を重ねる。しかも歪曲に歪曲を重ねることが、そしてこの重積によつてよみ進む事が、解釋

の實踐である　東洋の畫論では古くから、繪畫を以つて、自然の性に肇り、造化の功を成すものとしてゐる。自然の性に肇るとは、自然の性情を基礎とすることである。造化の功を成すとは、自然完成の成就である。自然の今ある形を、一層高いものに進めることである。自然を受身にとり入れることでなくて、自然の性情を一層完成せしむることである。繪畫は自然存在の形を示すのでなくて、自然完成の形を示すのである。しかもこの完成は自然の性情に基礎を置くのである。

かういふ深さの形は、解釋に於いても同一である。讀むことは、作者の表現に肇り、作者の意圖の更に高次なる完成に向ふことである。しかもこの完成の途上には、讀者の態度が入つてくる。讀者の歪曲を以つて、表現の歪曲に重ねることである。この重積によつて、時代時代の讀みは深められて行く。故に古典の讀みは時代を重ねて行く。かくて古典は漸次に讀みの發達の中で、完成されて行く。前代よりも今代は、一層深く讀んでゐる。この力によつて、古典はその功をなすのである。故に解釋の實踐、卽ち讀の實踐は、歪曲に歪曲を重ねることである。しかもこの重積は、作者に讀者を重ねることであり、この働によつて作品の發展はもとより、讀者も發展する。讀むとは進むことである。描くことは歪曲であるが、讀むことも歪曲である。歪曲は具體的實踐的の人格であるから、文は「人」であるが、讀みも亦「人」である。解釋の

實踐性は「人」によつて書かれたものが「人」によつて讀まるることである。卽ち人に人を重ねることによつて、重ねられた人も發達し、重ねた人も發達することである。されば解釋は、符號性に滿足するのではない。卽ち言葉の單一性純粹性に滿足するのではない。言葉の具體的純粹性に向ふのである。讀みを註釋性に固定せしめずして、解釋性に向はせることが具體的純粹性である。符號性の眞に對して、歪曲性の僞の、窮らざる所以がここにある。この窮らざるものの無限の發展に參與するのが解釋であるが、この無限の解釋に耐へ得る具體性を持つことが、作品の深さである。作品にもし無限の歪曲がないならば、歪曲の重積は不可能であり、讀みは最後の解釋に達してしまふ。解釋を註釋となす働は、ここで終結する。前人の解釋を自己の註釋として、進みて止まないのが、吾等の解釋の實踐である。

ここに解釋の一例として「十年」の歌について嘗つて書いたものを擧げる。

私は島木赤彦先生の「十年」がすきで、ある女學校の專攻科で一回、ある音樂學校で三回、ある美術學校で三回、教科書に使つた。第一に「古事記」、「古事記」をしたあとに「萬葉集」と前後して之を使ひ、これが順序としては自然であると思はれる。であるから坐右の歌集から、

自分の最も好む歌をとれといはれれば「十年」が無條件に開かれる。ただ「十年」には夏の歌は比較的少い。先生は初夏、晩秋、初冬等を好まれた樣である。ここにも私は先生の初夏の歌をあげたい。

諏訪山浦なる老父を訪ふ。十二首。

ひたぶるに我を見たまふみ顔より涎を垂らしたまふ尊さ

老父とは先生の實父塚原淺茅先生である。塚原先生は私の父の先生である。私の父は島木先生を教へたことがあり、島木先生は私を教へ、私は先生の娘さんを教へたことがある。塚原先生は謹直なすぐれた先生で、私の父も先生のことを私に語る時には、顏色を改めたものであつた。背の高い仰ぎ見る心持のする先生であつた。

その先生も年老い病まれて、口から涎がたれてゐる。涎は愚かしい。この先生がなすべきを爲し終り、健康にして自然に年老い、口から涎をたらして居られる。それは正しく老先生の尊さである。涎をたらしてゐるから豪いのではなく、涎をたらしてゐても豪いから、涎が尊いのである。ここに老境の尊さを感ずる。

雪のこる高山裾の村に來て畑道行く父に逢はむため

高山は信濃國諏訪郡の東境にある八ヶ岳であり、高山裾は諏訪郡豐平村下古田である。畑の

中の道を父に逢ひに島木先生が行かれるのである。畑は桑畑である。畑の間に淺い峽谷を作つて柳川が流れてゐる。

かへり來しわが子の聲を知りたまへり晝の眠りの目をひらき給ふ

島木先生の聲は太くて大きい。先生の聲をきき、塚原先生が眼をあかれたのである。ここにも老境の靜けさと父子の情の相通ふものがある。

この眞晝聲するわれを床の上に遠眼をしつつ待たせたまへり

「この眞晝聲する」の一句で、この眞晝に明るくして、しかも聲するもののなかつた家と庭との靜寂があらはれてゐる。

夏芽ふく櫟林の家のうちに命をもてる父を見にけり

これは先生が東京で「アララギ」の編輯をして居られて、御病氣の報を得急いで、信濃にかへられたのだつたと思ふ。「命をもてる」は、すでに命がなくなつて居らるるではないかといふ心配を持つて來た人から出るのである。この病める先生のうしろは丘で、そこに櫟林は夏芽をふいてゐる。

若芽ふく櫟林は朝さむし炬燵によりて我が父ゐます

古田の櫟が丘の下庵にふたたびも見む父ならなくに

古田は地名、下古田の略稱である。下庵は、老先生に弟子達が老年を慰むる爲に作つてあげた住宅で、これを先生は大變に喜んでゐられた。常に父君の枕頭に侍し難き先生は、再び命ある父君に逢ひ給ふことの難きを歎いてゐるのである。

われ一人命のこれり年老いし父の涎を拭ひまゐらす（我が兄三人皆夙く逝く）

先生は塚原先生の第四子で、出でて久保田家をつがれたのである。本名は久保田俊彦である。家に殘つた三人も早く死なれて、四男の先生が兄弟中での長者である。先生は母上、兄三人の死にあひ、更に夫人の死にあつてゐられる。今先生は一人殘られて、年老いし父の涎を拭き參らするのである。年老ひし父と、自分と、血緣のつながりを深く感じてゐられるのである。

父とわれと物語ること常の如し耳に聲きくいく時かあらむ

父と常の如く物語りつつ、しかも父の命の既に長からざるを惜み憂へてゐる。耳に今きく一つ一つの言葉が、やがて最後になるのかもしれない。父の聲を聞き得るのもいく時でもないのである。

間なく郭公鳥の啼くなべに我はまどろむ老父のへに

若芽の丘で郭公鳥は絕へずないてゐる　父のへに靜かな心でまどろむのである。ここにも父と子の心の交流がある。

くれなゐに楓芽をふく窓のうちに父と我が居るはただ一日のみ

日のくれの床の上より呼びかへし我を惜しめり父の心は（薄暮家を辭す）

日暮になつてかへらうとする先生を、塚原先生は惜んで呼びかへされる。「俊彦マッチをもつたか」とあとからよんで、外に出た先生をよびかへし、枕元のマッチを一つ先生にわたされた。先生はあとまでこれを大切にしてゐられたが、「アララギ」發行所で、誰か知らずに煙草の吸ひ殼と一緒に片づけてしまつた。

これは大正七年である。今「赤彦全集」の年譜でみたら、塚原先生は大正七年七月十八日になくなつてゐられる。行年七十五である。島木先生は父上の御臨終にはあへなかつたやうに記憶する。

第十章 解釋的方法

言葉は意味を持つてゐる。意味は二つの方向から見る事が出來る。第一は語る方向からであつて、第二は聞く方向からである。語る方向からは、言葉は自己の意向の表現せられたものであり、聞く方向からは、言葉は相手の意向を理解し得るものである。表現されたものが、理解し得らるる處に、意味が成り立つ。隨つて言葉は語ると共に聞かるるものであり、聞かるるやうに語るものである。語と聞との間に動くのが、意味である。換言すれば語るものは表現と聞く人の理解とを受け、聞くものは語る人の表現と自己の理解とを受けるのである。この「表現—理解—自己の理解」の系統が、これが「意味」である。語るものは聞くものの理解を豫想する。語るとは聞かれることである。聞くとは語られることである。聞かれない語りや、語られない聞きはない。故に語ることと聞くこととは、一連の連續した働である。斷絶を許さない一連續の働である。語ることは理解せらるることである。聞くことは理解することである。かくて「表現—理解」の密接せる系統が言葉の働である。語るには理解せらるるやうに語らなくて

はならないし、聞くには理解せらるるやうに聞かなくてはならぬ。かくて「表現－理解」のもたらすものは、「意味」である。

語る立場はどうであるか。

語る立場で必ず豫想する事は、二つである。

1. 自分の意向が、對者の意識の上に、其のままに現れ得ること。

2. 言葉の共通性が正しく持續すること。

卽ち、意向再現の可能の豫想である。ことに2は言葉が正しく自己の意向を表現し得ることを豫想するものである。換言すれば語る立場のとる豫想は、自己の意向を正しく言葉に表現し得、それが正しく對者の上に再現し得らるることである。もし此の豫想が不可能ならば、語る氣にも何にもならないに相違ない。故に語るものは自己の意向であり、更に意向の背後にある自己である。最も卒直に語るのは、自己を語るのである。隨つて對者に理解せらるるものは、第一に意向であり、次に意向の背後にある人である。意向を持てる人である。されば言葉をきいて之を理解するとは、その言葉を語る人を理解するのである。語る人を理解する處迄行かなくては、言葉を理解したものとは言ひ得ない。

ここに「馬」といふ一つの言葉がある。この言葉は人により時により、それから感ぜらるる意味は異つてゐる。ここに一定の馬が居る。その馬に對して感ずるものが、獸醫と、農夫と、畫家と、建築家と、御者と、屠殺業者と、騎兵とで各異つてゐる。おそらく百人百樣である。しかもこの百人が時によつてまたそれぞれ違つてゐる。そんなに違ふならば、この馬は一定の形を持たないであらうか。しかし馬は如何なる場合にも、他の牛や牡丹や自動車と異るものを明かに示し、且他のどの馬とも異るものを明かに示してゐる。如何なる解釋の間にも、その中に自ら理解を要求する形態を、ちやんと持ち續けて居る。この一つの態度は一定の形を以つて最後迄殘つてゐる。これは言葉の「馬」でも同樣である。如何なる差違の中にも、力强い共通性が殘つてゐる。この共通性が文章にあつては文意である。

而して共通性は二つの方向から考へられる。

1. 言葉の形の上から。これは言葉の辭書的、文法的性質である。

2. 語る意向の上から。これは如何に聽くとも、聽きの異る樣樣の相違を通じて、語る人の要求する迫力が、一定の方向に貫いてゐる。これが言葉の持續の基礎である。

言葉を讀み或は聽くのは、第一に共通性に立ち、第二に變化性に立つのであるが、しかしこ

れでその働は完了しては居ない。第三にはその變化性から、再びもとの共通性にかへつて來なくてはならぬ。この去來性は、先に意向と言葉との間にみられたものと同一である。その去來が更に言葉の中で行はれる。變化性から共通性に再びかへつて來る時に、共通性も充實し、變化性も充實する。讀み或は聽きの働はここで充實する。この去來の十分に行はるる可能性のあるものほど、その言葉は豊かであり、深いものとせられるのである。これが言葉の實踐であり、實踐性がここ迄來て言葉の解釋が完了する。そして解釋が完了した場合に明かになるのは、それを語つた「人」である。解釋とは人と吾とが言葉を通して一致したのである。

この解釋の去來性は、日本語には重要である。日本の表現が、性質的に異つてゐるからである。

私はパブロヴア夫人の一行が上陸して、ホテルに着くと、直ぐに猛烈な練習を始めたと云ふことを新聞で知つた。食物、睡眠、體重などにも綿密な注意を拂つてゐると云ふ噂も聞いた。そして實際その演出を見るに及んで、成る程これだけ烈しく自由自在に肉體を使用するためには、平生それ位の注意を拂はなければならぬのは當然だと思つた。あの乳の邊の筋肉の微妙に顫動するさまを見よ。後向になつて兩手を水平に擴げたがら、浪の形に上下する時のあの肩から腕、腕から手首へかけての細かた運動を見よ。

これは森田草平氏が「のんびりした話」にある「瀕死の白鳥」と「鷺娘」—露國舞踊と日本の踊との價

値批判――の一節である。ここに西洋の表現の露出性がある。

これを外面的に見れば、兩者の事情の差違は一目して明瞭である。西洋の踊は、殆ど腰の周りに羅(うすもの)の翼のやうなものを捲いたまま、裸體に近い扮裝(いでたち)で舞はるるのに對して、日本の踊は長い袂の振袖を着てゐる。日本の振袖と云ふものは、殆ど踊を踊るためばかりにあんなに長くなつたんだと云つても可い位のものである。その外に扇子と手拭とが踊には附物である。この振袖と、扇子と、手拭とが何れだけ日本の踊の手を複雜にしてゐるかと云ふことは、一度でも踊を見た人の直ちに點頭かれる所であらう。さういふ七つの道具を枷(かせ)に使ふものと、無手で裸體のまま踊るものとの間に、單純と複雜との差の生ずるのは自然の類であるが、これは餘に外面的な觀察である。もう少し内面的に考察して見ると、西洋の踊がさういふ裸體に近い扮裝で舞臺に立つと云ふのも、主として肉體の無意味な運動の美を表すことを目的としてゐるからではあるまいか。無意味な運動だからいくら肢體の美を發揮するために踊の手が分化(デフェレンシエート)した處で、それには自ら限界がある。ここに彼方の踊の單調に流れる根本の理由があるのである。尤も西洋の踊だつて無意味な運動の連續ばかりとは限らない。時には人間性情の表出もある。少くともパブロヴア夫人一行の舞踊にはその方面に出ようと努めてゐるらしい形跡がある。然も舞踊にあらはれた所では、僅に喜びとか、恐れとか、勇氣とか、極めて單純な、原始的な感情の表出にとどまつて、まあ日本の盆踊か、せいぜい二十五座に近いものと思へば間違ひない。そこへゆくと日本の踊は――勿論舞踊の根源に遡れば、何處の國だつて喜びの餘り躍り狂ふと云つたやうな處から生れたものに相違ないが、現にある日本の踊は――例の人形芝居から出てゐるだけに、一一の感情の複雜で微妙な陰翳(いんえい)までも肉體に依つて、委しく云へば肉體とそれを蔽ふ衣裳とに依つて表さうとした、極めて大膽な試みである。一言にして言へば人間表情(ジエスチユア)の最も發達した形式である。これに加ふるに例の物眞似――鳥の形だの浪の形だのをその儘模倣した踊の手を以てしたものが所謂振事の全部である。我邦舞踊の手の複雜にして千態萬樣なるは誠に故ありと云はなければならない。

實際無生の人形に生命を吹き込む、眼も動かず顏の筋肉も動かない人形を使つて、ただその姿態の變化に依つて生きた人間の感情を表すことに成功した、昔の人形使ひの苦心と創意とは驚嘆するに餘りがある。その人形使ひの創意をその儘繼承して、それに人形には許されてない顏面の表情やら肉體のしなやかさやらを加味したものが我邦現在の振事である。そしてその振事は人間の感情を表す上に殆ど完璧に近い、少くとも德川時代の爛熟した人間情調を表す上には、何等間然する所がないと云つても差支ない。我邦の踊がその振事に於て世界に冠たるものであるとは、かねがね人の噂にも聞いてゐた。今パブロヴア夫人の演出をみるに及んで、つくづくその言葉の私を欺かなかつたことを悟つた。私は日本の振事を世界の誇りとするものである。

かくて日本の表現は、表現を縮少する方向に進んで居る。かかる表現の縮少は、日本の感受力が弱いからであらうか。勝本清一郎氏は「日本文學に於けるエロチシズム」（昭和九年十二月二十二日、東京朝日新聞）で、日本の文學は感覺の文學であると言つてゐる。

私は日本文學の根柢にある最も本質的なものを、鋭敏な感覺だと思つてゐる。日本文學は感覺の文學である。日本文學は哲學的な文學でもなければ、論理的な思考を緻密にたどつたり、倫理的な問題を深刻に展開したり、宗教的な世界觀を壯大に築き上げたりといふ文學ではない。さういふ側から見る限りは、世界の他の文學とくらべて見る影もなく哀れである。

日本のリアリズムはいつの世でも結局のところ、鋭敏な感覺一本槍で裏づけられた成果である。西洋のリアリズムはさうではない。哲學がある、論理がある、倫理がある、宗教がある、科學がある。トルストイを御覽なさい。バルザックを、トーマス・マンを、ジードを御覽なさいである。日本の浪漫主義も、西洋のみたいに複雜な觀念體系に裏づけ

られてゐる事はない。やはり感覺から來てゐる。例へばもの〻哀れといふ奴である。それは佛教思想から論理的に割り出されたといふよりも、水蒸氣の多い纖細な氣候風土における四季の移り變りや人間の生死に對して、日本人が感覺を洗練して行つて、身體で感じ取つた情緒に外ならぬ。

隨つて日本の表現の後退作用は、後退した單純な形の中で、一層鮮かに感じうる感覺の鋭敏さを持つことに基くであらう。その特色は言葉の上にも常によくあらはれて、日本語の寡默性をなしてゐる。

言葉を聞くとは、その一つ一つの言葉を聞くのである。その一つ一つの言葉の共通性を聞くのである。その一つ一つは、語る意向の象徴である。この言葉の一つ一つが意向によつて充足する時、卽ち象徴が意向に滿ちた時に表現が終つたのである。

例として「枕草子」の最初の一節をみる。

春は曙。やうやう白くなり行く。山際すこしあかりて、紫だちたる雲の、細くたなびきたる。

この註釋をみる。

「春は曙」とは、春は曙の景色が、いともすぐれて、をかし、といふ心なり。ここにて句を切るべし。

「やうやう」は、漸漸なり。

「白くなり行く」は 空の白み行きて將にあけたんとする景色をいふ。
「山ぎは」は、山際にて、空の山に近づき接したる如く見ゆるあたりをいふ。
「少しあかりて」は、少し明るくなりてなり。（松平靜氏、枕草紙詳解による）

ここには主として辭書的なる言葉の共通性についての解釋が與へられて居る。しかしその中でも、多少その言葉の背後のものにも、注意を向けてゐる。「……といふ心なり」と言ふのは、その消息を示してゐる。隨つて、「ここにて句を切るべし」と言つた後に、清少納言の個性的歪曲をのべて、

そは清少納言が筆法にて、常に用ふる省略法なり。凡て省略法を用ゐたる時は、之をして冗長、散漫に流るる弊なからしめて、却て餘情津津として湧き來らしむる者なればなり。清少納言の文、奇警、清新など稱せらるる所以は、全くここにあるなり。さてその次はその面白き様をことわるなり。

と言つてゐる。これが清少納言の言葉の一つの歪みを示してゐる。「春」によつて呼び起さるる言葉の意味は様様である。「春の朝」、「春の晝」、「春の夕」、「春の宵」、「春の風」、「春の山」、「春の水」、「春の野」、「春の花」、「春の草」。限りがない。その中で、「春は曙」と體言でぴつたりと切つてゐる。ここで春の意味はこの一つに定位されて、他は皆背後にかくれてしまふ。しかもこの定位がしつかりして居るので、「春は曙」が明瞭である。「春は曙」と言ひ切つて居るだ

けに、そこに清少納言の感動の强さも、表現意向の强さも出てくる。そしてこの意向と、この表現の偏向とから、再び「春は曙」の共通性にかへつて來る時に、清少納言の意味は明かである。

さういふ風にして、一つ一つの言葉を讀んで行くと、そこに清少納言の「人」があらはれてくる。そしてここで「枕草子」をよむ人と「枕草子」を書いた人とは、一致する。この一致が言葉を中心にして、言葉の上に立つてなされる時、これを解釋と言ふのである。故に解釋には二方向がある。

一、自分のものになつて來る方向。

二、自分が他のものになつて行く方向。

而して他のものとは、言葉の表現をなせる人である。

言葉と文字とを比べると、同時的には言葉は文字よりも複雜である。言葉には文字であらはすことの困難な音の强弱とその起伏、音の高低とその起伏、音の明暗、斷續、更に身振、顏色等の諸性質が之に加つてくる。然るに文字はかかる性質を缺くにも係らず、場所からいつても、時間からいつても、言葉とは比較にならぬ擴大性永續性を持つて居る。文字は言葉の持つ諸性

質を缺くけれども、それと共に、文字には文字としての一つの形態がある。文字の形、書寫の書體、文字の分布、その他の性質があり、これまた中中輕んぜられぬ表情である。「春は曙」ときつて「やうやう白くなり行く」と斷續して行く處に、言葉の斷續にみるやうな味もあつて、そこに言葉の調子も現れてくる。また助詞や助動詞には、身振から感ぜられる程のものがあらはれて、文字にて十分に記しとめることが出來る。かくて文字の周圍がそこに現れて居る。しかもこの文字の周圍は、必ずしも語るもの、書くものが意識してゐる譯ではない。かへつて聽くもの、讀むものが理解し得る。されば「著者が自己自身を理解してゐたよりも、一層よく著者を理解する」のが、解釋の目的である。特に周圍は後になつてから、かへつてより全體として理解せらるることが多い。

かくて解釋は二つの性質を持つ。

一、言葉文字の直接に示すもの。文法的辭書的性質。

二、言葉文字の示す周圍のもの。

而してこの周圍のものは二つにわかれる。

一、言葉文字自身が持つ周圍のもの。卽ち言葉や文字の文法的辭書的性質以外に、言葉や文字が示す歴史的經過のために持つ自己の感情。例へば「萬葉集」の言葉や文字は、今日

にあつては上代に示し得た以上の感情を持つてゐる。その時代には或はわづらはしく繁雜であつた萬葉假名は、今はそれあつて一層「萬葉集」の空氣を示すものとなり、その當時は平常語或は平常語に近かつた萬葉語が、今日は吾等に遠い時代の追憶と彈力とを持つものとなつたのである。これは美術の上には一層よくあらはれてゐる。繪畫や陶器は年古りて更に味を深くする。かういふ言葉や文字の歷史性を輕んずる事は出來ない。此處に注意すべきは言葉の歷史性とは、必ずしも古語に限つたことではなくて、新語には新語でまた明朗な、新語でなくてはみられぬ周圍がある。

二、表現者の周圍のもの。表現者の意識するとせざるとに係らず、表現者の周圍のものは、呼吸の如く、脈搏の如く、言葉と文字との中にあらはれて居る。

而してこの周圍を理解し得るものは、讀者の體驗である。表現者からいへば、文字の背後に意向がある。しかし讀者から言へば、文字の背後に體驗がある。自己の體驗によつて文字をとほして、表現者の意向に觸れるのである。然らば讀者の體驗と、筆者の意向とが、相觸れる點はどこであるか。それがまた先に述べた接觸點である。隨つて余はこの點を展開點と呼んでゐる。ここを起點として、語るものと、知るものとに展開するからである。かくてこの接觸によつて次の二つの成果があらはれる。

1. よい體驗は、表現者以上の意味を展開する。子供の言葉や、小鳥の聲が吾等に甚だ深い意味を特ち來すことが多い。空や水の表現のうしろに表現者があるかどうかは別の問題であるが、この表現に吾等は可成り深いものを感じてゐる。また吾等は體驗の成熟によつて、前には感じ得なかつた意味を感ずる。體驗から讀みの深さが導かれる。

2. しかし讀み或は聽きは、自己の體驗のみによつて決定せられるのではない。自己の體驗がかへつて、言葉と文字によつて開かれる。吾等は體驗し得ざりしものを、讀書によつて、或は聽講によつて教へられる。ここに學びがある。

この二つの方向の完成が、解釋のなす處である。自己によつて自己以上のことをなすのが解釋である。そこに發展がある。換言すれば、自己によつて他を成す方向と、他によつて自己を成す方向との一致が解釋である。隨つて自己によりて成立する他と、他によりて成立する自己とが、合して一になる。合して一になるから、生の發展がある。この發展は表現に基くものであり、表現が表現として終るのでなくて、理解に進む。理解せられなくては表現は完結しない。故に表現と理解とは結合されたるものである。この結合が意味であるから、「表現－理解」のおちつき定位する所は、「意味」である。

されば言葉はその一側に、表現を持つ。他の一側に理解を持つ。語る働の基底には語らんとする意向がある。この意向は第一の展開點で表現になる。表現は第二の展開點、卽ち理解點に於いて理解になる。この「意向―表現―理解」の組織が、言葉の形である。この形は約すれば「意向―意味」となる。「表現―理解」は意味であるから、「意向―表現―理解」に代入することが出來るからである。隨つて最もすぐれた言葉は、表現が卽ち理解でなくてはならぬ。卽ち表現は意味に歸らなくてはならぬ。

言葉　意向―表現―理解。卽ち　意向―意味。

かくて表現作用は理解作用をふくむのである。しかも、この兩作用の直接に接續する程、言葉は完全である。卽ち完全に意味的である程、言葉は完全である。言葉は理解せらるる程完全であり、言葉が意味となる程完全である。

言葉を最初から最後迄貫くものは、意向である。隨つて意向は言葉の迫力として、第一に表現されんことを、第二に理解されんことを求めてゐる。換言すれば意向が意味とならんことを求めるのが、言葉の迫力である。

しかもこの意向は、展開點に於いて表現となる。言葉の基本的なものは意向であるから、時

には表現にならぬ意向もある。卽ち語られぬ意向もある。けれども意向の强い限、それは何らかの形で外に現れようとしてゐる。想ひ中にあれば、自らにして形外に現れようとする。語らずとも通ずることあり、言葉なくして語ることもある。その場合には、迫力が露出してゐる。かういふ原始性の表現がある。これが語らるる場合にもその基底として、言葉の基底にある。これは、言葉の速度、調子、表情としてある。直接に言葉の理解にせまり、言葉の支持をなすものは、この原始形式である。言葉が意向を不完全に表した場合にも、この原始形式はそれを訂正し、それを增補する。或は意向と反對でさへある場合にも、猶言葉の意味の理解を指導し、改訂し、その眞意を指導する。意向の最も直接なるものはこの原始形である。隨つて意向を示すものとして、調子と表情とはすべての人に對して共通的であるばかりでなく、異る言語團體にさへも通じ得る。これが言葉の第一表現である。ただこの表現は展開點に到らずして、早く既にあらはれ得るもので、意向の直接なる表現である。そこには何等の媒介性もなく、また何等の符號性もない。意向に直接するもののみがある。

意向の第二表現は、意向とは少しく間接になるが、意向を一層周密に表現する性質である。これが言葉の說明的性質である。第一表現は表示性であつたが、これは說明性である。意向を直接に表示するものでなくて、意向を說明する性質である。これが狹義に「言葉」と稱せらる

るものである。この言葉は時代による歴史的變遷によつて、說明的性質の變化があり、また多義になる事によつて、說明的性質が曖昧になる。しかしこれ等の符號的性質の減退にも係らず、これを指示する基底の意向があつて、表現的性質を一定方向に持ち續け得る。

かかる二表現性の持續の後に來るものは、意向の理解である。第一表現性の持つ共通性、一般性は第一の理解である。これは說明を要しない、直接なる表示であるから、常に意向の直接方向を表示するものとして、第二の說明性表現を、支持してゐる。第二の說明は意向を、周密に說明し得るが、背後から支持する第一表現性によつて迫力を得てゐる。說明的言葉は、その言葉の中に同一言語團體內における論理性と、變異性とを持つてゐるが、論理性によつては大きい系統を示し、變異性によつては細かい系統を示してゐる。細かい味があつて說明の周密性は一層細かに意向を示す事が出來る。

例へば「花月草紙」の

いでや櫻といはでしも花とだにいへば異木にはまぎれぬものをほのぼのと明けゆく山際雲か雪かとばかり咲きみちたるも霞こめたる夕まぐれ花のけはひもおぼろに見えて此處にのみ暮れのこす景色などいふは淺かりけりまいて夢ののびやかなれば近劣りするなどいふはかのことかへて才おふ心にいふことなりかし。

について、塚本哲三氏は、

この文を只原文のまま不用意に直解したのでは頗る妙なものになる。只原文通りに直解すれば、結局の思想は、

朝咲キ滿チテ居ルノモ

夕方オボロニ見エテ

「ココニノミ暮レ殘ス景色」ナドイフノハ淺ハカダ

といふ事になつて了ふ。

と言つてゐられる。これは言葉の論理性の立場においてみた解釋である。この文章には歪がある。この歪によつて、讀者は意向表現の周密を感得することが出來る。論理性の示すものは、漠然としてしかも意向の本質からは、遙かに距つたものになつてゐる。そこでこの歪の立場に立つて、變異を讀み、そこから意向の周密を得なくてはならぬ。故に塚本氏は、

そこで「いへば」「いふは」「いふは」「いふこと」の繰返しに留意して見ると、

…とだにいへば異木にはまぎれぬものを…などいふは淺かりけりまいて…などいふは…いふことなりかし

これが文の本質としての呼應といふ事になる。さうして見ると、此の文は次の如き文脈を認める事が出來よう。

いでや「櫻」といはでしも、

A ｛「花」とだにいへば
異木にはまぎれぬものを

B ｛「ほのぼのと明けゆく山際、雲か雪かとばかり咲きみちたる」（ナドイフ）も、（淺ク）
「霞こめたる夕まぐれ、花のけはひもおぼろに見えて、ここにのみ暮れのこす景色」などいふは、淺かりけり。

C　まいて聲のびやかなれば、近劣りするなどいふは、かのことかへて才おふ心にいふことなりかし。

○もの一字を「などいふも淺く」の省略と考へるのは少し無理のやうだが、どうしても斯う考へるのでなくては文の筋が立つまいと思ふ。

といはれてゐる。この「も」の示してゐる變異性に着目することが、この文を解釋する事になつてゐる。この「も」がこの文の形象である。「も」の示すものは、意向である。

そして塚本氏は更に、

これは繰返しに目をつけて文を條理だてた極端な一例であるが、とにかく文中の繰返された語句にしつかり目をつける事は、文解釋の一つの手立として極めて大切だ。（國文の學び方考へ方と解き方）

と言つてこの項を結んでゐられる。この「文中の繰返された語句」は何であるか。これは要するに意向の直接表現である。語る時の身振りや、表情と同じき言葉の原始表現形式である。これに注意することは、言葉の意義に到る唯一の立場である。

も一つの例を擧げる。同じく塚本氏の著からである。「徒然草」の

神無月のころ粟栖野といふ所を過ぎて或山里にたづね入ること侍りしに遙かなる苔の細道をふみわけて心細く住みなしたる庵あり木の葉にうづもるる筧のしづくならではつゆおとなふものなし閼伽棚に菊紅葉など折りちらしたるさす

がに住む人のあればなるべし。

の中で「遙かなる苔の細道をふみわけて心細く住みなしたる庵あり」が問題になる。これについては大體三つの解釋が成立つやうである。

一、庵の主が苔の細道をふみわけて山に入り込み……

二、庵の主が苔の細道をふみわけてそれを通路として……

三、作者兼好が苔の細道をふみわけて行きたるにそこに……

これについて「なるほどどれも一應尤もらしい。但、私の此の文から感得する所では二は一番不自然な穿鑿的な、無理に條理立てたやうな解だと思ふ。どうも此の文のどこからも『通路とし』といふ思想は出て來ぬ、感じも湧かぬと思ふ。それで殘りは一か三かで、自分はこれまで多少の條件を附けて三を採つて來た」と言はれ、

一、「遙かなる苔の細道をふみわけて」は「心細く住みなしたる」に掛る副詞で、結局庵を形容した句である。

二、「苔の細道をふみわけて」は苔の細道の奧にといふ客觀描寫を殊更に「ふみわけて」といふ主觀的描寫（動きの描寫）にしたものに過ぎない。

三、それは今自分が細道をふみ分けて來たといふ自己の動きを意識すると同時に、この庵の主も斯らして踏み分けて這入つて來たのだらうといふ想像の心が殆ど意識せぬ程に心の中に働いて、その二つが混線して「奧に」といふ客觀描寫と錯綜したからである。

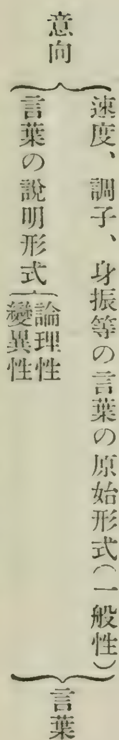
こんな風に主觀描寫と客觀描寫との錯綜する事は國文の一つの大きな特色だといへる。さういふ原文を强ひて一方に片付けて了はうとするのは正しい態度とはいへない。何だかひどく小むづかしい事をいふやうだが、此の文の結局の意味を最も簡明にいへば、

遙カナル苔ノ細道ノ奥ニ……

である。そしてふみわけては、原文がごく曖昧な表現であるから、强ひて「誰が」といふ主語を一定的に補つて完備した明確な思想として取扱ふべきものではないといふのである。

としてゐられる。この「主語を一定的に補つて明確な思想として取扱ふべきものではない」といふ立場は、この場合の意向の偏向を明かにした表現である。

かくの如くにして言葉の構造は、



であつて、解釋はかかる言葉の全體の意義にわたらなくてはならぬ。解釋は言葉の全體としての意義の理解でなくてはならぬ。そして解釋の後に殘るものは、意向の迫力であつて、讀後に緊張として感ぜらるる性質である。もし言葉が、單に說明形式の言葉として理解せられたのみで、その他に何の迫力も感ぜられぬとしたならば、これは理解したとは言へない。說明形式の

背後に意向が知られなくてはならぬ。緊張が感ぜられなくてはならぬ。換言すれば意向に貫かれた言葉が理解せられなくてはならぬ。

そこで言葉を解釋する立場は、著しきものとして二つある。まづ意向を讀み取らうとするのは、意向的方法である。これに反してまづ說明的形式の言葉、卽ち言語文字によつて理解しようといふのは、文形的方法である。

かくてここに理解の形があらはれてくる。

一、文形的方法による理解の形體は、語法的である。これを文章について言へば語句より意味に進まうとするもので、第一に手をつけるのは、文形である。表現の形體によつて、傳達の方法によつて、意味に達しようとする。それ故にその方法は形として與へられたものの、一般的解釋による。換言すれば何が書かれてあるかに力を集中する。何を書かうとしてゐるかでなくて、何が書かれてあるかに集中する。進む進み方は部分から全體に、構成成分から全體の意味に向ふのである。ここには先づ言葉の部分があつて、それから文法的に全體が構成されるものと考へる。先づあるものは語句であり、それが文法の組織によつて合成せられて全體となる。この豫定のもとに理解作用がなされる。ここには理解の辭書的文法的性質がある。まづ古典で

あるならば本文比較によつて定本が作られ、その一一の語句の解釋がなされ、其等の手續の後に文の意味が明かにされる。そのかはり本文比較は不安定の事であるから、異本の出づる毎に動搖するであらうし、この方面からすれば解釋は常に不安である。この解釋方法は客觀的であつて、一見公平なるが如くであるから、一應は安定せられるが、もともと本文校定が常に不安定であるから、その動搖はやむ時がない。故にそれが達し得た意味は、その方法が客觀的であるにも係らず、主觀的である。不安定なる到達を以つて、ここに安定なりと定位するのであるから、この定位は著しく主觀的である。また解釋の態度が受動的であるにも係らず、その意味は主觀的であるために、意味は發動的になる。しかしさういふ解釋は方法と結果との間に性質的なる相反關係を持つのであるから、解釋が意味に達する達し方が著しく不鮮明である。

二、意向的方法による理解の形體は、直覺的である。讀むのは勿論言葉であるが、一つ一つの言葉の辭書的解釋、それ等の言葉の組成の文法的解釋に力を集中するのでなくて、其等の言葉は何を語らんとしてゐるのか、卽ちその文章の意向はどこにあるのかに向つて力を集中する。隨つて表現を表現關係で吟味せず、展開點を越えて意向に歸らうとするのである。語學的文形的解釋は語の一一の解釋は自らにして意味に達することを豫定してゐるが、ここではこの豫定

を徹回して、一圖に言葉から意向に歸らうとするのである。例へば

川浪もふけゆくままにすごう月は氷をしける心地するに嵐の山のもみぢ夜の錦とは誰かいひけむ吹きおろす松風にたぐひて御前の簀子にて御酒まゐるかはらけの中に散りかかるわざと艶なることのつまにもしつべし若き人人は身にしむばかり思へり。（増鏡）

で「嵐の山のもみぢ」は、「夜の錦とは誰かいひけむ」といふ一句を距てて、その下の「吹きおろす松風にたぐひて……」の方に掛つて行くといふ考察が出來なくては、この文は混亂してしまふと塚本氏は言つてゐられる。「川浪」の意味、「ふけゆくままに」の意味を一一解釋して行くのは、文形的解釋である。然るにこの文形的解釋からは中中この一句を距てての連續は出て來ない。文法的には「嵐の山のもみぢ、夜の錦とは……」は並列した表現とも見得られる。これを「嵐の山のもみぢを夜の錦とは……」とつづけ、それからそれを輕くおさへて「吹きおろす松風に」とつづけて、全體の組織を完成して行く起伏は、意向の問題で、文法の問題ではない。

また「保元物語」の

爲朝を勇ませむ爲にや俄に除目行はれて藏人たるべきよし仰せけり八郎これは何といふことぞ敵既に寄せ來たるに方方の手分こそせられむずれただ今の除目物騒なり人人は何にもなり給へ爲朝は今日の藏人と呼ばれても何かせむただもとの鎭西八郎にて候はむとぞ申しける。

について、塚本氏は次の如く言つてゐる。

この文の「たるに」しても、これを下の「方方の手分こそせられむずれ」に掛るものと見れば、「タルニヨリテ」の意味となり、その句を距てて「ただ今の除目物騒なり」に掛るものと見れば、「タノニ」といふ反戻の思想になり、更にこの兩方に亘つて掛つてゐる趣と見れば、「……テキルカラ…ダノニ……」といふやうな意味になる。斯うした考案を下す事が文特に古文の解釋に於て實に大切な事である。

これは言葉を直に意向に向つて還元して行つたもので、ここに意向の形が明かになつて行く。かかる例は意向が最もよく吟味された例である。

ただこの方法の危險は、與へられた直接の印象に卽する爲に、意向の吟味が誤り讀まれる點にある。恣意によつて意向が誤られる點にある。この讀みが完全に行つた場合には、言葉に直接する事が出來る。しかも理解の客觀性を少くしてゐるので、その解釋の道程は發動的であるが、その言葉はかへつて受動的である。理解の主觀性がここにある。かくてより多く讀者自身が感じ得たるものによつて讀むのであるから、その意向は讀者の感得によつて充ち、時には筆者の意向を讀むのでなくて、知らずしらず讀者自らをよむの結果に陷る危險がある。ここにあらはれるものは先づ全體であり、部分は稀少であり、隨つて脆弱である。感傷の形がそこにある

かくて文形的方法と意向的方法とは、それぞれの特色を持ちながら、各自の偏向がある。文形的方法の偏向は所謂語學主義なる語によつて示される。一つ一つの言葉を知れば之を讀み得ると考へられ、文法的吟味によつてのみ文の構成が明かになると考へられる。卽ち文は合理的に語から組み立てられると考へられてゐる。文法的性質によつて組織されるのが語だと考へられてゐる。しかし文は單語の集積でもなければ、またその總和でもない。全體は部分の和ではない。これは生の論理が、反合理性なる處に原因してゐる。生は因果性に從ふのでなくて、當爲性に從ふのである。機械的必然性に從ふのでなくて、目的的必然性に從ふのである。隨つて生の表現たる文は、語學主義が考へるやうに、合理的性質のみによるのではない。文の中にふくまれたる歪或は反合理性を重んじなくてはならぬ。

ただこの語學主義の確實なる地盤は、言葉の論理性に立ち、既知の既定の意味に立つてゐる點である。そこには恣ならざる謹みがある。この謹みは言葉をよみ言葉を聞く場合の第一の基礎である。何故かといへば、一つ一つの言葉の集積が決して文ではないけれども、その一つ一つの言葉に、語り書く意向はこもつてゐるからである。

意向的方法の偏向は所謂直覺主義なる語によつて示される。この偏向では一つ一つの語を輕

んずる傾がある。重いのは意向である。その文中一二の單語は知らずともよみ得るし、また單語が多義であつても、その文中では前後の系列の中で一義になつてゐる。文中にあつては多義ではない。隨つて文を定めるものは全體の態度、卽ち意向であつて、一一の單語ではない。重いのは全體であつて、部分ではない。かういふ立場から一一の言葉を輕んずる傾がある。一文中もとより語の數は多く、その一語一語もとより意向に密接してゐるものではないが、その語の中には意向の結晶形をなしてゐるものがある。卽ち形象をなしてゐるものがある。例へば前引「花月草紙」の「いでや櫻といはでしも」の文章中の「も」の如くである。この微細な表現性を持つ「も」は、輕卒な立場からは、間間見落される。また一語二語は知らずして讀み得ても、二十語三十語を知らずしては讀み得ない。直覺主義の解釋が、單語を輕んずるのは至當ではない。單語を知つただけで文は解釋し得らるるものではないが、さればとて單語を知らずとも解釋し得るものではない。要はその言葉の意味の置き方である。言葉の共通性よりも變異性を重んじ、言葉の論理性よりも感情性を重んずるのが、直覺主義のよい處である。言葉の變異性、感情性の中に、卽ち言葉の歪の中に、意向が直覺せられる。しかも言葉の歪は言葉の反論理性であるから、言葉の論理性、文法性からはこれを解釋するのは困難である。ここに文形的方法の缺點がある。文形的研究からは分析せられぬものがあつて、それが文の形象をなしてゐ

る。また部分以上のものがあつて、それが文の支持をなしてゐる。その文形的語學的研究の及び難きものに直接に觸れようとするのが直覺主義である。ただこの主義の偏向として注意せらるべきは、言葉の論理性に對して、輕卒になり、恣意的になること、行き易き方向にのみ進み、視野が全般に及ばぬことである。文學的方法は一語一語の上に視野を廣げるために、深まり得ない傾があつたが、これは深さに向つて專らであつて、視野が狹少になる。かかる古典の讀み方があつて、所謂漢學者の讀みと、所謂國學者の讀みの如き、それぞれの偏向を示した讀みが、今日も猶一隅に殘つてゐる。かくて意向的方法はその偏向にも係らず、常に根底に向ひ全體に向ふのが其の善き點である。意味とは全體である。

語學主義の單語集積的豫想をすてて、しかも各語の論理性を重んじ、他方に直覺主義の變異性による意向の還元を重んじてくれば、ここに文の正しい意味が成り立つ。これが解釋的方法である。その一二の例として、塚本哲三氏の解釋をあげる。

その仇むすびし始をとへば深きうらみのあるにもあらずかたみに龍の雲にのりて空をかけりわたらんとほこり奢れる心の凄じきがたすにこそあれ流るる血は小川とせかれ碎くる骨は小石ともしきみちぬべしかくて年ふりたらん後はこのあらがねの土の下はことごと屍の積み埋みたらんが上にこそとふと思へば身の毛たちつめたき汗は衣をとほすべし

（上田秋成）

この文について塚本氏は先づ考へ方として、ここで意向的方法をとつてゐる。それからその意向的立場によつて部分の言葉の研究をなしてゐられる。卽ち意向の立場から文形的方法をとつてゐられるのである。これは反對の順序でもなし得ること勿論である。何れによるかは時の便宜である。

考へ方　全文を熟讀して見れば、「なすにこそあれ」までは、戰爭の起る原因、次の「しきみちぬべし」までは戰爭の慘狀を叙した文といふ事は分らう。難は其の一句にある。

かくて年ふりたらん後はこのあらがねの土の下はことごと屍の積みたらんが上にこそとふと思へば身の毛たちつめたき汗は衣をとほすべし。

は今現在の事か、これから先の事か、どこ迄も平靜に原文を翫味して見る。

一、斯うしてこれから年が經た後の世に於ては

と考へると、今上述する如き戰爭の慘狀を目擊してゐる立場になる。これに反して

二、かくて年經た後の今日に於ては

とすると、今自分が古戰場にあつて、自分が立つてゐる地下は悉く屍で埋つてゐるだらうと考へてゐる事になる。

しきみちぬべし…このあらがねの土の下は…上にこそ

斯ういふ言葉をしつかりと摑んで味つて行つたら、原文の趣はどうしても一の場合でなくて、二の場合であると考へる事になる筈である。卽ち「たらんが上にこそ」は「其ノ上ニ自分ガヰルノデナクテハツジツマガ合ハヌ」といふ考へ方に歸着する筈である。更に部分として問題になりさうなのを研究して見よう。

とへば　究めて見ればである。人に問へばではない。

龍の雲にのりて空をかけりわたらん　漢文の「風雲之會」といふやうな熟語の燒き直しで、譬喩的の句であるとはすぐ考へられよう。其の譬喩の精神については、龍＝英雄、雲にのり＝機會に乘じ、空をかけりわたらん＝大功を建てん、といふ風に文意によく合ふやうに譬喩と實義と引きあてて考へて見ればよく分る。

心の凄じきが　「が」は主格で、文法的にいへば、心が凄じい、それがするのだといふ意である。

流るる血は小川とせかれ　流れる血が堰きとめられて小川のやうにたまつてゐると見たらよく分らう。つまりは、血は流れて小川のやうになるといふ迄である。

あらがねの　土の枕詞。

ことごと　悉く。

埋みたらんが上　「が」は「の」の意の領格。

この後に句讀と解とがある。

句讀　その仇むすびし始をとへば、深きうらみのあるにもあらず、かたみに龍の雲にのりて、空をかけりわたらんと、ほこり猛れる心の凄じきがなすにこそあれ。流るる血は、小川とせかれ、砕くる骨は、小石どもしきみちぬべし。かくて年ふりたらん後は、このあらがねの土の下は、ことごと屍の積み埋みたらんが上にこそとふと思へば、身の毛たち、つめたき汗は、衣をとほすべし。

解　ソノ中ノ惡クナツタ本ヲ尋ネテ見ルト、別ニ深イ怨ミガアツタノデモナイ、タダ互ニ、龍ガ雲ニ乘ツテ驅ケ渡ルヤウニ、風雲ニ乘ジテ大活躍ヲ試ミヨウトイフ、オゴリ高ブツタ心ガ非常ニ烈シカツタ爲メニ起ツタノデアル。ソシテ流レル血潮ハセキトメラレテ小川ノヤウニ流レ、斃レタ武士ノ骨ハ砕カレテ小石ノ如ク積ツタコトデアラウ。ソシテ幾年モ幾年モタツタ今日デハ、コノ土ノ下ハ凡テ屍デ埋マツテヰルデアラウ、ソシテ今自分ハ其ノ上ニ立ツテ居ル

ノダナト、フト氣ガ附イテ見ルト、ゾツトシテ身ノ毛モ彌立チ、冷汗ガ流レテキモノヲ通シサウデアル。

更にも一つの例として、「徒然草」の

望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも曉近くなりて待ちいでたるがいと心ぶかう青みたるやうにて深き山の杉のこずゑに見えたる木の間の影うちしぐれたる村雲がくれのほどまたなくあはれなり。

の「考へ方」を引いてみる。この意向的方法の基礎には言葉の精しい省察がある。

「…よりも…またなくあはれなり」に着眼して、「望月…」をAであらはし「曉近く…」をBであらはして見ると、結局この文は

A＜B

といふ形式になる。そしてAの方はごく簡單であるのに反して、Bの方は對句的に二つの內容を持つてゐるといふ形式である。さういふ着眼に基いて文脈を立てて見ると、

望月の隈なき(光)を千里の外までながめたるよりも＝Aヨリモ

曉近くなりて待ちいでたる(月ノ光)が ｛いと心ぶかう／青みたるやうにて｝ ｛深き山の杉の梢に見えたる木の間の影／(又ハ)うちしぐれたる村雲がくれのほど｝ ＝Bがま

たなくあはれなり＝Cナリ

AヨリモBガCナリの形式である。卽ちこの文の「が」は主格の例である。そしてこの文の結局の所は、

Aヨリモ＝望月の隈なき(光)よりも
Bガ　＝曉近くなりて待ち出でたる(月)が
Cナリ　＝またなくあはれなり

であつて、更に詳細にその語句と思想との關係を究めて見れば、

千里の外までながめたる＝Aノ場合ニ於ケル隈ナキ月光ノ形容
曉近くなりて待ち出でたる＝Bノ場合ニ於ケル月ノ出ル時
いと心ぶかう＝Bノ場合ノ月ヲ見ル人ノ主觀的ナ感ジヲ主トシテノ形容
青みたるやうにて＝Bノ場合ノ月ノ色ノ客觀的形容
深き山の杉の梢に見えたる木の間の影＝Bノ場合ノ月ノアル位置ニツイテノ一ツノ例
うちしぐれたる村雲がくれのほど＝Bノ場合ノ月ノアル位置ニツイテノ他ノ一ツノ例

このやうな譯である。曉の月、木の間の月、村雲がくれの月と三つを別別に獨立させて考へては原文の文脈は崩れて了ふ。

この場合塚本氏が「語句と思想」といはるるのは、「語句と意向」といふ言葉に置きかへても同一である。

かくて解釋的方法とは、言葉を意向の形から讀み、説明の形からよむことである。意向を言葉の中でよみ、言葉を意向でよむのである。ここに意向と言葉との深き交錯がある。そしてこれを他の言葉でいへば、彼の方向より讀み、同時に吾の方向より讀むことになる。彼の方向とは書ける人の方向である。書ける人の意向を言葉でよむのである。吾の方向とは、讀む人の方向である。言葉の中に、讀む吾のこころがある。意向の決定、言葉の歪の決定、其他はもとよ

り書ける人の指示によるのであるが、同時に讀む人の發見によるのである。かくてこの發見によつて讀みは與へられたる以上を讀み得る。讀む働の中で價値が增大する。讀む働によつて筆者の書ける以上、著者の意圖以上を讀み取り得る。「文は人」であるといはれてゐるが、また「讀むのも人」である。これが讀みの深さである。解釋とはこの讀みの深さに達することである。

文形的方法も、意向的方法も、それが達し得る處はここである。文形的方法も意向に到る時ここに達し、意向的方法も文形に到る時、ここに達する。兩者共にその偏向を厭ふのである。故に解釋の最も妥當なる方法は、この文形的並びに意向的の兩方法を常に交錯せしむる解釋的方法である。

その一實踐例として、昭和十年二月長野縣師範學校附屬小學校の尋常科六學年丙組で訓導宮下忠道氏のされた「青の洞門」の教材研究及び學習指導案を揭げる。ここにはこの文形的意向的兩方法の　しき交錯がある。

「青の洞門」の教材研究及び學習指導案目次

教材

頭

衣

第二十一課　青の洞門

豐前の中津から南へ三里、激流岩をかむ山國川を右に見て、川沿の道をたどつて行くと、左手の山は次第に頭上にせまり、遂には路の前面に突立つて人のゆくてをさへぎつてしまふ。これからが世に恐しい青のくさり戸である。それは山國川に沿うて連なる屛風のやうな絶壁をたよりに、見るから危げな數町のかけはしを造つたものであるが、昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。

享保の頃の事であつた。此の青のくさり戸にさしかゝる手前、路をさへぎつて立つ岩山に、毎日々々根氣よくのみを振るつて、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。身には色目も見えぬ破れ衣をまとひ、日にやけ仕事にやつれて年の頃もよくわからぬくらゐであるが、きつと結んだ口もとには意志の强さが現れてゐる。

僧の名は禪海といつてもと越後の人、諸國の靈場を拜み巡つた末、たま〳〵此の難處を通つて幾多のあはれな物語を耳にし、どうにか仕方はないものかと深く心をなやました。さていろ〳〵と思案したあげく、遂に心を決して、たとへ何十年かゝらばかゝれ、我が命の

ある限り、一身をさゝげて此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、神

百五

佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。

之を見た村人たちは、彼を氣違扱ひにして相手にもせず、唯物笑の種にしてゐた。子どもらは仕事をしてゐる老僧のまはりに集つて、「氣違よ〱」とはやし立て、中には古わらじや小石を投げつける者さへあつた。しかし僧はふりかへりもせず、唯默々としてのみを振るつてゐた。

其のうちに誰言ふとなく、あれは山師坊主で、あのやうなまねをして、人をろうらくする

百六

のであらうといふうはさが立つた。さうして陰に陽に仕事のじやまをする者も少くなかつた。しかし僧は唯默々としてのみを振るつてゐた。

かくて又幾年かたつうちに、穴はだん〱奥行を加へて、既に何十間といふ深さに達した。此の洞穴と、十年一日の如く默々としてのみの手を休めない僧の根氣とを見た村の人々は今更のやうに驚いた。出來る氣づかひはないと見くびつてゐた岩山の掘抜も、これではどうにか出來さうである。一念こつた不斷の努力は恐しいものであると思ひつくと、此の見る

百七

影もない老僧の姿が、急に尊いものに見え出した。そこで人々はいつそ我々も出來るだけ此の仕事を助けて、一日も早く洞門を開通し、老僧の命のあるうちに其の志を遂げさせると共に、我々もあのくさり戸を渡る難儀をのがれようではないかと相談して、其の方法をも取りきめた。

其の後は老僧と共に洞穴の中でのみを振るふ者もあり、費用を喜捨する者もあつて、仕事は大いにはかどつて來た。しかし人は物にうみ易い。かうして又幾年か過ぎるうちに、村の

（さしゑ）

人々は此の仕事にあきて來た。手傳をする者が一人へり二人へりして、はては又村人全體が此の老僧から離れるやうになつた。けれども老僧は更にとんちやくしない。彼の初一念は年と共に益々固く、時には夜半までも薄暗い燈を便りに、經文をとなへながら一心にのみを振るふこ

とさへあつた。老僧の終始一貫した根氣は、遂に村の人々を恥ぢさせたものか、仕事を助ける者がまたぼつ／＼と出來て來た。かうして、老僧が始めてのみを此の絶壁に下してからちようど三十年目に、彼の一生をさゝげた大工事がみごとに出來上つた。洞門の長さは實に百餘間に及び、川に面した方には處々にあかり取りの窓さへうがつてある。

今では此の洞門を掘りひろげ、處々に手を加へて舊態を改めてゐるが、一部は尚昔の面目

百十

を留めて、禪海一生の苦心を永久に物語つてゐる。

百十一

A 教材研究

一、素讀

1. 讀替文字

頭　ヅ　頭上(ヅジヤウ)　巻十二、五十九頁ニ「龍頭(りうづ)」ト振假名附デ出テキル。

頭痛・頭巾ナドノ熟語ガアル。

頭(アタマ)・番頭(トウ)・頭(カシラ)ハ既習文字。

衣　コロモ　破れ衣(ゴロモ)　衣(イ)食ハ既習文字。

2. 讀ノ迷ヒ易イ文字

萬人（バンニン）の爲

絶壁に下（オロ）して

處々（ショ〳〵）

夜半（ヤハン）

3. 語句の註釋

青の洞門　耶馬溪の沿岸は卽ち中津から日田郡に出る便道で、樋田（ひだ）から守實（もりざね）に至る七里の間が所謂耶馬溪の美を鍾めた所である。樋田に近く鮎返りの急湍があつて溪谷の入口である。佛坂を過ぎると、神劍鬼刻の亂峯が溪を壓して、疎松斷壁が水に蘸つてゐる。その下を穿つて路を通ずるものを青の洞門といふ。洞門の處處には明り窓を穿つて往來の便としてゐる。

此の邊一帶の岩石は輝石安山岩より成り、火山泥灰の土壤は風雨及び流水のために削り去られて、獨りその岩石を殘し、さまざまの姿を留めて奇觀を呈す。山嶺は海青色にて草木の生長よろしからず、忍草風蘭など多い。（日本地理大系九卷及び大日本地名辭書ニヨル）

豐前の中津　今の大分縣中津市。奥平氏の舊城下、人口三萬。

激流岩をかむ　急流が岩に勢よくつきあたる樣子を形容した語。

山國川　源を英彥山（ひこさん）に發し瀬戸内海に注ぐ川。

頭上にせまり　頭の上におほひかぶさるやうになつてゐて。
世に恐しい　世の中でとりわけ恐しい。
「かよわい婦女子でなくとも、俯して五丈に餘る水面を見、仰いで頭を壓する十丈に近い絶壁を見る時は、魂消え、心戰くも理りであつた。」（「恩讐の彼方に」以下同書よりの引用文は單に「恩」と記す。）といふ程恐ろしいところ。

絶壁をたよりに　たよりには、たのみに。よるべに。足場に。
見るから危げな　ちよつと見ただけでもあぶなさうな。
かけはし　懸橋。棧道。けはしいがけなどに板木をわたしてこしらへた橋。
「その絶壁の中腹を松杉などの丸太を鎖でつらねた棧道が危げに傳つて居る」。（恩）
享保の頃　中御門天皇の御宇の年號。徳川吉宗が將軍になつてゐた時代。紀元二三七六より紀元二三九五に至る二十年間。
餘念なく　ほかのことは何も考へずに。一心に。
色目も見えぬ　色目は　(一)　色のほどあひ。(二)　品物の名目。色がさめてどんな色かわからぬ。粗末な。
やつれて　やせおとろへて。
意志の强さ　やり通さうとする心の强さ。

禪海

禪海の履歴については諸書をしらべて見たが、それぞれ差異があつて、しつかりした履歴は作ることが出來なかつた。「耶馬溪案内記」を書いた果仙といふ人も「禪海ノ履歴ハ多ク湮滅シテ眞ヲ稽フベキモノナシ。」と言つてゐるさうである。次に示す「禪海年譜對照表」は、その生年及び歿年の明示されてある「羅漢寺記錄」（この記錄は樋田小學校から調査してもらつたものである。後出參照せられたし。）を根據として年齢を推定して作つたものである。

禪海年譜對照表

天皇	將軍	紀元年號	年齢	碑文及墓石	羅漢寺記錄	恩讐の彼方に	人名辭書
112東山	綱吉	二三四七貞享四	一	越後高田ノ産。福原氏。	越後高田ニ生ル。市九郎トイフ。父福原勘太夫。	越後柏崎ニ生ル。市九郎トイフ。	市九郎トイフ。
				後武州淺草ニ住ス。	父ノ勘氣ヲ受ケ江戸ニ至リ中川四郎兵衛ニ仕ヘ淺草ニ住ス。	江戸ニ出デ淺草ノ旗本中川三郎兵衛ノ家臣トナル。	江戸淺草ノ旗本中川三郎兵衛ノ僕タリ。
	家宣	二三六九					
113中御門		二三七〇					
	家繼	二三七三正德三	二六…………→				誤ツテ中川三郎兵衛ヲ殺シ中川氏ノ妾ミとト奔ル。時財ヲ使ツ

	吉宗	二三七六					タ後鳥居峠ニ茶店ヲ開キ旅客ヲ殺シテ財ヲ奪フ。後美濃國成願寺明園上人ノ弟子トナリ禪海トイフ。佛道修行二年。後諸國托鉢。
		二三七九享保四	三三	此ノ頃鎖渡ニ來リ鑿石開路ノ大誓願ヲ發ス(?)	此ノ頃中川四郎兵衛ヲ暗殺シテ遁ル。實之助三歲。諸國ヲ彷徨ス。	中川三郎兵衛ヲ暗殺シソノ妾オ弓ト遁ル。鳥居峠ニテ強盜ヲナス。後大垣在淨願寺明遍上人ニヨリ得道シ了海トイフ。半年後、名僧トナリ、雲水ノ旅ニ上ル。	
		二三八四享保九	三八			八月鎖渡シニ來リ難所ヲ除カシント大誓願ヲ發シ實行ニ着手ス。	
		二三八九享保一四	四三			開鑿第四年目。五丈ノ深サニ達ス。	
		二三九四享保一九	四八		鎖渡ニ來リ慨然大誓願ヲ起シ、出家シテ開鑿ニ着手ス。	第九年目。二十二間ニ掘進ム。	青野ノ渡ニ來リ洞門ヲ開クノ大願ヲ樹ツ。
114 櫻町		二三九六					
		二三九八元文三	五二			第十三年目ノ終頃六十五間ニ達ス。	

		二四〇三寛保三	五七……	……	……	第十八年目。二分ノ一ヲ穿ツ。中津藩郡奉行巡視賞美ス。	
		二四〇四延享元	五八……	……↓	此ノ頃實之助尋ネ來ル、	第十九年目。中川氏ノ一子實之助尋ネ來ル廿八歳。	此ノ頃實之助尋ネ來ル實之助三十歳。此ノ後二年洞門開通ス。
	家重	二四〇五					
		二四〇六延享三	六〇……	……↓	此ノ頃鑿道竣工ス。水陸摩訶法會ヲ嚴修シ、中川四郎兵衛ノ靈ヲ供養ス。	第二十一年目。九月十日夜九ツ近キ頃大願成就ス。	
115 桃園		二四〇八					
		二四一〇寛延三	六四……↓	八月、洞門ニ禪海自刻ノ石像成ル。此頃鑿道竣工ス。(?)			
	家治	二四二〇					
116 後櫻町		二四二三寶暦一三	七七……↓	(金龍道人羅漢寺ヲ訪フ。)			
		二四二七明和四	八一……↓	四月、山陰鑿道碑文成ル。	永代祠堂トシテ田畑一丁並ビニ銀四貫ヲ羅漢寺ニ寄附シ大法會ヲ修行ス。		
117 後桃園		二四三一					
		二四三四安永三	八八……↓	八月二十四日歿。	八月二十四日他界八十八歳。		

「羅漢寺記錄」といふのは次の通りである。これはこの次に記す果仙の禪海の履歴と共に、樋田小

學校で御調査して下さつたものである。

○禪海の略歴（羅漢寺記錄直寫）

權大僧都眞如庵禪了海幼名市九郎と稱し越後高田の藩士福原勘太夫の一子也父の勘氣を受け江戸に至り中川家に仕へて淺草に住す後其の主中川四郎兵衛を暗殺して遁る而して諸國に彷徨して更に止まる處なし享保十九年豐前に來り宇佐八幡宮並に南山に參拜し窟中の勝景千古の靈場に驚く一日樋田村の上即ち鎖渡を過ぐ道路狹隘にして河に臨み岩腹危嶮にして往來甚便ならず動もすれば人馬誤て河中に墜つ市九郎之を觀て慨然大誓願を起し發心出家して同夜此の鎖渡の難道を開鑿することを勸めたり又江戸中川四郎兵衛の長子中川實之助父の殺害せられたるとき甫めて三歲禪海の非道を憤り十三歲にして柳生但馬に從ひ日夜武道を勵み十八歲にして其の奥義を極む而して諸國を歷遊して畿內及東海東山山陰山陽北陸南海等悉く跋涉し禪海の所在を尋ぬれども明ならず終に九州に下り一日宇佐八幡の大廟に參詣す偶傍人の告に依り禪海の所在を知る嗚呼二十年來の宿志將に達せんと天を仰ぎ地に伏し直に馳せ來つて禪海に會し在昔の非義を詰る禪海曰く既に染衣鎖渡鑿道に着手し其の功殆ど垂んとす君願くば海に三年の命を假せ此業竣らば謹で君が命に隨はんと實之助其の至誠に感じ父の讎を復すことを緩うし却て之に力を與ふ幾何もなく鎖渡鑿道の功竣へ一週間水陸摩訶法會を嚴修し中川四郎兵衛の靈に供養す此に於て實之助懇ろに暇をなし江戸に歸り此の狀を告ぐ一族敢て怒らず聞く者感動せざるなしと云ふ禪海大願已に成就し中川家年來の憤怨亦解くを得たるは禪海自ら然らしめたりと雖復何ぞ三法歸依の德に依らずんば復讎の殺氣を解くを得ん哉爾今道心益

篤く十方の信施と一餐の餘粱とを以て 小庵を結び此の郷に留まり 權大僧都に進められ念佛三昧以て餘榮を遣る 明和四年永代詞堂として 田畑一丁餘並に 銀二貫匁を當山に奇附して恆期の大法會を修行し祖先の追福死後の佛果を祈り曹洞の佛法を興隆せしむ 禪海貞享四年を以て 越後に生れ 安永三年甲午八月二十四日を以て他界に遷す 即ち羅漢睡龍山の右側に葬る 享年八十八禪海の如きは 眞に稀世の佛子と云ふべし惜哉星霜漸く轉じ其の遺勳を紀するもの稀なるに至る

この「羅漢寺記錄」も文面より察すると、禮海の歿後かなりの歳月を經て出來たもので、はつきりしたものではないらしい。前揭の碑によると鑿道は三十年で竣工したとあるが、この記錄によると十二三年で竣工したことになり、これは兩者甚だしい相異點である。

次に「耶馬溪案內記」の著者果仙といふ人は禪海の履歷について次の通りに言つてゐる。

果仙曰ク禪海ノ履歷ハ多ク湮滅シテ眞ヲ稽フベキモノナシ左ニ父老ノ口碑ヲ記シ識者ノ敎ヲ待ッ

禪海主を殺し江戶を遁れたる後暫く 木曾山中に潛伏して山賊をなす 此の時 禪海携へたる妻あり（出所不詳）或夜禪海其の拐取せる貨物を包みて 持歸りけるに 妻之れを披き見大に喜び 是尋常ならざる人の美服なり斯程の美服を着せる上は定めし頭髮の具も珍重のものならん 笄釵など 何の處に挿み置かれしや 疾く見せられよと云ひければ 禪海憮然として 手を拱すること久くして吾今山賊たりと 雖惡業をなすは常に良心に恥づる處吾今服を奪つて 頭髮の具に心付かず 彼如何惡人の妻たればとて 奸惡邪見に長ぜるの甚しきやと玆に迷夢を破り會心懺悔遂に妻を去りて六十六部の行者となり諸國を遍歷し享保十五六年の頃は豐後由布院某寺（不

明）へ寄食せりといふ

前記の禪海年譜對照表や右に擧げた記錄などを綜合して、その略一致する點を採つて禪海の略歴を記して見ると次のやうになるであらうか。

貞享四年（紀元二三四七）越後高田藩ニ生ル。福原氏。幼名ヲ市九郎トイフ。若キ時江戸ニ出デ旗本中川三郎兵衛（一ニ曰ク四郎兵衛）ノ家臣トナル。或時主人中川氏ヲ暗殺シテ江戸ヲ遁レシガ、後感ズル所アリテ出家シ名ヲ禪海（又ノ名了海）ト改メ諸國ヲ遍歴ス。享保年間偶豐前國中津在ノ青ノ鎻渡(クサリド)ヲ通リ、行人難澁シ或は山國川ノ急流ニ墜落溺死スルアルヲ見聞シテ、此處ニ洞門ヲ開キ道ヲ通ジテ、行人ノ艱難ヲ救ハントスルノ大誓願ヲ發ス。爾來不屈不撓多クノ歳月ヲ費シテ所謂青ノ洞門ヲ開通ス。ソノ後猶此ノ地ニ留マリ安永三年（紀元二四三四）八月、八十八歳ノ高齡ヲ以テ他界ストイフ。

靈　場　お寺やお宮などのある尊い地。
たまたま　偶然に。折よく偶然に。
難　所　通るに難儀なところ。
澤山なあはれな物語。

「歩み難い石高道を、市九郎は、杖を頼りに辿つた時、ふと道の傍に、此の邊の農夫であらう。四五の人人が罵り騷いで居るのを見た。市九郎が近づくと、その中の一人は早くも市九郎の姿を見つけて、「之はよい所へ來られた。非業の死を遂げた、哀れな亡者ぢや。通りかかられた緣に、一遍の回向をして下され。」と云つた。非業の死だ…（中略）「見れば水死人のやうぢやが、所所皮肉の破れて居るのは、如何した仔細ぢや。」

と、市九郎は、恐る恐る訊いた。「御出家は、旅の人と見えて、御存じあるまいが、此の川を半町も上れば鎖渡しと云ふ難所がある。山國谿第一の切所で、南北往來の人馬が、悉く難儀する所ぢやが、此の男は此の川上柿坂郷に住んで居る馬子ぢやが、今朝鎖渡しの中途で、馬が狂うた爲、五丈に近い所を眞逆樣に落ちて見られる通りの無殘な最後ぢや。」と、その中の一人が云つた。「鎖渡しと申せば、兼兼難所とは聞いて居たが、斯樣なあはれを見ることは、度度ムるかの。」と、市九郎は死骸を見守りながら打ちしめつて聞いた。「一年に三四人、多ければ十人も思はぬ憂目を見ることがある。無双の難所故に、雨風に棧が朽ちても、修繕も思ふに委せぬのぢや。」と答へながら、百姓達は死骸の始末にかかつてゐた。』（恩）

なやました　思ひわづらつた。心を苦しめた。

思案したあげく　考へたすゑ

何十年かからばかかれ　何十年かからうとかまはない。

萬人の爲に　多くの人のために。

安全な路　あぶなくなく安心して歩ける路。

神佛に堅くちかつて　ちかつては欺かぬことを約束して。

　神樣や佛樣に必ずやりとげますと堅く約束して。

彼を氣違扱ひにして相手にもせず

「『三丁をも超える大磐石を、刳貫からといふ瘋狂人ぢや、ハ、、、。』と、笑ふものはまだよかつた。』（恩）

「到頭氣が狂つた。」と、行人は（中略）嗤つた。（恩）

『行路の人人は、尚嗤笑の言葉を止めなかつた。「身の程を知らぬたはけぢや。」と市九郎の努力を眼中におかなかつた。』(恩)

物笑の種　世の人の笑話の種。

默默として　だまりこんで。

山師　(一)　山稼をする人。　(二)　投機又は冒險のことをする人。

(三)　他人を欺いて利益を得んとする人。

などの意味があるが、こゝでは、(三)の意味に解く。

『「大騙りぢや、針のみぞから天を覗くやうなことを云ひ前にして、金を集めようと云ふ、大騙りぢや。」と、中には市九郎の勸説に、迫害を加ふる者さへあつた。』(恩)

ろうらく　他人をだまして自分の利益をはかること。

陰に陽に　こつそりかくれ又大びらに。間接に直接に。

十年一日の如く　長い年月の間少しも變りなく。

見くびる　蔑視する。見下す。見おとす。

一念こつた　一心にこりかたまつた。一心こめた。一つのことに熱中すること。

不斷の努力　たゆまず怠らずつとめる。

『もう掘り穿つ仕事に於て、三昧に入つてゐた市九郎は、ただ槌を振ふ外は何の存念もなかつた。ただ土鼠のやうに、命のある限り、掘り穿つて行く外には、何の他念もなかつた。彼は、只一人拮拮として掘り進んだ。

洞窟の外には春去つて秋來り、四時の風物が移り變つたが洞窟の中には不斷の槌の音のみが響いた。』（恩）

見る影もない　見るのも氣の毒なくらゐみすぼらしい。

『市九郎は梳らざれば頭髮は何時の間にか、伸びて双肩を蔽ひ、浴せざれば垢づきて、人間とも見えなかつた。が、彼は自分が掘り穿つた洞窟の裡に、獸の如く蠢めきながら、』（恩）

尊いもの　あがめうやまふもの。

喜捨　（一）神佛に金品をたてまつること。（二）不遇の人に金品を惠むこと。ここは（二）の意味に解く。

うみ易い　あきつぽい。あきやすい。

とんぢやく　心配すること。氣にかけること。

初一念　初めに思ひ立つた一心。

經文　お經の文句。佛の敎をしるした文句。

終始一貫　始めから終りまで心を變へずにやり通すこと。

舊態　もとのありさま。その當時のありさま。

面目　（一）樣子。（二）かほかたち。かほつき。（三）世人に對する名譽。ここでは（一）の意味。

4. さしゑの解説

現今の青の洞門を川下より川上に向つて見たところである。山國川の水際より屹立する峻嶮な絶壁

に洞門が掘抜かれてゐる。洞門の奥の方に明るい所の見えるのは、明り取りの窓からさし込んでゐる光であらう。今、老ぼれらしい馬車馬が洞を出てくる所である、が少しの危険もない坦然安穏の道である。ところが今から凡そ二百年の昔、即ち禪海がこの洞門を開鑿しない以前は、所謂青のくさり戸の戰戰兢兢危惧の棧道を渡らなければならなかつた。洞門はまことに禪海一生の苦心を物語ると同時に、禪海の永劫無終の生命を物語るものである。

二、解　釋

1. 主　題

青の洞門を不屈不撓難苦をものともせずに掘抜いた禪海の慈悲心。

2. 構　想

第一段　青のくさり戸は危険な處。 ――第一節……禪海が慈悲を實現した場所。

第二段　餘念なく穴を掘る僧。
第三段　禪海の人となりと決意。 ――第二節……禪海の慈悲發動。

第四段　村人は氣違扱ひにして禪海を迫害するが、禪海は默然としてのみを振るふ。
第五段　山師坊主として取扱はれるが禪海は猶默然としてのみを振るふ。
第六段　幾年かたつうちに穴は何十間とな

る。

第七段　村人老僧の姿に尊いものを見出して、開鑿援助の相談をなす。 第八段　村人老僧に助力す。併し數年後には倦怠して村人老僧より離れる。 第九段　老僧村人に關りなく、誓願愈鞏固である。	第三節……禪海の慈悲誓願鞏固なること。（禪海の慈悲實現の過程に於ける村人の迫害と助力。）
第十段　村人の自省洞門開鑿竣工。	第四節……禪海の慈悲實現。
第十一段　現今の青の洞門。	第五節……禪海の慈悲は永生なり。

3. 敍述

これが世に恐ろしい青のくさり戸である。

村人にとつて「昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。」ほど戰競危險の所であつたのであるが、これに對する對策として坦然安穩の道を造らうといふ恆久的の對策はなく、唯一時的間に合はせの「見るから危げな、かけはし」を造つておいたのである。併しこの危險なくさり戸に安全の道を見出すことは凡愚な衆人に到底出來ることではない。

諸國の靈場を拜み巡つた末。

「靈場を拜み巡つた末」とはどういう意味か。最早靈場を巡る必要はなくなつたのだ。靈場を巡つたのは我が魂本然の相を見出さんとする爲であつた。我が魂の本然の相は、佛弟子禪海にとつては

佛祖釋迦牟尼の大慈大悲の心に目ざめることである。

深く心をなやました。

本然の生命に目覺めんとするときの、心の動搖である。小我の活動より大我の活動に移らんとする動搖である。

萬人の爲に安全な路を造つてやらう。

小我より大我に目覺めた時の大我の叫びごゑである。旣に此の時禪海の心內には洞門が開道してゐた。この後の禪海の仕事は、完成してゐる洞門を物の上に實證していくのである。釋迦が悟道の尊い心境を切開いた後、衆生を敎化濟度したのと同樣である。

唯默默としてのみを振るつてゐた。

一度本然の大我に蘇つた時、世間の毀譽褒貶などに關つては居られぬ。法悅の境地に對しては、あらゆる迫害も欲望も勝つことはできない。

尊いものを見出した。

「色目も見えぬ破れ衣をまと」つて居ようが、「日にやけ仕事にやつれ」て「見る影もない姿」であらうが、大我の活動に精進してゐる禪海の姿には自ら菩薩相が具現されてゐるのは當然である。

禪海一生の苦心を永久に物語つてゐる。

物の上に心の相が實現された時人格の完成である。物心一如の境地であり、知行合一の世界であ

る。

釋迦の臨終が近づき、諸弟子が泣き悲しんでゐる時、釋迦は、

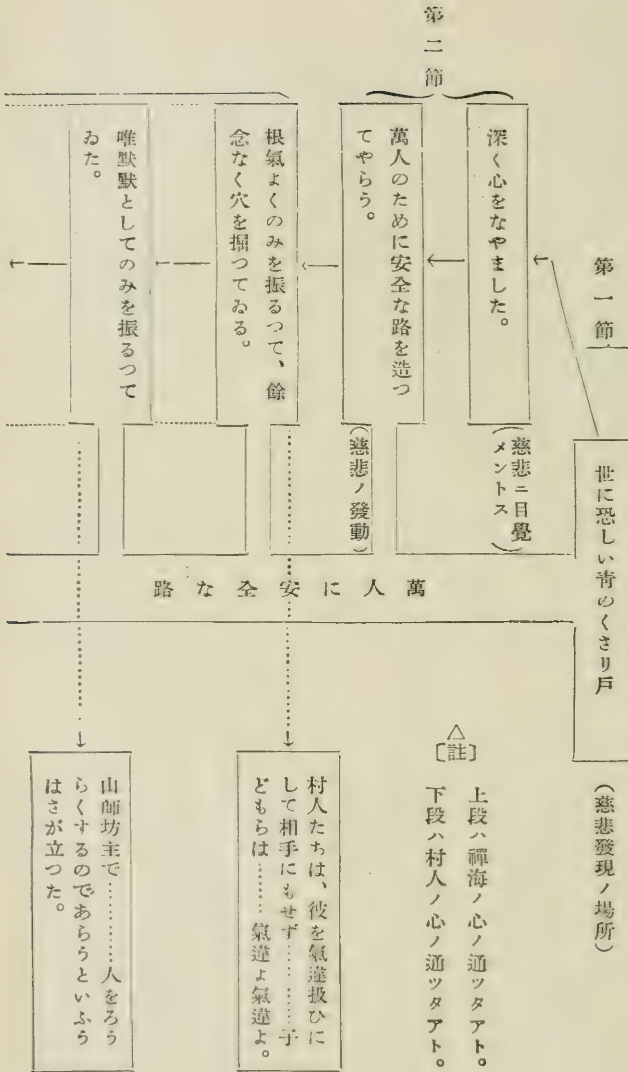
「私は行はうと思つたことは行ひ盡くし、語らうと思つたことは語り盡くした。これまで說いた教そのものが私の命である。私のなくなつた後も、めい／＼が其の教をまじめに行ふ所に私は永遠に生きてをる。」（讀本卷十二、九十八―九十九）

と諭したとあるが、青の洞門は禪海が、彼の思つたことを一のみ一のみ刻みつけた所で、言ひかへると禪海の慈悲心の權化は青の洞門である。青の洞門のあらん限り、山國川の水の流れが盡きない限り、禪海の生命は永劫無終である。

〔附記〕解釋としての叙述は以上でよいと思ふ。さきに（一ノ3參照）素讀のところで語句の註釋をなした時「恩讐の彼方に」の引用文を載せた。この引用文の內容を想起する程度まで讀むことは、六年の兒童としては、素讀としての註釋といふより、解釋された叙述語として考へてよいと思ふ。

4. 主題―構想―敍述の有機的連關

（曩に、主題・構想・敍述として個個に擧げたものを、一全體として左表の如く解釋す。）



第三節

唯默默としてのみを振るつてゐた。

（慈悲ノ誓願堅固ナリ。）

初一念は年と共に益固く、時には…一心にのみを振るふ。

→

第四節

始めてのみを此の絶壁に下してからちやうど三十年目に彼が一生をささげた大工事がみごとに出來上つた。

（慈悲ノ實現）

洞穴　萬人に安全な路　洞門

今更のやうに驚く。

1. 岩山の掘拔も、これではどうやら出來さうである。
2. 見る影もない老僧の姿が、急に尊いものに見え出した。

←

のみを振るふもの、費用を喜捨するもの。

仕事にあきて來た。村全體が此の老僧から離れる。

村の人人を恥ぢさせたものか、仕事を助けるものがまたぼつぼつ出來て來た。

第五節

今では此の洞門を掘りひろげ…禪海一生の苦心を永久に物語つてゐる。

冒頭靑のくさり戸のあり場所、その危險であるといふことが、むだのない簡明な手法で描き出されてゐる。ここはやがて禪海が心力を盡くしてはたらく舞臺及背景となるところである。禪海にとつてこの「靑のくさり戸」は、永年見出さうとして求め歩いて漸く見出し得た「さがしもの」であつた。禪海の心内に芽ぐんでゐた慈悲心が、「あはれな物語」のある「世にも恐ろしい」といふ「くさり戸」を楔機として、禪海の全生命として活動し出したのである。

禪海が諸國の靈場を拜み巡つたのも、「さがしもの」を求めてゐたからで、一度その「さがしもの」が慥かにこれであると確認した以上、もはやそれ以上價値ある尊いものはない。これこそ一生かかつても一身をささげても、さがし得たものに我が魂を吹込んで實にしなくてはならぬといふ大誓願が、起つて來たのである。

この大誓願に向ふその仕事は菩薩行であり、その心は菩薩心である。容貌が如何に醜くとも、そこには犯し難い菩薩の相が現はれてゐる。併し我我凡夫の肉眼をもつてしては菩薩相を見ることが難い。一介の貧僧に見えたり、瘋狂人に見えたり、山師に見えたりするのである。のみならずそれに對して我が優越感を暴威として揮つたりするのである。

併し村人の豫想は裏切られた。禪海は瘋狂人でも山師でもなかつた、禪海の事業は着着と實現して行つたから。始めて村人は禪海の計畫の可能性を認めた。村人は「くさり戸を渡る危險をのがれる」

ために禪海に助力の寄進をした。村人の考へは功利的打算的である。「小人ハ利ニ喩ル」と論語にあるがその通りである。利に趨るものは利盡くればその事より離れるのは當然である。村人は利益の報酬を目前に得られなくて老僧から遠ざかつた。

ここで我我はこれ等村人に對して彼等の蒙昧愚鈍を情なく思ふ。大我に目覺めて菩薩行を行ふ大知識の大慈悲心に何故感じないかと。まことにその通りである。我我の心は禪海の行爲に風靡される。これは我我も禪海の大理想にあやからうとする理想のひらめきである。併し猶一歩進んで我が心を省よ。我我が若しそこに居て見る影もない老僧を見たらどうであらうか。我我も亦村人と同一行動をとつたであらう。これは人間一般がもつ弱さである。その時時に見える形に左右されつつ、其の日其の日を刹那的に暮すのは凡夫の常である。非凡人は彼岸の光を見つめ、入る息出づる息の念念の間も常に離れない、不退轉の意志力をもつて精進する。

老僧から離れた村人が再び老僧にかへつた。老僧の無言の教化である。老僧から輝き出る尊い光を見たのである。凡夫もやはり光を求めてはゐる。光に對しては景仰の念をもつ。がその光を瞥見するのみでその光からぢきに退轉してしまふ——洞門の處處には明り取りの窓が穿つてあるといふ。宛も我我に光なしには生きられないことを暗示するやうである。

禪海一生の大誓願は成就せられた。現實と理想の一致である。我我は禪海その人の上に永遠不滅の光を見、彼の人格に對して景仰讃歎するのである。

全篇よく引きしまつたむだのない文章で書かれてゐるが、百六頁の、

子どもらは仕事をしてゐる老僧のまはりに集つて、「氣違よ氣違よ。」とはやし立て、中には古わらぢや小石を投げつけるものさへあつた。

といふ書きぶりは少しくどいと思ふ。子どもらが親のまねをするのは當然ではあるが、僧の仕事場へ行き、まはりに集つて、「氣違よ氣違よ。」とはやし立てるのみならず、古わらぢや小石を投げつけるに至つては少しくどい。第一まはりに集るといふことがをかしい。老僧の仕事をしてゐる後へ集つてといふが普通のいひ方と思ふ。此處はむしろ「空腹のために托鉢に出て來た老僧に向つて氣違よ氣違よとはやし立てた」といふ程度にしたい。猶老僧が如何にして食事をしたかといふことは、何處にも書かれてないから、此の邊へ其の意味の文句を織込んでおく方がよいかと思ふ。「恩讎の彼方へ」には食事のことについて、「空腹を感ずれば、近鄉を托鉢し、腹滿つれば絶壁に向つて槌を下した。」とあり、「市九郎が暫しの暇を窃んで、托鉢の行脚に出かけようとすると、洞窟の出口に思ひがけなく一椀の齋を見出すことが多くなつた。」とある。

四、原據の研究

文部省の編纂趣意書には、「金龍道人敬雄ノ書キタル青ノ洞門ノ碑文、禪海募石ノ文字等ニ據ル」とある。「等」といふ中にはそれ以外に原據としたものがあるといふことを表はしてゐる。我我は「恩讎の彼方に」などを、原據の一として參考にするがよいと思ふ。

金龍道人の書きたる碑文、禪海墓石の文字は別紙の通りである。（訓點を施したものを省略するから諸氏各自の研究をまつ。これは寶文館發行の教授書にあつたから、それに殆んどあるままを轉寫したのであるが、誤植脫字などもあると思ふから注意して讀まれんことを望む。）

左記に該當する事項は碑文及墓石の文字には明瞭に書かれてゐない。

○子どもらは仕事をしてゐる老僧のまはりに集つて、「氣違よ氣違よ」とはやし立て、中には古わらぢや小石を投げつける者さへあつた。（百六頁）

○しかし人は物にうみ易い。かうして又幾年か過ぎるうちに村の人人は此の仕事にあきて來た。手傳をする者が一人へり二人へりして、はては又村人全體が此の老僧から離れるやうになつた。（百八－百九頁）

（これらは菊池寛氏の「恩讐の彼方に」を參考すればよいと思ふ）

〔附〕參考文獻

山陰鑿道碑銘幷序　（編纂趣意書所揭のもの）
禪海墓石の文字　（同　上）
菊池寛　小說「恩讐の彼方に」
大日本人名辭書　「禪海」の條
百科大辭典　「やばけい」の條
日本地理大系第九巻
吉田東伍　大日本地名辭書
角田政治　大日本地理集成

山陰鑿道碑銘并序

豐前山之骨多肉少懸崖絕壁爭奇者多矣 而其 最靈秀者曰 耆闍崛山所謂阿羅漢禪寺在焉距羅漢寺十里許溪壑接連峯巖峭峻骨益瘦肉益少 如圭如璋聯輝合彩屹立雲間 衒奇狀者跡田山也 發源于彥山日嶽西數百里統衆淵之所會接天排岸滾滾洞流抱跡田村抵于中津城奔注於龍王海者 跡田河也 之二者俱因村 而名焉有石壩立高數百丈徑亦稱之跡于河枕于岸而岸上之路 將登羅漢者 之所繇也 而爲此石閉無地于開道矣民人乃於水際巖畔設棧施鎖使其行人左深淵右峭壁牽鎖躡棧拾涉因稱鋏鎖渡云然 石滑棧危巖耳嚙指足心 澁動輒告出 或墮汨流溺死者多矣此誠可慨也享保年間都僧禪海適來見其山 奇嶇艱難之狀即 發大誓願欲鑿石通路以救沒溺之患宜執鎚鑿而 進時旁近村氓洒然怪笑禪海益抱堅忍不拔 之志欲必拓開之以成 其功雖祁寒 酷暑淬勵益力窮日不息已而鑿稍深功稍見於是初怪笑者終感其心力勇銳誓願叢閭財施力 施勸讚隨喜然後 三十年 其功竣矣其高二丈基徑三丈其長三百有八步形如甬道可並騎而行也每過數十步 必穿壁窓以通日月 光於是變戰兢危懼之渡爲 坦然安穩道絡繹往來者靡不嘖嘖稱嘆焉寶曆癸未之秋余探九州之勝上羅漢山訪堂頭 無學和上乃 親見所鑿之道 與山水之美因謂和上曰禪海之功可與持地菩薩彷彿山水之美可與會稽山陰伯仲和上曰 此之勝槩在于僻地故 秪因村以爲名耳請師更命名余曰曩昔顧長康稱會稽山水之美曰千巖競秀萬壑爭流又曰山水自暎發 人應接不暇今此亦爾爾則山宜號競秀 宜號爭流而所鑿之道在山之陰宜號之陰道也 今茲明和丁未之春和上欲請藏經來入平安拾是禪海裁書請余鑿道之銘 余重像想其功而歎曰 修多羅云制心一處無事 不辦蓋禪海之謂乎 不但利行旅之人復足以勸獎出家學道之人志矣 古有功德則心銘金石今禪海之功宜勒堅石垂之不朽以傳遐邇也乃隨喜讚歎爲之銘曰

跡田之山　嶄馬千峯　跡田之水　衆澗所鍾
山水之美　會稽維同　有石當路　高聳岩空
絡繹行路　乃哭途窮　牽鐵躡棧　寒栗徹躬
若失一步　定墮水中　懿哉禪海　能勤其功
鎚鑿巖壁　人感其衷　財施力施　協心茲從
經三十載　克遂其功　長三百步　並騎而通
豁開鑿道　勝彼鬼工　持地平道　此續芳蹤
盛功勒石　永劫無終
明和第四丁未孟夏穀旦
金龍敬雄社多撰
龍山院仲明書

禪海墓（羅漢寺山下知光寺ニ在リ）

（右側）
南无阿彌陀佛
我等與衆生皆共成佛道
願以此功德普及於一切

（正面）　眞如禪海墓

回國行者
本國武州淺草住
（左側）先越後州高田福原氏
年　月　日
石工長州府中住岸野本右門

○寒山巖下の禪海の墓

安永三年
午八月二十四日
眞如庵禪了海墓
越　後　產
鑿道開主

○禪海自刻石像（青洞門ニ在リ）

（正面）法界萬靈
月牌禪曹洞眞如禪海
武州江戶淺草之住
先祖越後高田福原氏

奉納大乘妙典六十六部供養所
寬延三庚午年八月吉日
南無阿彌陀佛
石工長州府中住
岸野平右衛門

（右側ヨリ順次ニ）
諸方助力萬人講供永代碑因緣施主
願以此功德普及於一切
我等與衆生　共成佛道
日牌當道開主回國行者

B　學　習　指　導　案

一、要　旨

靑の洞門を掘拔いた禪海の終始一貫した根氣を讀み取らせ、兼ねてこの終始一貫した根氣は禪海の慈悲心に基づけるものであることを理解させる。

二、學習指導上の注意

(1) 菊池寬氏の「恩讐の彼方に」の小說を聞いたり或は讀んでゐるものがあるかも知れないが、さうし

た先入觀は一切捨てて、教科書に書かれてあることをあくまで根柢として、教材を理解させたい。卽ち菊池氏のものは開鑿事業の動機が贖罪としてのものであるが、そのやうに解釋せずに、禪海本來の慈悲心の發動を、開鑿事業に着手した動機として考へる。

(2) 理解を深く且廣くするために、本讀本「第十九課釋迦」、島崎藤村「お釋迦さまの燈火」、土田耕平「さがしもの」(本教材研究の終に附加してある。一讀せられたいこと連絡して考へる。

(3) 禪海がこの事業をしたのは幾つ頃からか、といふことに類する質問に對しては、教材研究禪海年譜對照表を據所として答へる。

(4) 禪海は食事をどうしたかといふ問に對しては、教材研究鑑賞批評のところへ書いたことを答へる。

(5) 讀替文字は二字だけで、一通り文字を讀むことは難事ではないが、書かれてある意味を讀むことは相當の難事であると思ふ。よつて、最初に書かれてある事實を把持することに力め、然る後その事實に基づいて意味を理解し、以て兒童の心内に禪海の人格を描かしめたい。

三、時間配當

凡五時間

第一時　全課の通讀

第二時　最初より百七頁の三行までの素讀的解釋

第三時　百七頁四行より最後までの素讀的解釋

第四時　文節の定立及其他

第五時　全文の理解(主題の把握)

四、各時學習指導の要項

第　一　時

(1) 第一時の主眼點　全課の通讀

(2) 學習指導過程

本課を讀んで來たものがあるかどうかをきく。

各自通讀一回以上

讀替文字の取扱――手帖へ記入

數生に分讀。凡二回。――讀みの不定のものを一定する。

各自通讀　一回以上

何のことが書いてあつたかと問うて見る。

答として要求する程度のことは

一、禪海が青の洞門を掘拔いたこと。

一、禪海が三十年もかかつて青の洞門を掘拔いたこと。

青の洞門はどこにあるか。――地圖を見るやうにさせる。

(3) 宿題　最初より百七頁三行までの全文を書取り、難語句の所へ傍線を附すること。

第　二　時

(1) 主眼點　最初より百七頁三行までに書かれてある事實を把握する。

(2) 學習指導過程

宿題として書いて來たものを數人に讀ませる。讀んでゐるのをききつつ、各自分の書取して來たものの誤を正さしむ。

百七頁三行までの難語句の質疑研究應答。

教科書の本文を逐次辿りつつ難語句の解釋を復習すると共に、書かれてある事實を把握させる。

(3) 宿題　百七頁四行より最後までの全文を書取り、難語句の所へ傍線を附すること。

第　三　時

(1) 主眼點　百七頁四行より最後までに書かれてある事實を握る。

(2) 學習指導過程

宿題として書いて來たものを數人に讀ませる。讀んでゐるのを聞きつつ、各自分の書取して來たものの誤を正さしむ。

百七頁四行より最後までの難語句の質疑研究應答。

教科書の本文を辿りつつ難語句の解釋を復習すると共に、書かれてある事實を把握させる。

(3) 宿題　各段落毎に其の大意を書き、猶全文は大きく幾つ位にまとめることが出來るかを考へること（つまり文節を考へて來ること。）

第　四　時

(1) **主眼點　文節を決定すること**

(2) **學習過程**

宿題としてやつて來たことが適當かどうかを反省させる。その目的のために一生に朗讀させる。（讀み聲をきくこと。）

各段の大意及文節の整理は大體左記の如くす。

- 第一節
  - 第一段　青のくさり戸は危い。
  - ――青の洞門の出來る前。
- 第二節
  - 第二段　根氣よく、餘念なくのみを振るふ僧があつた。
  - 第三段　僧の名と僧の決心。
  - ――禪海が洞門を掘拔かうと決心して仕事に着手したこと。
-
  - 第四段　村人が氣違扱ひにしたが、默默としてのみを振るふ。
  - 第五段　山師坊主のうはさがたつ。默默としてのみを振るふ。
  - 第六段　何十間となる。

第三節
- 第七段 村人驚く―相談。
  1. 洞穴。
  2. 僧の根氣。
- 第八段 〔村人のみを振るふ。費用を喜捨する。〕ものがあつたが、あきて老僧から離れる。
- 第九段 老僧の初一念益固し。一心にのみを振るふ。

→ 禪海は默默として根氣よくのみを振るふ。

第四節
- 第十段 村人恥ぢる。大工事が出來上つた。

→ 洞門が出來上る。

第五節
- 第十一段 今の洞門。老僧の苦心を永久に物語る。

→ 今の洞門。

この文を讀んで考へて見たいと思ふやうな問題を擧げさせる。

答として要求することは、

(一) 禪海の根氣の三十年も續いたのは何故か。

(二) 村人は何故禪海を迫害したか。

(三) 村人の心は何故幾度も變つたか。

(四) 青の洞門が禪海一生の苦心を物語つてゐるとはどういふことか。等。

右のやうな問題が出たら(三)を足場として順次他を考へて行くことにする。

もし右の問題に觸れるやうな問ひが出なかつた時は、段落の大意及文節の所を足場として教師より問題を提出する。

第三節のところを見ると、禪海は終始一貫默默として根氣よくのみを振るつてゐるが、その間村人はどんなやうだつたらうかといふ問を發す。然して村人の心が變つてゐたことを答へさせ、次のやうに整理する。

村人	老僧
△1 氣違扱ひ——物笑の種 子どもら	1. 默默 のみ
△2 山師坊主のうはさ じやまする	2. 默默 のみ
○3 {掘拔が出來さう 老僧が尊いもの} 相談	3. (默默 のみ)
○4 のみを振るふ 費用を喜捨する	4. (默默 のみ)
△5 あきて來た	5. (默默 のみ)
△6 老僧から離れる	6. とんじやくせず 一心にのみ
○7 恥ぢる 仕事を助ける	7. (默默 のみ)

右表のやうに○△印をつけて村人の心の變り方を見る。僧と比較して考へて見る。(右の表は手帖へ書かせる。)村人の著るしい變り方に對し老僧は終始一貫してゐる。何故だらうか。この問題を投げかけて放課。

(3) 宿題　教科を五回以上精讀して來ること。何回讀んだかは本へその印を記入せよ。村人や老僧のことについても考へて見よ。

第　五　時　(研究授業の時間)

(1) 主眼點　主題の理解

(2) 學習指導過程

(記載を省略す。各自指導案を考へよ。)

さがしもの

文吉は、ある夏休の末のこと、親不知子不知の海岸に近い、從兄の家へあそびに行きました。そして毎日從兄と一緒に、濱へつれて行つてもらつて、漁夫たちの網を引くのを見たり、沖の方に、一ぱいにうかぶ帆舟を眺めたりしました。磯にうちよせてくる小波に、ざぶざぶ足を洗はせながら、素足で砂の上を歩くのはわけてたのしいことでした。

二三日するうちに、文吉は、すつかり、海になれました。從兄につれてもらはなくとも、ひとりで濱へ出かけるやうになりました。

ある日のこと、朝御飯をたべると、すぐに、文吉は濱へ出かけて行きました。からりとよく晴れた日で、お日さまは、沖の方を、あかるくてらしてゐましたけれど、近く山を背負うた濱のあたりは、まだひやひやした陰になつてゐました。

やがて、お日さまの光は、沖の方からだんだん岸へ近づいてきました。砂地一めん、パツとあかるくなりました。文吉は、いつさんに、そのあたたかい光の方へ駈けて行つて、岩の出鼻をまがつたとき、どつんとぶつかつたものがありました。それは筬づるを背負うた、一人のおぢいさんでした。文吉もおぢいさんも、一しよに砂の上に、ころげました。そして起きあがるときには、文吉がおぢいさんに抱きおこされてゐました。

「ヤレヤレかんべんしてくれよ。わしは、今一しんに、さがしものをしてゐたのでのう。」

おぢいさんは、しわがれ聲でいひながら、文吉のきものについた、砂をはらつてくれるのでした。文吉は、びつくりした顔つきで、おぢいさんのするままになつてゐました。

おぢいさんは、もはや六十あまりの年ごろで、額にふかい皺がきざまれて、目はおちくぼんでゐました。おぢいさんは、文吉の顔を見て、

「ウム、よいお子ぢや。」

といひました。そのまま後をふりかへるでもなく、とぼとぼ歩いて行きました。

お日さまは、山の上へ高くのぼりました。砂地はぽかぽかあたたかくなりました。文吉は岩のかげに寢そべつて、

「へんなおぢいさんだな。一體何をさがしてゐたのかな。」

そんなことを考へてゐましたが、白帆のうかんだ、うつくしい海のながめはすつかり、文吉の心をうばつてしまひました。

それから、一時間ばかりもたつたころでした。

文吉は、砂地の上に寢そべつたまま、むしんに、口笛を吹いてゐました。海は大そうしづかで、時たま磯波がザザアーと、うちよせる音がきこえます。文吉は、じぶんの口笛の調子と、それに入りまじつてくる海の唄に、ぼんやりと聞き入つてゐましたが、そのとき、なむあみだぶつ、なむあみだぶつと、聞きおぼえのあるしわがれ聲が、きこえました。文吉は、はねおきました。

もう遠く、行つてしまつたことと、おもつてゐた笈づるのおぢいさんが、また、やつてきたのでありました。

「どうも心のこりでのう。もう一度さがしにひきかへしてきた。」

おぢいさんは云ひながら、何か一しんに、さがし出さうとするやうすで、前こごみに、そこらを歩きまはつてゐます。

「何をさがすの？」

文吉は、たづねました。

「親鸞さまの石ぢや。」

「しんらんさまの石？」

「ウム、親鸞さまの石ぢや。」

「おぢいさんは、時時砂地にころがつてゐる石ころを拾ひあげて、ためつすかしつして見ては、ポンとなげすててしまひます。

「だめぢや、これもさうぢやない。」

文吉は、ふと、じぶんの足もとに、波にみがかれた、きれいな石ころが目にとまつたのをひろひあげて、

「これぢやないの。」

といひますと、おぢいさんは、

「ドレドレ。」と一目見て、首をふりました。

「イヤ、ちがふ。」

「しんらんさまつて何？」

文吉は、たづねました。

「親鸞さまは、むかしのお上人さまぢや。」

おぢいさんは、前こごみにとぼとぼ歩きながら、いひました。

「それが石をどうしたの。」

「親鸞さまが、ここをお通りになつた。たつといお方ぢやけど、かうして、わしのやうな遍路すがたでな、それが、おそろしく海の荒れた日で、親は子知らず、子は親知らずといふ難所ぢや。そら、あそこに見えるぢやろ。」

とおぢいさんは、崖が海に迫つたところを指さして、

「あそこに見えるだろ、あの洞の中へお上人さまはお入りになつた。ところが、大きな波があとからあとから寄せてきて、お出になることができない。七日七晩、洞の中でおすごしになつた。そのあひだ、お上人さまは、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と、石ころを拾つては、一字一字おしるしになつた。七日七晩といへは、えらい數ぢやと思ふが、それがこのわしの目には一つも見つからぬ。申しわけのないことぢやて。」

おぢいさんの目は、そのとき、涙ぐんでゐました。

「わしは、もう行くとせう。」

と力ないこゑで、

「ぼんち、おまへは、よい子ぢや。せいだして、さがすがよいぞ。」

かういつて、波うちぎはの細みちづたひに、また歩いて行くのでした。又吉は、ぼんやり見送つてゐました。その笈づる姿が、むかうの岬のはしにかくれるまで。

「ぼくはあした家へかへるんだ。親鸞さまの石をさがさうたつて駄目だがな。」

さう考へると、たまらなく悲しくなりました。

その夕方、文吉は親鸞さまの石のことを、從兄にたづねますと、

「馬鹿だな。おまへ、そんなことほんとにしてゐるのか。」と從兄は笑ひました。

「だつて、お遍路さんがさういつてゐたもの。」

「まだそんなこといつてゐる。親鸞上人はいつの人だとおもふ。七百年もむかしの人だぜ。」

「だつてお遍路さんは、ほんきにさがしてゐたもの。」

「お遍路さんなんて、何にも知らないさ。ぼくのいふことが、うそだとおもふなら、學校へ行つて、先生にきいてみな。」

文吉はうなづきました。文吉の學校の先生は、文吉の問に、何と答へて下さるでせうか。（土田耕平著　夕燒）

この教材研究は、一の素讀の項に於いては、專ら文の文形的方法によつて研究をつづけ、二の解釋の項に於いては、意向的方法によつて、意向の組織について進行的に研究をつづけてゐる。三の鑑賞批評の項に於いては、前二項の研究を綜合して、解釋的方法に誘導してゐる。而して四の原據の研究は、解釋の周圍の研究であつて、この研究は體驗可能の度を大にし、熟知

の感情を熟せしめるものである。

學習指導案では第一時に全課の通讀を行つてゐる。これはこの文を意向的方法によつて解釋しようとする立場である。古い漢文の敎授が素讀のみを以つて滿足したのも、理由がある。しかしこれでは脆い。そこで第二時、第三時にわたつて文形的方法を適當に入れて、意向的方法を確實にしてゐる。この方法は最も穩當な解釋の方法であつて、この交融が圓滑に行はれてゐる。第四時は文節を決定させる仕事であつて、ここに意向的方法は再びあらはれ、その形を明確にする。それが第五時の主題の理解において、解釋的方法として完成するのである。その記載の省略されてゐるのは殘念である。後宮下訓導はこの學習指導の經過を、「信濃敎育」の「靑の洞門の敎材硏究及實際取扱」中にかく語つてゐられる。

以上で敎材しらべの概要を記したから以下學習指導案及學習指導の經過について記すことにする。全課取扱の所要時間を凡そ五時間とし

第一時　全課の通讀（書いてある事がらの筋の通る程度まで）。

第二時　百七頁三行までの素讀としての解釋。

第三時　百七頁四行より終までの素讀としての解釋。

第四時　主として各段落の事項を擧げ更に文節を定める。

第五時　主題の把握。

といふことにした。而して第四時の解釋の仕事にはいる前に十回以上讀むことと、全文章を一句讀も落さぬやうに視寫させることをさせ、第五時の解釋までには十五回以上讀ませるやうに工夫した。學習指導過程の方針としては、先づあるものとして讀み、次にあるものをありのままに讀み、最後にあるものをあるべき相に於いて讀ませるといふ順序を考へた。言換へると最初は文字や語句の抵抗のために何が書いてあるか分らぬから、その文字や語句の抵抗を取除けて書いてある事柄の筋の通るやうにし、次にその書いてある筋は確かに誤のないやうに讀めたかどうかをたしかめ、最後にその確かさの上に立つて如何なる意味があるかといふことを考へさせる學習過程を取らうと考へた。

さて實際の學習指導にあたり、第一、二、三時は大體指導案通りの進行が出來た。第四時（二月十八日第三時でこの時間には五六人の訓導が參觀された。）に至り、各段落の事項を項目として擧げ、更に文節について考へたところ、兒童から諸說紛紛として起つたが、結局次のやうにまとまつた。

第一節　昔の青のくさり戸（百四頁八行まで）

第二節　洞門の掘拔に着手した（百六頁二行まで）
第三節　洞門の出來る途中のこと（百十頁一行まで）
第四節　洞門が出來上つた（百十頁八行まで）
第五節　今の洞門（終まで）

この第一、二節は洞門の出來る前（私の教材調べからいふと慈悲心の發動）としてまとめて考へることが出來、第四、五節は洞門の出來上り（私のしらべからいふと慈悲心の誓願成就）として考へられる。而して兒童の仕方は洞門の出來ていくのを事件の上で見、私のは洞門の出來ていくのを事件を運ぶ精神の上で見ただけで二者その根本に於いては共通してゐると思ふ。文節のまとまりのついた時私は兒童に「本課を讀んだ上で皆で一緒に考へて見たいといふやうな問題はないか」ときいてみた。すると一女兒から禪海はなぜ出家したかといふ問題が提供された。豫期しなかつた問題であつたからどう解決の道をとつたらよいかと迷つたし、他の兒童達もこれについての解答が一人もなかつたので、これは明日しらべることにするから各自考へて來るやうに言ひつけて保留することにした。次に各段落の事項を項目として擧げた時、村人の心はだんだん變つたがその變り方を順序正しく整理して見ようといふ問題を出し、それに附隨してそんなに村人の心が變つた時、老僧はどうだつたかといふことを考へ次の樣に整理した。

村人の心の變つた順序

△①氣違扱ひ―物笑の種。

　子どもら―「氣違よ氣違よ。」

△②山師坊主のうはさ。

　じやまする。

○③今更のやうに驚く―老僧が尊いもの。

　掘抜も出來さう―我我も難儀をのがれよう。

○④のみを振るふ。

　費用を喜捨する。

△⑤あきて來た。

△⑥老僧から離れる。

○⑦恥ぢる。

○⑧仕事を助ける。

番號の所へ○△印をつけて考へて見た。さうして此間老僧はどうであつたかと考へて見たら、終始一貫村人などにはとんぢやくせず、默默とのみを振るつてゐた

といふことになつた。そこで私は、

老僧の心の變らぬのはなぜか。

村人の心の變つたのはなぜか。

といふ問題を出した。この問題は次の時間までの課題として出してこの時間を終へた。第五時の學習指導となつた（二月十九日の第三時間目で研究授業の時間である。本校訓導二十餘人、教生三十餘人の參觀があつた。猶丁度折よく金原省吾先生がお見えになられたので御指導を願ひたいと思ひ、御參觀をお願ひしたところ快く承知して下さつた。）

先づ本時解釋の仕事として、第四時に問題として兒童より提出されてゐる、

禪海は何故出家したか。

といふことについての答を求めたが、昨日同樣一人も答へるものがなかつた。實は兒童の中に菊池寛の「恩讐の彼方に」の小說を讀んだり聞いたりしてゐるものがあるので、「人殺しをしたから出家した」といふ程度の答は出るだらうと豫期したのだが、この答のないのは兒童は相當讀めてゐる爲ではないかと思つた。それでその問題はそのままにして、

(イ)老僧の心の變らぬのはなぜか。

(ロ)村人の心の變つたのはなぜか。

といふ問題にうつつた。㋑の答として、「根氣よく一心にやつたから」といふのと、「萬人の爲に安全の路を造つてやらうと決心したから」といふのとの二つの答が出、後者の方の贊成者が大部分であつたのでそれを採り上げた。㋺の答としては、「村人はうみ易いから。」「村人は出來つこないと思つたから。」「老僧の心持が村人にはわからなかつたから。」等といふ答が出た。私は「老僧の心持が村人にはわからなかつたから。」といふのを採り上げそれをしらべて見ることにした。そこで老僧の心持の現れてゐるところを探させたところ、次の事項が順次上つた。

きつと結んだ口もとには意志の强さが現れてゐる。

たとへ何十年かからばかかれ、我が命のある限り、一身をささげて此の岩山を掘拔き、萬人の爲に安全な路を造つてやらう。

此の難所を通つて幾多のあはれな物語を耳にし、どうにか仕方はないものかと深く心をなやました。

けれども老僧は更にとんぢやくしない。

神佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。

經文をとなへながら一心にのみを振るふことさへあつた。

唯默默としてのみを振るつてゐた。

それでは以上に擧げた禪海の心持の現れを村人は見たかどうかを考へて見たところ、見ることができなかつたから心が變つたといふことが解つた。そこで私は、「此處まで調べて禪海の出家したわけがわかつたか」と一度念を押して見た。わかつたといふものが四人あつて、その餘の三十二人のものはわからなかつた。そこで私はもう一つの問題を出した。

洞門はいつ出來上つたか。

これに對して

老僧が始めてのみを此の絶壁に下してからちやうど三十年目に、彼が一生をささげた大工事がみごとに出來上つた。

といふところが擧がつた。そこで私は更に、

それより前に洞門は出來上らなかつたか。

と問うて見たところ兒童は異樣な眼をみはつた、が、十人ばかりのものの手が擧つた。この問題を考へるために精讀を命じてから、再び手を擧げさせたところ、さつきの十人は五人に半減してしまつた。五人の答をきいて見ると、

「たとへ何十年かからばかかれ、我が命のある限り、一身をささげて此の岩山を掘拔き、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、神佛にちかつて此の仕事に着手した」時に洞門が出來

上つた。

と答へた。他の者にこの答についての當否を質したところ、全部のものがそれでいいと贊成した。つまり三十年目には洞門が絕壁の上に出來上り、工事に着手した時には禪海の心の中に洞門が出來上つてゐたといふことになつた。而して村人は禪海の心の中に洞門の出來上つてゐるのを見ることが出來ず、唯穴を見、洞穴がかなり深くなつてやうやく洞門になりさうだと考へたくらゐだから、心が變つたのだといふところまでわかつた。

次に私は「禪海が諸國の靈場を拜み巡つたのはなぜか。」ときいたところ、「あはれな困つてゐる人を救つてやらうと思つて。」又「萬人の爲に安全な路を造つてやるためだ。」と全部のものが答へた。ここで土田耕平氏の「さがしもの」(「夕燒」所載、これは科外の讀物として以前に取扱ひ問題を殘しておいた。)と連關して取扱つてから、最初からの問題の

禪海はなぜ出家したか。

にかへつた。この時は大部分のものが、その理由がわかつたと言つた。答としては、

親鸞さまの石をさがすためだ。

萬人の爲に安全な路を造つてやるためだ。

の二つに一致した。そこでこの答を本課の主題に結びつけるために、「萬人の爲に安全の路を造

つた人はほかにもあるか。」と問うて、「釋迦」(卷十二第十九課釋迦)を要求した。釋迦の慈悲心と禪海の慈悲心と比較して、釋迦が「永遠に生きてをる」ことと、禪海一生の苦心は永久に青の洞門が物語ることと結びつけて考へた。かうして本課の學習指導を終へることにした。(昭和十年四月號)

西尾實氏が「國語國文の教育」に於いて、「文學作品の研究及教授の體系は、讀みに於て成立する素朴なる直觀を基礎とし、これに反省的判斷を加へ、更に價値判斷を成立させる過程である」と言つてゐられるが、文の解釋的方法も亦、讀みに於いて成立する素朴なる直觀を基礎とし、これに反省的判斷を加へることによつてなる。素朴なる直觀を基礎とする處は、意向的な方法であり、反省的判斷は文形的方法である。この二つの方法の上に成立つ價値判斷が解釋である。ここに言葉の解釋の道がある。

補說一。吾等は言葉を語られた以上に深く知り得るのであるが、同時に言葉を知り盡すことは出來ない。しかしこれは何も言葉に限つたことではない。今卓上にある一つの果物でも同樣である。知り盡し得なくても、言葉に深く入り得る。卽ち言葉を理解し得る。

何故言葉は理解し得らるるのであるか。これは言葉の成立の事情によるのである。言葉は理解せらるるやうに表現せらるるやうに作られてゐる。理解せらるるやうに成立し、表現せらるるやうに作られてゐるから、それが理解せられ、表現せらるるのは當然である。手にはまるやうに作られた手袋が、手にはまるのと同一である。鍵孔にその鍵がさしこまれるのと同一である。そしてかかる成立による共通は一切の文化に共通してゐる。衣服、食物、住居、その他一切にこの共通連續性がある。この共通連續性によつて結成せられるのが、文化團體である。言葉を語り、言葉を聞くのは、この文化の連續性であり、解釋の可能も亦、この連續性であると考へなくてはならぬ。

補説二。解釋の心理過程は、第一に迫らるるものを感ずる。吾等に解釋を迫るものの存在を感ずる。そしてその迫るものの中に、それを體驗することが、可能だといふ感がある。その體驗可能の感が確實になつて行くと、分つたやうだといふ感になる。だがまだそれは分つたやうだが言へない、何がわかつたのか言へる程にはなつてゐない。それが言ひ表し得るに到れば、迫力を以つて自分にせまつたものが、既に把握され、熟知されたるものとしてあらはれて來る。熟知の感は、自分に對して親しさを持つものであつて、この感の中で理解は落ちつく。時によ

れば熟知の感が先に立つて、體驗が可能でないにも係らず、熟知せられたるものの如くに感ずることがある。例へば「よろしく言つてくれ」といふ風な傳言、その傳言を傳へられた相手、何れも「よろしく」の意味は必ずしも明瞭ではない。にも係らずそれが實に明瞭であるが如くに感ずる。流行に對する理解にこれがあり、親友の言葉に對してこれがある。これによつても熟知の情は理解の著しい特色なることを明かにする。熟知の感は安靜である。しかしこの安靜のあとから、はじめの迫力が復活して來て、緊張し充實した心持になる。自分が擴大し發育したと感ぜられ、緊張し充實したと感ぜられる。この迫力によつて一貫されるのは、意向の持續によるのである。ここに於いて理解の働は完成したと感ぜられ、理解の明證が與へられる。

嘗て繪畫に對する展開の過程を記したことがある。

畫面に對した時に吾等の上に現れる意識展開の過程を吟味する。第一にはそれが整へられ、緊張せる意識の狀態である。それは態度或は傾向の意識と呼ばるべきもので、將に起らんとするものに對する豫期の態度である。ここには、豐富なる可能的狀態がある。然るに第二の過程に於いては、その緊張せる意識に物の來てふれる感がある。その接觸に對して、吾等の意識は何等かの態度を取るべき事を要求する。もしこの時その接觸が吾等に何等の態度をも要求せぬ時には、それは吾等に對して何等の價値なきことを示すものである。第三の過程はこの接觸或は輕打が、意識の態度と一致すれば、接觸の箇所から四射する光を感ずる。これと同時に意識は明るくなり、生生として生長する。そして光を感ずると同時に、全體に響き渡るが如き響を感ずる。この光と響との中に意識は明るく眼ざめて來る。そして

第四過程に於いて意識は整然として緊張して明るくなり、最初意識を覆つて居たやうに感じた薄い霧は、漸く消失して、畫面よりの印象がだんだん緊張して來て、表象となる。それと共に腹から胸にかけて重く物の滿ちて來る感がする。そしてその光と音とは表象を統一する基本的なるものとして殘る。卽ちこれが力の感じである。力の感じの中に發展して來た表象の世界である。然してこの時吾等の意識を滿すのは、畫面から來る表象の系統である。

かういふ意識の明暗は、これを理解の心理の場合にも反省し得るやうである。

附錄一　童　話

一

私達の子供の頃の事を考へると、教育も實に進歩したものである。私は子供の頃から畫がすきであつた。しかしそれは明治二十五年頃の事で、今の様に調法な色鉛筆やクレヨンなどもなく、父の硯箱の中の墨だけが材料である。色はただ朱墨の一色である。この朱の一色を美しい色と思ひ喜んだことがありありと思ひ出される。それに比べると今の子供は、驚くべき程に色の濫費をなしてゐる。色がさうであるばかりでなく、紙なども中中手に入らなかつたものである。今も私の五つの頃の畫が保存してあるが、それには三錢とかいてある。何かのお義理に來てくれた金包の紙である。三錢位もつて行き來してゐた頃である。紙は貴いもので、新らしい紙は子供が書き捨てるには勿體ないものである。私は母にせがんで、さういふ紙包の廢紙などをもらひうけ、それに毛筆で畫を畫いた。紙が手に入らぬ時は、姉の本でも何でもひろげて、その餘白に畫をかきこんだ。姉は私に畫をかかれてしまつて泣いて居たことがあつた。八幡太

郎の雁行を眺めてゐる上に、私は黑黑と鼻汁をたらしてゐる子供の顏を畫いてしまつたのである。今の小供は畫學用紙に、思ふまゝにクレヨンでかいてゐる。紙やクレヨンを大事にしろといつても大事にする氣が出ない。境遇が私達の頃とは全く變つて來たのである。

やや長じて小學校も上級になると共に、美濃紙の礬水引に毛筆でかくことを習ひ、一心に摸寫をはじめた。圖畫とは摸寫といふことであつた。私の祖父は、私を愛し、私の畫にも何かと注意してくれた。畫法とか筆力とかいふことを祖父からきいた。祖父は何も畫の修業をした譯でもなく、また畫論をよんだ譯でもないが、畫がすきで、すきな畫から感じたものを、私に向つて要求したのである。一枚出來る毎に私は祖父にみせに行つた。祖父は今日私が畫論の研究に專念する樣になつた種をまいてくれたのである。そこに島木赤彥先生が顯れた。そして畫の道は寫生以外にない事を敎へて下さつた。これは私には大きい驚きであつた。この寫生の道はその後絕えず進步して、今はこの道を疑ふものは全くなくなり、正直な眼と心とを、自然に向つて開いて來た。家の小供達の畫く畫を自分の幼時の畫と比較すると、流石に年月の經つた事と、世の進步した事とを强く感ぜしめる。

二週間ばかり前に、國に歸つた。土藏の中で自分の書物など探がしてゐると、そこに長男がやつて來た。長男は國に居て尋常小學校に通つて居る。その時棚から大きい白い石が出て來た。私は長男を呼んで方解石をやるといつて、その石を手渡した。よろこんでその石を手にとつてゐたが、おかしいぞと言つた。これは方解石ではないと言ふのである。「だつて爪で傷がつかないぢやあないか」と言ふのである。方解石を私は既に忘れてしまつた。私達が小學校の頃にも勿論理科があつた。「葉は網狀脈葉にして根に鬚根あり」といふ風な記述を、ただ書物の上でよむだけである。それは少しも自分の生活に入つて來ない。少くとも理科と國語との間に、區別はなかつたものである。それに比べると何といふ差であらう。今の子供は手に持つたこの岩石を、色や形の上ばかりでなくて、先づ硬度で檢し樣としてゐる。さういふ科學的な方法が、この十二三の子供の中に、何の無理もなく、すらすらと採用せられてゐるのである。長男はその白い石塊を持つたまま外に出て行つた。そして間もなく片方の手には同じ樣な白い小片を持つてはいつて來た。これは石英である。私をくらい隅につれて行つて、小さい石英片で、私の與へた石をこすつた。火がぱちぱちと石の間に小さく輝いた。そこでこれは方解石でなくて石英だといふのである。私は「なるほどなあ」と言つて笑つてゐた。かくの如くして、科學的な生活が、もうちやんと少年の心の生活になつてゐる。父の言葉でも其れだけでは直にオオソリテ

イを持たぬ。吟味してその上で從ふといふ、批評的な乃至は實驗的な精神が滿ちてゐる。

またかういふことがある。昨年の冬私の長女が三つで帶結びの祝をして、こちらの氏神—諏訪明神であるが、そこに妹につれられてお參りに行つた。私の家は神社にも寺にも緣の少い方で、この子も一度もお參りといふことはしなかつたし、家にも佛壇神棚共にない。いはば汽車の中の樣な生活をしてゐる。長女がかへつて來たから、「神樣が何といつた」と私はきいてみた。すると「居なかつたの」といふ返事である。「團子坂の方へ御用に行つて居なかつたの」といふのである。あのお社の奧の方に居るといつても、どうしても、承知しない。自分は神樣に逢ふつもりで行つたので、逢へなかつたのが殘念だとみえて、兄達にも神樣が御用に出てしまつて留守であつたことを、繰り返して話してゐた。この頃はもうあまり言はなくなつたが、時時思ひ出してそれを言ふことがある。その奧に神樣が居ると言はれても、自分が眼でみなくては承知出來ない。居る筈の所に見えないので、これは團子坂に用事に出かけたものに相違ないといふのが、この子の解釋であつた。この見たものでなくては信じないといふ精神は、正しく私達の少年期後に、少年達の心にあらはれたものである。

もつとも私達の時代にも既に、實驗的な精神があらはれかけてはゐた。私が諏訪明神にお參りに行つたことがあつた。子供でも年に一度や二度は、明神樣にお參りに出かけたものであつた。祖母がその時風邪をひいてゐた。諏訪ではその頃、御柱の削つたものを煎じてのめば、風邪のなほることを信じてゐた。御柱を削つて來る樣に祖母にたのまれて、五錢の白銅貨を一つもらつた。明神樣からかへつて來て、村の入口に來た時に、祖母から賴まれてゐた事を思ひ出してはつとした。私は今橋をわたりかけてゐた。私はふところから小刀を出して、橋の欄干の端を削つた。それを紙にくるんで行つて祖母に渡した。祖母はそれを煎じてのんで、風邪がなほつた。大した風邪でなかつたに相違ない。祖母は私に禮を言つた。しかしかういふ行爲は科學的精神からではなくて、皮肉な反抗的な心持でやつたことであつた。

私は十一二の頃には、「保元物語」や「平治物語」や「太平記」や、さういふ古典によみふけつた。その當時は子供の心に響く樣な少年文學は無かつた。僅かに巖谷小波氏の童話があつた。しかしこの童話は、小供にもわかり得る程度に、やさしく書きかへた物語である。それは少年の感ずる世界を描いたのではなくて、少年にもわかる位に碎いて描いた世界に過ぎない。それは一つの筋であつて、筋が結末に向つて急ぎ、めでたしめでたしで終る程度のものであ

る。そこには少年の世界はない。故に摸寫ではじめた圖畫や、暗誦ではじめた理科の樣に、少年の世界といふものを持たなかつた。成人の世界を書き砕いたものの世界、言はば成人の着物をそのまま縫ひ縮めたに過ぎない世界の中に住んで居たのである。

かういふ自分達の時代に比べると、今の少年の時代は、實に豐富であると言はねばならぬ。少年の世界が獨立の價値を持ち、算術理科地理歷史その他一切のものが、少年の生活になつて來たのである。部分部分には兎角の評はあるであらうが、全體として、少年の敎育は發達した。すべてを批判と實驗との精神で見て行かうとしてゐることは、驚くべく喜ぶべきことであると言はなければならない。

しからば、童話の世界も亦、單なる筋ではなくて、更に深い反省と批評と實驗との精神でなされて來なくてはならぬ。わが友土田耕平氏の「蓮の實」の如きは、かかる精神を示した貴重なる文學である。自分がこの書に就いて書くことの喜びを感ずる所以である。

二

「蓮の實」の著者は、劍道の達人「淺山一位齋」の中に次の如く柳生十兵衞をして語らしめ

てゐる。

おまへにはまだ分らんだらう。淺山氏ほどの名人になると、ただ相手の太刀すぢを見て滿足するのぢや。で若い相手に花を持たせて勝をゆづらうとする。先刻もこのわしに勝をゆづらうとしたのだ。どうしてなかなか恐るべき太刀すぢであるぞ。

この太刀筋をみて滿足するといふ心持は、この達人の心境であると共に、またこの作者の心境である。太刀筋を見るのは筋をみる心ではない。筋をたどつて行つて、到達した境地のみを重んずる心ではない。結末に到達しなくては滿足し得られぬ、さういふ心持ではない。必ず一方を勝たしめ、一方を敗けさせるのでなくては、仕合をした氣にならぬ樣な、さういふ心ではない。筋の興味は結末にある。紛糾した事柄が段段に解けて行つて、一つの結末に到達する。到達した時にほつとする。かういふ結末を望む心は、結果の興味にのみ引かれてゐる。その太刀筋を味ふ樣な清冽にして澄徹した境地ではない。太刀筋を味ふ心は、一歩一歩を味ふ心である。太刀の一打、足の一足、それを味つて行く心持である。この心でなくては、劍道は僅かに相手を淩ぐだけの技術である。この心でなくては童話は、相手を釣るだけの技術である。

この筋を重んじないといふ心は、氏をして「谷へ落ちた話」や、「西行の戻り橋」の如きもの

を書かしめて居る。藤原陳忠が信濃守の任がはてて、木曾谷をかへつて行く途中、崖の下にころび落ちた。陳忠は谷底から上に呼びかけて、籠をおろさせて、第一に平茸をとつて入れて上げ、次に自分が乘つて上つて來た。

「でも、まあこの大事の場合に茸などは――」

と家來の一人が云ひかけますのを、陳忠はさへぎつて、

「だからおまへたちは駄目だ。むかしのことわざに、ころんだところで土をつかめ、といふことがある。この平茸を見てただかへられやうか。まだまだ澤山あつたのに惜しいことだ。」

と云ひました。家來たちはもう何にも云はず默つてしまひました。興ざめた顔をして、それぞれの持馬にまたがつてまた旅行をつづけました。陳忠の心は大膽なのか強慾なのか、とにかく並はづれたふるまひが人人の心を喜ばせませんでした。

と言つて、この話を結んでゐる。

この不可解を不可解として、さういふ人の心に觸れて行く態度は、意味深いことと言はねばならぬ。不可解を不可解とする素直な心は、かへつて一層深く心の底に探り入り、求め入る深さを與へる。これは結末として與へられたものでなくて、探求として與へられたものである。これより探り入つてはじめて、この話は完結する。この故にこの童話の終つた所は、直に次の探求の始まる處である。筋の童話は、童話の終つた處を以つて、すべてが終結したものとなる。

これとは非常な相違としなくてはならぬ。この不可解を不可解とすることは、かへつて童話に深さを與へてゐる。明晰の感と、必然の感とは、ここに傾向として一層強く準備せられてゐる。不明晰と見ゆるものは、かへつて明晰である。

「西行の戻り橋」では、西行が別所の北向觀音に詣でようとして、鹽田の原に休んでゐると片手に一握りの蕨を持つた男の子供が、「法師さん、火ノキガサ着て頭を燒くな」といつたことを書いて來て、

西行法師は何心なく橋の上へ渡りかけました時、

「ヒノキガサきて頭を燒くな。」

と云つた男の子の言葉がふとおもひうかびました。そしてあの美しい賢さうな顏が、チラリと目のさきに浮びました。西行法師は橋の上へ一足踏みかけたまま、何か考へこんでゐましたが、つと踵を返してもと來た道の方へと歩き出しました。そして夕靄のたちこめた奥深く西行法師の檜木笠はかくれてしまひました。はるばる訪ねて來た北向觀音へ、お參りもせずに、なぜ西行法師はひき返してしまつたのでせう。また再び男の子に行き逢つたでせうか。誰も知る人はありません。その湯川の橋は、今もなほ西行の戻り橋と云ひ傳へられてゐます。

と結んでゐる。

この童話でも、西行の後戻りした理由については、何とも言つてゐない。この理由はあとま

で氣にかかる疑問として投ぜられてゐる。私はこの理由が不明であつたから、著者にその理由如何をたづねた。その答によれば、それは著者にも亦不明であるといふことであつた。するとこの不明は、讀者に問題として與へられたばかりではなくて、著者にも亦問題として殘されて居るものである。

不可解を不可解として殘して、それが一層深化の基礎となるには、作者が先づそれに對する明晰な解釋をもつて居なくてはならぬ。作者の持たぬものは、與へ得ぬからである。この點に於いて、戻り橋は完備したものとは言へないであらう。しかし數學には不能問題がある。不能問題では不能なることが明晰であれば、それは解決のついたものとされる。然らばここにもこの戻り橋の原因の不明をば、明瞭に不明として、そしてかかる不明の原因によつても、人は動かされるものであることを明かにすることが大切ではあるまいか。人の行爲の原因となるものは、明瞭な動機に限らず、それ以外に不明瞭な、自分自身にも眞意の疑はれる樣な不思議な理由によつても、また爲されるものなることを明かにしたい。この不明はそれ自身不明であるといふ狀態のままではなくて、かへつてこの不明の故に心の深さをより切實に感じさせる。ここまで來て、作者の太刀筋を見るといふ心がけは更に確かになるのではあるまいか。かくてかかる不明なものの中に、一層深く一層廣い明晰の感と必然の感とがあるではあるまいか。

この道を進めたものは、「蓮の實」巻頭の「守り柿」である。「守り柿」は氏自身も語つた様に、氏がこれからの童話の世界の指標となるものであるといふから、これをやや精しく考究する事は、意味あることであると思ふ。

三

「守り柿」は、梢に高く取り殘された柿の生活を描いてゐる。そこで第一に此の形體の問題であるが、これはまだ十分に透明だとは言へない。たとへば最初の

柿の木の枝一ぱい鈴なりになつてゐた實が、ある日みなもぎとられて、梢に守り柿が一つ殘されました。守り柿といふのは、また來年もたくさんの柿がなるやうに、守り神さまとして一つ取りのこしておくのであります。

といふ記述などは、少したどたどしい。これは

柿の實が枝一ぱいに鈴なりになつてゐました。その實がある日皆もぎとられて、梢に柿が一つ殘されました。これが守り柿です。守り柿といふのは、また來年もたくさんの柿がなるやうに、守り神さまとして一つ取りのこしておくのであります。

と書きなほされた方が、たどたどしくなくて、かへつて平明であらうかと思ふ。同樣に、

とんきような聲におどろかされて、何ごとかと見ますと、毬栗頭（いがぐりあたま）の腕白さうな子供が木の下からあふむいてゐました。

とんきやうな聲におどろかされて、何ごとかと見おろしました。すると毬栗頭の腕白さうな子供が、木の下からあふむいてゐました。

といふ處も、また

とかいた方がよいと言ひ得る。

守り柿は、毎日うとうとと居眠りばかりしてゐましたが、ある朝のこと、

「旨さうだな。僕食べてもいいの?」

「まあほんとに旨しさうなこと。早く食べないと今に落ちてしまふわ。」

こんな聲がしますので、何かとおもつて目をあけて見ますと、かたはらの枝に親子の鴉がとまつてゐました。

の中、「まあほんとに旨しさうなこと」云云の會話は不要である。また

子供はと、見ますとまだこちらを見上げてゐますので、「奴(やつこ)さん、なかなか根氣がよいわい。」とおもひました。子供は

「おお寒い。」

と胴ぶるひして、やにはに駈けて行つてしまひました。

も、之を省略して

子供はと見ますと、まだこちらを見上げてゐましたが、

「おお寒い。」

と胴ぶるひして、やにはに駈けて行つてしまひました。

とする方が、かへつて明晰であるかもしれぬ。

　守り柿は、むかふの岡にふと犬の姿を見て、猫がはげしく駈けて來た理由がわかりました。（猫なんて恐さうな顔をしてゐても、存外臆病な動物だなとおもひました。）

の括弧内や、

　守り柿の（小さな）命は、お日さまの限りない光のなかに吸ひこまれて行くのを感じました。

の括弧内は共に不要である。

その他、これを或は誤植であるかも知れないが、「並間の柿」「横向」の如きも、「仲間の柿」「横面」の方が、一層適當でもあり、また普通でもあるかと思ふ。

更に柿の所にあらはれた親鴉の如きは、男性か女性かその性が不明である。作者は之について女性であると私に語つた。然らば

　親鴉が

　「ああこれは守り神さまだつたね。坊や、食べてはならないよ。」

といふ會話を、

　「ああこれは守り神さまだつたわね。坊や、食べてはならないよ。」

とすれば、「わ」の一語で、女性であることが理解せられる。かういふ工夫をしてもよいと思は

れる。

文章の一般性として、考へ味つて行くべき性質のものは、文章の形は單文でしかも短かい方がよい。論理によつて發展するものでは、一層短かく單純でなくてはならない。之に反して感情に訴へて、感情の絲で捉へようとするならば、その形は必然に複雜で一文一文の單位形が長くて、縷縷として絕えざる如きものでなくてはならぬ。この「守り柿」は感情の渦卷の中に、激しい勢でまき込む樣な性質のものではなくて、靜かにしみじみと、味ひ進むべきものである。隨つて短かい、そして單文形のものを基礎とすべきである。この點で土田氏の表現は、時に自分を疑はせた。これは先に自分の上げた例の中にも、見らるる所である。

しかし此等の點を外にして、氏の記述は可成り精緻であり、且適確である。柿が取りのこされて、

高い木の上にひとりぼつちとなつた守り柿は、ぞくぞくと寒いたよりない氣持になりました。そのうちに、守り柿のからだはだんだん赤らんで、かたい肉は糊のやうにやはらかくなつて來ました。守り柿は、每日うとうとと居眠りばかりしてゐました……

といふ所にも、その精緻と適確とがある。それからまた子供が來て、守り柿に石を投げてゐる

所をかいて、

守り柿が眞赤になつてゐるところへ、たちまち第二の石つぶてが來ましたが、今度は一間もむかうを過ぎて行きました。第三第四のも、守り柿のそばへは來ませんでした。

「それ見ろ。」

と勝ちほこつた氣持でゐますと、突然はげしいめまひがして、世界がまつくらになりました。やうやく我にかへつた守り柿は、

「たうとうやられたか。」

とおひましたが、目をあいて見れば別に變つたことはありません。さては石つぶてが枝を打つたのだなとさとりました。

それから冬が來る。

夜は星空がきらきらと冴え、朝は眞白く霜がおりて、あたりの景色は見る見る冬枯にうつつて行きます。が、やがて忘れたやうに、小春のうらうらしたお天氣がめぐつて來ました。守り柿のからだには深い皺がより、赤い肉が變に透きとほるやうになりました。そしてひどく力ぬけしたやうに感じましたけれど、暖かいお日さまの光にふれると、やつぱりたのしい心持でした。

かういふ柿の衰へや、衰への中にも感ずる一つのたのしい心持が、靜かに出てゐる。かかる境地に來ると、柿のことを書いてゐるこの描寫が、むしろ作者自身を描寫してゐる樣に思はれる。作者の生活が、我等に示してゐるものも、この靜けさに外ならない。この友の作物には、體力

の感じがない。作者が肉體を持つてゐるといふ事を感じさせない。この點では晩年の西行に感ずるものと、同じ性質である。これに比べると、同じ詩人でも一茶には、體力をひどく感じさせる。肉體そのもので感じ、肉體そのもので表してゐる様な、生理的な强い力を感じさせる。然るにこの作者は、體の感をすててゐる。體は感ずるものでなくて、感ずる働の暫しの據り所である。一茶の世界は、體なしには感じられない世界である。一茶に體のあること、一茶の體を感ずること、これが一茶の世界の先行である。けれどもこの作者には、體のあることを感じさせない。體なしにもこの世界の有り得ることを感じさせる。かういふ澄んでやや寒い程の世界は、實にこの作者特有のものといはねばならぬ。かかる消息をこの描寫の中に感ずることは、自分にはかりそめ事とは思はれぬのである。

四

「守り柿」は、守り柿として取殘された柿が、冬に向つて漸く變つて行く姿をかいてゐる。世に殘り、生きて行くものの寂しさをかいてゐる。この童話に向ふ時に、そこには柿の世界を通して、吾等にもつと廣汎な人生の姿をしみじみと思ひうかべしめる。

吾等の生活で生きるといふこと、經驗するといふこと、それだけでは何の價値もない。それ

は金魚もしてゐれば、兎もしてゐる。經驗の度數の多いといふことだけでは何にもならない。經驗は經驗のままでは、單なる一つの現象にすぎない。これが精神上の事實とならねばならぬ。この經驗の道から離れて、再びその經驗の迹をふりかへつてみる。經驗はこの働の中で、はじめて生活上の事實となる。生活の體系となる。換言すれば經驗が體驗となる。ここに生れて活くることの價値がある。藝術が吾人の生活をより深くより廣き生活たらしむる所以は、藝術が吾人の經驗を體驗たらしむる力ある故である。童話が少年の世界に貢獻するのは、それが生命の問題となることに依つてである。卽ち少年の經驗を體驗たらしむることに依つてである。理科は既に少年の體驗となつてゐる。圖畫も亦少年の體驗となりつつある。然らば童話は如何。この點に於いて、土田氏の童話を意味あるものとみねばならぬ。

「守り柿」にあらはれて來る程の事實は、すべて日常茶飯の出來事である。驚く程の特異性も、新鮮性もない。しかもこの平常なる、觸目の世界を、深く深く體驗せしめて行く所に、驚くべき特異性と、新鮮性とがある。日光の中で熟して行く柿、日光の中にまどろむ柿、そしてその中に遭遇する時時の恐、喜、何れも、人生の姿として、少年の精神生活の中に、體驗せられるのである。柿の姿の中に、直接に、この人の世の生涯を感ずるであらう。何等の筋もな

く、何等の煽動もない、かかる平坦な物語が、かくまで深く省察の世界を示して來たことは驚くべきことである。

そして最後にこの柿は地に落ちるのである。

守り柿はひとりこんなことを考へながら、はるかの空をながめますと、お日さまが今や山の端にかくれようとして赤赤とかがやいてゐます。守り柿の小さな命は、お日さまの限りない光のなかに吸ひこまれて行くのを感じました。

「お日さま、もはや私のつとめは終りました。」

と守り柿は云ひました。つぎの朝、守り柿の姿はもう梢に見えませんでした。

これが柿の最後である。ここには信ずるものの靜けさ、つつましさがある。自分のなすべきをなし遂げた尊さがある。「お日さま、もはや私のつとめは終りました」といふこの言葉は淺くて短かいが、世にこれにも增した深い滿足と感謝とがあり得やうか。人の世の最後にこの言葉を以つて、この世を辭し得る人があつたならば、何れにも增して尊き活き方をしたものと言はねばならぬ。

ここまで子供が感じ得るかどうかは、私にはわからない。しかしこの物語は、口で語つては何にもならぬものである。口で語るにしては、あまりにそつ氣なさすぎる。語るほどの筋もな

いものである。よませなくてはならぬ、語られずして、讀まれねばならぬところに、この物語の價値がある。語ることは、よむことよりも淺い。

子供が讀んでどこ迄達し得るかは、私にはわからぬ。子供の氣根の問題である。最低なる氣根に與へるものを想像すれば、それは柿の殘り、しなび、落ちて行く、一連續の經過に過ぎないかもしれぬ。しかしこの經過も必ず何かの陰影を作ふに相違ない。陰影の作はない言葉はなく、ことにこの作者の童話にはそれが濃いからである。しかしてこの陰影はやがて少年が青年となり、青年が壯年となり、老年になるに從つて、一層濃くして確かなものとなるに相違ない。この童話の生長性は、童話が單なる少年相手のお話たるの域を脱して、一つの完全な文學となり得る價値あることを示す性質である。

故に著者は「卷末小記」に於いて、

童話は一の文藝としてどれほどの位置に立ち得るものであらうか。さういふ事は作者たる自分にとつて重要の問題ではない。たゞアンデルセンの作などに對するとき、何とも云ひ難い「童話の世界」の美しい滑らかな存在を感じる。そして、自分も何卒この「童話の世界」に永く遊んで見たい欲求をおぼえる。童話は讀者の目安を兒童におくことも言ふまでもない。けれども制作時の心持は專ら作者童心の動きに從ふのみであつて、他のために計らうとの念は少しもまじらぬ。それが結局するところ兒童を眞の意味で「樂しみ」の道に誘ふ所以ではあるまいかと思ふ。若し作者童心

の滿足と讀者たる兒童の利益と一致せぬものとしたら、自分は童話制作の筆を乘てるの外ないと思つてゐる。

と言つてゐるが、作の目安を兒童に置くといふことは、それが兒童だけに限られた世界である ことを意味しない。兒童を對象としつつ、兒童以上の世界のあることが、童話の文學としての 價値であり、「童心」の更に展開し得る可能をを有することの歡びである。

「守り柿」の中にある思想は、決して思想そのものではない。思想ではないが、やがて思想 となり得る傾向を有するものである。思想に非ずして、思想たり得るものである。この場合、 思想に非ずと言ふのは、童心なる所以であり、思想たり得る可能態といふことは、童心が一層 高きものに展開發達し得る可能態なる所以である。換言すれば作者が少年に非ずして猶童心の 動きを有することは、童心がひとり少年の所有に非ずして、成人の中にも活活として猶存在す ることを示してゐるのである。少年が吾等成人の愛すべきものである限り、童話も亦成人の愛 すべきものであるに相違ない。作者童心の動きに從ふより外に、童話の道なきことを示してゐ る。これ少年が成人を動かすに、童心の動きに從ふより外に、道なきと相應ずる所以である。

自分は二十五年餘の昔に、アミチースの「クオレ（學童日記）」を讀んで、激しく感動した記 憶がある。「蓮の實」の所感を記すに際して、再び之を讀みかへして見たが、もはや感動する事

が出來なかつた。かかる兒童の世界の中に死滅してしまつた物語に對するにつけても、「蓮の實」の童心に根を置くことの深さを感ずるのである。アミチースの物語が吾人の少年時を強く感動せしめたのは、決して根本的な行き方ではなくて、ただ少年の理解と情感とに迎合したに過ぎなかつたことを知らしめる。かくては童心を動したのでなくて、童心を迎へたものである。

五

かういふ人生の自然に依つてゐる事は、「守り柿」の次の「兎たち」にもあらはれてゐる。兎達の生活の倫理的意義を、倫理的方法で規定せずして、人情の自然として描寫してゐる。兎達は獵師が出たと誤認して、病氣の小兎を棄てて逃げてしまつた。兎達が再びその小兎の所に歸つて行くと、小兎のトム公が、

「みんなよく來てくれた。僕を見すてないでくれて、こんなうれしいことはない。」

と言つて喜ぶ所で終つてゐる。かかる味は、倫理を教ゆるものでなくて、倫理に感動せしむるものである。この倫理を述べ教ゆるものとしてでなくて、感じ動かすものとして示してゐる所に、氏の童話の倫理的特色をみるのである。倫理を規範としてに非ず、人情の自然として示し

てゐる。かういふ中に氏が「卷末小記」で「童話の世界」の美しい淨らかな存在に住みたいと言つてゐる意味を、如實に感ずるのである。

淨らかさとは、思想が倫理とならず、倫理が規範とならず、人情の自然として、童心自身の有つ傾向として、描かれて居る狀態を言ふのである。存在として示されず、可能態として示されてゐる事を言ふのである。

島崎藤村氏の童話と、此の作者の童話とを比べてみると、誰でも展開の方向の全く異つてゐるのに、氣づくであらう。藤村氏は書かうとする材料を心であたため、そしてその世界が、今の世界即ち作者自身の今の世界と、如何に關係してゐるかといふ點に、興味の中心を置いてゐる樣である。木曾の谷をかく。それは幼い頃に感じた木曾の谷である。そしてその木曾の谷が、今の藤村氏にどういふ形で存在するかといふ點をかいてゐる。今の心であたためた過去である。今の眼でみた子供の世界である。換言すれば少年の世界が成年の世界に展開してくる姿でかく。この展開、下から上に向ふ展開の放つ香氣が、藤村氏の獨自な香氣である。

然るにこの作者の香氣は、之と方向が全然反對である。作者の童心を、そのまま少年の童心たらしめようとする。作者の感じた世界がそのまま子供の感じたものである。或は子供の感じ

ようとしてゐるものの世界である。藤村氏が成心を以つて童心を活かさうとする時に、この作者は童心を以つて童心たらしめんとする。成年にある童心を、そのまま子供の童心にみようとするのである。下から上への展開ではなくて、上から下への展開である。子供の世界がどうして、成人にも價値あるかでなくて、成人も猶如何に童心を持つかである。成人の中に子供を見るのでなくて、子供と成人とを同じものとみるのである。さればこそその童話には、同じ作者の短歌の中にはみられぬ様な、晴やかさもあれば、またユウモアもある。

しかしユウモアと言つても、それは口まで出るか出ないかと思はるる程の、秘やかな笑である。胸がほつとあたたまる程の笑である。笑つたあとがすぐに寂しさに消えて行く程のユウモアである。笑はうとする自分を、寂しい自分がみつめてゐるユウモアである。枯芝の上にさした冬の日の光ほどのユウモアである。

私は十何年前、この作者と同じ部屋に机を並べてゐた。初夏の夕方などによく人の氣をかねながら口笛をふいてゐた。私はその口笛をきくと、さびしくて居るなと思つた。和文英譯などになやんでゐたあの頃の作者の姿は、今もなほありありと自分の眼にある。ある夜伊豆の方へ旅をしようと言ひだした。私はそれよりもその時間で何か勉強したがよからうと言つたが、この

友はその旅の心を捨てなかつた。自分の棚から書物を取り出して布呂敷に包んだ。二た布呂敷である。それを兩手にさげて出て行つた。旅費を作りに行つたのである。二時間ほどたつと再びその風呂敷包をさげて歸つて來た。風呂敷包の底には泥がついてゐた。重くて道の土の上に置いて休んだのである。思つた金高にならなかつたのである。そのまま書物を棚にかへして、布團をしいて、頭まで布團をかぶつてねてしまつた。しばらくは眠れぬ樣であつた。その書物の中には、ゴリキイの「スリイ・オブ・ゼム」の英譯などもまじつてゐた。これは雜司ケ谷の宿で、窓の外からは柔かい木の芽の香がかほつて來るしめつた夜であつた。私はその夜のことを今猶時時思ひうかべる。

その後大島にもゆき、信濃にもゆき、今は攝津にゐる。しかし君はどこへもこの生活を持つて行つたのである。この童話の中に、昔のさびしい樣な口笛の心を感ずるのである。あの寂しいこころねを感ずるのである。寂しさでみてゐるユウモアを感ずるのである。このユウモア、例へば「寒山拾得」にある樣なユウモアを感じ得る迄には、わが友も長い年月を經て來たのである。

今の世に行はれてゐる少年讀物の多くは、ロマンチックなものである。この世にはあり得ぬ

樣な極めて特異な世界である。劍術、忍術、探偵、道德。何れもこの世では不可能な境地を以つて童話の世界を形づくつてゐる。そしてその不可能さが益大であれば、益その讀物の價値と興味とが大である。しかしかかる激しい唐突は、少年の心を險難にする。もつと平坦な平常の世界にあつて、深さを求めねばならぬ。講談を愛讀し、活動寫眞に心を奪はれてゐる東京市井の少年の間からは、數學者や哲學者を豫想する事すら困難である。食物にも、器物にも、談笑にも、平坦な田園の中にこそ、藝術と眞理との將來を希ひ得るではあるまいか。

さういふロマンチックな、そして唐突なる現世の中にあつて、土田氏のこの童話は、靜かにして寂しい平坦な道を歩いてゐる。しかもその道は童心の共通を豫想した、質實な道である。氏の童話が自らにしてクラシックになる譯である。現代の生活は現實の姿としては平俗である。思惟の姿としては唐突である。夢みて平俗に墮するのが、現實の生活である。かかる姿は發行部數の最も多いと稱せられる大衆雜誌或は婦人雜誌をみれば直に明瞭なことではないか。危險といふことを言ふならば、先づ是等のものこそ排せられなくてはならぬ。眞理と塵埃とを同坐させ、藝術と快樂とを混合せしめるからである。吾等は眞理を眞理とし、藝術を藝術とする高い態度を、高い傾向を、先づ少年に與へねばならぬ。尊ぶべきものを尊び得ぬ現代は、最も深き憂である。童話は傾向である。可能態である。然らば童話は、童心の姿、童心の形に於

いて、生涯のものを與へるのである。恐れ謹まねばならぬ。

この現代にあつて、最も價値あるものとせらるべきは、更に統一あるもの、更に靜粛なるもの、更に透徹せるもの、更に味到せるものである。而してこれは何よりも先づ、少年の心の中に養はれねばならぬ。「蓮の實」が平坦なる事柄の底に徹した、神秘にさへみゆる程の、「淨さ」を持てることは、注意しなくてはならぬ。もとより氏の持つ「淨さ」は筋の太い厚いものではない。しかし一つのものに二つ以上を要求してはならない。マッチは鉛筆を削るものではない。赤に向つて白を求めてはならぬ。マッチにはマッチを、赤には赤を要求し、それに滿足してゐればよい。この故にこの童話に多く尊敬の念を寄するのである。（昭和二年一月廿一日、信濃教育所載）

附錄二　讀　物

俳優羽左衛門氏夫妻が、海外旅行に出て、巴里に行つた時のことを、在巴里朝日新聞記者渡邊紳一郎氏が、「ほほづき鳴らす紋付の珍客」といふ題目に「買物競爭に來たお爺さんお婆さん」といふサブタイトルを附けて、「東京朝日新聞」に載せた。その上の部は次の如くである。

五月十一日の朝日本のやせたお爺さんと肥つたお婆さんがパリに乘りこんで來ました。市村羽左衛門とおかみさんのお春さんです、二人は何しにパリへ來たでせう？フランスの芝居を研究に來たんだらうと思ふ人があつたら大違ひ、二人は買物の競爭に來たのです。お爺さんがネクタイピンを買へば、お婆さんは指輪、お婆さんがオペラ・バックを買へば、お爺さんはシガレツト・ケースといつた風です。

パリの銀座ともいへるグラン・プールヴアールは、何うして外國人のお錢をしぼらうかとばかり、美しくショーウィンドウを飾り立て、あちらを見てもこちらを見ても買ひたい物ばかり。二人とも年は取つても氣は若く、ふたを開けるとオルゴールが鳴る煙草入や、お白粉函を買つて喜んでゐます。

買物をするには車では出來ません。歩かなくてはなりません。黑紋付を着た日本のお婆さんが、言さへぐ外つ國の都大路の人混みの中を通るのですから、いかなコスモポリタンのパリツ子も眼をみはつて二人を見送ります。寶石屋のショーウインドの前に立止まつてお婆さんは「旦那、あたいあの指はめが欲しいわ」「おらあ、あの時計だ」などと

話してゐると、通りがかりの人人は寶石を見るふりをして二人のまはりへ、集かります。ところが二人とも外國人たることを感じません。フランス人のことを「あの異人は…」だの「あの外國人は…」だのといつてゐます。自分の方が異人であり、外國人であることは氣がつかず、そこは島崎藤村先生よりも舞臺度胸——いや外國度胸があります。お婆さんは、日本からなぎなたほほづきの鹽づけを一瓶持つて來てゐます。そして毎朝出かける時はそれを一つつまみだして口へいれます。百貨店の賣子と顔を向け合つて、ギチギチ鳴らしながら「コレ・イクラ」などとゆつくり日本語を使ひます。ゆつくりいつても早くいつても、相手にはわからないことは同じです。兎に角お婆さんはパリで犬にほえられる程の姿をしてゐながら、インドの女を見て「妙ななりをしてゐるわねえ」などと感心して見てゐます。

二人とも日本の歌舞伎芝居の人ですから西洋の歴史なんか知りません。それは西洋人が直侍や松王丸を知らないのと同じ理屈です。フランスに革命があつたこともルイ十四世も何もありません。ギリシア、ローマもありません。おしなべて、西洋といふ言葉で片づけてゐます。ただ昔「ナポレオンといふ恐ろしく偉い人が居たさうだ」と知つてゐるだけです。はなやかなコンコルドの廣場へ來ても、ギヨチーヌでコロリと首が落ちた革命を思ひ起す譯でもありません。またロダンの刻んだユーゴーの大理石があつても眼に入りません。

お爺さんはいひました——「パリて所は名所古跡が少ねえなあ……大きな動物園や水族館がねえや」。お婆さんは女ですから、始めから名所なんか問題にしてゐません。晝間はただ買物です。ある時「玄武門は何處にあるの?」といつて人を驚かせました。二人は、ある日本人は十日かかつたといふルーヴルの博物館を三十分位でくるくる見てしまひました。ミロのヴィナスやミレエの「晩鐘」などもこの二人は眼もくれません。「こんなに畫が多くあつては一一覺えられねえ、研究に來たんぢあねえから」と話の種にルーヴルをのぞいたのに過ぎません。ヴィンチの名高い「最後の晩餐」のあるルネツサンスの部屋に來ても「何でえヤソばかりぢやねえか」といつたやう

な有様です。それからアンヴアリドのナポレオンの墓へゆきました。古いボロボロの聯隊旗がズラリ並んでゐるのを見て「全くナポレオンと來たら大したもんだからなアーとここで始めて感歎の聲をたしました。奥へ進んで見ると、金色に輝くキリストの像が飾つてあります。「何んでえ、ナポレオンの墓だなんて、ヤソぢあねえか」といひますから、「つまり日本でいへばあみだ様と同じ譯で」あることを説明すると「なる程、なる程」とこれはよく分りました。

私はこの記事をある大學生に示した。その大學生は「氣の毒なものだ」と言つた。羽左衛門は日本では一流の俳優である。この大家の歐羅巴視察が、一つの買物に過ぎないと言ふのであつては、私達はやや信じ難い氣がする。そして「下」の方には、

羽左衛門は細君をホテルに殘してたびたび競馬へゆきました……そして一萬フランほど損をしました。

といふ消息が競馬に行つた回數まであげて、やや精しく傳へてある。はるばる外國に行つて、しかも外に興味がもてないことは、若かい學生をして氣の毒なものだと言はしめるのに無理はない。視て理解することが出來ず、また理解せんともせず、夫婦それぞれに買物に浮身をやつしてゐるのでは、憐まれても致し方ない。日本の俳優の理解力がどの程度であるかは、もとより知らない。これを以つて私は日本の歌舞伎劇の將來を云云しようとは思はないが、日本の社會が有つてゐる教化機關の乏しいこと並びにその完備を希ふ心の乏しいことを感ずる。

吾が國體の世界に於いて優秀無比であることは、今更言ふを要しない。吾等がかかる國家に住みうる以上は、かかる特殊な國體のみが實現し得る文化を實現しなくてはならぬ。積極的に國體の優秀をほこる爲には、この國體のみが有する獨自の文化を有たなくてはならぬ。この文化と、この文化を生育せしめた母胎としてのこの國とは、決して別なものではない。文化を考へるには母胎を考へなくてはならぬし、母胎を考へるにはこの母胎の產出したる文化を考へなくてはならぬ。

吾等が奈良の諸寺並びに正倉院に、今も殘るすぐれた數數の古美術品に對する時には、かかる多くのすぐれた美術を產出し、且之を保存した特殊の國體を尊く思ふのである。これは教室や講堂で說くことあまりに屢であつて、かへつて時に或はその源に徹し得ない傾のある國民道德の所說よりも、もつと直接に、活活として、吾等の前にあるのである。

正倉院拜觀は中中容易でないが、之は特別な中にも特別なことであるから、全然問題以外であるが、今の圖書館の一般が、我が國の美術等に對する設備は甚だ乏しく、上野の帝國圖書館の如きでも、普通室では一人の閱覽者に與へられた机の面が狹いから、特別室に入らなくては繪卷物や大冊をひろげてみることが出來ないし、滿員勝で中中一寸のことで入場は不可能である。かういふ不自由な狀態にあつて、完備した大美術館を得ることは、單に美術研究といふ問

題を外にしても、我が國體と文化との關係に於いて、肝要なることである。
美術に比べると、我が文學は圖書の大量生産關係を通じて、可成りよく弘通し得る狀態になつてゐる。
一國の文化は、その國の出版物によつて、これを伺ふことができるといはれて居るが、今試みに一九二七年（昭和二）の世界文明諸國における出版物の種類について、その發行總數を擧げてみると次のやうな數字となる。（ベルヌ發行ド・ドロア・ドウトウル誌所載に據る）

ロシア	三六、六八〇
ドイツ	三一、〇二六
日本	一九、九六七
イギリス	一三、八一〇
フランス	一一、九二二
アメリカ	一〇、一五二

量的には兎にも角にも英佛米の列强を凌いで世界の第三位を占めてゐる。また、數字的にわが出版界を觀察すると、時に多少の消長は免れないが、僅數年の間においても、非常な進歩をな

しつつあることがわかる。

大正十一年は、一三、〇八一であつたものが、十二年には例の關東大震火災に禍されて、一時一〇、九四六に減少したとはいへ、翌十三年では、一四、三六一にはねかへり、十四年には一八、〇二八、昭和元年におよぶや、二〇、二一三といふ進展ぶりを示した。越えて、同二年にいりやや減少し、一九、九六七、翌三年は一九、八八〇と、いささか反撥力に缺けた氣味があるのは、近來出版界の沈滯を示すものであらう。

それはともあれ、更にこれを內容的に種別した統計によると、又ここ數年間において、讀書興味の中心が那邊に向ひつつあるか、その大きな動きを看取し得らるるのである。

	大正十一年	昭和三年
教育	一、六九六	三、三八三
文學	二、二七八	三、〇八二
神書宗教	七八三	九二三
音樂	一、一三一	八九五
地誌紀行	四九九	七八六
社會問題	三三二	七七五

美術	六三七	七一一
政治	二六六	五四五
法律	四五三	五〇〇
經濟	二〇八	四八六

【註】社會問題は社會科學を初め社會思想、社會運動、社會政策その他を含む。

卽ち音樂を除いた外は、ことごとく相當の增加を示し、もつとも進出ぶりの目ざましいのは教育、文學並びに社會問題の三つで、僅僅數年間に教育は二倍半、社會問題は二、三倍、文學は一倍半の激增である。

また最近の一大流行である、全集圓本の類は、統計中においてはこれを叢書類として數へてゐるが、大正十三年では、その種類二〇、翌十四年では二六に過ぎなかつたものが、昭和元年には七八に上り、翌二年には一躍一六五に達し、いはゆる畫期的な圓本時代を現出するに到つたが、翌三年には一一三に衰退、四年に入つてからは、いよいよこの種刊行物の少くなりつつある事實から推してみるも、もう圓本全集物の盛は過ぎ去つたと見るが至當であらう。この現象について今澤慈海氏は、次の如く言つてゐられる。

もちろん明治十年度の我國の出版納本數が、僅五千四百四十一册であつたに比べて、昭和三年中の內務省調の我國出

版總冊數一萬九千八百八十冊（月千六百五十六冊强、一日五百五十冊强）は、正に一萬四千四百三十九冊の増加で、本の雨、洪水といつてもいい。又單にこの數字のみからいへば、世界の出版統計において、我國は、世上によく傳へらるるやうに、露獨に次ぎ、英佛米を凌ぎ正に第三位にあるのである。が、これ等の數字は、これをそのまま鵜のみにし無條件に承認する譯にはゆかないのである。といふのは、各國統計の基礎に相違があり單にドイツといふもドイツ一ケ國の場合と、ドイツ語を使ふ全地域――オーストリア、スイスなど――を含める場合とによつて非常の違ひを生ずるのである。又二三十ページ乃至五六十ページの小冊子を加へぬ國と加へる國とによつて大變な差違があるのである。これ等のことを念頭に置いて、我國の出版數を再調するとすれば、意外な結果になり、あるひは第五第六位に下るかもしれないのである。我國の昭和三年中の内務省調の約二萬冊の中には、多數の小冊子を含んで居るからである。これを除けばぐつと數字が減ることになる。で、ここにわれわれの特に知りたいことは、これ等多數のパンフレツトを除き、その外多數の官公署の出版物や、賣ることを目的としない個人の出版物などを省いて、一般讀書子の手に渡るもの、いひかへればたやすく手に入るもの、本屋で賣つて居る本の數は、一體一年幾冊位なのであるかといふことである。自分の調によると、昭和三年中、大賣捌店の一つである東京堂で取扱つた冊數は、豫約書、非賣品、組合外出版物を除いて、二千六百九十二冊、即ち約二千七百冊（月二百二十四冊强、一日七・四冊强）であつて、内務省調の約二萬冊の七分の一である。これを我國の人口に割りあてて表示すると次のやうになる。

我國の人口、八千四百四十二萬八千餘人（大正十四年國勢調査）

（一）我國の出版物一種について五百冊づつ刷るとして

――東　京　堂　扱　百三十五萬冊……約六十三人に一冊の割合

――東京堂扱に豫約者を加へると　二百二十五萬冊…約三十八人に一冊の割合

（二）若し一種を千冊づつ刷るとして

一東　京　堂　扱　二百七十萬冊……約三十一人に一冊の割合

一東京堂扱に豫約書を加へると　四百五十萬冊…　約十九人に一冊の割合

前表の(一)(二)は、一種の印刷冊數を五百冊乃至千冊としての計算であるが、我國現在の狀況は、圓本類を除いて、一種千冊刷るのは非常に少いので、五百以内のことも少くないのである。更に前表の冊數の中で、圖書館とか、學校などで購入する冊數を差引くと、個人の手に入る冊數はずつと減るのである。これ等の計算を基礎にしていふと本の洪水とか、雨とかいふことは少しくあてはまらないのである。あるひは東京の洪水であつて、田舍では旱魃なのかもしれないのである。尙更に考へなければならないことは、英米においてはある一つの本を出版する場合、大抵一萬冊を標準としてゐることである。もちろんこれ以下のことも、これ以上のこともある。一つのものを一度に五百乃至千こしらへるのと、萬こしらへるのとでは、全數の上に大變な違ひが生ずるのである。で、出版の位次をいふ時には常にこのことも念頭に置かなければならない。前表の東京堂扱の、一種五百冊づつ刷るとしての計算である百三十五萬冊は、英米で、一種一萬冊刷る計算の場合の、僅に百三十五種にしか當らないのである。知識の力が、その量と質とに比例するとするならば、我國においては、まだまだ澤山の本が出てよいのである。更に望むことは、一種の良書の出版冊數が、現在の如く三百乃至五百の貧弱な數でなく、せめて一千乃至二千、一萬位までに增され、それでも尙讀書子の要求を充し得ないといふまでに、一般國民の讀書慾が向上し、財力が豐富になることである。（昭和四年十月三十日、東京朝日新聞）

「今昔雜誌風景」（千葉龜雄氏、東京日日新聞・昭和九年十二月廿九日）

昭和九年の東京新風景の一つに古書市の出開帳を數へてもその邊からあまり異議は出ないだらう。神田、本郷の古書街は、外國人の旅行記にも折折書かれてゐるほど古くからの東京名物であつたが、商店街である京橋、日本橋たまに

は新宿、青山邊まで伸して來た近ごろの古書展覽會の氾濫は、どうだ。古書街戰線、まさに異狀あり。

漢書、和書その他の純粹の古典的な古書は別として、そこで興味をひかれるのは、明治からかけて大正末期までの出版物である。古書といつても、書籍ばかりではない。新聞もあれば雜誌もある。いづれも一度は目に觸れたものなので、思ひ掛けず舊い知人に逢つた喜びにもひたるのであるが、中でも古い新聞雜誌の、べら棒た値上りには驚かないわけに行かぬ。その頃、ざらにその邊にころがつてゐた拾錢、二拾錢のが、一部何と圓臺に上つたりしてる。內容價値よりも、稀少價値によるものではあらうが。

が、それにも幸不幸がある。稀少價値で馬鹿値を見てゐるといつても、その稀少價値さへもあるのが明治時代に發刊された雜誌の中で、精精で二三十種內外のものでは無からうか。何かにつけ、今でも引抄されたりして、割合、多く現代人に印象されてゐるものに限られるらしい。引抄されたり、記憶されたりする。それだけ感化力が强かつたからだといへば、さう云つたものでもあるが、それならそれ等以上に、價値のある優秀な有力雜誌が外に無かつたかといへば、さうは云へない。何れかといへば、今日、高値を呼んでる古雜誌はやはり今日の活字に多く出る可能性に富んだ文學、政治、思想物が多いらしい。が、その他にも專門的の學會雜誌や、社會、兒童心理、工藝、歷史、其他に亘つた高級な雜誌が隨分あつた。內容價値としてはそれは現代の方が、いづれの方面でも比べ物にならぬ進展を遂げてゐることは話にならぬにしても、その時代時代に於ける相對的價値から云つて、或ひは今日見られないやうな貴重な文獻たるべき種類のものも、決して少くはなかつた。或ひは今日には求められぬやうな、眞劍な研究さへも少くなかつたとさへ云へる。その頃は現代ほどに、雜誌が一つの出版企業としての、商品財としてのみ見られず、また商品として今日のやうな素晴らしい成功のみは求められない。むしろ商品意識は割合稀薄で、文化財として文化の啓蒙のために、編み出された雜誌の多かつたことも勘定に入れられるからである。學會雜誌の種類の多かつたのもそれがためで、たとへば「東洋學藝雜誌」の、大正期に入つての沒落史のいきさつ一つだけでも、それが實證される。

徳富蘇峰先生は、最近の「日日だより」で明治文學史を語られた折、明治文學史を説く場合、雜誌と新聞文化の興へた業績と感化のいかに偉大であつたかを、見落してはならないと強調した。全くその通りで當時の新聞界は或る意味では米國の誰れかが云つたやうに主張の「糧」であるし、雜誌は主張の指導性そのものであるとさへ云へるではないか。ところが、けふ日古書市などで散見する分では、さうした尊とい歴史的意義を帶びた雜誌でも、その名が今日のジヤアナリズムに現はれた度數が寡少なために、まるで忘られてしまつてゐるものが、どれほどあるか。ジヤアナリズムは、ジヤアナリズムの法則の上で躍るのが宿命であれば、これもどうしようのない運命とはいへるのであるが、せめては、小野秀雄君の「日本新聞史」があるやうに「日本雜誌史」が誰れ人かの手によつて早く著述されて、大正期までの前期雜誌の果したそれぞれの文化功績を記錄して置く事業が、もう今日より後れてならないではないか。

大和田建樹の古い「日本大文學史」によると、明治十二年刊行の雜誌が約五百種、定期刊行が百廿九種、中で經濟商法に關する廿九種がトップを切つてゐる。富國强兵を標語として始めたその時代の國民の氣分を想ひ起させるに足る。著者は、これらの雜誌の發達を總評して「社會長大足の進步なりと處せざるを得ず」と、慶賀してゐる。昭和の八九年度では、日本國内の雜誌が約二千餘種、書店で普通取引されてゐる定期刊行だけで八百種といふのは、五十六年間の距離に比例して、相當の飛躍であると云はれ得やう。年年雜誌祭も擧行されるやうになつて、大衆文化への雜誌の役割を强調し、浸潤させても居る。質の廣汎さにおいても、種類と階層への分岐の複雜さにおいても、編輯技術の進展においても、また一ケ月八百萬部と數へられる出版量においても、當然ではあるが、素晴らしい高度に達してゐる。

これは昭和三年十一月一日の「出版タイムス東京版」で、少し古いものであるが、その當時

の出版界に鳥瞰視を與へて興味深いものがある。

從來文藝書及一般讀物と純學術書との間には經營上相當の距離が置かれてゐた。卽ち前者が廣告宣傳に重きをおき動もすれば一擧にして雌雄を決せんとする風があつたに對し、後者は飽くまで自重主義を取り、宣傳法も極めて地味で可成費用を省き、堅忍持久、氣長に效果を收むることを主眼として來た。從つて定價高く、賣行も捗捗しくはないけれど、其のかはり流行り棄たりもないから大損を招く心配もなく、本の壽命の長いのを取柄にこつこつとして仕事を進めるといふ有樣であつた。

ところで改造社に依つて火蓋を切られた圓本は、先づ文藝書の城砦を苦もなく取毀はし、本の値段を從來の半値以下に蹴落した。と見て春陽堂、新潮社も家柄が家柄だけに默つては居れず、同じ戰法でそれぞれ一城を陷れ、圓本の團旗を高く城頭に飜したものである。すると其の風雲を望んで蹶起した春秋社は「世界大思想全集」と云ふ巨砲を高級學術書の鐵門に差向け、些の手應へもなく擊破してどつと喊聲を揚げた。驚いたのは同じ城內に住む同業者よりは却つて居留民格の讀書人であつた。今まで良い本は高いものとばかり定めてゐたのに、其反對に安い本は良い本といふ逆定理を見せつけられたのだから、自分の藏書の價値が激減したことなどは忘れて、吾も吾もと拍手喝采して購讀の申込に氣をはやつたものである。

併し之れより最つと世間を驚かせたのは、この混亂最中に蜂起?した日本評論社の「日本法學全集」であつた。お蔭で多年定價と卸値の高い物と云はれてゐた法律書（醫書は未だ安全?）が亦一たまりもなくへたばつて、何でも彼でも一圓、おまけに第一次配本正味が勿驚五掛と聞いて赤本屋まで顏を眞蒼にしたさうだが、よく注意して見たら地色の赤と青の掛け合せで紫になつてゐたのだとの話もある。

法律の城さへ落した位だから經濟の砲壘位は何でもなからうと、改造社、日本評論社の兩軍が勢ひ鋭く攻め寄せた。つい數月前、清水書店が單騎孤軍で侵略を企てた際には、白耳義の中立國氣取りに、國際法規を楯に傍へも寄せつけ

なかつた「經濟」が（圓本ではなかつたけれど）宛然當年の獨軍の如き慓悍獰猛比類なき？改・日兩軍の馬蹄にかけられては、無慘や其の下敷になつて木ッ葉微塵と打ち碎かれてしまつた。

興文社の「小學生全集」は三十五錢、アルスの「兒童文庫」は五十錢、合せて八十五錢の戰爭ではあつたが、世間では普通圓本戰の中へ數へてゐる。圓本戰の前には子供も大人もない。假令子供でも義勇兵的に狩立てられて名を千載に留めんとはする。

圓本戰が酣になつた頃・平凡社は埼玉縣の某地方から一大弗箱を提げ來り、之れを軍資金に、千頁一圓といふ途方途轍もない大型の圓本。云はば超ツェッペリン飛行船とも稱すべき「大衆文學全集」を作り上げて斯界の上空に飛ばし、盛んに爆彈を投下したものである。さあ斯うなると獨機に襲はれた當年の倫敦市民も同前、夜間一齊に外出を禁じ、日中も地下室あたりに閉ぢこもつて、戰戰兢兢生きた心地もなかつたのであるが、偖て人間は奇妙な動物で所謂怖いもの見たさ、其の怪圓本？がまたなく評判になつて殆んど空前の申込を受けたのである。尤も圓本以前に博文館で賣出した「長篇講談」は五百頁三十五錢かであつた。而してこの本が實に良く賣れた。一種少きも五六萬部、多きは十萬部と稱せられた當時での大量生産であつた。この本は其後段段定價を引上げられて六十八錢まで上つたが、最近五十錢に改正して目下發賣中である。用紙や製本こそ粗末だが、價が安い點にかけては寧ろ先輩の格式がある。講談社の「講談全集」は千二百頁であるが、最早爰まで來てしまへば、二百頁や三百頁の差は問題でない。

斯やうにして圓本風は斯界を縱横無盡に吹き荒したが、去りとて斯界の總てを慴伏したと見るのは未だ早い。圓本は圓本、非圓本は非圓本で立派に門戸を張つてゐる。高い本も依然として出て來る。北隆館の「日本植物圖鑑」・「日本動物圖鑑」は定價何れも一册十圓以上だ。夏汀堂（永見君）の發行書は安くて十圓、高いのになると三十五圓といふのさへある。豫約本を見ても過半數は非圓本で占めてゐる。斯う考へて見ると圓本の勢力は案外强烈でないとも言へる。之れは宛然無産派が猛烈に蔓延したらしく見へても、帝國議會に僅に八名の議席しか有しない事實と似てゐるか

も知れぬ。勿論圓本の火勢は未た衰退したとは言はれない。寧ろ今後一層其の猛威を揮ふであらうが、而も單行本界を擧げて圓本化し去るには前途遼遠の感を免れぬであらう。且つ圓本の濫出に伴ひ、會員收拾率の漸減するのは必然の勢で、既成圓本の解約者續出し、曩に甲社が解約に依る圓本三十萬部を處分したことすら異とされてゐるのに、最近また乙社は同一の事情で殘本百萬部整理の商談進行中だと聞知してゐる。是れに由つて見れば、如何に會員收拾率が減退しても、未だ未だバラ本に比し甘味があると云はれてゐる圓本の陣營には、投機的危險分子が案外多量に含有されてゐるのではなからうか。往昔、ナポレオンが戰勝に醉ひ、莫斯科に深入りして慘敗を招いたのは一代の不覺だと云はれてゐる。圓本の末路が或ひは之れに類するものがないであらうか。殷鑑遠からず、既に圓本的潰滅者も二三出してゐる。以つて他山の石とすべきではあるまいか。

圓本が愈行詰つて斯界の立直しが行はるる時、そこに初めて黃金時代が現出するのだと觀察するものがある。之れは一應聽くべき議論ではあるが、議論と實際とは一致せぬ場合が多い。卽ち往年の東京大震災は何も彼も灰燼に歸せしめて、事實上斯界の立直しが行はるべく期待されてゐたのに、復興後の面容は舊態依然、一向變はり榮えもしてゐない。また景氣は週期的に出るものと學理は敎へてゐるけれど、其好景氣なるものは待てど暮せど一向に出て來る氣配も見えない。

且つ金が儲かつて繁榮するのと、斯界が刷新されて向上するのとは案外逆比例を爲すものである。故に黃金時代の意味が單に金が儲かることのみでないとすれば、开んなことに期待をかけるのは百年河淸を俟つのと選ぶなき迂愚と謂はねばなるまい。

之れも圓本の反動として生れたと思はれる岩波書店の「岩波文庫」はどの程度まで效果を收めたかは明かでないが、其の機運に促されて文藝社の十五錢本「萬有文庫」が出現したことに由つて見ても、斯界が如何に行詰れる局面の打開に焦慮しつつあるかが窺はれる。併し現在のところでは此れ以上他の模倣者を出してゐないと云ふのは、十錢程度

の安い本で相當の效果を收めるのは却つて小資本家に出來ぬといふ原因もある。値が安いから、生產費の少ないのは固よりだが、之れに依つて利益を擧げるには大量生產に俟たねばならず、大量生產には大資本を要し、然かも薄利のため採算が容易に立たぬからだ。之れは先年講談社で出した後藤新平子の「政治の倫理化」(十錢本)の例でよく判る。同書は自費出版との說もあつた位だが、これは恐らく眞ではあるまい。

そこへ往くと同じ大量生產でも、割合に算盤の採れるのが赤本だ。赤本の繪本は一册賣五錢の卸正味が一錢七厘五毛だが、この本が前月、東京の某市會で一度に百萬部賣れたさうだ。これでこそ薄利でも引合ふであらう。繪本になると石鹼や齒磨の如く一種の消耗品で、單行本とは性質も異ふが、その經營法には學ぶべき多くのものがあることを疑はない。

これに續いて、教科書、參考書、辭典等を述べ、少年雜誌を述べた後に、婦人雜誌、一般雜誌を論じてゐる。ここに大きく述べてゐる「平凡」はその後間もなく廢刊してゐる。そして結論はそれが商人の立場を純粹に示してゐて面白い。

婦人雜誌　婦人雜誌は到頭小國の存立を許さぬところまで進んで來た。同種雜誌で大量生產の端を開いたものは「婦人世界」かと思はれるが、次で「婦女界」「主婦の友」「婦人俱樂部」が興起し、其間に「婦人公論」「婦人之友」「婦人畫報」等が介在し、各誌の勢力は時に一消一長を免れぬにしても、此内の二三誌の發行部數が嶄然時流を拔いてゐたのは動かし難き事實であつた。併し「キング」及び圓本が出現するに及んで、其實勢力に移動を生ずるに至つたのも有爲轉變の世相を物語るには足りる。

婦人雜誌黃金時代に、某誌が一篇數十枚の原稿に對し千金を擲つて憚らなかつたのは著名の逸話である。併し婦人雜

誌で洋行したものは岡本一平君と高信峡水君（前「婦人世界」主筆、現「婦人公論」編輯主任）位に止つてゐるが、圓本のためには續續洋行者を出し、數萬圓の印税を獲得して、印税成金と稱せらるゝ一階級さへ生じた。

プラトン社の「女性」、改造社の「女性改造」、新潮社の「婦人の國」、春陽堂の「良婦の友」等が枕を並べて討死したのも、斯界の大きな動きを示すものであつた。

尤も其以前にも博文館の「淑女畫報」新婦人社の「新婦人」が流星の如く姿を消した。婦人雜誌界も今日の所まで來ると、餘程の大資本を擁し、確つかり目算を立てぬと、迂闊には手出しが出來ぬ時代になつたことは明かである。各誌が販賣策として性慾記事に重きを措き、之れがため婦人團體の反對運動を惹起したのも、見遁し難き事實である。而して他面にまた「婦人雜誌は何處へ行く」の聲が盛になつたのも、婦人雜誌の行詰りを暗示する意と解せられる。けれども、實は婦人雜誌とてどこへも往きも往かれもしない。何をくよくよ川端柳である。水の流れ、時の流れに從つて行く所まで行く。未だ五年や十年で大變革を來たさうとは思はれぬのである。

一般雜誌　圓本が單行本界の劃期的事業であるならば、「キング」は雜誌界の劃期的事業だと稱し得られる。さしも黃金時代を誇つた婦人雜誌も「キング」の出現に會して光を失した觀がある。本來から云へば婦人の多くは讀書家ではない。讀書家でない階級の婦人雜誌が一番良く賣れて、讀書階級の雜誌が賣れぬところに不合理があつた。其の不合理を合理化したのが「キング」だとも言へる。

尤も「キング」を以て直ちに讀書階級の讀物となすのは當を失するかも知れぬ。眞の讀書階級には、案外本も雜誌も賣れぬ。之れは專門的刊行部數が何れも大量であり得ないことによつて判る。して見ると「キング」は讀書階級にも非ず、非讀書階級にも非ざる中間階級的大衆領野を開拓したものと見て可い。圓本に至りても亦然りと云ふことが出來る。

兎に角、講談社の着眼點、宣傳策は往往人の意表に出づるものがある。「キング」の狙ひが的中し、豫想外の奇蹟を獲

得したのも亦之れが爲めに外ならぬ。

雜誌の附錄を小冊子にして添附する例は之れ迄もあつたが、堂堂たる製本の大冊子を雜誌の附錄に添附したのは「キング」が嚆矢である。併し其反對に單行本の附錄に大雜誌を添附する例はまだないが、將來若しやるとせば講談社あたりでやりさうの事である樣に思はれる。

平凡社の「平凡」は恐らく「キング」を目標にして出陣したものに違ひない。其成果は固より今日に於て豫測出來ないが、若し將來「キング」と對立する時代が來たと假定したら、更に第二・第三の追隨者が現はれて、婦人雜誌の如き混亂狀態?を現出する事は必然の勢ひであると見てよい。現に博文館は既に其の計畫中であると傳へられてゐる。プラトン社の「苦樂」は大衆雜誌を以て任じ乍ら、趣味があまりにも高踏的であつた。之れ恐らく其の敗因ではなかつたであらうか、後に至る者の三思すべきは此點にある。

思想雜誌として覇を唱ふるものに「中央公論」、「改造」、「文藝春秋」の三誌がある。三誌各嚮ふ所を異にしてゐるとは云へ、歸する所は要するに一である。中公は曩に名編輯長瀧田君を喪ひ、次で麻田社長隱退し、島中雄作君が其の後を襲つて陣容を新たにした。文藝春秋社は過般組織を改め、株式會社になつたが、菊池君經營の事業であることに變りはない。新潮社の「文章俱樂部」は最初一部十錢で發賣し、値の安い爲めに成功した。「文藝春秋」は云はば其の顰に倣つたもの、「法律春秋」、「教育春秋」等等、題號に春秋の二字を使用する流行は是れより生じた。

「文藝春秋」を經濟で往つたのが日本評論社の「經濟往來」である。「ダイヤモンド」は決算報告解剖で、經濟雜誌の型を破つたが、同誌は經濟的雜文で再び破瓜?した譯である。と云ふても舊來の經濟雜誌が一齊に斷髮のハイカラ姿を模した譯でなく、桃割れ、銀杏返へしは昔の儘である。「經濟全集」が經濟雜誌又は法律書肆の畑に生れず、出版的

新開地で生れたのは、大名華族の邸宅が續續開放されて文化村が出來た事實にも比すべきである。

一時全盛を極めた映畫雜誌は全く下火になつてしまつた。併し映畫其物は決して衰へた譯でない。映畫は見るもので讀むものでないのかも知れぬ。芝居が衰へたわけでなくて、演劇雜誌が發展せぬのも之れと同じ理由であらう。

專門雜誌として比較的多數を占むるものは各種教育雜誌である。併し之れは教育雜誌が特別に賣れる譯でなく、主として教育參考書肆の宣傳機關になつてゐる傾がある。

結論　以上吾吾は業界の全班に亘つて鳥瞰的に眼を走らせた。そこで現狀を以て將來を推究する時は、斯界の前途は時時刻刻諸多の變化を現はすことは今までと變りがないであらうけれども、斯業者が窮極の目的とする讀者の領域は、未だ未だ漸次開拓せらるべき餘地あることは瞭かである。

二十年前五千萬と稱せられた日本の人口は現在八千萬人に達し、戶數は二千萬戶と云はれてゐる。而して今後戶口が一層增加すべき趨勢にあることは云はずして明かであるが、假に現在の狀態を以てしても、尙且つ開拓の餘地は十分に存在してゐる。

併し其新領土を切り拓くためにはまたそれだけの覺悟を要する。即ち第一は內容、第二は廉價、第三は宣傳、第四は販賣法の改善である。が、之れを實行する爲めに要するのは何と云つても資本だ。圓本以來斯業が著しく大企業的形態を備へたとは云へ、未だ他の一般企業に比して遜色を免れない。

假令ば紡績、造船、製鐵の如きも、恐らく現在の斯業者の全資力を打つて一團としても、尙ほ且つ其內の一會社に當ることすら困難であらう。資本が乏しければこそ大きな仕事も出來ず、大きな成果も收めることも出來ないのだ。若し假に現在の斯業者に、乍失禮悉く一百萬圓の資金を貸與したならば、どんなに素破らしい仕事が出來、どんなに多く賣れる品を作り出すことか想像だもつかない。何としても斯業者に授けたいものは巨資である。嘗つて或る英雄は

「吾れに不可能なる事無し」と云つたさうだけれども、資金を自由に作り出すことだけは、不可能でないとは云はれない。

併しそれは先づ措ておき現在で最も缺陷とせられるのは、販賣法の不備ではなからうか。內容が良くなつたのは勿論、値も安くなり、宣傳にも遺漏がないまでに進んで來たが、それに比して見劣りがするのは販賣策である。販賣法不備のために斯業の發達がどれだけ阻害されてゐることか判らない。大取次店から殆んど敬遠されてゐる單行本（豫約本を除く）に至りて殊に然りの[illegible]があ[illegible]

某某の圓本、某某婦人雜誌は其發行四十萬と云はれ、「キング」に至つては六七十萬と稱せられてゐる（間違つたら御容赦）。併し假に七十萬としても現人口に對しては九厘弱、戶數に對しては三分五厘にしか當らない。卽ち現在日本で一番賣れる「キング」の讀者が百軒に三戶半の割でしかないのだから、今後開拓の餘地あることが判る。一戶一册は廣告の文句として、せめて十戶に一軒、百戶に十册の程度位までに讀まれるものを一種位出すことは望ましい。

新聞は時間的、大阪の兩大新聞でも其威力を名古屋以東へ及ぼすことは出來ない。そこへ行くと一般出版物は空間的、新聞に比して頒布力が偉大であるべき筈だ。而かも現在の出版物が其頒布力に於て新聞の敵であり得ない觀があるのは、其一因が販賣法の不備に存することを疑はない。

かかる結論に達したことも、これは出版業そのものの特性から來るものである。その特性について、「東洋經濟新報」の營業部長神原周平氏は次の如く言つてゐられる。

（1）古本として二度の勤めをされること。

器具機械類にも此の種の制度、謂ひ換ふれば扱ひ方がないではないが、出版業のそれは特に甚しいものがある。之

れが他の製造業とは異なる考慮を要する。

(2) 委託販賣制度の無權威。

出版者側から見て、委託制度に就いての出版者の利益が些しも主張出來ない狀態にあることが、又他の製造業と大いに異なつてゐる點である。例へば、一の單行本を出版するに當り、各取次者に對しての配本は可成制限されるのが例である。出版者の思惑に依つて製造されたものが、取次店の思惑に依つて配本が制限され、剩さへ配本の頒布が出版者の希望に副はざるは勿論、搗て加へてその賣殘り品は、容赦なく返品と稱して出版者に返還されるのである。何れの事業にか斯くの如き制度があらう。尤も、藥品、化粧品等にも委託販賣制はある。が併しそれは新製造品とか新事業者が販賣擴張又は新設の爲めにするものが主で、他の一般に名稱品目の通つたものは、小賣店に於て何れも自己の計算に於て買取らるるもので、出版物のやうに一から十迄委託に依るのとは比較にならない。此點が出版業者の不利とする一點である。

此の制度が自他共に如何に強く働いてゐるかは、豫約に依る出版物でさへ、圓本の出現以來出版者は何れも書店の賣殘りを引取るべく餘儀なくされてゐるではないか。書店並びに取次店が、豫約品を返へすことの出來る、卽ち返品を引取る了解の許でなければ、豫約出版が出來ないと云ふのは、何とまあ出版業者の弱身を曝露したものであらう、と嘆ぜざるを得ない。

(3) 製造額に比して廣告費を多額に要すること。

此點は自制に依り、採算の採り方に依り、必ずしも全般的とは謂へないが、概して此の弊のある事は事實である。最近の豫約物の大大的宣傳費の狀態は無論のこと、他の單行本も皆一樣に廣告費負擔が一般商店のそれよりは多額である。之れは出版業者自身にも罪があり、又社會の制度にも出版物の公開に對する希望が違ふからであらう。

(4) パテント料の高いこと、不確實な事。

印税が近來餘程セり上げられたことも一つであり、その權利の確保されてゐる様な居ない様な一寸曖昧の點があることは、彼の全集物の流行と共に各所で問題を醸してゐる。之れには著者の態度の如何をも考慮に入れねばならぬが、書籍の如く、從來複生産は比較的に尠ないもので、單價の一割以上を、實行高に關せず印刷部數で取られることは、前に申した返品となるべき可能性の多い制度の下にあつては頗る過重の負擔となることがある。之れも何とか出版業者に幾分の負擔輕減法を講ずる要があらう。恐らく他の機械だの其他特許品に對する特許料で、出版業者の負擔する印税の負擔率以上の率になるものは多くあるまいと思はれる。殊に、出版權が著者に偏在して、出版者の權益が頗る薄いことは、是非共何等かの方法に於て改善の要を主張したい點である。

圓本といへば、人は笑ひたがるが、しかし圓本はその内容に於いて決して一笑に附せらるべきものではない。代表的に後に殘るべきものが、この圓本系の全集であらう。この點で圓本並びに類似の全集物の流行は喜ぶべきことである。過去數十年の統計にみるに、經濟界の振不振を超越して、出版物は累進的増加の傾向を持つてゐ、その自然的總括として、ここに圓本を生じてゐる。これはむしろ當然だと言はなくてはならぬ。しかし書籍はすべて圓本になるとは言ひ得ない。高い市價を有しつつ圓本になりがたい書籍もある。第一は珍らしい點で價値を持つだけのもの、第二は珍らしく且學問的價値があるけれども、その要求が一般的でないから再版し得ないものである。ここにその二つの例をあげると次の如くである。

明治十五年版川島忠之助氏著「虛無黨退治奇談」といふ假綴のうす汚ない本が、このほど神田の一書店に現れて、賣價四十五圓となり、近頃古本界の一大センセイションとなつてゐる。たかが七、八十錢の本で大抵の藏書家には「くづ屋お拂ひ」か、震災燒失を運命づけられてゐる種の本だ。さういへば堀謙德氏著の「解說西域記」は定價五圓の本であるが、それに一躍四十圓の賣價が出て、昨今古本屋間に掘だし競爭を演ぜしめて居るが、これなども高い古本の典型である。

この第一の書は第一の例、第二の書は第二の例である。これ以外の書卽ち價値があつて、しかも一般性ある書は、すべて圓本となる可能性をもつてゐる。ただ辭書の樣に出版費の多額なるものは、圓本となることが困難であつてこれも一つの例外である。

次に雜誌の問題であるが、雜誌にも一般性のあるものをねらつて、大量生產をすると共に、單價を極度に低下させること、圓本と同一形式をとるものがあらはれてゐる。前引の讀書階級と非讀書階級との中間階級で、この階級は人數が相當に多いのであるから、ここをねらつた出版方法が成立する。ここに於いて二種の雜誌編輯法が生じてくる。この點を新居格氏は明瞭にしてゐられる。

雜誌は幾年か前までは自然發生的に編輯されてゐた。特に文藝雜誌がさうであつた。卽ち編輯者は特に問題のプランを設けず執筆者の隨意に創作、評論、隨筆等その好みに任せ大體の枚數と締切日とは指定したが、それ以上ではなかつた。編輯者は集まつた原稿を材料として雜誌を作つた。この昨日の編輯法には一つの特徵があつた。それは執筆者がもつとも心の向いたものを比較的に書き得たといふ意味で、その範圍での長所があつた。しかしその編輯方法は著るしく事務的でなく、雜誌自體のものの方針と意思と卽ちジャアナリズムの機能が閑却されたともいへる。その後になつて雜誌編輯者は曾ての受動的態度から一變して能動的態度になつた。何を問題とすべきか、如何なるものをたれに執筆を求めるか、そこで雜誌編輯者は絕えず敏活に社會の情勢、そこに胚胎されてある問題、生ずるであらうところの傾向、それと讀者の要求、それに對應すべき編輯といふことが發想されなければならなくなつた。一般雜誌はもちろん文藝雜誌でも同樣の行方を取らなければならなくなつた。その傾向が一層助長されて來た結果、雜誌は著しく新聞の影響を受け、新聞に追隨する形となつた。それ以前には雜誌には雜誌の分野があつて、それは新聞のそれとは多少違つてゐたのだが、雜誌編輯者が社會の動き、そこに現れる現象に關心を持つに至つて、雜誌は新聞に追隨せざるを得なくなつた。例へば婦人雜誌の編輯法を見るともつともその點が顯著である。新聞紙上に報道された戀愛問題の如きは必ず翌月の婦人雜誌の大題目となるのである。その間何が異なるかといへば、雜誌は新聞に遲れて發行されるだけに詳細なる記事となり、少なからざる批判が加はる點である。だが、私の疑問はさうして新聞に追隨して行くことがいいのか、新聞には性質上取扱へないで雜誌の分野として當然に殘されたる範圍にむしろ創始的發想的にテーマを見出さねばならないのではないかといふ點である。もつとも一般の雜誌は專門の學術雜誌ではないから、時の問題、季節的風味に無關心であることは出來ぬ。だから時の問題に關連してもつとも適當な筆者の解說乃至批判を揭げ、季節季節による色彩をも加へてゆくのも當然である。そして今の雜誌界は大體さうなつてゐる。ところが雜誌界に大衆的動向が近時一層加へられて來た。その點でも雜誌が著るしく新聞紙的ねらひ方になつて來た譯である。この傾向を

助長した最大の原因は圓本刊行が大衆的役目をしたことにある。そして今日いはゆる大衆雜誌の盛行を生んだのである。現在もつとも賣行が多いと目されてゐる雜誌は三四の婦人雜誌といはゆる大衆雜誌とである。大衆讀者を得んがためには大衆の平均知識に標準を置かねばならぬ。その平均知識といふものは決して高いものではないと編輯者達は考へてゐる。それはさうであるに違ひない。その結果比較的程度の高い雜誌はあるひは影を沒し、あるひは程度をさげ、新たに生れるものにはいはゆる大衆雜誌が多いのである。最近一ケ年間の雜誌界の消長を見るとそれを有力に物語つてゐる。雜誌が存在する以上それがより多くの大衆的顧慮を欲するのは當然であり、そこに大衆雜誌の所期もある。しかしそれと同時に大衆雜誌が自警しなければならぬものもありはしないか。一例を擧げると、大衆は程度が低いのであるから、それらの讀者が讀んでも分からぬやうなものを掲載するのは不親切だと思ふ好意ならとれるが、兎もすれば大衆は愚だからといふ不遜心に親切を取替へるならば間違つてゐるといふことである。といふのは、大衆は無知であつても決して愚ではなく、相當卓抜な批評眼も見識も有するからである。だから執筆者も大衆を甘く見て執筆し、編輯者も大衆を輕蔑して編輯すれば、思はぬ見當違ひを結果するのである。（雜誌界の昨日、今日、明日）

この大衆性はいろいろの側面にあらはれる。その大さの問題については、伊藤正德氏が「雜誌のトン數」（歐米の一流雜誌に比べて）の論文がある（昭和九年三月四日、東京朝日新聞）。また發行期日の問題がある「今昔雜誌風景」（千葉龜雄氏、東京日日新聞、昭和九年十二月廿九日）。

日本は雜誌の一番厚い國だ。「中央公論」、「改造」、「經濟往來」、「文藝春秋」等を歐米の一流雜誌に比べると、少なくとも三倍の厚さがある。增刊號のときなぞは五倍以上のページである。

しかし、かかる量の優越は必ずしも質の優越を語るものではない。雜誌の機能或は能率の點からいふならば、劣ると

評せられても致し方がないやうだ。かりに、歐米の一流誌が、全讀者に對して平均七割の内容を讀ませるものとすれば、我國のそれは三割もむづかしいのではないか？　二倍の排水量で同等の砲力しか備へない軍艦は、設計が劣つてゐるといふ外はあるまい。一言にして盡せば、日本の一流誌はバルキーである。澱粉が多すぎる形だ。歐米のそれが腹八分目で十分のカロリーを攝らせるのに反し、我は柱にもたれる程の分量を食べさせて、なほ殘肴山をなし、しかも消化しないものもあつて、滋養價はそれほどでないといへる…。

無論、雜誌の當事者はこの事情を百も承知なのだ。お國柄致し方なしと考へてゐるのであらう。お國柄とは芋や大根をいふのではない。店頭の體驗を指すのだ。同じ値段なら、手にとつて重い方、厚い方が明かに賣行がいいのだから文句のつけようがない。その結果、總合雜誌が携行不便の厚さとなり、盛り澤山のトン數主義を採用することになる。その責多く讀者にあるか。

以上は雜誌の能率から見た主觀評である。立派な原稿を少く載せ、頁數を半減して今日の部數を維持し得るならやや理想であらう。しかし、讀者の「厚いもの好み」の背景以外に、日本には雜誌の分量主義を要求する客觀的事由がいくらもあるやうだ。人口が多い、準フリー・ランサーも多い。それに糧を與へて文運をさかんならしめる作用も必要であらう。また讀者の知識層が高低區區その差が著るしく、欲望また然りで、したがつてバラィチーが必要となるのであらう。かくて次のやうな比較が生れる。

誌名	目次	頁數	定價（錢）
中央公論	四二	四九九	八〇
改造	三六	四八〇	六〇
文藝春秋	四四	三五六	四〇
經濟往來	四五	四七四	五〇

ナインチーンセンチユリー	一二	一二八	二・九五
カーレントヒストリー	二三	一二四	八五
コンテンポラリレビユー	一四	一二五	二・九五

(註――右は例月の比較。各月大差なし。附錄を含まず。)

この數字の上に、吾吾は、日本の商品が世界市場を席卷する所以の一證を見る――。雜誌の能率は別として、讀者への奉仕は再び確認されねばならない。更に日本の新聞の方は、歐米のそれに比して三分の一以下のページ數しかない。その敗北(?)を雜誌が取返してゐる姿だ。正に、主力艦の不足を補助艦が補つてゐるやうなものである。

それ、好き嫌ひは別個の問題として、同じスピイド・アップでも明治時代などと著るしく違ふ一例を、とりわけ今日この頃の年末や新年で痛切に感ずるのは、雜誌發刊期日の途法もない繰上げがその一つ。十二月の廿一日になつて、正月の雜誌に書く豫定の作家が雲隱れしたために、編輯者が青くなつて探し廻つてゐる年の暮らしい風景に、その頃の私は、時時出逢したものだ。元日號の新聞の編輯が濟んで、もう去年ともいへない元日の午前一時頃、大通りを歸る。夜明しの書店の店頭に、今出た正月號のインキの香が新らしく積まれてゐる。冴えきつた曉空のアセチリン瓦斯の下を、頁をばらばらと返しながら家路に歸つた除夜風景。しとしとと門松に降り積む濃雪の街景を炬燵の中にうつとりと聞いて、正月號の雜誌に讀み耽るなども、のんびりした正月行事の一つだつた。現代では十一月頃にもう正月號に尻を叩かれて「去年とや云はん今年とや云はん」の切迫感に、目が廻る。

けれども大衆性を眼ざす限、流行性を見逃し得ない。流行性は次の如き性質を有する。

一、流行の作者は多くの場合不明である。そこには著しい個性がない。

二、變異性が大きい。變異性には、二方向がある。珍らしさ、新らしさとして過去から區別さるる對過去の方向が一つ、明日は既にこの流行を保持しないといふ對明日の方向が一つである。

三、しかしこれは個性の色の濃いものでないから、比較的容易に受納せられ、同時に比較的容易に放棄せられる。卽ち浮動性が大である。

四、故に容易に人を捉へなくてはならぬから、味が細かくて、直に人の心に訴へる所がある。

五、輕くて明るくて、しかも多少の哀れさがある。

而してかかる流行性の傾向の一番大きいものは、婦人雜誌である。然らば婦人雜誌は如何にして編輯されてゐるか。「東京朝日新聞」は各婦人雜誌の編輯責任者に

一、貴誌を編輯さるるにあたつての理想又は希望。

二、婦人雜誌に對する非難についての辯明。

をたづねてその回答を、昭和五年十二月二十九日の同紙に載せてゐる。

我等女性の研究室「婦人之友」

羽仁もと子

「婦人之友」は「われらの女性研究室」だと信じてゐる外、私たちに他意はありません。編輯の苦心も經營の苦心も何もいらなくなりました。

過去二十八年の間、眞面目な多くの女性が、それぞれの立場から、あらゆる實驗やあらゆる疑問あらゆる希望を携へて、本氣に集まつてくるので、それが移りゆく時代を背景にして、この研究室が常に活氣に滿たされてゐました。

しかし詳しくいへば、はじめの頃は研究室といふよりは、單なる談話室でした。そこで交換されたよい思ひや經驗が多くの友の力で實行されるやうになつてから、年年著るしく雜誌の内容が研究的になつて行きました。そしてそれだけ挑發的とは反對な地味なものになつて行くので、經營の方からは、この傾向は、果してよいことか惡いことかと危ぶまれることもあつたのですが、そこから段段に讀者各各の思ひの中に、ますます深く發見されてくることを、各自が希望的な努力を以てその實生活の上に活かすやうになつてから、自から「婦人之友」は熱心な主張を生みだしてゆく雜誌であることを、私共は思ふやうになり、その主張によつて、志を同じうする多くの女性が正直に自己を生き、子供を育て、家庭を營み、學校をつくり、團體をつくり、更に各種の新しい領域に向つて研究と實行の準備がなされつつあります。さうしてそれはいふまでもなく、この世の中の他のさまざまの動きと相まつて、社會改造の有力な一要素になるためです。

それ故に私たちは、唯この研究室で、本氣によい研究をしたい。より正しいことを見出したい。そしてそれを社會的に實行して行きたい。今は唯この思ひのみを以て「婦人之友」をつくつてゐます。その外に何にもありません。

今春三月出版界注目の的となつた「婦人之友」の豫約賣切制度の完全なる成功が、私どもをして全然商品でない婦人雜誌が、その持つてゐる眞實の價値次第で今の社會に、もつとも有力なる存在權を確立し得ることを、信じさせられ

ました。

一つの本當の雜誌には、必ずその主張にも趣味にも特色があるはずです。從つて他の特色を持つた研究もまた必ず必要なのですから、すべての婦人雜誌はその時代錯誤の立場や商品製造的の心理を淸算して、それぞれのなくてならない研究室になつて、社會に重きをなすことが出來るのだと信じます。是非ともさうなることを望んでゐます。

革命近し「婦人世界」

池田林儀

ナポレオンは、湯に入つても、決して、ヘソから上を湯に浸けなかつた。いはゆる腰湯である。彼は、この腰湯で、全身が温まつて、汗をかくまで風呂場を出なかつた。彼は、侍醫からこの浴法を教へられた。これによつて、熟睡をとることが出來た。激務に當つてゐた彼は、熟睡によつてのみ疲勞を醫し元氣を回復し、健康を保つことが出來た。

今日の雜誌の編輯者や經營者は、たれしも時流に投じて、尖端を歩みたいといふ氣分は多量にあらう。又大資本主義、多量生産主義、大宣傳主義、おまけどつさり主義でやつてゆきたいといふ心にも燃えてゐやう。もつとも至極なことである。これでやつてゆけば相當效果を擧げ得るに相違ない。だが、「婦人世界」を引き受けた自分は、立場が少し違つてゐる。現代式雜誌經營法の最高峰に達したと見るべき時に方つて、のつそり罷り出て來たものである。いはば時代遲れの人間だ。

その時代遲れの人間が、新しがつて先人既踏の境地を、猿の如く眞似ようたつて巧く行くはずがない。これを眞似るのは、温かい湯の中に全身を浸けるやうなものである。だから、自分は、ヘソから下だけを現代的雜誌の經營法なり編輯法なりの中に浸けて、上半身は湯の中に浸けたくないと思つてゐる。腰湯を使ひながら、次の時代の雜誌界を凝視したい。もう變るべき時代が來てゐる。

婦人雜誌は、ややもすれば、婦人個人個人の實益とか、修養とか、娯樂とかいふ方面に周到た注意を拂つて編輯され

るが、次の時代、次の社會といふやうな事については輕んぜられてゐる。次の時代に對する責任感の缺如である。今一つは、婦人個人個人のためには注意を拂つてはゐるが、婦人全體の問題、一般婦人文化の指導向上といふ方面に力が缺けてゐるやうにも思はれる。これが、現代婦人雜誌が薄つぺらだ、下らないといはれる一因かも知れない。

腰湯使ひの自分としては、大道香具師の如く、その月その月の雜誌を賣つて、自分の懷がまうかればよいといふ、資本魔の惡癖だけは發揮したくないつもりだ。

婦人雜誌は、一九三一年中に大革命がくる。キツトくる。その變り方は、夜盜の如く忍び來つて、ダイナマイトの如く爆發する。

半歩主義「婦女界」　都河　龍

私の編輯方針は、常に半歩だけの前進主義で行きたいと思つてゐます。そして殘りの半歩は、讀者と共に歩みたいといふのです。即ち半歩だけの所を指導的のものにして、あとの半歩は、讀者の日常生活に即して、讀者と共に談笑話樂する氣分で行きたいのです。

それに今日の婦人雜誌の讀者は單に精神修養の糧としてとか、又は娯樂の料としてとか、といふのではなく、雜誌で讀んだ知識を、直に日常生活に利用して、實際の役に立てようとしてゐるのです。だから勢ひ婦人雜誌の記事は、單なる記事として讀み捨てられて行くものでなく、應用自在の實利實益を伴ふものであらねばならないのです。

そこで私の婦女界は、特にこの實利實益といふ點に重きをおいて編輯してゐます。この新年號から「婦女界考案部」や「家政研究室」といふのを新設して、一層愛讀者奉仕に努力しようと考へてゐるのも、これがためです。

しかも婦人雜誌の領分は、衣食住を中心として、家庭の精神生活にまでも及ばなければならないのですから、常に半歩前進の指導方針を誤つてはいけないのです。アンヨは上手の形で、絕えず半歩は先に、半歩は共に進むことを心が

けてゐる次第です。

「婦人公論」　島中氏語る

「婦人雜誌の編輯理想は恐らくどの婦人雜誌編輯者も知つてゐますまい。さう簡單にいきませんよ。婦人雜誌に對する非難はどの點を指さすのか、私にはわからない。非難をする人は、恐らくその雜誌を讀んでゐないのではあるまいか。」

A　B信條「婦人畫報」　鷹見思水

婦人雜誌は如何なる道を進むべきかといふ事は我我當事者の常に念頭におく所であるが、要は婦人の向上心を誘起し、家庭生活の改善を計り、人間としての婦人、社會人としての婦人の完成を理想としての基礎の上に立たなければ雜誌を發行する意義はなさない。これをAとする。

然し一面からいへば雜誌は商品である。堅くるしい、しかつめらしいもの計りで詰め込まれてあるものを、たれが喜んで買ふ者があるか。そこに面白味と、溫か味といふ、いふにいはれない引きつけるものがあつて、始めて喜ばれもし、評判にも上り、賣行も良くなり、商品としての存在を意味するのである。但し根本の理想の上に立つての事である。これをBとする。

Aに傾いてならず、Bに囚はれてならず、AとBとは車の兩輪、鳥の兩翼である。婦人雜誌はかくして靜かに穩かに舵を取つて大道を進み、翼を張つて大空をかけるべきである。それでいけないなら婦人雜誌はあつて要なきもの。

「婦人サロン」の抱負　佐佐木茂索

今日のあらゆる雜誌の中で、婦人雜誌の經營ほど困難にして危難の多いものはあるまいと思はれる。然もこれに反して現在の各婦人雜誌の目覺ましい進出ぶりとその賣行きの好況は、その何十萬部といふ販賣部數を莫大なる資本の下に巧に運用して、他のあらゆる文藝娯樂物の群小雜誌を遙に拔いてゐる。

然るにこれら婦人雜誌の內容の多くは、家庭を持つ主婦を目的として、實用及び家庭的な記事を盛澤山にし、讀物としてはただ單に既成あるひは流行作家の名を連らねてゐるに過ぎないところのあやふやな小說の連續である。即ち讀物の內容の選擇と配合とに少しの注意も拂はれてゐない。いはばこれ等多くの婦人雜誌は「家庭的實用雜誌」と名づくべきものであつて、一般的に婦人雜誌と名づけ得らるべきものではない。

雜誌の性質上、實用記事の必要はやむを得ぬとしても、理想的なる將來の婦人雜誌はこれら實用記事を僅なページの中に效果的に編輯しなければならない。

文化の進むにつれて社會は複雜化して行く。それら社會の全般に渡つた記事、即ち時時刻刻に變化して行く世相を反映した讀物を主とし、實用記事を從として、一家の主婦はもちろん、あらゆる階級の婦人が、これより知識を得、あるひは利用して愛讀する雜誌こそ、これから現れなければならない理想的な雜誌であるといはねばならぬ。「婦人サロン」の抱負はそこにある。

而して最後に「婦人俱樂部」は

「婦人俱樂部」の主張

荒井兵吾

「婦人俱樂部」編輯の焦點はどこにあるかと問はるるならば、私共同人は、敬虔なる態度と確固たる信念とを以て、女性の人格を完成するにあると、かくお答へする――

矢の走るは弓の力、男性をして皇國の爲に奮起せしむるものは、女性の力。かくの如き女性に向つて、よき修養とよ

き訓練とを與ふるは、お國への奉公、われ等のつとめ。この大主旨が太い線となつて、「婦人俱樂部」全誌面を貫いてゐる。かるが故に、見て以て淳風を傷つけるが如き記事は、魅力ありといへども、始めからこれを退けてゐる。聞いて以て良俗を助けるが如き美談は、地違しといへども、行いてこれを尋ねて居る。實用記事は實驗部においてこれを實驗し、興味記事は檢閲部において再應吟味し、念又念、愼重に愼重を加へてゐる。

從つて讀者層は、各種各樣、未婚者も、既婚者も、母も子も、全日本の女性のすべてを網羅してゐる。即ち廣きにわたること、あまねきに及ぼすことは、本誌の一大特長。

といひ、しかしてかたよること、囚はるることは、本誌の「一大禁物」として、要はこれによつて皇國女性の精神文化に香高き刺激を與へ、立派な女性を作る點に努力してゐるといつてゐる。しかるに「主婦の友」は

「私の方は何もいはないのが主義理想です、從來の經驗から推して、ただ主婦のよき友達となることをモツトーにしてゐます。輕薄な興味本位とか、社會的な思想解說が缺けてゐるとかの抗議は、恐らく私の方には當はまらないと思ひます」

と語つて居る。

「雜誌文化の變遷」　靑野季吉氏（東京朝日新聞、昭和八年六月二十四日）

恐慌のあふりでさすがの婦人雜誌にも、時化が來たとはいつても、その大量生産の隆盛は、まだ容易に傾きさうではない。およそ日本の雜誌文化で、婦人雜誌ほど資本家生産的に思ひ切つた前進をやつた部門はない。雜誌文化はまさ

にこの婦人雜誌によつて、途方もないところへ導かれたといつていいのだ。

婦人雜誌の最初は、巖本善治等の「女學雜誌」(十五年)だといふ。この雜誌はだが婦人雜誌といふよりも、啓蒙的な一般文化雜誌であつたやうだ。婦人雜誌が飛躍を示したのは、何といつても第一には日露戰爭後の日本の社會の向上期で、「婦人世界」、「婦人之友」、「女學世界」等の發刊を見た。これらの婦人雜誌にも、もちろん後來のものの萠芽はあるが、しかしまだ商品化の程度がきはめて稀薄で、たとへば「婦人之友」ではキリスト教主義の主導意識が、かなり濃厚だつたし、「婦人世界」はもつぱら文化的な主婦のカルチュアに訴へてゐたし、「女學世界」は學生層の進步的な感覺にその支柱を求めてゐた。

第二の飛躍期は、世界戰爭を機緣とした大正前期で、「婦人公論」「主婦之友」「婦女界」「婦人倶樂部」など——その次の次期において商品化に徹底し、思ひ切つた大量生産にと進んだ婦人雜誌は、いづれもこの時期に創刊された。だがこの時期にはこれらの婦人雜誌はまだそれぞれ多少とも相違した目標をもつてゐたし、一般共通的には、科學的進步性や道德的文化性が、その內容をつつんでゐたといつていいだらう。

ところが大正末期から昭和に入り、とくに近年になつては、婦人雜誌の商品性が飛躍的に高まると共に、さういつた科學的進步性や道德的文化性がしだいに稀薄になつて、その代りに迷信的な野蠻性や、官能的な荒廢性すら、はいり込んで來て、一般に婦人雜誌は何等かカルチュアのためよりも、まつたく娯樂と「實用」のための雜誌となつた。もつとも「婦人之友」のやうな、この流れにさからつた雜誌もあるが、それはその代り雜誌としてはひどく步みおくれてゐる。

まつたく娯樂と「實用」の雜誌になり切らず若干科學的・批判的・啓蒙的の內容によつて、婦人の知識性に訴へてゐるものも確かにあるが、それにしてからが、娯樂と「實用」の暴威に受太刀となつて、次第にその內容が蠶食されてをり、その若干の批判性は、新聞のニユース・センスによつて一度不自然に擴大された事件を、さらに輪をかけて不

自然に擴大して、婦人大衆の單なる興味に訴へることの方に歪曲されて來てゐる。

日本の雜誌文化の發達からいへば、婦人雜誌は一時代あとに生れた部門であるのだ。そしてこの文化に占めるその地位も、婦人讀者を專門的に對象とする意味で、自然、第二位的であるのはいふまでもない。それに拘らず、その商品化の徹底、それに伴ふ感覺的刺激性や、娯樂性や、「實用性」やは、ある意味で雜誌文化をリードするほどの力を持ちかけて來てゐる。たとへば有力な總合雜誌や、新聞ですらが、そのなかに多かれ少かれ婦人雜誌の方法をとりいれてゐるのが見られるのだ。これを「女學雜誌」の昔にくらべたら、何とどえらい勢ひではないか。

だが、婦人雜誌のこの盛時も最早や下り坂となつたのではないかと思ふ。かの別冊附錄の景物によつて讀者を誘惑する方法にしてからが、婦人雜誌の內容作製の常套的な方法が、極度にゆき詰つたこと、その方法による讀者の興味が飽和點に達したことを自認してゐる。さうとすると、婦人雜誌を商品的に成功せしめた武器は、いまや婦人雜誌をたふす武器に轉化しつゝあるといへるのだ。

婦人雜誌の問題として誰も氣のつくのは、時には雜誌その者よりも大きい位の附錄である。

一

昭和八年新年號の雜誌を總觀して、まづ氣のつくところのものは、これまで我がちにと人をかきのけて驅けよつてゐた附錄政略のヤマが、もう峠を越したのではなからうかといふ徵候の見えて來たことである。

これに先手をうつたのは改造社だ。昨年中に雜誌「改造」は、一年に四回の附錄をだした。人名辭典、滿洲辭典、等等といふ風に、讀者のうちには別にほしくもないものを押しつけられるやうな氣もちのする人も少くはなく、相當に不平の聲もあつたのであるが、この新年號からズバリと去年の方針をあらためて、特價は一圓にしたが附錄はやめて內容を充實して賣るといふ方針に出た。

また「婦人世界」は、婦人雜誌としては容易にあきらめ切れさうにもない附錄を思ひ切りよくなげうつて、四十錢に値さげを斷行したことは本紙の豆戰樵子もほめてゐたやうであつたが、實に颯爽とした商略で、うまく成功させたいものである。それにはさういふ鋭い頭腦の働きを、編輯内容の方へも働かせねばならず、其結果は今のところ斷言しがたい所にあらう。

新年號を簡單にしてお祭り騷ぎをやめようといふ傾向は、「中央公論」もまたこれを端的にあらはして、定價は例月通り八十錢、外面的には何等の仰仰しい松飾りもなく、賣りだしたことは、實に劃期的な方針で、これは一二の新聞が今年から新年附錄を廢したと同じ樣に、インテリゲンチヤからは非常な好感をもつて迎へられるに相違ない、しかし一方にインテリゲンチヤを對象としない婦人雜誌或は大衆雜誌の方はどうかといふに、この方はやはり當分は附錄なしには競爭してはいかれないんぢやないかとも思はれるが、それにしても附錄の内容に行きづまつて來たといふ點は明かに看取される。婦人雜誌の附錄といふものは食物の調理法・衣類編物に關するもの、結婚育兒に關するもの等と、たいがい範圍はきまつてゐるので、それを取りかへ引かへ形をかへて出してゐるのだが、それもあまり久しくなると何となく内容に腐りが感じられてくる。

それでいろいろに頭腦をひねつても人間の智惠といふものはさう違つたものは出ず、名のある畫伯の色紙とか短册とかいふものが、この新年號も「主婦之友」・「婦人倶樂部」・「講談倶樂部」と、鉢あはせしてゐるといふ狀態である。要するにこの附錄戰は各雜誌社協定の上で早晩何とか整理すべきものではなからうかと思ふ。（昭和八年十二月二十九日、東京朝日新聞、新春雜誌界の諸相、一記者）

二

今年は秋口に雜誌週間といふものがあつた。雜誌週間つて何だい？　雜誌を安くでも賣る週間かい、何か景品でもつ

くのかい？とお互にたづねあつたが、どうもハッキリしたことは誰にも分らず、僕も現在にいたるもよく分つてはゐない。

ただ見たところ、雑誌屋の小僧さんが勇しく赤いたすきをかけ、チンドン屋が東京中を練り歩き、その週間に大大的に行はれた雑誌廣告は、だいぶ廣告料の點で新聞社が奉仕させられたらしいといふこと、（これも眞偽はどこまで本當か僕らには分らぬ）ぐらゐが漠然とした僕らの知識である。

いづれにせよ、雑誌企業者が近代的コンマーシアリズムの上で愈積極的に覺醒して、攻勢をとつて來た事實をしめすもので、卽ち雑誌本來の持つ文化的意義が、コンマーシアリズムのための雑誌卽ち眞に必要たための雑誌より賣らんがために、刺激によつて需要を喚起するといふ傾向が愈强められて來たことを意味する。

いつたい日本人の食ふ米の量はだいたいにきまつてゐる。一人で二升飯を平げる豪傑もあれば、一合もたべられない病人もあるが、平均して見れば健全な消費量といふものは大體にきまつてゐる、

これと同じく、智的食糧品たる書物や雑誌の消費量といふものも、大體においては健全な限度といふものがあるべきなのである。

現在日本の雑誌發行部數は、一千萬部と概算されてゐるのであるが、某雑誌社長は、今年の初頭において、これを日本全世帶數たる一千四百萬部にまでひきあげたいとの希望をもらしてゐた。常識的に考へて、一世帶に一册の雑誌といふものは、決して多すぎるとはいはれない。

しかし現在の日本の社會において、一册の雑誌を購讀し得る餘裕のある家庭といふものが、全世帶の幾割ぐらゐにあたるだらうと推定すると、これは恐らく寥寥たるものに相違ないから、この一千萬部の雑誌といふものは、非常に

偏つて散布されてゐるわけで、その意味では雜誌を絶對に讀めない側のものは非常に多く、讀める側のものは數は少いが、その讀む分量が多きに過ぎるともいはれはしないかと思はれる。もし富の分配が平均され、日本中の全世帶において雜誌購讀の餘裕が持ち得られるとすれば、一家庭に二冊としての二千八百萬部の發行も敢て多しといふことは出來ないかも知れない。

しかし、現在の情況では一千萬部はむしろ刺激によつて喚起せられた需要であり、あらゆる娛樂のうち、雜誌といふものが最も安價で手つとり早いといふ、强味によつて維持せられてゐる故ではあるまいかと推定される。

そのため同業者競爭は、日ましに激甚になつてゆくのは事實で、婦人雜誌においての附錄景品の爭ひは今や絶頂に到達し、何らかの協定の必要あることは、私などは一年ほど前から唱へてゐるところであるが、最近になつてやうやく、各社へトヘトに疲れはて、このため受ける損害の甚大なのに、今さら愕然としてさめつつあるやうな機運に近づきつつあるやうだ。

卽ち婦人雜誌では「主婦之友」の王者的城廓に對して「婦人倶樂部」が肉薄してゐるのであるが、双方ともに附錄競爭の痛手は、相當に滿喫しつつあると傳聞する。この兩者に對しては他の雜誌はすこぶる影がうすく、壓されがちで「婦女界」はもつとも甚しい痛手を蒙つたものであるが、ここも今年半ば頃より陣容を立て直し、再び盛り上げようと努力してゐることは認められる。

この附錄競爭の圈内にありながら、なほ超然としてこれにとらはれず獨自の地歩を保つて、グングンとのして行くのは「婦人公論」で、これはインテリ婦人を相手に、センセイショナルな社會問題を華華しくかつ相當に批判的に取扱ふことと、新しい感覺的な廣告的手腕によつて、新時代の讀者を獲得してゆく戰法は他に追從し得るものがない。今年の始めに實業之日本社から改造社にうつつた「婦人世界」が、この方法を眞似て、一ページ廣告の連發でこの牙城

に迫らんとしたが、そんな無理な强引がデリケートなヂヤアナリズムの世界に通用するはずなく、センセイショナルな問題の取扱ひ方も廣告そのものもともに泥くさく、三、四號で十數萬圓の損害を殘して沈沒し去つた。强引的な一ページ廣告といふもので思ひ起したが、アルスの「健康倶樂部」といふものもこの手をやつて失敗を演じた。後から來るものの一應は參考のため念頭においておくべきところである。

その他婦人雜誌として、「令女界」、「婦人畫報」、「婦人の友」など、やはり昨年來の地位內容を持續して變りがないやうだ。將來に對する希望をいふならいくらでもあるが、これを現實問題として考へると、いつでも無駄なことといふ氣が先に立つ。ただ「婦人公論」が、社會や時事問題についての婦人の關心を刺激してゐるのはたしかに功績で、近頃は他の雜誌でも次第にその影響を蒙つてくることが認められる。同時に煽情的に陷る弊は免れないが、概して刺激的な性的記事が各誌から完全に影をひそめたのは一大進歩といはねばなるまい。（昭和八年十二月廿九日、東京朝日新聞、刺激が生む讀者の數、杉山平助氏）

附錄は婦人として誰にも必要な實用的項目が彙集してあるからである。本誌よりも一層實用的であり、後後まで保存するに便であつて、しかも日常の用に立つやうに編輯されてゐる。附錄の方が、本誌よりも一時的でなくて、普遍的であり、いつまでも便利である。家庭婦人の手許にこの附錄だけが保存せられてゐるのをよく見かける。

今手許の八月十七日「東京朝日新聞」に、某婦人雜誌九月號廣告が出てゐる。これは「生活を樂にする方法」號であるとことわつてある。そして「ステキな二大附錄つき五十錢の九月號」

と目ヌキにして右肩に大きく出してゐる。第一附錄は、和洋料理の作り方大畫報である。第二附錄は九條武子夫人の大畫像である。料理を眼にみる形にしたのは、その出來上りのはつきりみえる點で、たしかによい工夫である。しからば「生活を樂にする方法」とは何か。それは二一字よめばすぐ金になる記事」である。

買物上手の秘傳發表會
生活費半減の新生活法
生活を樂にする名士の簡單生活打明話
不景氣でも貯金を殖した經驗
十割增收の改良養蠶法
農林省保護の有利な副業新發表
廢物が金になる利用法
素人の婦人が商賣に成功する方法

の八つである。そしてこれと間接の連關を持つものと思はれる

慢性胃病の根治の實驗
婦人病速治の腰湯療法

お金いらずに效能の著しい梅干療法三十二種

がある。かういふ直に日常生活に應用出來る功利的價値は、女性に對して、大きい魅力を持つてゐる。そして學校でも社會でも、十分に教へない樣樣のものを教へてゐる。婦人がこの興味から、雜誌を隅から隅まで丹念によむのをみてゐると、一種の信仰さへも持つてゐるかと思はれる程である。

新らしい化粧法の發表會

有合せで直ぐ出來る手拭とハンカチ利用の手藝品

ドコでも大評判の廢物利用の手藝品の作り方

そこには「お姉さまの女生袴で作つた新型女生服」と註をして可愛いい妹がそれを着て手を前で重ねてゐる。

かういふ調子が更に複雜になつて、

再婚して幸福になつた婦人の告白

良人を惚れさせる秘訣十ケ條

額の生え際で男女の運命を占ふ法

經濟的に建てた便利な中流住宅

が出て來る。その外

逝けるスポーツ界の明星、人見絹枝孃の悲痛なる遺言
母の立志美談、芝居王映畫王松竹社長の母
家なき子から一躍してスター…伊達里子の出生哀話

の如き讀物もある。それから「評判小說」と銘をうつた「相思樹」、「彼女の道」、「聖なる乳房」の三篇の小說がある。實に千紫萬紅といふ外はない。

そしてこれで終らずに、「流行女物紋附羽織三百枚贈呈」といふ、女の心を引きつけるものがある。ことにそれが「ハガキ一本で誰にも出來る大評判の大懸賞をいよいよ發表」といふのであるから、手を出したくなるのも無理ではない。この懸賞の問題については去年河崎なつ氏が「東京朝日新聞」で論じたことがある。

九月號の婦人雜誌中、「主婦之友」はダイヤいりの指環三百個の大懸賞を、「婦人倶樂部」は美術組合せ鏡臺その他二萬人當選の大懸賞を、いづれも九月號の呼び物にしてゐます。いはく「不景氣を吹き飛ばして景氣のいい世の中にしたい」から「まづ景氣直しにダイヤ入の指環を大懸賞にする」のださうです。

これは又思ひ切つて女を馬鹿にした企てではありませんか。いくらダイヤいりの指環がさせたからとて、この世界的の不景氣がなほるかなほらぬか位は女だつて知つてゐます。それをダイヤいりダイヤいりと太鼓をたたいて、徒らに

女の射倖心や虚榮心を呼び覺す不誠意がしやくなのです。

五十錢の雜誌一册で、ダイヤいりの指環や美術組立鏡臺にありつけるといふところに、この企てのトリツクはあるのですが、果して幾人がこの僥倖にありつけるものでせう。聞く所によれば「主婦之友」は、毎月三十萬部も發行せられるのださうですが、三十萬部に對してダイヤいりの指環三百個は千人に對して一人の割合で、一人が僥倖すればのこりの九百九十九人が指をくはへて引き退らねばならぬのです。よしや三百人がダイヤ入の指環で一寸景氣が好ささうでも、のこりの二十九萬九千七百人は、五十錢を投げて望んだものを得られなかつた一層の暗い心になるのです。大懸賞によつて景氣を直すのは讀者婦人ではなくて、ために雜誌を多く賣上げた主婦之友社自らです。ここにも利潤の前には何物をも顧みぬ資本主義の鐵則を見出すのです。（九月號の大懸賞）

日本の婦人位優美で高尚で、しかも道德的な婦人は他の國にはないといふ人がある。そしてそれは無論我が國古來の淳朴良風に負ふものであるとほとんどすべての人が信じてゐるが、そして褒められることは惡くはないのだから、それを信じてもいいと考へてゐるが、それと同時に私はいつも一つだけ大變不思議に思ふことがある。それはこの高尚にして優美極まりない日本婦人が、何の因果であの低級な婦人雜誌を、唯一の生活の伴侶、唯一の生活の指南書としなければならないかといふことである。

がさつで輕はづみでフラツパーで、どの點からいつても日本婦人の敵手ではないヤンキーガールでさへ、その愛讀するホームジヤーナルなど、まだどんなに優美であるか知れない。それからツルーストリーだとかプライズストリーなどにのつてゐる小說や實話だつて、少くも日本の婦人雜誌のそれのやうに無暗と我我の感覺や感情の上にのしかかつてくるやうなものではない。それなら、なぜ日本の婦人雜誌だけが特にさう低級なのだらう？

第一の理由は、我我の婦人の敎養が一般にまだひどく低いといふこと、したがつて生活內容が貧弱であり、低級なも

のであることにあると思ふ。

が、しかし、更に根本的な更により強力な原因は、私共はこれを日本の出版資本主義の惡影響のうちに求めることができると思ふ。

日本の出版界は、今のところ他のどんな產業にも見ることができないほど、アナルキイな狀態にある。我我の市場は限られてゐる。朝鮮が最近やや我我の出版物を消費するやうになつたといつてもまだ微微たるものであり、滿洲國が我我の文化に同化してくるのは、まだいつの日か一寸見當がつかない。實に我我の市場は、英・佛、獨等の先進諸國に比較すると實にあはれな狹小なものにすぎないのに、出版物の種類と部類とは決して先進諸國に負けないほど尨大なものである。中でも、婦人雜誌は特にさうである。

この事は、無論一面に婦人雜誌同士間の競爭が、いかに激甚であるかを語つてゐる。この競爭の激甚さが、直ちに雜誌そのものの卑俗化、低級化となつて現はれるのであつて、實に資本主義的競爭が存する限りは、この狀態はまだもつと續くことであらう。

婦人雜誌が、過去においてまうかつたことは事實である。が、それは今もまうかつてゐるか？

信用することのできる專門家に聞いたことであるが、最大の讀者をもつてゐる都下の婦人雜誌の一つでさへ、現在ではまうかつてゐないさうである。わづかに代理部であがる利潤によつて支へられてゐる狀態だといふ。

この事は、一寸は信じられないだらう。が、あの尨大な附錄と、莫大な宣傳費と、相當殘るといふ殘本のことを聞く時にはじめて納得できるのである。最大の雜誌にしてさうである。その他の雜誌がどんなに苦しがつてゐるか——ここでもあまり遠くない時代に、他の產業部門におけると同じやうなことが起り、倒るべきものは倒れ、興るべきは興り、かくして資本の集中が行はれて、一つか二つのものが殘つて行くことにならう。（婦人雜誌の動向、神近市子氏、

昭和八年十二月廿九日、東京朝日新聞）

以上の如くであるから、婦人雜誌の形態は、今の文化生活の上で、一つの明白な特色を持つのである。卽ち

とにかく一ヶ月ただの五六十錢の資本をかければ、如何なる邊土にあつても、流行の髮に結び、化粧も出來、和漢洋の料理を夫に薦められ、洋服を縫ひ、スエターを編んで愛兒にまとはしめられ、一萬圓の貯金も出來れば家も建ててくれ、任意に子寶も授かれば、醫者のさじを投げた病氣も素人療法で助かり、失つた夫の愛も取り戻せるのだ。

から、婦人雜誌が大きい貢行を示してゐることも、偶然ではない。婦人雜誌に似た性質を有つものは、大衆雜誌と子供雜誌である。性質的にいへば婦人雜誌から實用性を除いたものが大衆雜誌である。

大衆雜誌乃至娯樂雜誌の初期のものは、文學雜誌のやや低級のもので、その內容の一部は、文學雜誌と重なり合つてゐた。ごく初期の「かぶき新報」や、「東京新誌」は、その氣味がうすかつたが、日清戰爭後の雜誌文化の飛躍期に出てその後相當長くさかえた「文藝俱樂部」は、娯樂的要素を加味した文學雜誌といつてよかつた。明治時代の人人が、雜誌文化の上で、今日とくらべていかに純粹娯樂的興味の要求をもつことが少なかつたかは、これでほぼ察せられるやうだ。明治早期の有名な「團團珍聞」にしてからが、その興味は單に娯樂的のものでなく、政治上の關心とむすびついてゐた。

もつとも雜誌文化ではさうだつたとしても、明治時代の大衆に娯樂的興味が旺盛でなかつたといふのではもちろんな

い。その興味はもつぱら講談や落語に求められて、雜誌文化の上では求められることが少なかつたといふに過ぎない。それだけ大衆のカルチユアがひくかつたからでもあり、社會の近代的な享樂的・感覺的の刺激が稀薄であつたからでもあり、雜誌文化からいへばまだほとんど商品化されなかつたからでもあらう。その上、都會の大衆でなく地方の大衆についていへば、それはまだ日本資本主義の生成期で、勤勉成功の心理がつよく、したがつて實際に單なる娯樂的興味は稀薄だつたものであらう。事實、ずつと後の時代になつて復活せしめられた地方の傳統的な歌謠や盆踊りなどは、當時まつたく顧られなかつたものだ。

雜誌文化のうへで、純粹の娯樂雜誌が顯著な地位をしめたのは、いふまでもなく大正年代にいり、世界戰爭を契機として、日本の資本主義が爛熟期に入つてからである。そしてまづ講談社の諸雜誌がこの部面をリードし、雜誌文化で空前の大量生産によつた「キング」が現れるに及んで、さらに新たな飛躍を見せ、刺激を與へたのであつた。これには、いまいつた爛熟期の心理と意識が強く作用してゐたことはもちろんで、シネマやラヂオなどを加へた近代的な享樂的、感覺的の刺激も完成された。

大衆娯樂雜誌が雜誌文化にもたらしたものは、他方に婦人雜誌をさらに乘越えた商品化の徹底であつた。雜誌文化はこの部門において、完全に企業化し、その製品は完全に商品となつたのだ。雜誌文化がなんらかの意味と程度で、ヂヤーナリズム本來の批判性や對抗的感覺をもつてゐた間は、それはどうしても商品に成り切つてしまふことは出來なかつた。それがまつたく失はれて、漠然たる社會的の感覺や、個人の感覺的興味を刺激するだけのものとなつて、始めて商品として完成した。これが大衆雜誌だ。だからこれまでの諸部門のうごきから考へると、大衆雜誌の發生と發展とは、日本の雜誌文化の歸結を、早回りして示したものといつていいだらう。

すでに大衆雑誌は、ヂャーナリズム本來の意義はこれを微塵もまじへない。だから、内容的にはどういふものを、その娯樂的感覺的の支配要素と結びつけたつてかまはない。もし現在のやうに、ファッショ的なものが社會の表面に浮びでれば、その原始性や、本能性や、衝動性をとつて、それと結びつけることは、易易たるものであり、また商品性にとつて有利でもある　左翼運動ですらが、獵奇的な角度から、其素材とされる、それらは現に見る通りだ。（雑誌文化の變遷、青野季吉氏、昭和八年六月二十五日、東京朝日新聞）

新年の子供雑誌―總合的に觀察して―　A・B・C

一九三二年の新年のこどもの雑誌が、まことに盛裝をこらして、店頭に飾りひろげられ、つみ重ねられてゐる。その數をいつたら一般ものから特殊ものにかけて、ざつと三十餘種に上つてゐる。こどもの讀書興味の旺盛なのをまづ一應祝福しておかう。

こどもの學校教育を大切にする親たちは、それと同樣今日では、こどもの家庭教育を大切にするが、この教育の重要な部分はこども雑誌からの影響によつて、占められてゐるといつてよい。ところでそれほど重要なこども雑誌の内容が、世の親たちや識者の批判的な注意のまへにおかれてゐるかといふに、必らずしもさうでない。これは決して望ましいことではない。

ここではこども雑誌のどれがよいとか惡いとか、それを比較檢討するのではない。また數多くのこども雑誌の全部を觀察しつくさうとするのでもない。そんな業はこの場面では不可能である。市場に提供されてゐるこども雑誌のうち特殊な方面、たとへば小學校の學級別のものとか、繪本式のものとか、科學知識を目ざしたものとかを別として、一般的なものを專らとつて、そこに現はれた内容形式の全體及び諸樣相を總合的に觀察しようとするのである。この總

合的な觀察によつて、現在のこども雜誌はどういふ線をとつて歩いてゐるか、そこに現はれた諸様相はどういふ文化的、社會的意義をもつてゐるか——それを考究しようとするのである。

こども雜誌を全體的に見ると、極く一般的にいつて、こどもの心理や意識の世界が、餘りに概念的に、且固定的に定められてしまつてゐる。たとへばこどもといへば、男子であれば冒險や怪奇や勇壯や等等が、いつも主要興味だと定められてをり、女子であれば、愛戀や感傷や遊樂や等等が、その心理、意識の全世界だと定められてゐるといつた風である。この取扱ひ方は、いかにも機械的、傳習的であつて、實際の複雜なこどもの世界に適合するものではない。親たちの實際の經驗によると、こどもの心理、意識はまことに多方面であり、少くとも多方面の萌芽を具へてゐる。そしてそれが動いて、生長してやまないのを知つてゐる。今日のこどもの雜誌のほとんど全部は、この現實のこどもをその姿でとらへてゐないのである。その結果は、こどもを一面的な、傳統的な型に封鎖するやうた傾向を持たざるを得ない。これは大きな問題である。

幼年ものを別として少年少女ものになると、全體的にいつて大人の娯樂雜誌との類似性が非常に强い。單に前者の表現を平易にしたに過ぎぬやうな記事や讀物が、主要た要素となつてゐる。たとへば今日の大人の娯樂雜誌では、愛慾を取扱つた通俗小説や、維新ものや、探偵、怪奇を主題とした小説や讀物が中心興味となつてゐるが、こども雜誌にもその型が觀られるのである。かくてこども達はこども雜誌の興味によつて、大人の娯樂雜誌の讀者たるべく養成されてゐるやうなものである。二三の例をあげれば、大佛次郎の「山を守る兄弟」子母澤寛の「江戸城危し」（少年倶樂部）加藤武雄の「日は大空に」岡田三郎の「子守唄」（少女倶樂部）鈴木彦次郎の「風雲劍侠兒」野村胡堂の「惡魔の王城」（少年世界）長田幹彦の「歸らぬ虹」吉屋信子の「櫻貝（少女の友）の興味による教育は、大人の娯樂雜誌への

直接の教育だといつてもよいのである。

全體的に見たこの現象も大いに注目すべきもので、大人の文藝界の一部や娯樂界に流行してゐるナンセンスやモダーンの讀物の、多少平易化したものならこども雜誌に混入されてゐる。事態がからなると、これはいづれにしてもこどもの世界に對する大人の一種の強制とならざるを得ないのである。

新年のこども雜誌に表はれた諸相のうちでは、時節柄、軍事相が極めて濃厚である。一時代まへの日露戰爭の時ほどでないにしても、とにかく軍國的テーマや軍國的記事が極めて豐富である。「少年倶樂部」がさまざまな軍國的記事にそへて、西條八十に「滿蒙守備の勇士を讃ふ」歌をうたはせ、橋爪健に「譽の兵曹」を、山中峰太郎に「亞細亞の曙」をつくらせ、「日本少年」が滿洲事變繪とともに軍事小說「蒙古黃金城」をかかげ、「少年世界」が滿洲事變の忠勇烈士物語の外に「極東大戰爭」等の軍事小說をさめてゐるのは、一應もつともであるが、少女雜誌たとへば「少女の友」にすら滿洲事變にからまる少女美談「殘された拳銃」や「滿洲軍訪問記」が見られ、「幼年倶樂部」の冒頭には、小さな陸軍大將が木馬にまたがつて、さらに小さた多くの兵隊さんを指揮してゐるのである。

これらの軍事相に現はれた觀念を見ると、「戰爭」はまつたく征服の行爲であり、英雄豪傑の行動であるとされてゐる。たとへば「少年倶樂部」の表紙繪では、一人の少年が日章旗をささげて、地球をまたいで意氣揚揚としてゐる。まことに男ましくはあるが、その觀念の底には征服がある。この他、東洋征服、世界征服の未來記が、さまざまなこども雜誌に見られるのである。さらに戰爭に關聯して、封建時代の「英雄豪傑」の征服、戰勝の讀物・小說が、一九三二年の新年にこども雜誌に滿載されてゐることが觀察される。

新年のこども雜誌で滿洲事變を取扱ひ、ひいて一般の戰爭をさまざまな表現形式で取扱ふのは、いかにも自然であり、ひとたびそれを取扱ふとすれば、いま述べたやうな仕方で行くのは、一種の「常道」ではあるが、これではやはり一方で今日のこどもを餘りに機械的に、固定的に考へた嫌ひがあり、他方で、滿洲事變にせよ、戰爭一般にせよ、これを傳統的な軍國的想念で取扱ひ過ぎた嫌ひがありはしないか。世の心ある親達は、こども達の頭腦に戰爭をかく反映させることを決してうれしいこととはしないであらう。

滿洲事變や一般に戰爭について、こども達はまづ理解を與へられねばならない。その理解のためには、どんな面白い表現技術が施されようとそれは問題でなく、そこに大人の苦心が宿るのである。もつとも肝腎なのは理解の內容である　所で今日の戰爭、特に滿洲事變は、決して單なる征服のための戰爭でもなければ、國民の好戰的な性質の表現でもないのである。一方に戰爭へと導かれた事情があると共に、他方に日本國民には、およそ征服とは反對の共存共榮の理想もある。戰爭をこどもに理解させるには、これ等の多方面な現實が無視されてはならないのである。こども雜誌に現はれた戰爭相をとつて見ると、そんな譯で、戰爭の形の上のことばかりが誇張されてゐる。これでは眞の「勇武」も結局は文字通りに兒戲となつてしまふに相違ない。

新年のこども雜誌に現はれた興味的樣相について次に觀察しよう。ここではほとんど總ての雜誌において冒險、怪奇傳奇、劍豪、探偵、忍術等の興味を中心としてゐる。その上少女雜誌には、愛戀、感傷が加はつてゐるのはもちろんである。それらの讀物、小說に出てくる主人公は、多く英雄であり、怪傑であり、大冒險者であり、名探偵であり、大盜であり、さまざまの神祕力を具へた超人であり、しかもその中には少年の非凡人が多くまぢつてゐる。代表的な若干の例をあぐれば、「幼年俱樂部」には「粂平內」大河內翠山）「ナポレオン」（豐島與志雄）等があり、「幼年の國」に

は「梁川庄八」(二上一龍)「猿飛佐助」「突貫太郎」等があり、「少年世界」には「御用盗奇譚」「天狗騒動」「髑白城主」等、「少年倶樂部」には「密林の王者」「地底の都」「萬歳栗毛」等、「少女倶樂部」にすら熱情冒險小說と銘をうつた「萬國の王城」(山中峰太郎)が中心におかれてゐる。これは極く一部だが、これによつてこども雜誌の興味的讀み物一般が十分にうかがはれるのである。

こども特に十四五歳の少年の興味が、かういふ方面に動くこと、乃至ひかれ易いことは、勿論である。そこでこども雜誌の當事者が商品としてのこども雜誌を成功的にしようとすれば、この習性に追隨するのがセフティ・ファーストであるのはいふまでもない。だがこどもの興味が、かかる方面にのみ動くと思つたら間違ひで、こども雜誌でほとんど開拓されたい方面にもこどもの興味の萌芽は立派に存在する。新年のこども雜誌の興味相を見ると、一方にその大切な尊い萌芽が全く顧みられないで、他方に傳統的に習性となつてゐる方面が、非常に誇張されてゐる。これは何も新年號に限つたことではないが、こども雜誌が伸びて行く上の一つの重要な問題であらう。さらにここで問題となるのは、これらの興味讀物の舞臺、その機構、それを裏付る觀念が、徹頭徹尾封建的なものであること、これである。この點についてはあとで解說する。

興味的樣相について、こども雜誌で重要な部分を占めてゐるのは、輕い、明るい、いはゆる罪のない娛樂的要素である。これを假に娛樂相と名づけておかう。この樣相を具體的に示すために若干の例をまづ示せば、ものしりちいさん、天ぐ和尚、トビジマン、丸角サン等(幼年倶樂部)、無學の郵便屋さん、のらくろ二等卒、動物の演說大會等(少年倶樂部)間拔けた頓吉、子供彌次喜多、ペソ吉等(幼年の國)、アキレ蛙物語、少女私立探偵、少女百面相等(少女倶樂部)頓珍漢兵衞、友ちやん物語等(少女の友)、突飛問答、支那の兵隊さん、漫畫撮影等(日本少年)、スピード三郎、

ヘツポコ探偵、梵珍の旅等(少年世界)――これ等は讀物または漫畫、寫眞になつてゐるもので、多くの諸雑誌もほぼこれと大同小異であり、この外に主として繪畫や寫眞で、新年の年中行事や、スポーツや、映畫の花形や、名流の家庭や、さまざまの和樂の形相が、この中に混入されてゐる。

この興味相を總合して觀察すると、第一には封建的な年中行事や、同じく封建的な新年景物が目につく。それについでは漫談的なナンセンスの「罪のない」讀物、奇行、頓智、愚鈍、スピード、動物の思ひ切つた擬人化が主となつてゐる。これらの興味相はこども雑誌には早くからの付物で、まことにこどもの單なる娯樂の對象で、こどもを陽氣に、明るく、ほがらかに笑はせるといふだけのものだが、それがまたこども雑誌にとつて重要なものであるのはいふまでもない。ただここで考へて見なければならぬのは、これらの娯樂相のなかに眞に小供を對象とし、小供の世界から自然にわき上つてくるユーモアがあるかどうか、新しい、水水しい娯樂(趣味)があるかどうかである。

かう考へてくるとここでも餘りに習慣的で、落語に含まれてゐるやうな封建的なものが大いに幅を利かせてをり、また一方では大人的のナンセンスをそのまま持込んだものも見られるのである。これは決してこどもを眞に朗らかに、明るく、かつ生生と育てて行かうとする親達の望むところではないのである。大體この部分では、對象の自然な戯畫化、思ひ付きの純眞さがあつて、始めて目ざす效果があげ得られるのであるが、さういふものは現にこども雑誌では極めて稀である。ただ一昔前には此部分にも浸潤してゐた因習的な道德感が、ほとんど清算されたのは一進歩といつてよいが、その代りにモダーンな輕佻な娯樂的興味や、形をかへた冒險的、劍劇的、傳奇的の興味がここへ加へられて來てゐる。これでは目ざす「罪のない」こどもの娯樂とはならぬ場合が、相當に多いのである。

今日はいはゆる科學の時代であり、自然征服の時代、機械の時代である。したがつて子供の興味も、新しくそこに動いてをり、それを專ら目標とする「子供の科學」といつたやうな雜誌も出てゐる。また三二年のこども雜誌を見ても、各誌多かれ少かれ、科學に注意を向けてゐる。この科學相の內容はそれならどうか？ここでも若干づつの實例を示さう。

「少年世界」はグラフに陸軍の新兵器を示し、讀物に月世界の祕密を題材とした「火星航空賊」がある。「日本少年」でも陸海軍の新兵器を見せた後「科學の頁」として世界一珍木くらべ、怪奇な動物を紹介してゐる。「幼年の國」の讀物には、科學に關聯した「エヂソン物語」が見られ、「少年俱樂部」のグラフには、世界一の飛行船、新兵器、大宮鐵道工場、日本一の大鐵橋等がかかげられてゐる。「幼年俱樂部」をとつて見ても、故エヂソン翁のことがこども達に傳へられ、卷首にはタンクの機械的威力が示されてゐる。この外、諸雜誌に自然科學、機械科學、物理科學に關する通俗の記事や紹介や、科學的興味を目ざした讀物、小說が相當に見られるのである。

しかしこの科學相は他のこれまで述べた樣相に比較すると、その占める分量が極めて少い——これが第一の特色である。第二には時局的な條件はあつたにしても、機械において新武器の紹介に偏し、工場や鐵橋や建築の紹介の如きは例外でしかない。第三、自然科學の領域にしても、怪奇な動植物を紹介する方に專ら傾き、人文科學では同じく博覽會式た珍奇な土俗、風習を觀せることにのみ骨折つてゐる。第四に、さらにそれらよりも眼につくのは、科學小說や科學物語の形で、折角この科學的興味を荒唐無稽なものの方向に迷ひ込ませてゐることである。一口にいふとこども雜誌の科學相を見ると、科學のさまざまな現象や、新發明や新發見をいかにして正しくこどもの興味と合致させるかについて、まつたく方向に迷つてゐるか、乃至はそれについて何等苦心しないか、いづれかであるとしか思へない

のである。

さきにもいつた通り、今日のこどもの科學的興味は非常に旺盛なものがある。ところでこの有樣では、こどもの方が雜誌を乘り越えてゐる譯になる。――いづれにしても科學的の分野は、新年の雜誌に見るやうな景物的に取扱はれてよいものではない。科學の中にこもり、科學から引出され、科學をもとにした興味はこども相手とした上でもほとんど無限なのである。ここにもこども雜誌の伸び行く上の重要な一つの問題がある。

これまでこども雜誌の重要な樣相をほとんど觀察して來たが、まだ二つの重要な部分がある。一つは繪畫的の要素で他は詩のそれである。繪畫は表紙、口繪、さし繪としてこども雜誌の大切な要素であるが、全體的に見ると、粗惡たといつた感じが深いのである。だいたい單色の單なる組合せで、典雅も諧調も、明朗もないのでは、こどもの色感を高揚させることは出來ない。一般の婦人雜誌の繪畫部分も粗惡には相違ないが、近來はよほど諧調が重んぜられて來てゐる。それに反して、こどもの雜誌の方は從來より却つて後退の感さへ抱かせるのである。これにはさまざまな原因もあらうが、往年には相當な技量のある畫家が、內職的にこども雜誌に彩筆をとつたものだが、現在では未熟な青年畫家か小器用な素人畫家が單に職業的に、こども雜誌の畫をかいてゐる場合が多い。これなどもその原因の一つであらう。

色調ばかりでなく構圖などにしても、たとひこども相手としても拙劣低調であつて、例へば「日本少年」の表紙畫の如きは得體の知れぬ、異樣な服裝の古代英雄が征服の劍をあげてゐる圖であるが、そのテーマの善惡は別問題として、何ら繪畫的な美を具へてゐない。ただの素人繪である。これは獨り「日本少年」の場合のみでなく、大部分のこども雜

誌が、この通り繪畫ではやつつけ仕事をしてゐるのである。こどもの色感を全面的に成長させ、それを高雅に洗練を加へたものに導くことは世の親達の當然望むところで、こども雜誌の繪は一樣にこれを意識して欲しいと思ふ。

詩の部分では繪畫と若干異つた技量のある詩人の努力を多少とも持つてゐる。たとへば「少年倶樂部」の西條八十、濱田廣介、「幼年倶樂部」の北原白秋、「少年世界」のサトウ・ハチローの作歌のごときがさうである。その限りで歌詞やことばの上で、目立つた粗野さはないが、かういふ詩人以外の人の作歌には、かなりにお座なりのものの多いのは事實である　特に憂欝にならざるを得ないのは、民謠中の卑俗な調子が、そのまま取り入れられてゐる場合の多いことである。前記の詩人達の作歌にしてもこどもに讀ませる歌としての新鮮味と、明朗さと、純情性とに特に努力を向けてゐるとも思へない。

例へば西條八十の滿蒙勇士をたたふる歌を見ると「風にひらめく日章旗、總攻撃のラッパの音、さつそうとして劍をとる、神にぞ似たるその姿」うんぬんといつた調子で、テーマに相應した響きの高いリズムの何物も無く、ただ傳統的な軍歌調子である。サトウ・ハチローの少年詩「新年」は「新たな年の霜柱力づよくもふみしめて、今年こそはと腕をふり禮拜にゆく朝の道、肩をならべる友達の紺の飛白が鼻にしむ」うんぬんといふので、そこに若干の新鮮味はあつても、こどもの詩のそれとはどうしてもいへぬだらう。

こどもと詩の世界とは切り離し難いもので、小學校の教科書などにも、出來、不出來は別として、澤山の詩がとりいれられてゐる。それにも拘らず、こども雜誌、特に少年少女ものには、案外に詩の世界が貧弱な部分しか占めてゐない。そしてその多からぬ詩にしてからが、單に説明的のものか、前記の詩人達の詩のやうた非こども的のものか、單

なる感傷や抽象的な咏歎が多いのである。しかし實際にこどもの心や眼や耳を中心として、そこに展開されてよい詩の世界はかかる貧弱な、常套的なものでないのはいふまでもない。こども雜誌の詩の領分は、その眞のこどもの詩の世界を開發してほしいのである。新年のこども雜誌の詩を見て、特にこの感が深い。

三二年の新年のこども雜誌の諸相はこれで大略觀察し終つたが、最後に、その全體を貫く文化的意義の上の批判を若干付加へてこの小研究を終らう。

こども雜誌の內容の全體において、まづ生活的にいふと、消費生活の場面が全部を占めてゐて、生產生活の場面はほとんど取りいれられてゐない。だが現實のこどもの世界にも生產的の場面が十分に含まれ、こどもはまたそれに實際上の關係をもつてゐるのである。

第二に知識的にいふと、具體的、科學的の正確な、生きて役立つ知識といふものが、あまり顧みられないが、こどものロマンチックな空想的な興味にのみ訴へられてゐる。が科學的樣相の時にも述べたやうに、こどもは一方に空想的浪漫的であると共に、今日では周圍の條件によつて、科學的、客觀的な、リアリスチックな興味をも持つてゐるのである。第三に思想的にいふと、封建的、軍國的、爭鬪的、英雄的なものが主要要素となつてゐて、進步的、平和的、共存的なものが、少女を對象としての感傷の場合は別として、一般に背後に押しやられて居る。

第四に人間的に見ると、個人主義的の傾向が強く、個人の獨立、個人の成功、個人の名譽が一般に中心におかれてゐて、集團的、社會的な人間活動の方面がまつたく無視されてゐる。例へば戰爭や偉大な科學的達成などにしても、いつも個人の功績として物語られてゐて、集團的、知識的努力として取扱はれてゐないのである。

これらの樣相と、それの說明によつて、今日のこども雜誌の多くが、「面白く」「賣れるやうに」と目ざしてつくられる結果、そこに社會的なよきものと共に、反社會的な望ましからざる多くのものが混入してゐることが、ほぼ明瞭となつたと思ふ。こども雜誌の興味から、こどもに社會的なものを吸收させることは、どれだけやつても足るといふことはないが、そこからの反社會的なものの影響を妨ぐると——これもまたどれだけやつても足りるといふことは無いのである。（昭和七年一月、東京朝日新聞）

現狀と希望　幼少年雜誌について

倉橋惣三

幼年雜誌は相變らずの氾濫をつづけてゐる。月刊幼年雜誌の多いことは、世界無比といふよりも一種の世界的怪奇であらう。これは幼年のためによき繪雜誌を與へてやらうとする熱心家の多いためであらうか。それならば誠に結構なことであるが、事實は必ずしもさう思はれない。幼年繪雜誌ほど編輯上の良心なしに濫造されてゐるものはないのである。但しその非良心的な濫造をゆるして成立させてゐる社會も非良心の甚だしいものといふ外はない。堂堂たる大書店に赤本そのままの幼年雜誌が、月の號を追つて列べられてそれが買はれてゆくのを見ると、誰を責めたらいいのか分らなくなる。殊に幼年雜誌は子ども自身よりも親の選擇が加へられるものである。その親がわが子のために、もう少し良心的選擇をして吳れたら、かうまで非良心的な濫造は直ぐにも防止出來るはずである。

その非良心的濫造品に對して、彼是れいふのもいひ甲斐のない氣がするが、差し當りもつとも堪へられないのは、繪柄・色彩、印刷の粗野下品なことである。一體幼年雜誌は教訓とか知識とかいふ內容的效果よりも、子どもに子どもらしい美を與へて、性情の形式陶冶をするのが第一の意義である。すなはち繪柄や色彩や印刷の技巧要素が何より大切なのである。もちろん、子どもが求める以上の美は不用であるが、美の調子を缺くものは何はともあれ落第である。

濫造品を忌むのもその不用意なる粗野俗惡を忌むのである。是非一掃しなければならぬ。

さてかうして第一次淘汰をした後で、名ある數種の代表的幼年雜誌を列べて見る。流石に綺柄、色彩、印刷に相當の意が用ゐてある。內容についても注意されてゐることももちろんである。しかも一應感心しながら、更によく見てゐる內に起る疑問は、これが幼年の單純簡素な要求に果してぴつたり合つてゐるだらうかといふことである。或るものは教訓が勝つてゐる。或るものは知識を教へ過ぎてゐる。又或るものは畫家の表現工夫が凝り過ぎてゐる。いづれも大人の作意、苦心、努力が出過ぎてゐて幼兒の世界のものになつてゐない。それを感心して高級だ有益だといへば、それまでであるが、眞に幼年のための雜誌がこれでいいだらうか。殊に畫家の凝り過ぎは將來一層著るしく目立つやうな氣がする。畫家としては幼年雜誌の繪を重んじて力作せられればこそさうなるので、その點は大に敬意を表さなければならぬのである。しかし、そのために大人の藝術として趣向が濃くなり過ぎて、子どもの世界から遠く離れたものになると困る。いはば過ぎたるは及ばざるが如しの歎を起させるのである。

同じことが童話、童謠、童曲、振付のどれにもあてはまるが、つまり畫家、作家が熱心の餘り自分を滿足させることに徹し過ぎて、肝腎の子どもが置き去りにされることが起るのである。その結果大人が見ては至極結構に思へるが、それだけ子どもの雜誌らしくなくなつて仕舞つたりする。困るといふよりも、子どもの純一、單素な心を正しく養ふものでない。幼年雜誌は幼年の世界を下へも上へも超脫してはならない。しかも實際は高級でいいなと思ふと凝り過ぎてゐる。凝つてゐなくて輕くていいと思ふと俗惡下品。このどちらでもないのが、我等の求める幼年雜誌である。

少年雜誌の問題は幼年雜誌に比して簡單である。記事內容さへ少年に適切ならばまづいい譯である。また課外讀みものとしてそんなに窮屈に、又打算的に、教育的でなくてもいいこともちろんである。ただ興味本位の性質をどうす

るかが問題である。ところで今日の少年少女雜誌の興味は一方に偏し過ぎてはゐないか。いはゆる空想興味、主觀興味に偏して、少年少女にゆたかな求知興味、客觀興味が缺けてはゐないか。すなはち小說的讀み物が中心になり過ぎてはゐないか。それも小說が惡いといふのではない。小說類を重んじ過ぎるために他の材料に用意が怠られてはゐないか。そのために、興味の他の方面を少年少女に滿足させることも養ふことも不足してはゐまいか。元來少年少女は事實に對して强い興味をもつものである。歷史でも、地理でも、理科でも、兎に角事實としての强い興味をもつものである。つまり、小說や感傷的文章などの主觀性に對して、客觀性の興味の持主である。しかも、今日の少年少女雜誌がこの點において甚だしく不十分ではあるまいか。もちろん理科專門のいい雜誌もあるが、一般雜誌でもこの點をもつと平易に加へたい。

少年は戰爭小說、探偵小說、立志小說で、少女は感傷小說、感傷隨筆で、たえず主觀興味に醉はされてゐるのでは、興味の發達が偏するを免れぬであらう。いい少年少女雜誌は興味本位といつても、可なり地味であつていいはずである。毎月刺戟的な大がかりな興味を促し立ててゆく、大人の雜誌の編輯法とは全然異つた態度で編輯せらるべきものである。子どもの興味を迎へさへすればいいといふやうな編輯者は、さもしいをぢさん達といふべきである。（昭和八年十二月二十九日、東京朝日新聞）

今日一般の讀書力は日日に盛になつて行くことは前述の如くであるにも係らず、婦人の讀書力は盛ではない。その原因が何處にあるかは暫くとして、とにかく世の進步にも係らず、常に取り殘されたものは、婦人の讀書である。婦人の讀書が頹廢し紛雜してゐる狀態を、有りのままに語るのは、今の婦人雜誌である。勿論男子の雜誌にも低想なるものは少くない。けれども

それは男子の讀書の中で、決して公の位置を占めてはゐない。自ら水平線以下と信じてゐる。然るに婦人雜誌は、婦人雜誌と呼ぶものの殆ど全部が、低愚であつて、しかもその低愚のままで水平線上にあり、低愚たるに氣づかざるか、或は氣づくも之を恥ぢざるかの何れかである。これは頽廢を示すものに外ならない。

かかる頽廢は、原因が發行者にあるか、それとも讀者にあるか。發行者に言はせれば、これが讀者の好に適ふからだと言ふであらうし、讀者に言はせれば、こんな雜誌しかないので仕方ないと言ふであらう。しかし一般の婦人は讀物について積極的に自分の態度をきめる程、はつきりして居ない。ある書店が「婦人講座」を計畫して、可成り廣告費をつかつて廣告もし、街頭宣傳もした。その結果を聽くと、殆ど效果がないといふのである。即ち婦人はさういふ廣告や宣傳では動かないのである。はじめからあまり氣をつけないのではないかと思はれる位である。婦人を動かすのは、さういふ文字などの力によるものではない。隣人或は友人から「私はとることにしました。あなたもおとりにならない」といふ樣に勸誘される方が直接だといふのである。出版物の價値などをあれこれ言つても仕方ない。それよりも直接勸誘の方法が有效であらうと思ふことには、子供雜誌と婦人雜誌を同時に發行してゐる場合には、一方は必ず他方をその中で紹介してゐる。紹介してゐるのに何も不思議はない。母親のよむ雜誌に、子供にか

つてやる子供雜誌を紹介するのは、母親の雜誌に、子供服の裁縫があり、育兒法のあるがごとくに自然である。ただ子供雜誌に、母親のよむ雜誌の紹介のあるのは變である。母親が子供の雜誌に眼を通すことは少いからである。その紹介は子供によませる爲である。こんなに綺麗で面白くてそして爲になる雜誌の出たことを、お母さんやお姉さんに知らせて上げて下さいとかいてゐる。子供を雜誌の宣傳掛とするつもりなのである。母親や姉は自分の讀物の選擇を、幼年雜誌の讀者たる兒童にさへ左右されるといふ妙な現象がここにあらはれてゐる。着物や料理を子供に左右される婦人は少ない。それには母は母として自己の見識をもつてゐるのである。しかるに讀物にはそれだけの見識がない。さういふ見識のない母親達を捉へるには、どうしても夫の操縦策や、涙の告白や、見合成功法や、色の白くなる化粧法でなくてはならぬ。またその廣告も、なるべく刺戟性を有たねばならない。

　發行者は商品のつもりで出してゐるのであるから、發行者を動かすには、何よりもつまらぬ雜誌は買つてやらぬことにするより外に方法はない。この道で發行者は最よく動かされるからである。雜誌を改善する上にも、或はまた讀むこと自身の上にも、責任は全く讀者にある。自分のよむものであるから、自分の責任で選擇すべきであり、自分のよむものであるから、自分のよむ態度で發行者を動かさなくてはならない。發行者の言の如く、雜誌が商品ならば、商品

の道の上で、之を動かさなくてはならぬ。讀者の聲は發行者には最も鋭敏に響くからである。

ここで考へらるることは、もともと婦人だけを特別扱にして、婦人雜誌を作らなければならぬ理由があるかといふ問題である。婦人には婦人特有の必要なる知識がある。料理に於いて、裁縫に於いて、それぞれ特有の專門の知識が必要である。これは哲學に哲學雜誌あり、建築に建築雜誌あり、美術に美術雜誌あるの類である。この點で料理の雜誌が成立し、裁縫の雜誌が成立する。故にまた其等料理裁縫育兒等、家庭の知識一般を網羅した雜誌も成立し得る。然らば婦人雜誌が成立し得る筈ではないか。しかし今の婦人雜誌の努力してゐる處は、そこにはない。大に努力し大に賣らうとするのは、夫の操縱策であり、告白であり、更に小說である。婦人雜誌が最も苦心し、最も多くの經費をかけてゐるのは小說である。讀者も心をひかるる處は、亦月月變る操縱策やそれに類似の部面や、それから小說等の續き物である。雜誌の上に掲載されてゐる讀者の聲が、果して正直に雜誌にあらはるる讀者の聲を代表するものとすれば、それは殆ど小說等の續き物に集中してゐる。

婦人雜誌掲載の小說が、正當に文學といひ得るならば、文學は讀者を男女によつて區別する必要はない。文學には國境なしと稱せられ、それは言葉の相違さへ取りのぞかれたならば、世

界に共通すべき性質である。婦人だけを讀者に持つといふのは、その文學がゆがめられてゐる證據である。婦人ででもなくては讀み手のないものか、それ程でなくても、婦人の方が喜んで讀んでくれる程度のものかもしれない。もしさうであつたならば、婦人雜誌の刊行は、婦人に低級な文學を供給するといふことより外には意味がないことになる。然らば商品としては下等であるし、讀者としても下等である。ここに於いてこの發行と購讀との關係は、實に羽左衛門を憫むと同樣に憫れまるべきものではないか。

都會の女子は比較的暇を持つてゐる。この暇は、どの男子よりも大きい。故にこの女子の讀書の可能性は、男子よりも大きいと言ひ得るのである。然るにも係らず婦人の讀書は輕ぜられてゐる。最も婦人に同情を有すべき、所謂婦人先覺者は、多くは名のみであつて、學ぶべきものを與へる程の素養を缺いてゐる。ある一流の婦人敎育者の、敎室でした講義の筆記を見たことがある。その講義は學術としても誤謬であり、聽講者の要求にも全く合はない、低級な一つのお談義である。その心理學說は、おそらく四十年前のものであり、その倫理學說は更に老ひ朽ちたものであつた。然らば先覺者でない婦人は如何。學力もあり、潑溂たる婦人では、むしろ興味の中心が男子と併立する處にある。故にこれも亦、あまり深切な誘導者ではない。この

關係は男子に於いても同樣である。世の先覺者、指導者に之を求むることは出來ず、進んで求めんとする程の人は、多くは婦人のことを考へてゐない。故に婦人は坐して自己に供給せらるるものを待つ譯にはゆかない。婦人雜誌既に婦人の讀物として好適に非ず、婦人讀物によきもの少き今日にあつては、婦人は自ら進んで、讀物の選擇をしなくてはならぬ。

然らば讀物の選擇を如何にすべきか。文部省の囑託によつて、中等學校の入學問題を研究した報告書をみると、兒童の個性と能力に應じた學校を選べといつてゐたと記憶する。これは如何にも御尤のことである。それに相違ないが、如何にして自分の子供の個性と能力を判別し、更に學校の個性と性質と學校の教授程度の高低を判別するか。これが實に困難である。かかる結論は有るも無きも同じである。道を問ひて、道を間違はぬやうに行けといはれたと同樣である。問題は間違はぬ樣に行く道筋如何である。故にこれでは答にはなつてゐない。

故に讀物の選擇法を如何にしたらよいかといふ問に對しては、先づ讀んでみよといふ答がある。讀んでみよといふ答はよい答のやうで、しかも實は不十分な答である。かういふ問を出す人の要求は、惡い本は一頁もよまず、良い本だけをよみたい處にある。それに對してよんでみよは、不十分である。少くとも不親切である。良藥か毒藥かの判別を問はれた時に、飲んでみ

よといふ答は困る。飲んでみればわかるに相違ない。しかし自分の命をかけて實驗するのはたまらない。それで質問をしたのである。そして書物を買う上からいつても、書の善惡を問はず一一買つて來て、それを讀み試みて、その上で選擇するといふことでは、損害が大きすぎる。ここに圖書館の機能がある。圖書館を書庫と考へてはならぬ。書物を備へつけて置いて、貸したり受取つたりの出し入れをするばかりでなくて、書物の紹介をしたり、讀書の指導をしたりしなくてはならぬ。ことに地方の如く人人の間に親しみのある關係では、これが一層よく行く譯である。かういふ點で圖書館は、重要な立場にある。

次にかかる親切な指導機關がない場合には、書物に對して自分で選擇する外はない。その場合には讀むより外ない。讀まずに知る法はない。ただ書の善惡適不適は、これを卷末まで讀まずとも、最初の一章でほぼわかる。その書の害をうけざる中に棄てることが出來る。そしてこれにはすぐに學校の國語教育が關連してくる。國語教育が單なる訓詁註釋の域に留るならば、この自己選擇は望むも不可能である。ここに於いて國語教育は必然的に讀みの教育でなくてはならぬ。吾等の國語國文の教育は、羽左衛門によつて、多くのヒントを與へられてゐることを辭む譯には行かない。

婦人雜誌を一貫してゐる特徴は、これを一言すればモダアニズムである。生活の上に、ひいては文學の上に、美術の上に、樣樣にあらはれて居るが、中村武羅夫氏が、「東京朝日新聞」にかいた「モダアニズム文學に對する一考察」は、この問題を文學の上から捉へてゐられる。

中村氏はモダアニズムの文學の樣狀をといて、

既成文藝が衰へ獨りマルキシズムの文藝理論のみが盛んだつた一九二九年の文藝界の後半期において、モダーニズム文學が、徐徐に、その特徴を色濃くし始めて來たことは事實である。しかも、マルキシズム文學が、理論的には甚だその勢ひが盛んでも、實際の作品としては、「大いに見るべき」ものが甚だまれであるのに反して、モダーニズムの文學は理論的には沈默の態度を取つて、實際の作品の上に、次第にその特徴を發揮して來たのである。そして、モダーニズムの文學が文藝上の一つの傾向として漸く文藝批評の對象となつたのは、昨年の暮からであつて、一九三〇年におよんで、忽然としてその勢を增して來た。

モダーニズムの文學の中には、大體において三つの傾向があるらしい。その一つがエロチシズム文學であり、もう一つがナンセンス文學であり、更に他の一つは、近代文明の精髓をなすところの科學や機械を取りいれた文學である。即ち、モダーニズムの文學は、大體において、この三つの傾向に分れてゐるらしい。しかして、そのうちで、エロチシズムとナンセンスとがもつとも盛んで、科學や機械を取りいれたモダーニズム文學は、大體において、新しい尖端的な作品に、さういふ傾向がほの見えるといふだけで、いまだその特徴をハツキリ具備した作品や、その傾向を身に體した作家は、現れてゐないと思ふ。それ故に、モダーニズム文學の作品といへば、現在のところ、エロチシズムとナンセンスとに盡きてゐるやうに見える。

と言つてゐ、そしてその發生については、

モダーニズム文學の發生が、その性質上、現在の都會文化にその根據を置いてゐることは、いふまでもない。もし、現在の都會生活がなかつたら、モダーニズム文學は、現在の如き特徴をもつて發生しなかつたことは事實である。殊に、現在の都會文化の中でも、モダーニズム文學を醱酵せしめる酵母となつてゐるのは、場所としては銀座であり、淺草であり、新宿であり、いはゆるセーラーパンツのモボや、斷髪に、かかとの高い靴を穿いたモガや、時代の尖端人などが跋扈してゐる都會の享樂地である。それから、映畫であり、カフヱーやバーであり、ビルヂングであり、デパートであり、ダンスホールであり、とに角、さういつたやうな、浮華な遊樂場や、消費によつて賑はう場所である。さういふところが、いはゆるモダーニズムの文學の雰圍氣を醸しだす酵母で、もし現在の都會生活の内からさういふ側面が失はれたとすれば、現在あるところのモダーニズム文學は、その根を失つた花の如く忽ちしぼんでしまはなければならないだらう。

と言つて、それを都市原因としてゐる。であるから

また、モダーニズムの文學は、明るく、朗らかにといふことを大切な條件にしてゐるやうだ。が、現在のモダーニズム文學の明るさ、朗らかさには、健康——即ち健やかさが伴うてゐないと思ふ。明るく朗らかではあつても、一種病的なあを白い明るさであり、朗らかさである。それには潑剌たるところや、野生の果物の如き新鮮さや、野に遊ぶ鳥や、山を驅ける兎の如き健康さが見られない。即ち現在のモダーニズム文學には、都會人の洗練された感覺に訴へる美しさはあるとしても、野生的な健康からくる美しさがないのだ。いや、モダーニズム文學の特徴は、却てさういふ野生的な美しさとはほとんど對蹠的な點にあると思ふ。

といふ特色を生ずる。然らばこの文學の將來はどうか。

總じてモダーニズム文學の特徴は、餘りに末梢的であり、無氣力であり、消耗的であると思ふ。その作品の多くは、

感覺的遊戲に陶醉して「藝術の本道」といふべきものを目指してゐない。一流一派を建設して行く意力、情熱、忍耐などを持つてゐないやうに見える。もちろん、モダーニズムの作家の個個が、それを持つてゐないといふのではない。現在のモダーニズム文學の特徴として、それを認めることが出來ないといふのだ。凡何派、何主義の文學に限らず、それが新興の勢力を潜めてゐる限りは、それに力、意志、熱情が伴うてゐなければならぬ。はじめから、その特徴が無氣力で、病的で、いくらか頽廢的ですらあることは、たとひ、いくらかの若さや、いくらかの新鮮さや、またいくらかの明朗性を持つてゐて、それを唯一の賴りにして時代を動かさうとしても、それでは餘り薄弱だと思ふ。それが、假令一部の好尙に投ずることがあるとしても、一時の泡沫的現象だと批判されても仕方がないだらう。都會文化に尖端性が伴うてゐる限り、モダーニズムの文學は、必然的に榮えて行くもののやうに考へてゐる人もあるやうだ。が、いはゆる現代の都會文化の尖端性なるものが、一體、われわれの生活に、どれだけの深い關はりを持つてゐるだらうか？　疑ひなきを得ない。

銀座を步き、カフエーやバーに入り、音樂を聽き、ダンスを踊り、電光ニユースを見るのは——卽ちモダーニズム文學の根據となすところの都會文化の尖端性に觸れるのは、われわれの生活における限られたる一小側面であり、またわれわれ同胞の中の何萬分の一の人人に過ぎない。われわれの生活の最大の側面は、また、われわれの同胞の最大多數は、都會文化の尖端性などとは全く沒交涉に、そんなものとは何等の關係もなく生きてゐるのである。

なるほど、現在の都會文化が今後ますます榮えてゆく限り、その尖端性は、いろいろな方面に現れることだらう。風俗的にいつても、スカートの長いのが流行したり、また短いのが流行つたり、帽子のつばの廣いのが流行つたり、狹いのが流行つたり、今日のカフエーやバーは、いつの間にか古くなつて、別のもつと尖端的なものが現れて來ないとは限らない。今日においては、映畫は民衆娛樂のトップを切つてゐるが、しかし、何年か後には、映畫なんか古くさくなつて、もつと別のものが、新しく勢力を得てくるかもしれない。

さうして都會生活には、次から次と常に新しい尖端性が作つて行くことだらう。そして、モダーニズム文學は、常に新たな尖端から尖端へと追つかけて行くところに、その存在の意義を置かうとするのであらうが、しかし、何時の時代になつても、尖端は常に尖端であつて、尖端が全部を覆うてしまつた時は、それは既に尖端ではない。かくして尖端から尖端を追つて行くモダーニズム文學は、遂に、それは一部分の人人に取つては意義を持つとしても、他の最大多數の者には、沒交渉の存在として終らなければならないだらう。泡沫的現象として、消え去つてしまふことはないとしても、そこから何物かが建設され、大きく伸び、育ち、擴がつて、ある時代を支配してゆくことが出來るとは思へない。

モダーニズムによつて立つ作家が、深く戒心しなければならないのは、その點にあると思ふ。

然るにこのモダアニズムの發生については、他の見地からする人がある。藏原惟人氏の「モダニズムの階級的基礎」（東京朝日新聞）の如きその一である。氏は中村武羅夫氏や平林初之輔氏の發生說をのべて後、次の如く言つてゐられる。

ではマルクス主義者はモダニズムの風潮を如何に見るか？　我我はここにもまたその階級的基礎を見るのである。近代資本主義は帝國主義段階にいり、工業資本は金融資本にその支配的地位を讓つた。そして金融資本は獨占によつて大きな利潤を得、そこに「不可避的に、金利生活者、すなはち「利札切り」によつて生活する人人、絶對に何らの企業にも參與しない人人、遊惰を事とする人人の階級——あるひは、より正確にいへば——層が、增加する」（レーニン）。この近代的意味における金利生活者の層を基礎としていはゆるモダニズムの潮流が起つたのである。

この階級あるひは層が產業的ブルジョアジーと異る所は、上に指摘されてゐるやうに、彼等が何等の生產にも參加せずして、唯銀行の預金や有價證券の利子によつて生活してゐるといふことである。從つて彼等の生みだす文化なるもの

は必然に無内容な、華美な頽廢的な印影を與へられる。それはすべての有閑階級の文化に共通なものである。江戸時代の富裕な町人階級の文化がさうであり、十八世紀フランスの貴族的商人的文化がさうであつた。モダニズムは實にかくの如き消費的文化の現代帝國主義階級における再生産に他ならない。ここからしてそれのナンセンスや、エロチシズムや、消費的な機械のスピード讃美が起り、ここから建築や裝飾や家具等におけるロココ様式の復活が生じ、同時に帝國主義的政策の消極的ではあるが無條件的な支持者である彼等の間に殖民地的エクゾチズム（ジャズ、ネグロその他のダンス、支那音樂、支那料理、マージャン、キモノ等――それは征服者のエクゾチシズムである）が生れる。このことはモダニズムの源泉地が高利貸資本の國であるといはれたフランスに起り、戰後においては金融資本のもつとも發達したアメリカに渡り、更に日本に渡つたことを見ても分るのであるが、この文化が一度形式化されるや、それは言葉通りの意味における金利生活者のみでなく、その影響下にあり、それを摸倣しようとする層――小市民層にまで傳播して、そこに滔滔たるモダニズムの潮流を作りだしてゐるのである。

モダニズムの潮流は具體的には恐らくは、もつと複雑であり、またその國國によつて少しづつ異つた形相を得るであらうが、この基本的な社會的階級的基礎を見ずしては、その本質は少しも理解されないといふことを忘れてはならない。

この説明で、モダアニズムが金利生活者の中から起つたといふ點を認めるとしても、何故金利生活者でない小市民層にまで傳播して、社會の風潮をなしたかは説明し得ない。隨つて一世を風靡する程の力を持つ風潮となつた點に考察の中心を置けば、ある特殊階級に原因を置かず、これを一般民衆の素因に置かなくてはならぬ。

此處に他の例をとつて見る。竹內薫平氏が「感冒の實相」の中で、「疾病準備體狀」とこのことを言つてゐられる。

寒いと感冒を引くといふ。然し寒冷といふことだけで起す病氣は割合に少い。顏面神經麻痺、三叉神經痛、筋肉痛、發作性血色素尿、それからまれには腎臟炎位なものに過ぎない。

大抵は感冒を引くといふのはこれではない。寒冷その物は粘膜やその他の器官の血液循環狀態を非生理的に變へるといふ働きをする所から、身體を病氣に罹り易い體狀にしてしまふ。この體狀は疾病準備體狀と名づけられて居る。

寒冷は單に人を疾病準備體狀にするに過ぎない。しかしてこの體狀になる結果、人はいろいろな病氣に罹り易くなる。あるひは體外からの黴菌の感染も受け易くならうし、あるひは既に體內に潜伏して居る病菌も勢ひを盛返して病氣を發することもあるのである。體外からの黴菌の感染や體內からの病菌の盛り返しやで起つた病氣、これを普通に感冒と呼んで居るのである。

寒いといふ事はどんな子供に對しても一樣に疾病準備體狀にするかといふにさうではない。なり易い子と、なり惡い子とある。なり易い部類に屬する子供は、腺病質や滲出性體質や、淋巴質や、それから先天性梅毒や、一般虛弱質の子供である。なり惡い子供といふのはかういふ病的體質の所有者でなくして、殊に皮膚の丈夫な子供である。

既に疾病準備體狀と名づくる以上、どんな疾病に對しても罹るべく準備された身體かといふに、「風は萬病の基」とのことわざの示す事が、まんざら當はまらないではないが、寒冷がもつとも好んで準備するのは呼吸器の病氣に對してである。卽ち寒冷は呼吸器病に對してもつともよく罹り易くする樣に身體を準備するのである。呼吸器病といへば鼻、咽頭、喉頭、氣管、氣管枝、肺である。感冒を引けばまづもつともよくこれ等の場所が犯されるのはこの理由に基くのである。

寒い風に當たる。翌日から無暗に鼻汁が出る。これ既に感冒に罹つたのである。いはゆる鼻感冒である。委しくいへば寒い風の寒冷のために鼻粘膜が血液循環異常を起して、その結果、疾病準備體狀を形成し、鼻の部分に抵抗力減少を起して黴菌の侵略を受け、ここに鼻加答兒を發したのである。これは鼻でも咽頭でも、喉頭でも、氣管　氣管枝、肺でも，皆理窟は同一である。

然らば社會にかういふ「疾病準備體狀」ともいふべき樣狀があるであらうか。杉田直樹氏は「疲勞が子供を神經質にする」ことを語つてゐられる。

神經質の兒童については、日本には正確の調査がないが、最近非常に増加しアメリカでは全數の三分の一乃至四分の一はいづれも神經質兒童である。その樣な兒童は精神作業をなすにあたつて、最初は非常に感激するが、約十分も經過すれば疲勞を覺え、遠足などの場合も學校を出かける頃には、大いに歡び走り，はしやいではゐるが、目的地に達せぬ内一言も口を開くさへ出來ぬ程疲勞を覺えるのであり、算術の問題をやらせる場合でも最初十分間位は速度も速く，成績も良いが、時間の半頃より遙に劣るといふ傾向であり、又習字の時にも最初一、二枚は上手に書けてもいざ清書といふ場合には下手に書くといふ傾向である。

本郷誠之小學校の三年生のある兒童が低能であるといふ事を聞き、私は一ヶ月間診察した結果，その兒童は問題を與へた場合，最初の十分間十五分間位は良く出來るが，時間の終り頃には疲勞を覺え、低能者の如き感となる。所が同小學校では大抵の時間に試驗をする。しかもその試驗が相當の間練習問題を與へた後、時間の終り頃始めて試驗問題を提出するといふために、その兒童は練習中はよく出來るがいざ試驗の頃といふと不出來といふ結果になり、習字の場合も練習の間はよく書けるが清書の際には駄目になる。

又一例として下町のある小學校の兒童中、低能といはれた者がゐた。それについて調べた所其家庭は非常に貧困のた

め、夜は內職させられ睡眠が十二時、朝は朝刊賣り、子供のお守等で午前五時に起床、そのため登校第一時間目には全く疲勞を覺え、その結果低能兒の如き感を呈する。前者は一年間休學させてそれを矯正した結果、優等生となり、後者はその家庭の仕事を減じたら、普通兒童と並んで行けるやうになつた。

又寢小便をする子供の中には神經質の者が非常に多い。それは床についてもただちにねむれず、長時間の後深いねむりに落つる時、膀胱がゆるみ寢小便をするのである。

又神經質の子供は床についた場合ねむりが淺いため、普通の子供が睡眠の絶頂は三時間後にくるにも係らず、この樣な子供は七時間後にくるため、朝起きる頃に熟睡してゐる。それを兩親は知らずに無理に起すのがある。それは更に疲勞を與へる事で、その子供を更に神經質にしてしまふものである。

また「東京朝日新聞」は「帝都の騷音には鼠でさへも弱る」といふ東京市の衞生試驗所の實驗を報じてゐる。

都市の騷音は都市生活者にいかなる影響を與へるかといふ事についての基礎的資料を得るために、東京市衞生試驗所では竹內所長の命により藤卷博士、有本理學士の兩氏が主となり、昨年九月四日以來二百匹の幼少なる白鼠を選んで騷音の及ぼす影響について實驗中であつたが、その發育影響については最近漸くその結果が判明した。

まづ同所では百匹を都市騷音の最も甚しいガード際の試驗所化學室に置き、他の百匹は試驗所內でもつとも靜かな動物實驗室に置き、この兩群の鼠に衞生的に同一の條件——溫度濕度通風光線——を與へて今日まで實驗した。

最初の一日二日は兩群とも何の影響もなかつたが、鐵道ガード際は一日三百數十回に渡つて省電や汽車が通過し、更に自動車が通るので數十日後にはつきりとその影響を示し、騷音中の鼠は食欲は減退し發育は著るしく惡くなり、かつ神經過敏になり、從順性を失つて來た。餌をやるために籠の中に手をやると嚙みつく位で、食物を食べかけても

自動車のサイレンが鳴ると急にやめて見たりする。これに反し靜音中の鼠は極めて從順で、食餌の如きも極めてゆつくりと食べ、その動作も緩慢でいかにも落ちついてゐた。

九月四日以來今日までの發育の程度を見ると、體重の增加率は騷音中の鼠は三十七パーセント低く、しかも身長の伸び方は早くてやせてゐる。卽ち骨ばかり伸びて筋肉脂肪の發育が惡く、標準發育に達せぬ。かつ食料攝取量に不同があり、すききらひが著しく、食料に常に新しい刺激を求めてゐる。これは丁度都市生活者を如實に示現してゐる。もつともこの實驗には紫外線の影響が見てないさうである。

同試驗所では更にこの實驗を續けて、騷音の姙娠出產に及ぼす影響を見ることになつてゐる。

「腺病質も騷音から」　藤卷良知博士談

大都會に住んでゐる人人は、農村の人と比較すると身長が長くてその割合に體重が少く、骨格の發育が劣つてゐる。かつ都會人は神經質で、子供について見ても、都會の子供は腺病質なのが多いが、農村にはほとんどない。現在榮養學者の唱へてゐるやうに紫外線だけの影響とは考へられぬ。騷音も一つの原因をなしてゐると思はれる。かつ姙娠率乳幼兒の死亡率も騷音とは深い關係を持つてゐるのではないかと思ふので、研究實驗を進めてゐる。

是等の點を考慮に入れるならば、モダアニズムは、現代生活の疲勞から來てゐるのではないかと思はれる。ジャックソン氏は、頽廢的傾向の特色をのべて

一、妙にひねくれて、凝つてゐること。

二、人爲的であり、技巧的であること。

三、主我的であること。

四、好奇心の旺盛なること。

の四をあげてゐる。モダニズムはこの特色に最もよく合してゐる。故にモダアニズムの發生を都會的疲勞に置くことは、無理がないと思ふ。藤原末期の藤原的疲勞から、藤原氏のモダアニズムが出、徳川末期の江戸的疲勞から、化政度のモダアニズムが出てゐる。昭和の今日またこの疲勞によるモダアニズムを發生してゐるのである。單に讀物ばかりでなく、今日何れの方向を見ても、この傾向が著しい。羽左衞門の巴里生活の如き、またこの疲勞の持ち來した一面である。（昭和六年八月）

著作目録

支那上代畫論研究	（大正十三年十月）	岩波書店
東洋畫概論	（大正十三年十月）	古今書院
繪畫に於ける線の研究	（昭和二年十一月）	古今書院
東洋美論	（昭和四年四月）	春秋社
東洋畫	（昭和四年十月）	春秋社
日本農民史	（昭和五年一月）	古今書院
東洋美學	（昭和七年十月）	古今書院
構想の研究	（昭和八年七月）	古今書院
東洋美術論叢	（昭和九年六月）	古今書院
解釋の研究	（昭和十年七月）	啓文社

昭和十年六月二十八日印刷
昭和十年七月二日發行

解釋の研究　奥付

定價貳圓八拾錢

著作權者
検印

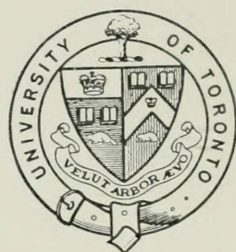


者　金原省吾

行者　生地龍太郎
東京市本郷區元町二ノ二一

印刷所　山村印刷所
東京市芝區新堀河岸三十一號地

發行所　啓文社
東京市本郷區元町二ノ二一
振替東京三八七七六番
電話小石川五五二九番


UNIVERSITY OF TORONTO
VELUT ARBOR ÆVO


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02950 5401